也。内には寝ずして居ることを暁りたる故なり。○かけながらすべり寄りて　縁に戸の際に居ざり寄りてと也。「かけながら」は陰乍なり。「すべる」はそろりと目立たぬやうに進退するをいふ。濱臣の説に「かけながら」と清みて讀むべきか。戸の懸金はそのままにて、只近くよりてといふ意なるべし。次に『叩かねどまづあけたれば』とあるを思ふべし」と。一理あるやうなれど、鑿にちかし。

（口譯）
又、大勢の聲で、詩を吟じたり、歌など歌うてくる時には、戸を叩かなくても、こちらからまづあけるから、此處へ來ようとも思はぬ人さへも立止つた。餘り大勢で、はひりやうもなくて、立つたままに明すのも面白い。御簾が大層青く美しげなのに、その下に立てた几帳の帷子が、大層あざやかで、その陰から、女房の衣の裾の先が、すこし重なつて見えたのに、直衣の腰のあたりに、何時も綻を切らしてゐる君達や、

又、あまたの聲にて、詩を誦し、歌などうたふには、たゝかねどまづあけたれば、こゝへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷子いとあざやかに、裾のつま少しうちかさなりて見えたるに、直衣のうしろに、ほころび絶えず着たる君だち、六位の藏人の青色など着て、うけばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえたてらず。へいの前などにうしろ押して、袖うちあはせて立ちたるこそをかしけれ。また、指貫いと濃う、直衣のあざやかにて、いろ〳〵の衣どもこぼし出でたる人の、簾をおし入れて、から入りたるやうなるも、外より見るは、いとをかしからむを、いときよげなる硯ひき寄せて、文書き、もしは鏡こひて、鬢などかきなほしたるも、すべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは唯すこしぞある。外に立てる人、内に居たる人と物いふ顔のもとに、いとよくあたりたるこそをかしけれ。長のいと高く、短からむ人などやいかゞあらむ。なほよのつねのはさのみぞあらむ。

六位の藏人が、青色の袍など着て、いづれも遣戸の際などには、威張つて寄添うては、よう立たない。庭前の壁の前などに、腰をあて、、袖を掻合はせて、敬つて立つたのが面白い。又、前のとは違つて、指貫が大層色濃く、直衣があざやかで、色々の下着の衣などを、表着の下から出し掛けたある貴人が、簾を外から押込んで、簾内へ半身ばかりはひつたやうなのも、外から見るのは、甚だ面白からうと思ふへに、大層綺麗な、そこにある硯を引寄せて、手紙を書き、もしくは鏡を借受けて、鬢など掻直したりするのも、すべて面白い。三尺の几帳を端に立てゝあると、簾の帽

（考異）○いとよく　原本いとにくいとあり。古本による。

（釋）○あまたの聲にて　數多の人の聲にてと也。人は殿上人等なり。○詩をずし　「ずし」は「誦し」の音轉にて、諷詠するをいふ。○たゝかねどまづあけたれば　戸をなり。○こゝへとしも思はぬ人も云々　この局へ立寄るべしと思はざりし人もなり。○入るべきやうもなくて立止りたる人がなり。細殿は簀子など狭ければ、大勢の人は入難きなり。この「入る」は局の内に入るにあらず。○立ちあかすもをかし　簀子の前の庭に立ちながら、夜をあかすも面白しと也。○御簾のいと青く　新しき簾にて、竹の色の青きなり。○几帳のかたびらいとあざやかに　「かたびら」は帳に用ゐる布帛にて、帷をいふ。夏は生絹を用ゐる。冬は熟絹を用ゐる。「あざやかに」はあざやかにてなり。帷の新しく美しきをいふ。○裾のつますこし打ち重なりて云々　几帳の陰より、女房の衣の裾の褄の重なり揃ひたるが、少し見えたるにと也。この褄を重ねて外に出して見するを、押出といふ。「すこし」は「見えたる」にかゝる副詞。○直衣のうしろに云々　直衣の腰のあたりに、常に綻を切らして著たる君達なり。ふざけ廻りて、著物などいたはらぬ若人のさま也。○青色など着て　六位の著たる青色は、麹塵色の袍なり。藏人の具にしつべくてを見よ。○うけばりて　うけばりてはと也。「うけばり」は何も承知顔に振舞ふをいふ。承張るの義。この句「え立てらず」にかゝる。○遣戸のもとなどにそば寄せてえ立てらず　遣戸際などに寄添うて、威張りてはよう立たぬと也。即ち簀子には遠慮して上らぬさま也。○へい　壁か。小右記に、承安五節圖、皆屋垣とあり。思ふに屋根ある舘造の屏にて、内側は漆喰塗なるべし。この壁の字音ヘキを、音便にヘイといへるならん。○うしろ押して　背中を寄せかくるをいふ。○袖うちあはせ　袖かき合はするは、敬意を表するなり。○いと濃う　紫色のいと濃きなり。○いろ〳〵の衣どもこぼしいでたる　表衣の下、指貫の上に、風流のために　わざと下著の

裾の美しきを出したる也。三條家裝束抄に「異晴時、浮織物、唐織物など、隨時色々の衣を、出衣に用ふ、云々」。「こぼし出で」とは出衣の裾を出して見せたるをいふ。出衣を見よ。○簾をおし入れて云々　簾を内へ押入れて、その身が半分ばかり、局の内へ入りたるやうなるもの也。○とより見るは云々　外より見るは、その様優美ならんをと也。この句の下、まして〻を補ひて聞くべし。○いと清げなる硯ひき寄せて云々　半ば入りたる男が鏡を女房に借受けて、鬢の亂を直したるもと也。「こひて」は借らんと請ふなり。○三尺の几帳　普通の高さの几帳なり。几帳を見よ。○帽額のしもは只すこしぞある　帽額の簾の下は、只少しあきてありと也。即ち上は、捲上げたる帽額の簾の餘が垂れ、下は三尺の几帳にて塞ぎたれば、その間の明はわづかなるをいふ。○とに立てる人外に立てる男がなり。○内に居たる人　この「人」は女房なり。○いとよく當りたる云々　内外の男女の顔が、丁度この明の所に當りたるが面白しと也。○たけのいと高く短からむ人などや　身丈のあまり高き男は帽額に遮られ、居丈の卑き女は几帳に隔てらるべければ、うまく明の所に顔の當らんことは、いかゞあらんと思はるゝと也。○なほよの常のはさのみぞあらむ　しかしやはり普通の人は、さやうにのみあらんと也。「よの常のは」はよの常の人はの略。「さのみ」はいとよく當りたるをさす。

ましして、臨時の祭の調樂などは、いみじうをかし。とのもりの官人などの、長き松を高くともして、くびはひき入れて行けば、さきはさしつけつばかりなるに、をかしうあそび笛ふきたてゝとほるに、心ことに思ひたるに、君達の日の裝束して、立ちとまり物いひなどするに、ともの隨身ども、さきを忍びやかに短く、おのが君達の

（口譯）ましして賀茂の臨時の祭の調樂などは、ひどく面白い。主殿寮の役人などが、長い松明を高くさし上げて首は紐の中に引

額の下のあきは、只すこしばかりある。そとに立つてる人が、内にすわつてゐる女と話をする顏の所に、丁度よく、その隙間が當つてゐるのが面白い。丈の大層高い男や、背の大層低い女などは、どうだらうか。さう都合よくはいくまい。世間並の高さの人は、やはり、專らそんな具合であらう。

込めてゆくので、松明の先は、物にうちつけさうな程なのに、面白く音樂が始まつて、笛を吹立てながら、局前を通るので、格別に面白く思うてゐると、君達が束帶姿して、局に立止まつて、話などするに、お供の隨身達が、そつとしかも短く、自分の主人の君達の爲に、ほんの申譯ばかりに、先を追うたのも、その聲が管絃にまじつて、いつになく、面白く聞える。夜が更けたから、夜明けて、樂人舞人などが歸るのを見ようと思つて、やはり寢ずに待つてゐると、君達の聲で、「荒田におふるとみ草の花」と歌つたのも、今度は、以前よりは、一層面白いのに、どういふ生まじめな人だれうにおひたるも、あそびにまじりて、常に似ず、をかしう聞ゆ。夜更けぬれば、なほあけて歸るを待つに、君達の聲にて、「あらたに生ふるとみ草の花」と歌ひたるも、このたびは、今すこしをかしきに、いかなるまめ人にかあらむ、すくゝしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「しばしや。など、さ夜をすてゝ急ぎ給ふ。とありて」などいへど、心ちなどやあしからむ、倒れぬばかり、もし人やおひてとらふるとも見ゆるまで、まどひ出づるもあめり。

（考異）○吹きたてゝとほるに　原本ふきいでてとあり。堺本による。○ともの隨身ども　原本殿上人の隨身どもとあり。一本による。

（評）○臨時の祭　こゝは賀茂のなり。上文、山はの段にある臨時の祭は石清水のなり。その場合に應じて、いづれとも定むべき也。臨時とはいへど、不時にするにはあらず。古來の大祭日の外に、新に設けられたる祭日をいふにて、賀茂の臨時祭は、宇多帝の代に起りて、毎年十一月下の酉の日に行はる。禁中より御使あり。舞樂を奏せしむ。○調樂　テウガク。祭日前三十日、祭使及び舞人等を簡定し、その後樂所において歌舞を調習する、これを調樂といふ。祭の當日に先だつ二日、清涼殿の東庭において、更に試練するを試樂といふ。但本文にいへる調樂は、すべて試樂の趣なり。公事根源に「試樂は調樂ともいへり。まづ音樂を調べ試みる心なり」とあるが如し。○とのもりの官人　主殿寮の役人なり。○主殿寮　殿庭の掃除、湯沐、薪油の事を掌る役所にて、頭、助、大少允、大少屬、史生、殿部、使部などの役人あり。松明などともしゆくは殿部なるべし。即ち殿守の伴の御奴なり。○長き松　丈長き松明なり。こ

らうか、さつさと脇目もふらないで歩いて退出してゆくのもあるから、女房達が笑ふを、中で一人が聲かけて、なぜそんなに、面白いこの夜を見すてゝ、お急ぎなさるのですか。今すこし經つてお歸りなさい」などいふが、心持でもわるいのかしら、もし人があとから追掛けてつかまへるのかと思はれるまで、殆ど倒れるばかり、あわて惑うて急いで、退出するのもあるやうである。

の頃は、松とのみいへば、松明の事に通じたるなり。江次第に、臨時祭試樂の條「若及二昏黑一、主殿官人奉二炬火於庭中一、相分入レ自二瀧口併仙華門一」とあるは庭上の儀なるが、樂所より、樂人等が庭上にゆく際も、日暮となれば、主殿の官人が、松明を振照して、先立するなり。○くびはひき入れてゆけば　首は衿に引込めて行けばと也。寒さに首をすぼめたるなり。陰暦十一月の中頃なれば、夜は殊に寒かるべし。○さきはさしつけつばかりなるに　松明の先は、物に打當てんばかりなるにと也。松明を見ずしてあるく故なり。「さし附けつ」のつは現在完了の助動辭。○をかしう遊び　調樂のさま也。「遊び」は音樂を奏するをいふ、この頃の通用語なり。○笛吹きたてゝとほるに　樂人共が、をかしう遊びて笛吹立てゝ、細殿前を通るにと也。○心ことに思ひたるに格別に面白く思ひ入れたるになり。○日の裝束　禮服にして、束帶を稱する。日は晝の義。連阿口傳抄に、その着用の次第あり。「まづ赤大口の袴、次に表袴、次に單に袙を重ねて著、次に下襲次に半臂、次に袍を著る。次に石帶をさし、魚袋を懸く。次に帶劍平緒を用るる。以上取重ね着用したるを、束帶といふ也」。(附圖參照)○立ちとまり物いひなどするに　細殿の前に立止り、女房と物いひなどするにと也。○さきを「追ひたる」につゞく。さき追ふ聲を見よ。○忍びやかに短く　調樂の夜なれば、樂の音に遠慮して、わざと小聲に短くいふなり。○おのが君達のれうに云々　自分の主君の爲として、いひ譯ばかりに追ひたるもと也。「れう」は料の字音。○あそびにまじりて　その前を追ふ聲が、奏樂の音に混りてと也。○なほ明けて歸るを待つに　なほ寢ずして、夜明けて舞人樂人等の歸るを見んとて待つにと也。○あらたに生ふるとみ草の花　風俗の諺物、荒田に「あら田に生ふるとみ草の花、手に摘みれて宮へまゐらむ、なかつたえ」とあり。「とみ草」は富草の意にて、梁塵愚案抄に、稻をいふと見えたり。「摘みれて」は摘入れての約。○今すこしをかしきに　上に述べたる種々の面白かりし事よりも、この風俗の歌を聞けば、この度は今少し立勝りて面白きことゝなり。○まめ人　「まめ」は忠實、老實、正眞、眞じめなどの意。濱臣の說に「まめ人は普通には、よき方にいへど、いかなるまめ人にかあらむと玆にいへるは、餘り正直過ぎたる人といふ意に使へる也」。○すく〳〵しう　さし歩みて云々　サツサと歩きて退出するを　見たる人達がなり。細殿の局の女房達なるべし。○しばしやなどさ夜をすて、急ぎ給ふ　そこに居たる或一人の詞なり。「しばしや」は少時待ち給へよとなり。「や」は歎詞。「などさ夜をすて、急ぎ給ふ」は何とてまだ明けぬこの夜を見捨て、さやうに急ぎ退出し給ふぞと也。「さ」は「急ぎ給ふ」にかゝる語にて、すくすくしうさし歩みて出でぬる」をさす。○とありて　とばかりありてに同じ。暫時猶豫して後、退出し給へと也。「ありて」の下、出で給へを補ひて聞くべし。○心地などやあしからむ　その人は氣分などあしきならんかと也。○たふれぬばかり　倒るゝばかりなり。下の「まどひ出づる」にかゝる詞。「ぬ」は現在完了の助動辭にて、打消には非ず。○人や追ひてとらふる云々　他の人が追掛けて引捕へてもするかと思はるゝほどと也。○見ゆるまで　思はるゝまでといふに同じ。○まどひ出づるもあり　あわてふためきて退出する人もありと也。

評註　この細殿も、弘徽殿のである。中宮御入内の最初は、外に御后方も無かつたから、后町の御殿は何處もがらあきで、より取は隨意であつたが、后位にましますの御方は、弘徽殿に住まれる慣習であつたから(それは主上の清涼殿に近くて御便利な爲)この中宮もやはり、初のうちは弘徽殿をお住居となされた。弘徽殿の西廂は、夾舍即ち細殿で、間毎に戸があり、南から數へて一の口、二の口など稱へた。源氏物語に朧月夜の內侍の事のあつたは、その三の口である。すべて西向の部屋で、前にはすぐ屋垣があつたから、あまり涼しくも無かつたらうが、寒い方はたしかに受合である。しかも清少は、北山面にゐられて、

雪霰が簾の中まで轉がり込むのを面白がつてゐる。大抵殿舍の正寢は大間で陰鬱だから、それに對して、細殿住ひの手狹に輕びて陽氣なのが、珍しくも面白くも感ぜられたのであらう。屏風の後に屈んでゐる里の童が女童で、若し清少の實子ででもあらうものなら、いよ〳〵妙であらう。

この細殿前は、清涼殿に上下する公卿侍臣等の通路に當つてゐるので、あの下屋の曹司などとは違ひ、沓摺衣摺の音の絶間もなく、何時珍客が襲來するかも測られないから、晝夜すこしの油斷も出來ない。殊に「夜をまして」といつたのは、懸想人が音なふからである。戸を叩くに、早くもその人と知るのも、何時もくる懸想人であるからである。古い歌集に「夜毎に簀子に居明すを」、「格子のつらに一夜居明して」、「風吹き雨ふる夜、例の簀子に居明して」などある端書は、皆同じやうな場合をいつたもので、かうして心の誠を見せたものである。女はまたそれと知つても、わざとつれない風をして試みたり、又はこゝにあるやうに、わざと寐た振をして戸の陰から、そつとその氣はひを伺つたりなど、情事をもてあそぶ興味は、老實な後世の人間の、夢にも思ひ寄らぬ所である。戸一つを隔て、主客の擧動を、内外に書分けた手際は、甚だ巧なものである。火箸の音は、その夜の靜寂を印象させる、極めて有力な文字。

若者達が詩歌の朗詠は、當世好の風流だらうが、一面には、女性をいどむ戀の聲であつた。それをもてはやして、叩かねどまづ明くる局は、ゆかしい限ではないか。そこで打連れ立つて、思はぬ人さへはひつてくる。清少が機智頓才を以て、一世を敬服させたのは事實だが、一面には、かうした情らしい和いだ所もあつて、人好もしたのであらう。中宮と御一所に、生昌の第に下りて後も、清少をあてに、君達などが參つたものである。

五節の所々の有樣などいひ語るにつけても、清少納言など出合ひて、少々の若き人などにも優りて、をかしう誇りかなるけはひを捨難く覺えて、二三人づつ連れてぞ參る。

と榮華物語に見えてゐる。さて局の前に、人達の立とまる所から「入るべきやうなくて立明す」までは概叙で、「みすのいと青く」から「袖うちあはせ立ちたるこそ」までは、その詳叙である。若人達が多人數、狹いはざまに、目白押に竝んで、壁に凭れながら敬屈した樣と、物々しく盛裝した君達が一人、簾うち被つて、文書き鬢などつくろふ打解けた態とは、面白い對照で、戸をほと〳〵と打叩く懸想人と共に、細殿情調の、尤も深みのあるものであらう。

音樂の遊興は、村上帝以後、甚だ寂寞を極めたが、一條朝になつて再興された。實際、帝は高遠門下の笛の妙手であらせられたのに、左大臣源雅信が、また音樂堪能で、一代の名匠と稱せられ、催馬樂の譜曲を作つて、郢曲界の高祖と仰がれ、その子時仲、及び四納言の一人公任は、斯道の達人であつた。内侍所の御神樂も、この時代から始つた事を思ふと、神事佛事に託して、專ら歌舞遊宴を好まれた事が推知される。祭の樂一つにも、試樂があり、當日の樂があり、中々盛んなものであつた。神樂は神代からの恒例として、必ず夜陰に行はれるのに、賀茂の臨時祭は冬の眞只中だから、底冷のする夜寒にかじけた主殿の官人が、頸をすぼめながら、松明を持つてとほる、北の陣の方から、節おもしろく、笛の音がさえて聞える、參内する束帶姿の公達が、通りがかりに聲をかける、樂の音に遠慮して、いよ〳〵低くみじかく小前の聲がおはれる、かう見集め聞集めると、面白くてたまらぬのに、やがて御前の儀が濟んでくづれ出た君達が、興もなほ盡きぬと見えて、細殿の人も聞いてくれといはぬばかりに「荒田におふる」と投やり節に歌つたのが、霜夜の空にすみ渡つた面白さ、細殿の簾も、この爲に揭げずには居られまい。大鏡に、

一條院の御時、臨時祭の事はてゝ、上達部たちの物見に出給ひしに、雅信が外記の隅のほど過ぎさせ給ふとて、

わざとはなくて、口ずさびのやうに歌はせ給ひしが、中々優に覺え侍りし。「とみ草の花、手につみれて宮へ參ゐらむ」の程を、例のには變りたるやうに承りしかば云々。

とあるのは、まさしく本文の事實と吻合するものである。

これらの折過さぬ風流男の對照として、すく〳〵と退出する老實人を點出したのも面白い。例の女房氣質で、用捨なく冷かしかけても、一向通ぜず、知らぬ顏で急ぎ行くを「人や追ひて捕ふる」といつた誇張の形容は、甚だ滑稽である。よく見ると、この文は相對の事實での配合で、すべてが組織された事が、合點されるであらう。

六十四段

職の御曹司におはしますころ、木立などはるかに物ふり、屋のさまも、高うけどほけれど、すゞろにをかしう覺ゆ。身屋は鬼ありとて、皆へだて出して、南の廂に御几帳たてゝ、又廂に女房はさぶらふ。近衞の御門より、左衞門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人のはみじかければ、おほさき、こさきと聞きつけてさわぐ。あまたたびになれば、その聲どもゝ皆聞きしられて、「それぞ、かれぞ」といふに、又「あらず」などいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは、「さればこそ」などいふもをかし。

有明のいみじうきりわたりたる庭に、おりてありくを聞し召して、御前にもおきさ

（口譯）中宮が職の御曹司に居られる頃、庭前の木立など、奥ふかくふるびて、建物の造りざまも高く、人氣遠いけれど、何となく面白く思はれる。身屋には鬼がゐるといふので、皆そちらをば仕切つて別物にして、南の廂の間に、御几帳を立てゝ、中宮の御座所とし、又廂の間に、女房はつめてゐる。近衞の御門（陽明門）から、左衞門の陣（建春門）におはびりになる上達部のながい警蹕の聲など、殿上人の警蹕は短いから、それと區別して、これは大前、あれは小前と聞付けて、女房達が騷ぎ立てる。その警蹕も、度々になると、その聲柄が皆聞分けられて、「今のはその方ぞ、いやあの方ぞ」といふに、又脇から「さうではな、」などいふから、人を遣つて見せなどするのに、いひ當てた者は得意になつて、「それだから、あの方とさしたのだ」などいふのも面白い。在明の頃の、ひどく霧の滿ちわたつた庭に、女房の下りて歩くのをお聞きになつて、中宮にもお起きせ給へり。うへなる人は、皆おりなどして遊ぶに、やう〳〵明けもてゆく。左衞門の陣にまかりて見むとて行けば、我も〳〵と追ひつぎて行くに、殿上人あまた聲して、「なにがし一聲の秋」とずんじて入る音すれば、にげ入りて物などいふ。殿上人「月を見給ひける」などめでて、歌よむもあり。夜も晝も、殿上人の絶ゆるをりなし。上達部まかで參り給ふに、おぼろげに急ぐことなきは、かならずまゐり給ふ。

釋　○職の御曹司　附圖を參照せよ。○おはします頃　中宮のおはします頃と也。○木立などはるかに庭の木立のはる〴〵と見ゆるをいふ。○屋のさまも高う　屋の造方も高くと也。○け遠けれど　人氣遠けれどと也。○身屋は鬼ありとて　母屋は鬼の居て怪をなすといひてと也。當時さる事いひ傳へたるなるべし。古今著聞集に「延長七年四月廿五日の夜、宮中に鬼の迹ありけり。玄輝門内外、桂林坊のほとり、中宮廳、常寧殿の内などにぞありける」。○隔て出して　御簾、壁代、障子、屏風の類にて、身屋の界を隔てゝ、此方に居間を造るをいふ。○南の廂に御几帳立てゝ　の下、中宮はおはしましを略けり。「南の廂」は身屋の南に當る外側の間なり。「御几帳立てゝ」は中宮の御座をしつらふる也。○又廂　マタビサシ。孫廂とおなじ。廂と簀子との間の間。○陣に入り給ふ　左衞門の陣屋ある建春門より參内し給ふをいふ。○さきども　前追ふ聲どもと也。「前追ふ」は警蹕するをいふ。「ども」の下、長くの語を補はでは聞えがたし。○殿上人のは　殿上人のさきはと也。○大さき小さき　上達部の警蹕の聲は長ければ大前、殿上人のは短ければ小前と呼べる也。抄に「大前とは本府の隨身など御免ありて、所せく、みありきの面正しく前追ふをいふ。小前は小隨身ばかり連れらるゝ公達のはふれにたる樣子に前追ふをいふ」。○聞きつけて騷ぐ　女房達のなり。○それぞかれぞ　この前追ふは某殿のぞ、かの前追ふは彼某殿の

ぞと也。聲によりて、女房達の推斷していひ爭ふさま也。○あらずなどいへば　これは、他の女房の詞なり。それにても彼にてもなし。他の人ぞと也。「あらず」はしかあらずの略。○いひあてたるは　いひ當てたる人はと也。○さればこそなどいふも　さればこそしかいひしなれなどいふもの略。いひ當てたる女房の自慢の詞なり。○あり明の　有明の頃のなり。委しくは在明の月のある頃のともいふべし。月の名稱より轉じて、時間の名稱となれるもの也。「在明」は空に月の在りながら、夜の明くる義にて、陰曆廿日過の空をいふ。○きり渡りたる　霧の立渡りたるをいふ。「きり」は動詞なり。きりみちたるを見よ。○おりてありくを　女房達のおりて歩くをと也。○御前にも　宮の御前にもと也。○うへなる人々のかぎり　宮の御側に當直したる女房達の悉くと也。非番にて局に下り居る者は別なるをいふ。○まかりてみむ　行きて見んと也。まかり入りを見よ。○追ひつぎて　他の女房達が、あと追ひ續ぎてと也。あとから追ひ〳〵に續くをいふ。追付にあらず。○なにがし　一聲の秋　夏日閑避し暑といふ題にて、源英明の「池冷水無三二伏夏一、松高風有二一聲秋一」と作りし詩の句なり。「なにがし」とは、記者がわざと、上の詞を忘れたる如くに書きなしたる也。この句、和漢朗詠集に出づ。○入るおとすれば　職の方へ入來るけはひすればと也。○にげ入りて　出掛けたる女房達の、皆殿内に逃入りてと也。上に「追ひつぎて行くに」とあるは大凡にいへるにて、職を出でて、遠く行きたるにあらず。纔に門のあたりまで出でたるなり。○物などいふ　入來れる殿上人と物などいふと也。○月を見給ひける　の下、よの歎辭を略けり。○よるもひるも　かくの如くしてといふ詞を補ひて心得べし。○上達部　上達部もの内をまかで給ひ、又内に參り給ふにの略。「まかで」は退出なり。○おぼろけにいそぐ事なきは　ひどく急ぐことなきはと也。「おぼろけに」は急ぐにかゝる副詞にて、格別に、一通りならずなどの意なり。朧氣ならずの略。土佐日記に、おぼろけの願とあるを、加藤美樹の、おぼろけは大方といふ詞なり、されば朧氣ならぬ願とあるべきを、かくいへるは、この頃の俗語なりといへり。總べて辭樣には、種々の例外ありて、氣分を強くいひ表さんが爲に、わざと反對にいふことあり。卽ち怪しくある事を、怪しからぬといふ類なり。○まゐり給ふ　職に參り給ふと也。中宮の御機嫌伺かたぐ〳〵參るなるべし。

評　中宮が職に入らせられたのは度々であるが、長德元年十月の石清水行幸の時と、御落髮後の長德三年六月、梅壺に御移住なされたその前との二回は、ほんの一寸の間であつて、秋にはかゝらない。全く落着いて、職にお住ひなされたのは、長德四年二月この方の事である。その翌年（長保元年）は、六月に内裏が燒亡したので、秋まではお出のないことは、明かな事實であるから、これは是非とも長德四年中の事と斷じてよい。そして「一聲秋」と吟じ、「有明のきりたる」とあるによつて、その八月下旬と推定する。（中宮二十三、清少卅三四？）

職院が宮中の后町の殿舍よりも廣大なことは、孫廂があるのでも合點がいかう。隨つて身屋の邊は日の目がうとく、甚だ陰欝不快な間であつたらう。そのうへこの御殿は、昔から臨時の御用にばかり充てられ、或時は、主上の、不時の御立退場、或時は皇后の御産所、或時は公事執行の役所となつたりして、平常は空御殿だから、何となく人氣遠い氣味があつたのだらう。寬弘二年に内裏がまた燒けて、一時この職院が、主上の御座所となつたが、破壞がひどくて、官の朝所に御動座なされのは、この時から七年後の事である。その朝所ですら、やたらと蜈蚣などが落懸つて、閉口した事が、この草子にも出てるから、職院の荒廢はそれ以上と斷じて、間違はなからう。その身屋に鬼のある事は、紫宸殿の鬼が貞信公を脅し、藏人貞孝が殿上で鬼にけどられ、道長の夢に、南殿で朝成の靈が行成を取らうとしたと見た類、又この職院をはじめて、内裏の御殿や何かに、鬼の足

迹があつたといふ著聞集の記事などを湊合して考へると、その始は宏壯を誇つた建物も、使用するほどの機會が少なくて、多くは立腐れの有樣だから、何となく、陰々冥々、鬼氣人に迫るの感があつたらしい。こんな建物は、理性の力の極めて薄弱な時代思潮の產物たる鬼神の、最も都合のよい活動場だつたらう。

しかし鬼の間を隣に、中宮はじめ女房連が平氣で居るのは、いさゝか大膽らしいが、鬼にもいろ〳〵あつて、氣の荒いのもあり、優しいのもある。後世でもよく明かずの間などいつて、そこだけ閉めてさへ置けば、何の祟もしない奴がある。或地方で座敷わらしなどいふのも、これである。こんな陰氣臭い職院も、宮は廂に、女房は孫廂に居ることゝなつては、却つて端近く陽氣なのが珍しく、陽明門から建春門へ行く路は、この南側の築地外だから、大前、小前は、いつも絶間なく物騒がしいうへ、女同志が、誰の彼のと姦しくいひ爭うては、その賑やかな事は、言語道斷である。

庭木立に薄靄のたなびく夜は、却つて月の澄みまさる夜である。徒に寐てあかすのも心なしと、まづ庭に下りたのは、恐らく淸少だらう。宮にも、折過さぬ御心から、この振舞をもてはやして、お起きなされたので、他の女房達も、盡く庭上に出かけて遊んだのである。興に乘じて、大膽にも、左衞門の陣の殿上人に、夜襲を煽動したのも、淸少の外にはあるまい。一隊の娘子軍は忽に編成され、建春門外の南舍なる左衞門の陣さして進擊しようとする。それは丁度、職の西門から、斜に見渡される距離にある。ところが思の外に、殿上人の別働隊は、朗詠を高唱して、逆襲してやつて來た。娘子軍は先を越されて意氣忽ち沮衰して、退却又退却、もとの御曹司に逃げこもる。こゝがそれ、當時の婦人氣質である。現代の婦人連なら、直に遭遇戰が開かれることは受合である。

さて敬宵、月に興じて、互に應酬する。その夜の景氣、想ひやつてさへ面白さうである。されば、宮

（口譯）埒もないものわざ思ひ立つて、宮仕に出た人が、勤を大儀がつて、うるさげに思つてゐるのは、埒もない。人にも何かといはれ、自分にも氣に入らない

には後々までも、この出來事をば御記憶なされて、淸少に仰せ遣はされたことが、下文にも見えてゐる。

この文の中心點も、全くこの月の一章にある。

御殿の有樣からはじめて、禁中出入の通路にあたつてゐる爲、廷臣等の出入が絶間なく、甚だ面白い所であると、嚴重な禁中とはちがつて、諸事自由に、くつろぎ勝なのを喜んだ氣分が、全文に漲つてゐる。相變らずの遊樂本位である。文として見ると、大前、小前のあて競は、全くすきのない筆づかひで面白く、月下の興の一章は、その筆その事と相俟うて、ことに妙で、月の光が字面に耀き、男女遊樂の聲が紙上に聞えるやうである。「なにがし一聲の秋」は、宣耀殿女御の古今諳誦に「やがてさかしう末まではに」とあるに同じく、淸少が謙遜の意味で、ぼんやり書いたともいはれぬでもないが、これは、菅原文時が、一字の妙筆を加へたとかいふので、誰も承知の名文句だから、修辭上から、わざと明確を避けたのに違ない。

六十五段

あぢきなきもの　わざと思ひたちて、宮仕（みやづかへ）に出で立ちたる人の、ものうがりて、うるさげに思ひたる。人にもいはれ、むつかしき事もあれば、「いかでまかでなむ」といふことぐさをして、出でて親をうらめしがりて、「また參りなむ」といふよ。とりこの顏にくさげなる。しぶ〳〵に思ひたる人を、しのびて堺にとりて、思ふさまならずとなげく人。

（考異）○いかで　原本いかでかとあり。古本による。○うらめしがりて　原本うらめしければとあり。古本による。

評釋　○あぢきなき　雅語譯解に、無益ナコト、ラチモナイと譯せり。眞字伊勢物語に無二味氣一と書けり。詰ラヌの意にも當るべし。○わざと思ひたちて云々　みづから發起して、宮仕を望みて奉公に出でたる娘のと也。○物うがりて　大儀がりてと也。懶の字の意。○うるさげに思ひたると也。「たる」の下、がの辭を略けり。○人にもいはれ　朋輩共に何の彼のとうるさくいはると也。○むつかしき事も　むつかしを見よ。○いかでまかでなむ　いかにもして里へ退出せんと也。○ことぐさ　言種なり。口癖のいひ草をいふ。○出でて　里へ出でてと也。○親をうらめしがりて　親はその辛棒甲斐なきを諫めなどしたるなるべし。故に衝突を起して、怨めしがる也。○また參りなむ　復宮仕に參りなんと也。○といふよ　の下、あぢなきものの限りにこそなどいふ詞を補ひて聞くべし。○とりこ　取子なり。養子をいふ。○にくさげなる　の下、あぢきなきものなりを略けり。○しぶ〳〵に思ひたる人を　娘をしぶ〳〵に思ひたる人をの略。「しぶ〳〵」は餘り氣の乘らぬをいふ。○しのびて　我慢してと也。一本しひてとあり。これは意いよ〳〵明なり。○思ふさまならず　思ふやうにあらずと也。○堺の餘所にのみゆきて、娘の許に一向落着かねばなり。○なけく人　「人」は親をさす。「人」の下、あぢきものなりを略けり。

評　虚榮と好奇の念に驅られて、我から宮仕に出るやうな我儘娘では、到底お尻も了見もすわるものではない。だが現代の奉公人の性根と、すこしも變らぬ所が面白い。事實のありのまゝの記述に過ぎないが、流石に捨てがたい味ひがある。眞實は何時でも、大きな價値を有するものである。

わが子なら據ないし、又、普通の結婚ならば、向ふの門地とか財産とかが目的になつて、不男を壻に取ることもあらうが、養子には、何も不男を貰ふにも及ぶまいと、男前の穿鑿、これが卽ち、容儀、容姿

事もあるから、「どうぞしてさがりませう」と、口癖のいひ草をして、里におりて、さて彼是意見する親をうらめしがつて「またあがりませう」といふことよ。から呰もない。養子の顏のにくらしげなのは詰らない。娘を氣の進まず思つた男を、我慢して壻にとつて、その結果が思ふやうでないと歎く人、これは呰もない。

（口譯）氣の毒げなもの　人に代作してやつた歌の譽められるのは、氣の毒げである。けれど、それはわるくはない。遠方へゆく人が、段々に緣故をもとめて、旅行先の知人への紹介狀を書いてもらひたいと、中に立つた人にいはせたから、自分の知人の許へ、いゝ加減に、添書を書いて遣つたのに、知人はその手紙を見て、敬意を失してゐると惡つ

六十六段

いとほしげなるもの　人によみて取らせたる歌の譽めらるゝ、されど、それはよし。遠きありきする人の、つぎ〳〵緣たづねて、文得むといはすれば、知りたる人のがり、なほざりにかきて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせで、むとくにいひなしたる。

（考異）いとほしげなるもの　原本いとほしげなきものとなり。諸註本また然り。本文の事實に見れば、いとほしげなきにては、反對の意となりて通じ難し。なきは必ず「なる」の誤寫なるべし。

評　○いとほしげなる　氣の毒さうなるの意。原本のいとほしげなきを、或說にいとけなし、はしたなしなどの類語として、なきは意を強むる爲の接尾語と解きたるは誤れり。既にいとほしにげの接尾語あるを、更になしの接尾語を重ねて添へんことあるべくもなし。いとほしを見よ。○人によみて取らせたる歌の譽めらるゝ　詠みて人にくれてやりたると也。頼まれての代作ならむ。「譽めらるゝ」の下、いとほしげなるものなりを略けり。○遠きありきする人　遠方に行く人。○つぎ〳〵緣たづねて　段々に緣を求めてと也。

を重んじた時代思潮の映寫である。

現代にも我儘をこねてゐる間に、臺のたつたオールドミスのあるやうに、緣を取はづすと、その結果が面白くないから、相應だと思ふ時は、親達が、無理にも壻を取らせたものと見える。しかし、娘はもとゝ澁々なり、隨つて和熟もせぬので、壻殿も面白くないから、遂には寄付かなくなる。親ばかり獨氣をもんで、あぢなきもの、謗を招く。押付業の愚なことは、千年も前に、清少がかういつてゐる。

て、その人に返事もしないで、樣あしくいひなしたのは、氣の毒げなものである。

（口譯）氣持よささうなもの　卯杖を獻る時の祝言、神樂の人長、いづれも氣持がよい。池の蓮の村雨にあつたのが、氣持がよい。御靈會の馬長、また御靈會の振幡なども、氣持がよい。

「つぎ〳〵」は次々なり。○文得むといはすれば　清少の文得んと、人していはすればと也。清少の紹介狀なり、添書なりを欲しと、人を以て申入れたる也。○人のがり　人の許にと也。「人がり」が正格なれど、「の」の辭を挿みていふこと、この以前より例あり。○なまいたはり　生勞の義。勞り方の薄きにて、書中の文辭の、禮儀に缺くる所あるをいふ。○腹立ちて　知りたる人のなり。○返事も取らせで　添書を持行きたる人に、返事もくれずしてと也。○むとく　無德なり。その位なきこと、見るかひなきこと。仕方のなき、詰らぬなどの意もあり。古來難解の語とせり。無得と解する說もあり。○いひなしたる「たる」の下、いとほしげなるものなりを略けり。

評　代作の歌などは、誰しも無責任に、いゝ加減に、口から出まかせに詠みがちなものである。それが譽められては、全く極りがわるい。なほざりの紹介狀は、あまり同情がないやうで、一寸不快に思はれるが、又々の又頼みでは、さう眞劍になれないのは、無理もない。

六十七段

こゝちよげなるもの　卯杖のことぶき。御靈會の馬長。又、御靈會の振幡。

釋　○卯杖のことぶき　「卯杖」は正月初卯の日、曾波木、比々良木、牟保巳、棗、桃、栢、椿、木瓜、槇、梻、梅等の木を、長さ五尺三寸に切り、これを一束にも二三束にも結びて、諸衞府より禁中に上るもの也。御杖、初卯杖、祝杖ともいふ。惡鬼を厭ふ料とす。もと支那の風俗にて、わが邦にては持統帝の三年に、大學寮より杖八十枚を獻ぜしや始ならん。「ことぶき」は言壽の轉にて、詞にて祝ふこと也。祝の杖ともいふよより見れば、樣々の祝言をいひ立て、厭ひしならん。（衞府その他より、卯杖を獻ずる時の詞はあれど、そは祝言の意なければ別なるべし）。○神樂　神遊ともいふ。わが國上古の歌舞にして、天の岩屋の故事を本とし、歌を主となし、笏拍子に琴を合はせ、笛篳篥をまじへ、本歌、末歌を、座を分ちて聯ね歌ふ。○人長　ニンヂャウと讀む。神樂人に長たる意にて、纓冠を戴き、闕腋の袍を著、笏を持ち、太刀を帶び、手に榊の枝を持つ。本末の各員を指揮して演奏せしめ、韓神、其駒の曲をはる毎に、起ちて舞ふ。かく花々しき役なれば、心ちよげなる也。○村雨　群にふる雨をいふ。○御靈會の馬をさ　「御靈會」は京都の東山なる祇園午頭天王の御靈祭なり。この天王は、素盞嗚命の垂迹とぞ。將門の亂に、平定の祈願を、朝廷の籠められしより、神威盛んになり、その祭日六月十四日には、馬を禁中より引かれ、走馬、舞樂ありき。公事根源に「祇園御靈會。この祭、禁中には異なることなし。馬長など催し遣さるれども、御覽はなし。云々」。「馬をさ」は引馬の奉行なるべし。○ふりはた　振幡か。祭禮に、幡打振りて練る行事ありしならん。

評　人事を並列したる間に、只一句、蓮のむら雨の自然美を配したので、文卽ち凡でない。人長のことは、なほ百二十三段の評でいはう。

六十八段

とりもてるもの　くゞつのこと、り。除目に第一の國得たる人。

（口譯）とりもてるもの　傀儡の座がしら、正月の縣召の除目に、第一等の國の守になつた人。

釋　○とりもてるもの　春註に、この句、異本にはなしとあり。これに從ふ時は「くゞつのこと、り。除目に第一の國えたる人」は前段に續きて、心ちよげなるもの、中に入るべし。意も極めて明白なり。現存の諸本は、皆この句あり。詳解の說に「御靈會の振幡、とりもてるものとありたるを寫し誤りて、

別の題のやうにせしならん」といへる、信にいはれたり。○くゞつのこと、り　傀儡の事取なり。「傀儡」は、傀儡子記に「男則皆使二弓馬一、以二狩獵一爲レ事、或迹二雙劍一弄二七丸一、或舞二木人一鬪二桃梗一云々。女則爲二愁眉、啼粧、折腰歩、齲歯笑一、施レ朱傳レ粉、倡歌淫樂、云々。」男は遊行の藝人にして、女は即ち賣女なり。想ふに、一種の特殊階級の部民にして、良民にはあらざるべし。「事取」は事を取りまかなふ意にて、その演藝の際の頭人即ち座頭をいふ。なほ、神樂における人長の如き者ならん。一本ことりとあるは、部領の義にて、これも通ずべし。○第一の國得たる　守の明きたる國々ある中にての、一番よき國の守に任ぜられたるは快かるべし。昔は全國を國の貧富廣狹によりて、大、上、中、小の四等に分ちたりき。第一の國は、いづれ大、上などの國なるべし。

六十九段

御佛名のあした、地獄繪の御屏風取りわたして、宮に御覽ぜさせ奉り給ふ。いみじうゆゝしき事かぎりなし。宮「これ見よかし」と仰せらるれど、清「更に見侍らじ」とて、ゆゝしさに、うへやに隱れふしぬ。雨いたく降りてつれ〴〵なりとて、殿上人、うへの御局に召して、御あそびあり。道方の少納言琵琶、いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の少將笙の笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたる程に、大納言殿の「琵琶の聲はやめて、物語せむとすること遲し」といふことをずんじ給ひしに、隱れふしたりしも起き出でて、清「罪はおそろしけれど、なほ物の隱れて打臥した。雨がひどく降つて、主上が御退屈であるというて、殿上人を、弘徽殿の上御局に召して、管絃の御遊があつた。道方の少納言の琵琶が、大層うまい。濟政の君が箏の琴、行成が笛、經房の少將が笙の笛などで、大層面白く、一曲かなでて、琵琶を彈きやんだ時に、大納言殿が、白樂天の琵琶行中の「琵琶の聲はやめて物語せむとすること遲し」といふ句を吟じ出されたのに、面白さに溜らなくなつて、隱れ臥してゐたのも起出して「佛罰は恐ろしいけれど、やはり物の面白いことには、我慢が出來まい」というて、人々に笑はれる。大納言殿の御扉などがすぐれてゐる

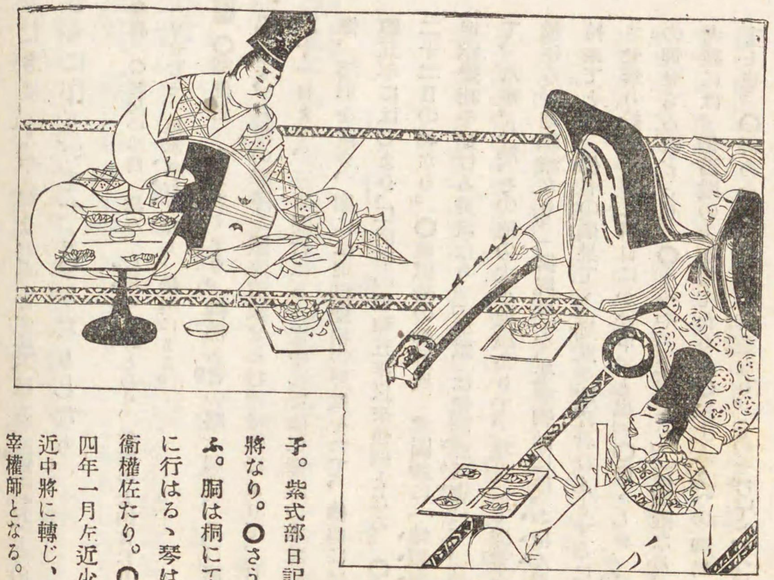
（口譯）御佛名會のあつた翌朝、地獄變相の繪をかいた御屏風を、持つて來て、中宮の御覽に御入れ申した。その繪のひどく厭らしいことは、限もない。中宮が「これを見なさい」と仰しやるけれど「決して見ますまい」というて、厭らしさに、上屋に

めでたきは、えやむまじ」とて笑はる。御聲などのすぐれたるにはあらねど、折のことさらに作りいでたるやうなりしなり。

（考異）○經房の少將　原本、經房の中將とあり。伊周の大納言たりし頃は、未だ中將たらず、依りて改む。○物がたりせむと　原本せむとなし。抄本による。

釋　○御佛名　オブツミヤウ。御佛名會の略。朝廷、及び諸國にて行ふ諸會の一にて、三世諸佛の名號を唱へて、六根の罪障を懺悔消滅せしむ。時代により、日時に異同あれど、この頃は十二月十九日より二十一日まで、三日間行はる。宮中にては仁壽殿の本尊觀音像を遷して、清涼殿の御帳の中に掛け、佛像、塔形を置き、廂には地獄變相の屏風をたて、佛前には香華を供ふ。初中後夜、導師代りて勤む。寶龜五年にはじまり、仁明帝の承和五年以來恒例となる。○御佛名のあした　佛名會のはてたる旦なれば、二十二日の朝なり。○地獄繪の御屏風　雲圖鈔に「地獄變の御屏風、七帖立二七个之間一」とある是なり。地獄變相を描ける屏風なり。「地獄」は梵語那落迦にて、地下二萬由旬に、無間地獄あり。これに重層して、八寒、八熱、その他の大小地獄ありて、現世にて罪業を作りたる者を呵責するといふ。この呵責の樣を描けるが地獄繪なり。「御屏風」を、榮華物語には、おほん屏風と書けり。○取りわたして　中宮の御殿に持來てと也。佛名の儀果て、屏風を取片付けんとするに當り、中宮の御殿に持來れる也。○宮に御覽ぜさせ奉り給ふ　宮に御目にかけ申〻と也。○ゆゝしき　忌々しくて厭なるをいふ。○仰せらるれど　宮の仰せらるれどと也。○うへや　上屋なり。清涼殿なる、中宮付の女房などの詰所なるべし。大內裏考證には、御湯殿の上を當てたり。○殿上人うへの御局にめして　殿上人を、帝の、上の御局に召してと也。○御あそび　音樂の御遊なり。「あそび」といへば、音樂の演奏をいふこと、當時の慣習なり。

のではないけれど、場合がわざと拵へ出したやうであつたのである。それで大層面白い。



貴人管絃（餓鬼草子）

○道方の少納言　源重信（當時右大臣）の子。正暦元年少納言、長德四年左少辨たり。後左大辨參議を經て、正二位權中納言に至る。長久五年薨ず。年七十六。○琵琶　雅樂に用ゐる四絃の樂器。その體圓く、棹の先曲りて、頸長し。撥にて彈ず。もと胡國の樂器を、支那にて傳へたるが、雅樂と共に、わが邦に傳來せしなりといふ。平家の琵琶などは、これよりうつれる物なり。○濟政の君　源時中（當時權中納言）の子。紫式部日記に、美濃少將とあり。寬弘七年從四位下右中將なり。○さうの琴　箏なり。雅樂に用ゐれば、樂琴（がくごと）ともいふ。胴は桐にて、長さ六尺四寸に造り、十三絃を張る。今世に行はるゝ琴は、この一轉したる物なり。○行成　當時左兵衞權佐たり。○經房の少將　西宮左大臣源高明の四男。正暦四年一月左近少將、長德二年七月右近權中將、同四年十月左近中將に轉じ、長保中藏人頭に補し、後參議、權中納言、太宰權帥となる。治安三年薨ず。年五十五。○さうの笛　笙（しやう）な

り。雅樂に用ゐる。細竹十三管を、環形に排列し、管毎に簧（した）あり。下に、桐にて製れる頭を附け、吹孔を設く。○笙を笙の笛、箏を箏の琴、又琵琶を琵琶の琴などいふは、この頃の辭樣なり。○道方の少納言、濟政の君、行成、經房の少將　の下、各のを略けり。○ひとわたり遊びて　一遍とほり演奏してと也。一曲奏でをはりたるなり。○大納言殿の　伊周公がなり。中宮の御兄。○琵琶の聲はやんで云々　白居易の琵琶行の一節に「忽聞（チク）水上琵琶聲、主人忘レ歸客不レ發（ヲバレヌヲフヲヌ）、尋（ネテ）レ聲闇問彈者誰（ヘバ）、琵琶聲停（ヤンデ）欲（スルト）レ語（ラントシ）遲（シ）」。○ずんじ給ひ　誦し給ひの音便。吟じ上げたるをいふ。○隱れふしたりしも　上屋に隱れ伏したりしもと也。○罪はおそろしけれど　佛罰は恐ろしけれどと也。落臣の說に「地獄畫は、人に道心起させん爲なるを、それを見ずして、面白き事にさし出づるは、罪恐ろしけれども、怺へ難しと也」。○なほ物のめでたきは「なほ」はヤハリの意。「めでたきは」はめでたきにはの意。○えやむまじ　止むことは出來まじとさらに云々　その場合と、その詩意とが、あまり旨く打合ひたるに、この朗詠に出合ふやうに、さやうなる機會を、わざ〳〵作り出したるが如かりしと也。○笑はる　人々に笑はると也。○御聲などの　大納言殿の也。○折のこと

評　この段は正暦四年十二月廿二日の事である。それは伊周が大納言在任中の十二月は、正暦三年と同四年とであるのに、經房が少將となつたのは、同四年一月だからである。（主上十四、中宮十八、伊周廿二、道方廿六、經房廿五、行成廿二、濟政（未詳）、清少廿八、九？）

地獄繪を展開して、道心を勸めることは、後世までも行はれ、熊野の勸進比丘尼など、この繪解をして生活する者さへあつた。著聞集に、

弘高、地獄繪の屏風をかけるに、樓の上より梓をさし下して、人を刺したる鬼をかきたりけるが、殊に魂ひ入りて見えけるを、自らいひけるは、恐らくはわが運命盡きぬと。果して幾程なくて失せにけり。

と出てゐる。弘高は巨勢家の畫伯で、『具平親王に重んぜられた人だから、この地獄繪の屏風は、當時新調の物で、珍しいところから、中宮の御方にも取渡して、御覽に入れたものかもしれない。弘高が壽命をちゞめた程の名畫だから、氣味わるく、恐しいのは勿論だらうが、「更に見侍らじ」と、上屋にまで逃げ匿れるのを見ると、清少が氣弱で臆病で、神經質なことは蔽はれない。これを和泉式部が、

淺ましや劍の枝のたわむまでこはなにのみのなれるなるらん

と秀句まじりに洒落のめした、呑氣さ加減にくらべると、兩女の性格の相違が、雲泥であつたことがわかる。（赤染衞門も、業の餅を「罪はよにおもき物ぞときしかどいとかばかりは思はざりしを」と詠んでゐる）

公事は果て、雨は降る。禁中のつれ〴〵は、一通りではなかつたらう。まして當年漸く御十四にならせられた主上ではないか。そこで、弘徽殿の上御局に、管絃の御遊を催して、そをお慰め申上げる。管絃者は、皆殿上の若手揃で、いづれも名門の子弟である。中にも濟政は、先祖敦實親王以來の斯道の名手である。どんなにか面白い花やかな樂の音であつたらう。さてその琵琶の揚撥の餘韻が、今や盡きなんとする時、主上の御側に侍坐してゐた、上達部伊周の大納言が、忽ち樂天の詩句を朗誦して、「琵琶の聲停んで」と打棄ける。恰も蓮の莖が折れても、絲がなほ續いてゐるやうな、卽不卽の妙味は、とても口にも筆にもいはれない。聲の良いわるいは、全く問題外である。のちに政事上では失敗したが、伊周はやはり才人である。「物のめでたきはえやむまじ」は、例の折過さぬといふ理想と共通し、感鳴する迹がある。

清少の隱れ伏した上屋は何處だらうか。御湯殿の上とする時は、萩の戸、藤壺の上御局の二室を隔てることになるが、朗吟の聲ぐらゐは、勿論聞えるだらう。

（口譯）頭中將が、取とめもない虛言を聞いて、非常に私をけなして、「何しにあんな者を、人間と思つたらう」などと、殿上でも、ひどく私の事を仰しやると聞くに、恥がしいけれど「その事が本當ならばくやしくもあらうが、さうでないから、自然お聞直しなさるだらう」などいうて、平氣で笑つて居るに、頭中將は、黑戸の方などへ通る時にも、私の聲などがすると折は、顏に袖をふさいで、すこしも見向もせず、ひどくお憎みなさるのを、私は何とも彼ともいひわけせず、頭中將の方を見向きもし

七十段

頭中將（とうちうじやう）のそゞろなるそらごとを聞きて、いみじういひおとし、頭中將「何しに人と思ひけむ」など、殿上（てんじやう）にても、いみじくなむの給ふと聞くに、はづかしけれど、清「まことならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてむ」など笑ひてあるに、黑戸（くろど）のかたへなど渡るにも、聲などするをりは、袖をふたぎて、つゆ見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。

釋 ○頭中將　近衞の中將にして、藏人頭を兼ねたる人をいふ。藏人所及び近衞府を見よ。この頭中將は藤原齊信なり。○齊信　タヾノブ。太政大臣藤原爲光の二男。永祚中左近中將に任ぜられ、正曆五年藏人頭に補せらる。長德二年參議たり。後中納言、右衞門督、檢非違使別當を經て、正二位大納言に至る。長元八年薨ず。年六十九。才學優長にして、公任、俊賢、行成と共に、一條朝の四納言と稱せらる。○そゞろなるそらごと　取とめのなき虛言なり。○いひおとし　いひ腐すこと。俗のケナスにあたる。○何しに人と思ひけむ　何とて人らしき者と思ひしならん、あのやうなる女をと也。こは齊信の、中傷者の言を聞きて、清少を惡める詞なり。○殿上　テンジヤウ。清涼殿の殿上の間なり。南廂にあり。公卿、殿上人の祇候する處。廣さ六間にて、一間の奥に、御椅子を立て、關白その傍に着座す。その前の緣は小板敷とて、紫端の疊をしき、職事（藏人等）こゝに候す。奥端、及び西の末、横さまに、疊をしく。中に臺盤を立つ。頭の方は切臺盤、次は八尺二脚なり。火櫃二つを置く。夏は火櫃をとりて、圍棊、彈

ないて過して、ゐる。

（口譯）二月の晦ごろ、雨がひどく降つて、退屈である時に、頭中將が、禁中の御物忌にこもつて「清少と、あゝ絶交はしたものの、流石に物さびしく思はれる。何かいうてやらうか」と仰しやると、人達が私にしらせていふけれども「そんな筈は決してありますまい」など答へてゐるに、その日は一日下の局に暮して、夜になつて、お上にあがつたれば、中宮は御寢所におはひりなされてしまつた。御夜詰の女房達は、長押のしもの次の間で、燈火を近く引付けて、寄集つて、扇繪をしてゐる。その人等が、私を見付けて、「まあ嬉しいことよ。早くこゝにお出なさい」などいふけれども、中宮が御寢なつたので、つまらない氣持がして、何だつて上つたのだらうと思はれて、圍爐裏のそばにゐると、人達が、又そこに寄集つて、話などするに、外で、「何の誰が參りまし

棊の秤を置く。下戸の方の奥に、日給（ひだまひのふだ）簡と、日記の唐櫃とを置く。その前の端の柱より、蘇枋の綱を、校書殿に引きて、藏人、小舍人を召す鈴を附けたり。御椅子の兩側に、奏杖と、和琴とを置き、横敷の前に、硯を置く。殿上より落板敷に出づる口を、上戸といふ。（附圖參照）○いみじくなむの給ふ「いみじく」は惡しき方の甚しき意に用ゐたり。○と聞くに　と人のいふを聞くにと也。○まことならばこそあらめ　誠ならばこそくやしくもあらめの略。全然形のなきことなれば、何と思はれても悔しくもなしと也。この句の下に、全く虚言なればを補ひて聞くべし。○おのづから聞きなほし給ひてむ　自然その中には、事實の眞相を聞き知りて、思ひ直さるべしと也。「まことならば」よりこゝまでは、清少の詞なり。○など笑ひて　などいひ笑ひての略。○黒戸　クロド。清涼殿の北廊の西側にあり。但その黒戸のある間の稱に用ゐたり。（附圖參照）○黒戸の方へなど渡るにも　中將がなり。○聲などの略。○袖をふたぎて　袖を顔に塞ぎてと也。「ふたぎ」はふさぐの古言。○見おこせず　わが方を見おこせずと也。こちらを見やりもせぬをいふ。○とかくもいはず　一向いひ譯もせぬと也。○見も入れで過ぐす　齊信の方を見向もせずして、日を過ぐすと也。

二月つごもりがた、雨いみじう降りてつれづれなるに、御物忌にこもりて、「頭中將『さすがにさうざうしくこそあれ。物やいひにやらまし』となむの給ふ」と、人々語れど清「よにあらじ」などいらへてあるに、一日しもに暮して參りたれば、よるのおとゞに入らせ給ひにけり。長押のしもに、火近く取りよせて、さしつどひて、扁をぞつぐ。女房「あなうれしや。とくおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらむとおぼえて、炭櫃のもとに居たれば、又、そこにあつまり居て、物などいふに、「某さぶらふ」といと花やかにいふ。清「あやしく、いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば、主殿司なり。殿司「たゞこゝに人づてならで申すべき事なむ」といへば、さし出でて問ふに、殿司「これ頭中將殿の奉らせ給ふ。御かへりとく」といふに、いみじくにくみ給ふを、いかなる御文ならむと思へど、只今いそぎ見るべきにあらねば、清「いね。今聞えむ」とて、ふところにひき入れて入りぬ。なほ人の物いふ聞きなどするに、すなはち立ち歸りて、殿司「頭中將『さらば、そのありつる文を賜はりて來』となむ仰せられつる。とく〳〵」といふに、あやしくいせの物語なりやとて見れば、青き薄樣に、いと清げに書き給へるを。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、「末はいかに〳〵」とあるを、いかゞはすべからむ。御前のおはしまさば御覽ぜさすべきを、これが末しり顔に、たど〳〵しきまんなに書きたらむも見ぐるしなど思ひまはすほどもなく、せめまどはせば、たゞその奥に、炭櫃の消えたる炭のあるして、「草のいほりをたれかたづねむ」と書きつけて取らせつれど、返りごともいはず。

（考異）○物語なりや　原本なるやとあり。元本による。○いはず　原本いはでとあり。抄本による。

（解）○つごもりがた　晦方にて、下旬をいふ。つごもりを見よ。○御物忌にこもりて　頭中將が内の御物

忌に籠りてと也。主上の御物忌の時は、侍臣等、殿上に詰合ひて、共に引籠るなり。物忌を見よ。○さすがにさうぐしくこそあれ　清少と絶交はしたるものゝ、流石にさびしと也。以下「なむの給ふ」まで、人々の談話の詞にて、その中、「いひにやらまし」までは、頭中將の詞を取次ぎていへるなり。○物やいひにやらまし　何か清少のお許にいひやらんかと也。○よにあらじ　よにさる事あらじと也。頭中將のおのれを甚しく悪めるを知れる故、とてもさやうなる事あるまじといへるなり。○いらへてあるに　返事してをるにと也。○一日しもに暮して參りたれば　わが局に一日籠り居て、さて夜に入りて、お上にあがりたればと也。このお上は中宮の御殿なり。「しも」は下屋なり。わが局をいふ。「一日」は終日の意なり。或日の意にあらず。○よるのおとゞに云々　宮はや夜の御殿に入らせ給ひて、御寢になりたりと也。この「夜の御殿は」中宮御殿の御寢間なり。清涼殿の夜の御殿にあらず。○長押のしもに　長押の下は、一段さがりて、次の間となる。卽ち身屋の次の間なる廂の間なるべし。長押を見よ。○扁をぞつぐ　扁續なり。字の扁のみをあらはして、その作をあてさする遊戲にて、早く何なりと答へたる數の多きを勝とす。（以上明星抄の說による）又作を出して、扁を附けさする也ともいふ（以上嬉遊笑覽）。○とくおはせ　疾く此處に來り給へと也。清少の來るを喜びて、扁續の仲間に入れんとする也。○見つけていへど　女房達がわれを見付けていへどと也。○すさまじき心ちして　中宮のおはしまさねばなり。○炭櫃のもとに　扁續の仲間を外れて、遠退きて居る也。○そこにあつまりゐて　女房達の其處に集り居てと也。○何がしさぶらふ　某甲がこゝに參りたりと也。「何がし」は使者の主殿司の、わが實名を名告れるなれど、明記するほどの必要もなければ、不定の代名詞を用ゐたるなり。外の方に、何の誰と名告りて、清少に使者のあるさまなり。○いと花やかにいふ　外にて使者のいと花やかにいふと也。「花やかにいふ」は辭づくろひして、晴やかにいふ也。○怪しくいつの間に　只今きたるばかりなるに、

怪しく何時の間に、何事の出來したるぞと也。○問はすれば　人して問はすればと也。○主殿づかさなり　その使は主殿司なりと也。この「主殿司」は男官のなるべし。「なにがし候ふ」の口調の男らしければなり。主殿寮を見よ。○たゞこゝに　只此處にてと也。「只」はひたすらの意。「此處にて」はこの音なひたる外面をさす。○人づてならで　「人づて」は間に人ありて、事を取次ぐをいふ。清少が人して、何の用事ぞと聞かせたる故に、ぢかに申上げたき事ありといへる也。○申すべき事なむ　「なむ」の下、あるを略けり。○さし出でて問ふに　みづから出でて問ふにと也。○これ頭中將殿の、「これ」は持來れる文をさす。これを頭中將殿の、お許に奉らせ給ふ、御返事とく賜へと也。○いみじく憎み給ふを　齊信のいみじく憎み給ふものをと也。○いね今聞えむ　使にいふ詞なり。汝は行け、やがて御返事申上げんと也。「今」は俗のオツツケ、ヤガテなどの意。○ふところに引きいれて入りぬ　懷中に文を入れて、奥に入りぬと也。また元の席に反れる也。○なほ人の物いふ聞きなどするに　やはり朋輩達の話するを聞きをるに程にと也。「物いふ」の下、をを含めり。○すなはち立ちかへりて　使の主殿司がなり。○さらばそのありつる文を賜りて　以下「とく〳〵」まで、主殿司の詞にて、これは頭中將の詞の取次なり。今急に返事の出來ぬとならば、その先程の文を頂きて來よと也。「さらば」は「今聞えむ」をさす。「ありつる」は最前、以前などの意。○仰せられつるとく〳〵　頭中將の仰せられつる、疾く〳〵返事を給へと也。○あやしくいせの物語なりや　文をおこしながら、又、取返さんとするを怪み訝れる詞なり。「いせの物語」は僻事の意に用ゐたり。いせの物語は、伊勢物語のことにて、その題號のいせを、袋草紙に「爲下構二僻事一之由上といへり。錦織舍隨筆（春海著）に釋して「いとえと音通へば、いせをえせに取做して、僻事をいせとはいへる也」とあるを引きて、濱臣はこゝの伊勢の物語も、えせ事の隱語なりといへり。舊註は、伊勢物語に、在原業平の母親王の長岡に居給へる許より「師走ばかりにとみの事とて御文あり」とて、その手紙を懷中に入れて、引込んだ。そしてやはり、人が話をするのを聞きなどしてゐると、主殿司が、すぐに引返して來て、「今御返事もないなら、その先刻の手紙を返して頂いてこい」と仰しやいました。大急ぎで、御返事を下さい」といふに、變なまちがつた話であるよと思つて、その手紙を見ると、青い薄樣の紙に、大層綺麗にお書きになつてある。さう心配する文言でもなかつた。「關雀花時綿帳下」と書いて、「このあとの句はいかに〳〵」と書いてあるが、どうしたらよからうか。宮の御前の、こゝにお出なちば、御覽に入れようものを、このあとの文句をば知つたり

振に、おぼつかない漢字で書出さうのも見苦しいなどと、思案する間もなく、早く〳〵とむやみに催促するから、只その手紙の奥のところに、圍爐裏に消えた炭のあるのでもつて「草のいほりを誰かたづねむ」と書付けて遣つたけれど、それきり返事もない。

あるを引きて、伊勢の物語は。火急の使の由なりといへり。聞えぬにはあらねど、なほ前說を可とす。「や」は歎辭。○とて見れば　とてその文を見ればと也。○青き薄やうに　頭中將の文のさま也。「薄樣」は貞丈雜記に「薄樣、厚樣、中樣などいふ紙は、皆鳥の子の紙を、薄く漉きたるうちに、三段の品あり。今の薄樣は、上代の薄樣とは、今の厚樣ほどもあるべきか。云々」。○書き給へるを　「を」は歎辭にてよといはんが如し。こゝにて句は切れたり。一本、書き給へりとあるは事もなく聞ゆ。○心ときめきしつる樣にも云々　文を開かぬ前に、何ならんと氣遣ひしたるやうにもなしとなり。上に「いかなる御文ならむ」と怪めるに對へて、今は心安く思へるなり。○蘭省花時錦帳下　唐の白居易の詩の句なり。白氏文集に、廬山の草堂に雨夜獨宿して、牛二、李七、廋三十二員外に寄する詩に「丹霄携レ手三君子、白髮垂レ頭一病翁、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草菴中、終身膠漆心應レ在、半路雲泥迹不レ同、唯有二無生一三昧觀、榮枯一照兩成レ空」とある、その第三句なり。「蘭省」は支那にては尚書省をいへり。漢官儀に「漢尚書郎懷レ香握レ蘭、含二雜舌香一奏レ事」とあるによる。「錦帳」は錦のとばり也。この對句たる第四句の「廬山」は支那江西省の匡廬山の略稱なり。「草菴」は草葺の假家なり。三四の句意は、牛李廋等三友人は、今なほ尚書省にありて、侍中の職を奉ずれば、三春の候、百花爭ひ開く時、その身天子の錦帳の下に侍して、榮華ならぶ方なけれども、我は世事志と違ひて、今は廬山の下に草菴を結びて、獨わびしく住居るに、半夜暗雨蕭々として、空しく榮枯盛衰の量り難きを觀ずると也。○末はいかに〳〵　「末」とは聯句のうちの下句をさせり。即ち對句たる第四句を、如何にと問へる也。○いかゞはすべからむ　清少の心のうちに當惑したる樣なり。○御前のおはしまさば云々　中宮のこゝに御出ならば、この文を御覽に入れて、御相談もすべきを、御殿籠りてお出でなさらねば、如何にせば宜しからんかと也。この句の下に、「いかゞはすべからむ」をまはして心得べし。○これが末　「これ」は卽ち「蘭省云々」の句をさす。「末」は卽ち廬山雨夜草菴中の句をさす。○たど〳〵しきまんなに云々　「たどたどし」は辿るの形容詞格にて、確ならぬ、覺束なきなどの意。「まんな」は眞字の音便にて、漢字をいふ。假字に對する稱なり。漢字を男文字、假字を女文字といひし如く、當時の婦人は、專ら假字をのみ書慣ひたれば、漢字は比較的下手なりし也。故にたど〳〵しきまんなといへり。○思ひまはす程もなく考へてゐる間もなくと也。○せめまどはせば　主殿司の疾く〳〵とせめまどはせばと也。「せめ惑はす」は責むることの甚しきをいふ。○その奥に　その本書の奥にと也。○消えたる炭のあるして　熾りさしたる炭のあるを以てと也。近くに硯筥のなきさま也。○草のいほりを誰か尋ねむ　歌の下の句なり。廬山雨夜草菴中の句意を飜用して、頭中將に憎まれたれば、わが許を誰かは訪はんの意を寓せたり。○取らせつれど　主殿司にその文を取らせつれどと也。○返りごともいはず　頭中將よりは返事もなしと也。

（口譯）一同寢て、翌朝、大層はやく自分の局におりてゐると、源少將の聲で、「草のいほりがゐるか〳〵」と仰山におとづれるから、「何で、そんな人氣ないものが居りませう。玉の臺をお尋ねなさるなら、御返事も致しませう」といふ。その聲を聞いみな寢て、つとめていととく局におりたれば、源少將の聲して、「草の庵やある。〳〵」と、おどろ〳〵しう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらむ。玉の臺もとめ給はましかば、いらへてまし」といふ。「源少將」あなうれし。しもにありけるよ。うへまで尋ねむとしつるものを」とて、よべありしやう、頭中將のとのゐ所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集りて、よろづの人のうへ、むかし今と語りいでいひしついでに「頭中將」『なほこのもの、むげに絶えはて、後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず、つれなきがいとねたきを、こよひ惡

しとも善しとも、定めきりて止みなむかし』とて、皆いひあはせたりし事を、『清』只今は見るまじ」とて、入り給ひぬ』とて、主殿司來りしを、又追ひかへして、人々『たゞ袖をとらへて、東西をさせず、こひ取り持てこずは、文をかへし取れ』といましめて、さばかり降る雨のさかりに遣りたるに、いととく歸りきたり。主殿司『これ』とてさし出でたるが、ありつる文なれば、返してけるかとうち見るにあはせてをめけば、人々『あやし。いかなる事ぞ』とて、皆寄りて見るに、頭中將『いみじきぬす人かな。なほえこそすつまじけれ』と見さわぎて、人々『これが本つけてやらむ。源少將つけよ』などいふ夜更くるまでつけ煩ひてなむやみにし。この事、かならず語り傳ふべき事なりとなむ定めし」と、いみじくかたはらいたきまで言ひきかせて、源少將御名は、今は草のいほりとなむ附けたる」とて、いそぎたち給ひぬれば、清「いとわろき名の、末まであらむこそ、くちをしかるべけれ」といふほどに、

（考異）○源少將　諸本源中將とあり。されども、齋信が藏人頭たりし時は、經房は少將現任なり。故に改む。○いらへてまし　原本出で聞えてましとあり。抄本による。○見るまじ　原本見まじきとあり。抄本四本による。

（評釋）○みな寢て　女房達の、皆上屋に寢たるなり。○局におりたれば　清少がなり。○源少將　經房なり。前段を見よ。○草のいほりやある　清少の居らるゝかといふ也。「草の庵」を清少の綽名として呼べるものなるが、委細は經房の談話中に明なり。○おどろ〳〵しう　仰山なるをいふ。○などてかさ人は

て、あゝ嬉しい。下屋におりてゐることよ。こちらに居なければ、お上の局の方までも尋ようと思つたものを」というて「昨夜あつた事だが、頭中將の宿直所で、少し人らしい者のありたけ、五位は勿論、六位までも集つて、いろ〳〵の人のうへを、昔や今やと話し出したついでに、頭中將が『やはり、あの少納言は、一向絶交してしまつての後が、絶交したとはいひながら、そのまゝにしては、どうも置かれない。もし向ふから、折れてでもくる事があるかも知れぬと待つてゐるが、少しも何とも思つて居らず、平氣でゐるのが、甚だ殘念なのを、今夜試しをかけて、それで悪いとも著いとも、決定してしまはうよ」というて、皆で相談してよこした手紙を、貴女が『只今は見まい」と仰しやつて引込まれた』というて、主殿司が歸つて來たのを、又追返して『只その紬をつかまへて、有無をいはせず、無理にも貰つて持つてこい。返事をくれぬならば、手紙を取返せ」と人々がいひ聞かせて、あんなに降る雨の盛りにやつたのに、大層早く歸つてきた。『これを』というてさし出したのも、こちらから遣つた以前の手紙だから『返したのがしら』というて、その手紙を開けて見ると同時に、頭中將が、あつと叫んだから、人々が『不思議な。どうした事ぞ』というて、

なきものはあらむ　何とてさやうに人がましくもなきものは、此處にはあるべきぞと也。「か」は反語。「さ」は草の庵をさす。「人げ」は人氣なり。「草の庵」などはわび人（貧者）の住居なれば、いぶせくて、人氣もなき故にいふ。○玉のうてな求め給はましかば　玉の臺を尋ね給ふならば、ありと答へんものをと也。「玉の臺」は草庵の對語にて、漢書禮樂志に「遊三閶闔一、觀二玉臺一」とある玉臺は、上帝の居にて、玉にて造れる臺なれど、又玉を譬喩の美稱として用る、立派なる臺の意ともす。ここもその意なり。○あな嬉しもにありけるよ　まづ清少の居たるに安心して「あな嬉し」といへる也。「しも」は下屋、即ち私の局をさしていふ。主人のお前の局を上屋といふに對す。上に「局におりたれば」とある局なり。○うへまで尋ねむとしつるものを　もし下屋に居給はずは、上屋までも尋ねんと思ひしものをと也。この句より「下にありけるよ、あな嬉し」と續く文章なるを、三段に反轉したる也。急遽の際の口氣味ふべし。○よべありしやう　よべありしやうはと也。以上「定めし」まで、源少將の昨夜の出來事を語れる詞なり。○とのゐ所にて　次の句を隔てゝ「よろづの人のうへ云々」にかゝる句なり。「とのゐ所」は宿直所にて、藏人所にある藏人頭の當番所なり。○すこし人々しきかぎり　すこしは取得のある者の限りとなり。物の心をも知れる人々をいふ。○六位まで　五位は勿論、六位までもと也。「六位」は藏人の外に非藏人等をも含めるならん。非藏人の定員は、禁祕抄に「四人也、間五人也」と見ゆ。門地ある者の子弟中、六位たる者の中より補し、殿上廳使の役を務む。藏人に非ずして、藏人の如く、昇殿を許されて、職に從ふにより、非藏人とはいふ也。藏人に缺員ある時は、必ずこれより補す。○よろづの人のうへ　「うへ」の下、をを略けり。○むかし今と語り出で　古今の數多の人の上を論評したる也。○いひしついでに　人物評の序に、清少のことに及びたる也。○なほこの者　以下「やみなむかし」まで、頭中將の詞なり。「なほ」はヤハリの意。この者は清少をさす。○むげに絶えはてゝ　一向に絶交してと也。○さすがにえ

皆そばに寄つて見ると、頭中將が『えらい盜人だな。やはり見襲てられまい』といつて、その筆蹟を見て騷いで『この上の句をつけてやらう。源少將つけてやらい』など人々がいふ。夜の更けるまで考へたが、つけ煩つて止めてしまつた。『この事は、必ず世間に語り傳へなければならぬ事である』と、皆で決定してしまつた」と、甚だ苦々しい程にまでいひ聞せて、「貴女のお名前は、今は草の庵とつけましたし」といつて、急いでお立ちになつたから、「大層わるい名前が、後世まで殘らうことがくやしいだらう」といふ時に、

あらね　憎みながらも、流石に絕交したるまゝにては、さしおかれぬと也。○もしいひ出づることもやと云々　若し彼が言譯の詞をいひ出すこともやあらんと待てどと也。「思ひたらず」は思ひてあらずの約。○つれなきがいとねたきを　「つれなき」は平氣なるをいふ。「ねたき」は殘念なるをいふ。○こよひ惡しとも善しとも云々　今夜善惡いづれとも定め切りてしまはんと也。惡しければ絕交し、よければ引續きて交際せんとする也。「よひ」は夜の義なり。●皆いひ合はせたりし事を　殿上人等が皆相談して、文を贈りし事をと也。○返してけるか　返事出來ずして、文をそのまゝ返したるかと也。○うち見るにあはせてをめけば　一寸見ると同時に、あゝと聲を擧げたればと也。「うち見る」は見るとをめくと一所なるをいふ。「をめく」はわめくと同じ。驚き叫ぶこと。この返してけるかと思ひて、うち見るにあはせてをめきたるは、まづ文を見たる頭中將なども也。「見るに」の下「ありつる文の奥に、炭して草のいほりを誰か尋ねむと書付けてありたれば」と、詞を補ひて聞くべし。○いみじきぬす人かな　頭中將の詞にて、感激の極に發したる矯語なり。「ぬす人」はまことの盜人にはあらず。春註に「清少を凡人ならずと褒めんとて、されていへる也。禪話に此老賊などいふ類なるべし」とあり。されば、ぬす人の語に三樣の意味あり。(一)は盜賊をいひ(二)は罵詈するに用る(竹取物語に赫奕姫てふ大ぬす人)(三)は(二)の更に變化したるものにて、本文に見えたるこれ也。○なほえこそ棄つまじけれ　やはり見棄てらるまじと也。絕交し難きをいふ。○これがもとつけてやらむ　人々の詞なり。この上句を作りて、清少に贈らんと也。「これが」は「草のいほり」の句をさす。○源少將つけよ　經房下句を附けよと也。○附けわづらひて云々　人々が附けかねて、その儘になりたりと也。○語りつたふべき　世に語り傳ふべきと也。○定めし　人々が論定したりと也。○かたはらいたき　はた聞の苦しきをいふ。傍痛しの義。○御名は今は云々　これも源少將の詞なり。あなたの御名前は、今よりは草のいほりと附けたりと也。蓋し異名なり。○いとわろき名の末まであらむこそ　清少の詞なり。「わろき名」とは草の庵の異名をいふ。上に「さ人けなきものはあらむ」といへる如く、草の庵はしみたれたる名なれば也。「末まで」は末の世まで也。

（口譯）修理の亮則光がきて、非常な慶びやうひに、貴女を尋ねて、上の御局の方に參りました。がもうおさがりでしたな」といふから、「何ですか、司召の除目があるとも聞かないのに、何役におなりなされ

修理亮則光、「いみじきよろこび申しぞ。司召ありとも聞えぬに、何にうへにやとて參りたりつる」といへば、則光「いでまことにうれしき事のよべ侍りしを、心もとなく思ひ明してなむ。かばかり面目ある事なかりき」とて、はじめありける事ども、少將の語りつるおなじ事どもをいひて、則光「『このかへりごとにしたがひて、さる者ありとだに思はじ』と、頭中將の給ひしに、たゞに來りしたびは、いかならむと胸つぶれて、まことにわろはなか〳〵よかりき。もて來りし

ぞ」といふと「いやさ、ほんに嬉しいことが、昨晩ございましたのを、早くお知らせしたくて、待遠に夜の明けるのを思ひました。これほど面目ある事はありませんでした」という、最初からあつた事などを源少將の話したのと同じ事などいうて『この返事次第で、そんな者が世間に居るとも思ふまい』と、頭中將が仰しやつたので、始め使が返事も持たずに來たのは、却つてよかつた。二度目にそれを持つて來た時は、どんなものだらうと、肝がつぶれて、ほんにその返事がまづからうには、この兄の爲にも、面白くなからうと思つたのに、それが一通り所でもない上出來からむは、せうとのためもわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人のほめ感じて、『せうとこそ聞け』とのたまひしかば、した心にはいとうれしけれど、則光『さやうのかたには、更にえさぶらふまじき身になむ侍る』と申しゝかば、人々『こと加へ聞き知れとにはあらずや。たゞ人に語れとてきかするぞ』との給ひしなむ、すこしくちをしきせうとのおぼえに侍りしかど、人々『これが本つけ試みるに、いふべきやうなし。ことに又、これが返しをやすべき』などいひあはせ、わろき事いひては、なか〳〵ねたかるべしとて、夜中までなむおはせし。これ身のためにも、人のためにも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召にせう〳〵のつかさ得て侍らむは、何とも思ふまじくなむ」といへば、げに數多して、さる事あらむとも知らで、ねたくもありけるかな。これになむ胸つぶれて覺ゆる。この妹、兄といふことをば、うへまで、皆しろしめし、殿上にも、つかさ名をばいはで、せうととぞつけたる。

（考異）○せう〳〵　原本少將とあり。活本による

補注　○修理亮　スリノスケ。修理職は内裏を修理造作する役所にて、大夫、權大夫、亮、大、少進等の官あり。○のりみつ　橘則光なり。駿河守敏政の子。小右記によれば、花山天皇の御乳母の子なり。長德二年の大間書に、修理職亮正六位上と見ゆ。本文を長德元年の出來事とすれば、こゝに一年の齟齬を生ずれど、後の官職を前に及ぼして書ける例、本文中に少からざれば、こゝもその類とすべし。なほ小右記

て、その邊に居あはせた人々が譽め感じて『兄君よ。聞きなさい』と仰しやつたから、内心には大層嬉しいけれど『さういふ文雅の事には、一向たづさはりかれぬ身でございます』と申上げると、人々が『何もお前に、批評したり、了解したりせよというて、聞かせるのではない。只世間に吹聽せよというて聞かせるぞ』と仰しやつたのは、少し情ないこの兄の見立られ方でありましたが、人々が『この上句を附けてみるのに、どうもいひやうがない。いつそ附けるのはよして、別に又、この返歌をしようか』など、いろいろに相談して、『詰らぬ事をいつては、却つて殘念だらう』

長德三年四月十七日の條に、左衞門尉則光とありて、檢非違使と註したり。また今昔及び宇治に、その武勇の事見えて、若くて衞府の藏人なりし由あるは、この草子の官職に符合せり。江談抄に「橘則光、於二齋信大納言宅一自搦二盜人一、勇力軼レ人」とあり。尊卑分脈に、陸奥守從四位上と見ゆ。この草子の則光は歌嫌なれど、金葉集に、その他に、この人の歌見えたり。「のりみつ」の下、の來りてを略けり。○いみじきよろこび申に　この「悅申」は任官の奏慶にあらず。清少の名譽を祝ふにもあらず。人中にて面目ありしことを感謝するをいふ。「悅申に」は悅申の爲にの略。○うへにやとて　うへにや尙居給へるとての略。○參りたりつる　上屋に參りたりつるよと也。「つる」の下、よの歎辭を略けり。この句の下、然るに下におりおはしけるよを補ひて聞くべし。○なぞ　何ぞの略。○司召　ツカサメシ。京官の叙任を稱す。除目を見よ。○司召ありとも聞えぬに　司召の臨時にありとも聞かぬにと也。○なになり給へるぞ　何の官職になり給へるぞと也。則光が「悅申に」といへる故に、奏慶の意に聞做して、何役になれるぞと問へる也。○いで　發語なり。サア、イヤサなどいふが如し。以下中間挿入の「とてはじめありける事ども、少將の語り給へるおなじ事どもをいひて」とある地の文をのぞきて、「思ふまじくなむ」までは、則光の談話の詞なり。○よべ侍りしを　の下、君に知らせんとてを略けり。○心もとなく思ひあかしてなむ　待遠に思うて、夜一夜を明して、さて今參りたりと也。「なむ」の下、參りつるを略けり。○かばかり云々　かほど程身に取りて、面目あることは、これまで無かりしと也。○面目　メイボク。又メンボク。○はじめありける事ども　頭中將の宿直所にて、最初よりありし事なり。○語りつる　の下、とを略けり。○このかへり事にしたがひて　この文の返事次第にてとも也。○さる者ありとだに云々　最早清少などいふ者の、宮の女房中に居るとサヘモ思はざるべしと也。全く絶交するをいふ。○たゞに來りしはなか〳〵によかりき　最初主殿司が、返事を持たずに來り

しは、却つて下手な返事のあるよりはよかりしと也。「たゞに」は徒にて、手ブラなるをいふ。「中々」は却りての意。○もて來りしたびは　二度目に、主殿司が文を持來りし時は、その返事は如何なるものかと心配になりて、肝がつぶれてと也。「胸つぶれて」は、ハッと思ひて、動氣のするをいふ。○まことにわろからむは　返事のなり。○せうとの爲もわろかるべし　この兄の爲も善からざるべしと也。そは晉に當座の面目なきのみならず、藏人頭の絕交せられたる者の緣者にては、殿上に勤むるにも、甚だ具合よからぬをいふ。「せうと」は兄人の音便にて、則光と清少は義兄妹の約束ありし故に、則光みづからも、兄人といへり。春註に、中よき故に、人々戲に兄妹と申さるゝとあるは非なり。○なのめにだにあらず　その返事が斜にだにあらず、十分の出來にてと也。「なのめ」はなゝめの古言にて、倒るゝまでならねど、傾きかゝりたる程をいふ。故に物の七八分目なる、不完全なるなどの意とす。○そこらの人こゝらの人といふに同じ。人數のあるにいふ。○せうとこそ聞け　兄公聞けよと也。「せうとこそ」は「兄人」と「こそ」の辭との連名詞なり。このこそはくそとも轉じて、その人をさして呼ぶ一種の敬稱なり。小忌こそ（小右記）忠こそ（空穗物語）北殿こそ（源氏物語）わが君こそ（この草子）阿古くそ（河海抄）小藥師くそ（大和物語）の類、甚だ多かり。○した心　心の中をいふ。○さやうの方にはえさぶらふまじき云々　さやうなる文雅の方には、向たゞさはりかぬるわが身にて候へば、聞きても無用の事ならんと也。無學にて、何もわかり難しと謙退したる也。「侍る」の下、すれば聞くもそのかひなく候はんを補ひて聞くべし。○こと加へ聞き知れとにはあらず　これもそこらの人々の詞なり。言葉を加へよ、又意味を知れよとて、聞かすにはあらずとなり。「言加へ」はいひ添ふることにて、助言することなるが、こゝは批評するをいふなるべし。○たゞ人に語れとて聞かするぞ　たゞ清少の手柄話を、世間に吹聽せよとて、それが爲に聞かするぞと也。「たゞ」はひたすらの意。○くちをしきせうと

というて、夜中までお出なされた。これが、我が身の爲にも、貴女の爲にも、さて非常な慶びではございませんか。司召に少々の官職を得ませうことは、これにくらべては、何とも思ひますまい」といふので、ほんに大勢して、そんな事をしようとも知らないで、殘念であつた事よ。この事で、肝が潰れるやうに感じた。この妹といひ兄といふ事をば、お上まで、皆御存知で、殿上でも、則光の官名をば呼ばないで、兄人と名を呼んでゐた。

のおぼえ云々　情無き、この兄の見込まれ方に候ひしかどと也。この句の下、それはともあれを補はでは、文意とほり難し。全くの物識らずと見られて、只吹聽の道具に使はるゝを「口をしき覺」といふ也。「おぼえ」は思はれにて、雅語譯解に上ノ思召、人ノ思ハクとあり。○これが本つけ試みるに　これも人の詞なり。これが上句を附けて見るに、いひ出し樣なしと也。これがは「草の庵を云々」の下句をさす。○ことに又これが返しをやすべき　特別に、この返歌を作りて贈らんかと也。上句の旨く附かぬ故なり。○わろき事いひては云々　これもそこらの人々の詞なり。下手なる事をいひ出しては、全くいはぬよりは、却つて恥ざらしにて殘念ならんと也。「中々」は却りて、又はナマナカニの意。○夜中までなむ云々　夜中まで、人々の案じておはせしと也。○身のためにも人のためにも　「身」はわが身にて、則光自身をいひ、「人」は清少をいふ。○侍らずや　「や」は反語。○せう〳〵の司得て侍らんは云々　司召に、少しぐらゐの官職を得んことは、嬉しとも何とも思ふまじき事なりと也。「なむ」の下、侍るを略けり。わが官職を得たる以上に、清少の昨夜手柄を現し、ことが、甚だ嬉しき趣なり。「せう〳〵」は少々の字音なり。濱臣いふ「せう〳〵は、おろ〳〵といふに同じ。榮花物語に『せう〳〵の舞姫などの、少し物の心しりたらんは』とあり。少將と書ける本は、字のあて違ひなり」。○げに數多してさる事あらむとも云々　これは清少の意中なり。只頭中將の文とのみ思ひて、いかにも大勢して相談したるをも知らで、返事せしことのくやしきことよと也。「數多して云々」は頭中將、源少將など、大勢いひ合はせしをさす。○これになむ胸つぶれて、今始めて肝が潰れたる由なり。「これになむ」は殿上人の大勢にて、清少を試みたるをさす。○この妹兄といふこと　自分と則光とが妹といひ、兄といふこと也。○うへまで皆しろしめし　「皆」とある故、「うへまで」は、主上と中宮とを申すことゝなる。○つかさ名をばいはで　則光の官名をばいはでと也。官吏を呼ぶに、その官名を以て呼ぶが、この時代の慣習なり。「つかさ名」は官

（口譯）修理の亮と話などしてゐるうちに、取あへずまづ參れと、中宮のお召しなされたので、御前に參ると、昨夜の事を仰しやらうとて召されたのであつた。「主上が先刻此方にお出遊ばされて、あの事をお話しなされて、殿上の男共は皆、扇にあの句を書いて持つてゐるわ」と仰しやられるに、何者が、そんなに吹聽させたことかと、淺ましく思つた。さてこれから後には、頭中將には、紬几帳など取除けて、私を憎む心もお直りになつたやうであつたよ。

物語などして居たるほどに、「まづ」と召したれば、參りたるに。この事仰せられむとてなりけり。宮「うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、をのこども、皆、扇に書きてもたる」と仰せらるゝにこそ、あさましう、何のいはせける事にかと覺えしか。さてのちに、紬几帳など取りのけて、思ひなほり給ふめりし。

評　○物語などして　則光と物語などしてと也。○まづと召したれば　先づ參れと、中宮の召したればと也。○參りたるに　宮の御前に參りたるにと也。○この事仰せられむとてなりけり　この事を淸少に話し給はんとて召されたるなりけりと也。「この事」は、淸少が草の葩の手柄話をさす。○うへの渡らせ給ひて　主上がわが方に來り給ひてと也。○をのこども皆扇に書きてもたる　侍臣等が、草の葩の句を皆扇に書記して持ちたりと仰せられたりと也。「皆」とあるに、當夜御物忌に籠らぬ侍臣までも、扇に書きて持ちたり〳〵事知らる。「をのこども」は殿上のをのこ共なり。「もたる」の下、よの歎辭を含めり。○あさましう　「覺えしか」にかゝる副詞。○何のいはせけるにか　何者がこの事を、吹聽させたる事かと也。「をのこ共皆扇に書きて持たる」とあるに應ず。諸註「何かわが身に憑きて、か、る下句はいはせしぞ」と解けるは、甚だ非なり。○さてのちに　の下、頭中將はを略けり。○紬几帳　ソデギチャウ。物語に「若き人々の、打撒をあやにくにすれば、御紬几帳のほどもをかしく見えさせ給ふに」とあり。なほ几帳を見よ。○思ひなほり給ふめりし　これまで憎みし思を飜されたる樣子なりしよと也。「し」の下、よの歎辭を略けり。

評　この段及び次の段は、齊信を頭中將とあるのみか、必ずその藏人頭在職中のこと、見るべき理由がある。齊信が藏人頭在職中の二月は、長德元年と同二年とであるが、次段に「かへる年の二月」とあるから、これは長德元年の二月で、次段は同二年の二月と定めてよい。（主上十六、中宮二十、齊信二十九、經房二十七、淸少卅、卅一？）

殿上から出て北へ、黑戶の御所へゆくに、弘徽殿の上御局か、或は上屋あたりに、淸少の聲を聞くと、紬几帳を作る。齊信も、太だ神經質の男と見える。蓋しその憎惡の甚しい趣がうなづかれる。一體、殿上における頭の權力は絕對で、頭がその座に居ると、藏人などは、片沓をはき、片膝を緣にかけて敬屈したものである。だから、それに憎まれては、中宮方の女房でも、決してよいことはない。齊信の「つゆ見おこせぬ」のを平氣で「ともかくも見入れで過ぐす」は、目で目にむくいる仕打で、淸少の心中に、固い所信があるからでもあらうが、何となく片意地らしい。のちに齊信の手紙を得ても「只今見るべきにもあらず」と、わざと落着いて、おのが體面と地步とを占めるに油斷のないのは、淸少が生來の剛愎な氣分によるか。それともまた、女房社會の通有性とが結び合つた結果で、流石の齊信に、小面憎く肝を煎らせたのであらう。これが卽ち、草の庵の本事の生ずる原因である。

晦日は御物忌の日なので、中宮も、夜はお上りにならなかつた。當番の女房共は、上屋につめて夜を守る。禁中の夜分だから、鳴の高いのは勿論御法度で、しめやかな雜談の外は、韻塞、扇繪、入文字ぐらゐが、退屈凌ぎの遊戲の頂上であつた。後ればせに上つた淸少は、宮が既に御休みなされたのに失望し、さりとて、若々しく扇繪の仲間にもはひりかねて、只一人かけ離れて居ると、一人寄り二人寄り、いつか座談の中心となる。淸少が女房間に相當の人望があり、渴仰の的となつたことも、これで略わかる。隨

つて、他の半面に、「そゞろなる虚言」をいひつけられる程、嫉視の的となつたことも、了解がいかう。

禁中の御物忌に籠ることは、殿上人の大事の役目で、不參者をば、わざ〳〵驅り催された程だから、かなり賑やかな筈だが、空柱にそぼ降る雨の音を聞集める春の夜は、いかにも無聊の極だつたらう。そこで、をのこ共は悉く頭の許に寄集つて、古今東西の人の噂もいひ盡したはては、話が遂に問題の女清少のうへに落着した。事件の推移が、甚だ自然である。そこで殿上會議はゆくりなく、白氏文集の試驗を、清少に課し來つたのである。

嵯峨朝に、白樂天の文集が舶載してから、その平明卑近な詩體は、わが國歌の風調に類似して、尤も人の耳にはひり易く、且叙事詩の大手筆は、支那でも一派の法門をひらいた程だから、忽ちこの集が流行となつて、文は文選、詩は文集と並稱されることゝなつた。又、樂天の性行が恬淡で、崇佛主義なのが、佛敎隆盛期の、平安人士の嗜好にかなつて。その片言隻句も、紳に書せられ、口頭の語となり、遂にはその行事をさへ眞似て、七叟會を催すやら、その風迹を慕つて、屛風に圖するやら、はては樂天を夢に見たとて、唱和の詩を朋友間にもとめるやらであつた。けれどもこれは皆、博士、學生、またはず人の所爲であつて、婦人社會には、まるで沒交涉であつた。功德の爲の讀經すら、この前期には婦人に不似合といはれ、當時も婦人の學問は薄命の因と稱された。こんな時世に當つて、破格な高內侍（儀同三司の母）が出、紫式部が出、また清少納言が出た。

高內侍、紫式部などは、もと〳〵學者の子であるから、その素養のあるのは當然だらうが、清少とな つては、歌人の子といふだけある。「蘭省花時錦帳下」。この對句はよもや知るまいと試したのは、多少侮り氣味もまじつてるたのだらう。こちらは知つてる て見れば、それをポツ〳〵と漢字に書並べるのも鳴呼がましく、藝もない氣持がする所から、その句意を飜案して、歌の下句十四字につゞめ、來書の端に消炭で書付ける。倉卒の際、紙筆の間にあはなかつた樣が見るやうではないか。伊勢物語、齋宮の御使の條に、緒松の炭で歌を書付けたのと、同一軌である。前に「怪しくいせの物語なりや」といつたのに、何かの脈絡があるやうである。「知顏にまんなに書かむも見苦し」といつてるのは、大いに謙遜らしい女のやうだが、これは今漢字を書かぬ申譯に過ぎない。紫式部がその日記中に、

ともすれば眞名がちにはしり書き、云々。

と評したのは、必ず事實にちがひない。後世の和漢、漢和の連句は、端をこゝに發したものだらう。

「あ」と喚いたのは、まづその書狀を手にした頭中將であることは、無論である。はしたない感歎の聲は、一同の注意を惹いて、一波は萬波、こゝに「いみじき盜人かな」の矯語を產み出して來た。元來草さに出榮のしたのである。「廬山雨夜草庵中」の答が出來るか出來ぬかが、當面の問題であつたのに、意外にもその沖を越して、意譯の句を以て答へられたのは、當時にいはゆる女牛に腹を突かれたものである。又、蘭省の句は、その對句を問ふ爲の出題には相違ないが、蘭省と花時と雨夜とは、まさにこの二三月の交の殿上の雨の夜に吻合する所から、この句を選んだのである。流石は才子の齊信で、これは、頗る氣の利いた見立方であるが、清少は早くもその意のある所を曉つて、「さる者ありとも思はじ」とまで、頭中將に憎まれて、袖几帳などされる自身を、對句中の草庵に喩へて、「誰か尋ねむ」と、原句に籠つてる言外の意を揣摩して、人にも訪はれぬわが境遇のわびしさを寓した、その手際のあざやかさ、しかも下句ばかりを提出して、反つてその上の句を附けねばならぬハメに、先方を陷れた掛引の狡猾さ。これがほんの咄嗟の際の屬吐だと知つては、その滑脫の才に愕かぬ者が、何處にあらう。實にコン畜生と、今もいひたい所である。かう自繩自縛のハメに陷つた殿上人等は、石帶のうはてを外して、和琴枕に一

寢入することも忘れて、上句を互に附試みだか、一向物にならず。玆に全く返討をくつて、草の庵の尊稱を、清少に獻じて、降服の誠意を披瀝するより外はなかつた。

御夜詰の朝は非番となつて、局に下りるのがきまりだから、多分はと、經房少將が、清少の部屋に雜込んだのである。「草の庵やある」は、まだ清少が委細を知らぬ間だから、樂屋落ではあるが、玉の臺のやり返しは、正に急處を突いたものである。則光が「いみじき悅申に」といへば、「司召ありとも聞えぬに」と答へる。よくも口のまはる女かな。

異名や綽名は、當時盛んに行はれたことで、藤原濟時を紅梅（こうばい）（空拜）の大將、慶滋保胤を有々の主（ありぬし）と呼んだ類、譏刺の意から出たのは珍しくないが、清少の草の庵は稱譽の意だから、最も名譽な譯で、伏柴の加賀、沖の石の讃岐の先驅をなしたものである。「これになむ胸潰れて」は全く正直な告白だらう。謙退の語と見ては當るまい。「わろき名の末まであらむこそ」は謙退ながら、下には喜べる意ありと、盤齋が揣摩したのは中つてゐる。「何のいはせけるにか」は、いはゆる卑下自慢らしい。

中宮の清少を召されたのは、その手柄を御稱美遊ばされる思召からである。「扇に書きて持たる」は、當時扇子は或場合において、一種の備忘錄だつた。行成が齊信の公事上の失錯を見て、扇に書付けて置いたのを、子息の行經が持出して大騷となつた例もある。

則光は後に叙爵して、遠江介になつたことが見えてゐるから、六位の藏人だつたらう。諸人の評議に一喜一憂し、返事の有無に赤くなり青くなる。義兄妹の約束した親身の情が、よく映つてゐる。だから殿上の顚末報告も、經房の少將の盡さない所を、よく盡してゐる。「只人に語れ」と廣目屋がはりに使はれては、あまり知慧が無さ過ぎて、當人も愚癡をこぼしたが、まこと無才の人物だつたらう。下文にも歌は大嫌とある。尤もこの人の歌が三首ばかり、選集や何かに見えるから、老境になつては、敷島の道を

（補）外はなかつたノ下、公任集に
いかなる折にか
「草の庵をたれか尋ねむ」との給ひ
「九重の花の都をおきながら」と見えた。草の庵を公任の詞とするは誤だが、忠隆の附けた上句は必ず當夜に提出した一案であらう。

たどつたらしいが、どうして三十代の男盛りには、只もう強がり一方で、盜賊の手づらまへをしたり何かして、源平の勇士のお株を奪つたほどの豪傑である。きび〳〵した男らしい男には、遠ないが、別に言加へ聞知るほどの學問もなく、文學趣味の了解もなく、特筆する才氣も無いとなつては、當時の佳人淑女がゐがいてゐる理想の男とは、遙に距離のあるもので、こんな男に、清少が兄妹の語らひをした事が、不審になる。蓋し敏慧驚悍な婦人の通有性として、自分に關係する男は、消極か積極かの絕對なことを要求する傾向がある。歷伏か服從か、二者その一であらねばならぬ。行成卿や實方朝臣などは、歷伏か服從かに屬するであらうし、則光などは乙者に屬する者だらう。それ故一は御簾清少に對して、稍甲者の方に屬するであらうし、則光などは乙者に屬する者だらう。それ故一は御簾うち被くを許し、一は兄妹と呼合つてむつんだものと見える。依つて想ふに、以前清少に子を生ませた夫は、或は中性の男だつたかも知れぬ。それで緣が續かなかつたらしい。「せうと妹」の說は、次々段に、自分發見の新說を委しく述べよう。

「殿上にても」、「御物忌に籠りて」、「頭中將の宿直所に」は、皆これ上の御局の對象として、殿上を反復したるものである、頭中將の「物やいひにやらまし」といつたのは、後に殿上より消息の來る伏線である。「いととく歸り來り」「さし出したるがありつる文なり」は、「返してけるか」と疑ふ觀染である。「よにあらじ」は「いみじく憎み給ふ」の、「何とも思ひたらず」は「見も入れで過す」の、「いととく」は「思ひまはす程もなく責め惑はす」の、「えこそすつまじけれ」は「定めきりてやみなむ」の、人々上句を附け煩ひて一夜をあかすは「返事もいはず」の、「わろき事いひては中々ねたかるべし」は「夜ふくるまで附け煩ひて」の、「思ひ直り給ふめりし」は「おのづから思ひ直し給ひてむ」の首尾である。「あな嬉し」の語を先にし、「見付けて」を後にしたのは、この打付けな場合に適應した叙法である。主殿司が去來しての一問一答は、五分もすかさぬ筆致で、叙事も會話も、頗る快捷である。「草の庵やある」と提唱し

て、「あな嬉し下にありけるよ」と頓挫したのや、主殿司への命令の口氣の飽くまで引締つたのや、「よりて見るに」といつて、「いみじき盗人かな」と頓挫したのや皆面白い。經房少將の談話に「蘭省云々」以下の詩歌の附合を、前章の叙述に讓つて、一言も言及しないで、卽不卽、離不離の間に、讀者に了解をあたへた手際は、實に老熟なもので感服する。則光の談話から一轉して、妹せうとの說明に移つた、この閑文字が挿まれたので、文章が忽ち平凡でなくなる。宮のおはしまさねば「何しに上りつらむ」と思ひ、「御前のおはしまさば御覽ぜさすべきを」といつたのは、末段の伏線で、つひに重きを中宮に歸し奉つて、この大文字を結收した。つとめて君の美を濟すといふ美しい眞情は、この時代、獨淸少において見ることが出來た。

この文の中腹は、三段に劃然と別れてゐる。一は上御局の光景、二は經房の談話に現れた宿直所の光景、三は則光の談話で、二の補足である。これに冒頭の袖几帳の一段と、結末の主上中宮の御聲がかりの一段とを加へると、すべて五段の構成となる。袖几帳を作るにはじまり、袖几帳を取のけるに終る。首尾があり、照應がある。そして、一と二とは相互の記述が合拍して、一箇の事實を說明したものである。三は二の餘波である。こんな風に、一箇の事實を、五段に記述して、一向重複をおぼえず、煩瑣を感じないのは、決して凡手の出來得ることではない。それには見方の方面をかへたり、記述の對象を別にしたり、省筆法を用ゐたり、あらゆる努力を盡してゐる。行文紆餘曲折して、時に舒びやかに、時に促まつて、意到り筆隨ふ自然の妙境に入つてゐる。一字一句の工となつては、殆ど擧げる遑がない。眞に大手筆である。

伊勢の物がたり、草の庵、玉の臺、口を開けば、卽ち他を壓倒する。殆ど禪家の鋭い機鋒に似てゐる。淸少と禪とはかけ離れた問題のやうだが、當時の說經師が、いかで語り傳ふばかりと、畢生の辯才を弄んだ法談は、かうした機智の暗示を、淸少ばかりではない、一般社會に與へたことを斷言する。

（口譯）立返つた年の二月廿五日に、中宮が職の御曹司に、梅壺から御移りなされた御供に、私は參らないで、もとの梅壺に居殘つて居たその翌日、頭中將の手紙といふて「昨日の晩、鞍馬寺に參詣したが、今夜歸らうとするに、都へは、方が塞がつてゐるから、方違へに、よそへ往く。そこから夜の明けきらぬうちに歸るだらう。是非話したい事がある。あまり局の格子を叩かせないやうに、待つてゐてくれ」と仰しやつたけれど、御匣殿から「何で局に一人は殘つてゐ

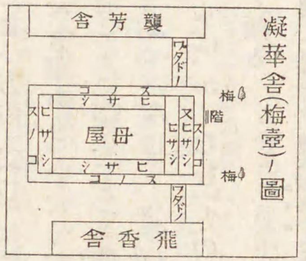
七十一段

かへる年の二月廿五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし御供にまゐらで、梅壺に殘り居たりし又の日、頭中將のせうそことて、「きのふの夜、鞍馬にまうでたりしに、こよひ方のふたがれば、たがへになむ行く。まだ明けざらむに歸りぬべし。必ずいふべき事あり。いたくたゝかせで待て」との給へりしかど、「局に一人はなどてあるぞ。こゝに寢よ」とて、御匣殿めしたれば、まゐりぬ。久しく寢おきておりたれば、留守ノ女「よべいみじう人のたゝかせ給ひし。からうじて起きて侍りしかば、客人『うへにかたらば、かくなむ』との給ひしかども、留守ノ女『よもきかせ給はじ』とて、臥し侍りにき」と語る。

（考異）○鞍馬に　原本鞍馬へとあり。○よべ　原本よるとあり。以上いづれも抄本による。

【釋】○かへる年　立返へる年にて、翌年をいふ。前段に續きたる書方なれば、翌年は長德二年なり。○職の御曹司に　梅壺より職の御曹司にの略。○御供にまゐらで　淸少はその御供に加はらざる也。○梅壺凝華舍をいふ。內裏五舍の一にて、庭に梅ある故に、梅壺と稱す。淸涼殿の西北に當り、飛香舍の北に並びて、南面せり。廣さ五間、別に四方に廂と簀子とあり。○のこり居たりし又の日　殘居たりしその又の日と也。「又の日」は翌日をいふ。「殘り居たる」は廿五日の事なれば、又の日は廿六日なり。○頭

中將　前段と同じく齊信なり。○せうそことて　消息とて、使の持來たる文にと也。○きのふの　廿五日のなり。以下「待て」まで、文の詞なり。○鞍馬にまうで　「鞍馬」は鞍馬寺の略。京都の北三里、鞍馬山の半腹にあり。延暦十五年の創建にして、毘沙門天を祀る。延喜中、東寺の峯延中興したれば、この頃は眞言宗なるべし。○こよひ方のふたがれば云々　今夜京の方塞りたれば、餘所へ、方違にゆくと也。今宵は廿六日の夜なり。方違にゆく先は、西の京なり。下に「西の京よりくるまゝに」とあり。○まだ明けざらむ云々　いまだ夜の明けざらむうちに都に歸りぬべしと也。○必ずいふべき事あり　是非話があると也。○いたく更けて　局の戸をさのみ敲かせで、すぐ開くるやうにして、我を待てと也。即ち寢込まずして待居れといへる也。○局に一人はなどて　御匣殿の、倹もて召さるゝ詞なり。御主人はじめ、皆留守になりたる明御殿なれば、さる處の局に、獨は何として居るぞと也。○こゝ　此方に來て寢よと也。「こゝ」は御匣殿の住給ふ貞觀殿をさす。○御匣殿　御匣殿の別當の略稱。關白道隆の四女にて、中宮定子の妹なり。のち甥敦康親王の母代となる。簗花物語に「四の御方、いと若うおはすれど、内の御匣殿と聞えさす」。○御匣殿　ミクシゲドノ。御櫛笥殿の義。貞觀殿の内にあり。内藏寮の外に、天皇の御服を裁縫する所。長を別當といひ、時に天子の侍妾となる。下に女藏人あり。○まゐりぬ　御匣殿の御方になり。○久しく寢おきて　寢込みて目の醒むることを「寢起きて」といふ、この頃の詞なり。上にも「ねおきて飲む水」とあり。「久しく」は寢にのみかゝる副詞。○おりたれば　わが局になり。○よべいみじう　以下局に留守せし下女の詞なり。○人のたゝかせ給ひし　人の戸を敲かせ給ひしなと也。敲きし人



凝華舍（梅壺）ノ圖

（口譯）氣になる事よと思つて聞くうちに、主殿司が使にきて「頭中將殿が申上げられるのでありますが『只今御殿から退出しますが、貴女にお話したい事がありまして。で御目にかゝりたい』といふから、『始末すべき事があつて、上屋の方へ參ります。そこでお目にかゝりませう』と、返事をいつて、下の局の方では、もし引明けでもなさらうかと心配になつて、面倒だから、

は齊信なり。○からうじて起きて　眠くて起きかねたる樣なり。○うへに語らばかくなむと云々　叩きし人の詞なり。御主人に取次ぐならば、かく約束の者の來れると申上げよと、仰せられしかどもと也。「うへ」は清少をいふ。留守の下女に對しての話なれば、その主人を「うへ」といへる也。「かくなむ」の下、あると聞えよを略けり。○よもきかせ給はじとて　夜も深ければ、假令申上ぐとも、よもや御主人には、下りて來ることを承知あるまじと、答へてと也。「給はじ」の下、「明日申上げむ」の餘意あり。○臥し侍りにきと語る　自分の意見を述べて取次がずして、又寢てしまひたりと、下女の、昨夜の樣子を、清少に語れる也。

心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。頭中將『只今まかり出づるを、聞ゆべき事なむある』」といへば、清「見るべきことありて、うへにわづらはしければ、梅壺の束おもてのぞあゆみ出で給へる。櫻の直衣いみじくはなく〳〵と、うらの色つやなど、えもいはずけうらに、蒲萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝、こと〴〵しくおりみだりて、紅の色、打目など、かゞやくばかりぞ見ゆる。次第にしろきうす色など、あまた重なりたる。せばきまゝに、片つかたはしもながら、すこし簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪にかき、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはと見えたる。御前の梅は、西はしろく、東は紅梅にて、少しおちがたになりたれど、なほをかしきに、

梅壺の東面の半蔀をあげて、「ここにお出で下さい」といふと、頭中將は、立派な風采をして、歩み寄つて來られた。櫻の直衣が、非常に花々しく、裏の色澤なども、いはれない程に綺麗で、葡萄染の大層色濃い指貫に、藤の折枝の模樣を、仰山に散して織つて、下着の紅の色や折目などが光るほどに見える。その下には、段段に白い色や薄紫色などの衣が、澤山重なつたのが美しい。簀子が狹いまゝに、半身は下にゐながら、上半身は少し御簾の際近く寄つて居られた樣は、ほんに繪に書いたり、物語で立派なことにいつたのも、こんなのであつたらうと見える。お庭前の梅は、右は白く左は紅で、少し散方になつたけれど、やはり趣があるに、うらゝかに日のけしきが長閑やかで、人に見せたい。ましてや、御簾のうちに、年若な女房などの、髮の美しく長くほつれかゝりなどして、寄添うて居る樣子ならば、もう少し見所もあり、面白からう筈なのに、大層盛り過ぎて、古々しい女の、髮なども、自分のでもないのかして、處々ちぐれ亂れかゝつて、一體に忌服があつて、衣の色の、常とは違ふ時分だから、色の有無もわからぬ程の薄い鈍色などて、襲付のあはひもわからぬ衣服など着てゐるから、少しの見榮もしないのに、中宮の御不在だから、裳も

うら〳〵と日のけしきのどかにて、人に見せまほし。簾のうちに、まして若やかなる女房などの、髮うるはしく長く、こぼれかゝりなどそひ居ためる、今すこし見所あり、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふる〴〵しき人の、髮などもわがにはあらねばや、處々わなゝきちりぼひて、大かた色ことなるころなれば、あるかなきかなる薄にびども、あはひも見えぬ衣どもなどあれば、つゆのはえも見えぬに、おはしまさねば、裳も着ず、袿姿にて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。頭中將「職へなむまゐる。ことづけやある。いつかまゐる」などのたまふ。頭中將「さてもよべ、あかしもはてゞ、さりともかねてさいひてしかば、待つらむとて、月のいみじうあかきに、西の京よりくるまゝに、局をたゝきしほど、からうじて寢おびれて起き出でたりしけしき、いらへのはしたなさ」など語りて、わらひ給ふ。頭中將「むげにこそ思ひうんじにしか。などさるものをばおきたる」などの給ふ。げにさぞありけむと、いとほしくもをかしくもあり。しばしありて出で給ひぬ。外より見む人はをかしう、内にいかなる人のあらむと思ひぬべし。奥のかたより見いだされたらむうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。

（考異）○めでたくてぞ　原本めでたくぞとあり。抄本による。○わがには　原本われにはとあり。釋本による。○さりとも　原本されどもとあり。抄本による。○おきたるなどの給ふ　原本の給ふなし。釋本による。

釋　○心もとなの事や　氣掛りなることよと也。「や」は歎辭。心もとなしを見よ。○とて聞くほどにと思ひて、下女の話を聞く程にと也。○頭の殿の云々　藏人頭の申上げらるゝことは、只今殿上より退出するを　その序に立寄りて、お話致したき事ありと申されたり、といへばと也。「ある」の下、との給ふを略けり。又と一字を略きたるものと見て「と頭の殿の聞えさせ給ふなり」と、上に反る格とするも、差支なし。○見るべき事ありて　公務を執るべき事ありてと也。「見る」は點檢するをいふ。○うへになむのぼり侍るそこにて　お上の御殿の方に參るなり。其處にてお目にかゝらんと也。「そこにて」の下、對面せんを略ける也。○といひて「局は云々」を隔て、「梅壺の東面の」へ續く。○局はひきもやあけ給はむと云々　局は頭中將の、若しも簾など引開けて見給はんも測られずと、氣になりてと也。この「心ときめき」は輕く聞くべし。局は私室なれば、物など取散してあれば、頭中將の心安立に覗き見んことを恐れたる也。○わづらはしければ　面倒なればと也。○はじとみあげて　半蔀を上げてと也。但こゝは上を釣上げたるのみならず、下のをも外したること、下の「かたつ方は下ながら」とあるにて明なり。なほ蔀を見よ。○こゝにと　此處に來給へとと也。○めでたくてぞ云々　樣子美しく見えて、來給へりと也。○はな〴〵と　花々としてと也。櫻の直衣の尤も花やかに見ゆるをいふ。○裏の色つや櫻の直衣の裏は赤花か紫なるが、その染色及び光澤なり。○えもいはず　えも云はれずの古格。○けうら　清らの音便にて、美しき限をいふ。○藤の折枝こと〴〵しく云々　藤の折枝の模樣をば、大業に織亂してと也。こは指貫の上紋にて、地の葡萄染に、白く模樣を出したる也。「織亂り」は亂れたる模樣を織出したるをいふ。「亂り」は亂しの古言。○紅の色、うち目　これは直衣の下に着たる衣の色打目なり。「打目」とは砧にて打ちて出せる光をいふ。打衣を見よ。○しだいにしろき薄色など　次第に白き色、薄紫色の衣などと也。「白き」の下、色を略けり。「白き」を薄色にかゝる形容詞と見るはわろし。「薄

色」は例の紫の薄色なり。これは紅の下著の下に、又、白や薄紫やの衣を重ねたるさま也。○かさなりたる　の下、うつくしを略けり。○せばきぇゝに　簀子の狹きまゝにと也。○かたつ方はしもながら　簀子(緣)狹ければ、腰掛けたるやうに、下半身は下方にありながら、上半身は及びて、簾のもとの長押近く寄居給へりと也。「片つ方」を片足とする説は取らず。○繪にかき　繪にかきたるといふべきを、次句の「たる」に讓りて略けり。繪には筆にまかせて、美しき人を描けばいふ。○物語のめでたきことにいひたる　物語が極めて美しきことに褒め立てたると也。「たる」の下、人をを略けり。古物語には、よく美男子を主人公として、その美貌を筆の限形容せり。空穗物語の藤原仲忠、落窪物語の藤原仲賴、又同時のものなれど、源氏物語の光君これなり。○これにこそはと見えたる　これにこそはあらめと見えたるの略。「これ」は「頭中將」をさす。○お前の梅　殿前の梅なり。○おち方　散方に同じ。○人に見せまほし　人に見せたしと也。獨見るは勿體なき氣のしたるなり。○簾の内にまして若やかなる云々　況や簾の内には、年若き女房の髮美しく、長くふさ〳〵として、顏や肩のあたりにほつれかゝりなどして、寄添ひて居たらんはと也。「など」の下、しでを補はでは聞え難し。○見所ありをかしかりぬべきに　見所ありぬべきにの二句を、一句に約めたる也。○さだ過ぎふるぶるしき人の　「さだ過ぎ」は程よき年の過ぎたるをいふ。おもに婦人のうへにていへり。萩原廣道いはく「さだは定の意にて、よき程の定りたる時をいふ」と。この語、なほ異論多し。「ふるぐ〳〵しき」は年老いたるをいふ。○わがにはあらねばや　我が物にはあらねばにやあらんの略。髮の頭によく馴染まずして、亂れかゝりたるを、わざとわが物にはあらざる故ならんといへり。旁註に、そへ髮とあるは非なり。○わなゝきちりぼひて　「わなゝき」は毛の縮れたる譬喩なり。「散ぼひ」は毛の纏まらずして、亂れたるをいふ。この句、下なる「物ぞこなひに口をしけれ」にかゝる。○大方色ことなる頃なれば　中宮の御方の者は、大抵服色の常と異なる頃なればと也。中宮の御不幸ありて、喪中なる故なり。古は喪服の規定ありて、緣の遠近によりて、服に輕重あり。服中は常の色の衣を著ず。櫟、鈍色の服を著る。○あるかなきかなる薄鈍どもにびを見よ。○あはひも見えぬ衣　色の有無も判然せぬ薄鈍色などのと也。「薄鈍」は薄鼠色をいふ。青が、皆薄鼠なれば、他の色物の如くもせぬにと也。○おはしまさねば裳も著ず　此處には中宮の御出なければ、裳も著ずと也。されば唐衣も著ざること想ふべし。裳は女の禮裝なり。裳を見よ。○桂姿　ウチギスガタ。これは小桂を著たる樣なるべし。桂は打著の義にて、打掛けて著る服なれば名づく。上に著る故に、上著ともいふ。三領、また は五領、七領と打重ねたるを總稱し、又、重なる上著のみを小桂ともいひ、下の重桂をたゞ桂とのみもいふ。小桂著たるは、正裝に準ずる也。裝束要領抄に「唐衣、裳を著たるは、男官の束帶の如し。小桂著たるは、衣冠の如し」。(附圖參照)○物ぞこなひに　物損ひにてと也。折角の美しき景氣を打こはすをいふ。○職へなむ參る云々　自分は今これより職の御曹司へ參らゝかと也。「ことづけ」は言附にて、言傳と同じ。○さてよべあかしもはてで　さても昨夜は方違の所にて、夜を明し切らずしてと也。西の京の宿を、夜深に出發したるをいふ。○さりともかねて云々　夜深なりとも、おとづるゝ由、豫め文して知らせ置きたればと也。「さりとも」は夜深なるをさす。「さいひてし」は「明けざらむに歸りぬべし。いたく叩かせで待て」と消息せしをさす。○徒つらむとて　淸少のなり。○西の京　西の京は、鞍馬を出でて、方違に行きし宿のある處なり。古の京都は、朱雀大路を中央にして、東、西京と別れたりしが、西の京は早くより衰微して、東の京のみ榮えたり。○くるまゝに扇をたゝきし　來るや否や、淸少の扇を叩きし

居においたのかと仰しやる。「ほんにさうだつたらう」と、氣の毒にもあり、をかしくもある。暫時して頭中將は出てゆかれた。外からこの樣子を見る人は、簾の內に、どんな美しい人がゐるだらうと面白く思ふだらう。奥の方から見遣られた私の後付では、簾の外に、そんな美しい人がゐようとも、よう思ひ寄るまい。

と也。○からうじて寝おびれて云々　下女のなり。「辛うじて」は「起出で」にかゝる副詞。「寝おびれ」は寝惚けたるをいふ。○けしきいらへのはしたなさ　その様子や、返事やの不都合さよと也。「はしたなさ」の下、よの歎辞を補ひて聞くべし。○思ひうんじ　心に不快なるをいふ。「うんじ」を田中大秀は鬱しの音便とせり。心の結ぼるゝをいふ。和訓栞には倦しの音便といへり。春註に、慍の字を當てたるは、事狭し。○などさる者をば置きたる　何とてさる はしたなき者をば、留守番には置きたるかと也。又「置きたる」を使ひたるの意としても聞ゆ。○さぞありけむと　清少の想像なり。「さぞ」は「思ひうんじにしか」をさす。○をかし　は可笑の意。○しばしありて出で給ひぬ　頭中將のなり。「ありて」は居てなり。○とより見む人はをかしう　外の方よりこの有様を見ん人は、頭中將の風情の面白くてと也。○内にいかなる人云々　簾の内にいかやうなる美人の居るならんと思ふならんと也。所が内には、自分如きさだ過ぎたる物ぞこなひの口惜しき者が居る、といふ意を含めたり。○奥の方より見出だされたらむうしろこそ　殿内の奥の方より見られたらんわが後附は、見窄らしくてのの略。上の外の方より見たる反對なり。○外にさる人やとも云々　外にさる美男の居らんとも、とても思ふまじと也。「人や」の下、あらんを略けり。

暮れぬればまゐりぬ。御前に、人々おほくつどひ居て、物語のよきあしき、にくき所などをぞさだめいひしろひ、すゞし、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せられける。女房「まづこれはいかに、とことわれ。仲忠が童おひのあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、清「何かは、琴なども、天人おるばかり彈きて、いとわろき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、仲忠がかたうどと心

（口譯）その日が暮れてから、職へ參つた。丁度中宮の御前で、女房達が澤山集つてゐて、昔物語の巧拙や、感心しない所などを品評していひ爭ひ、空穗物語の涼や仲忠

を得て、女房「さればよ」などいふに、宮「この事どもよりは、ひる齊信が參りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるゝに、人々「さてまことに常よりもあらまほしう」などいふ。清「まづその事こそ啓せめと思ひて、まゐり侍りつるに、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさすれば、人々「誰も〳〵見つれど、いとかく縫ひたる絲、針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。人々「頭中將『西の京といふ所の荒れたりつる事、もろ共に見る人あらましかばとなむ覺えつる。垣なども皆やぶれて、苔生ひて』など語りつれば、宰相の君の、『かはらの松はありつや』といらへたりつるを、いみじうめでて、頭中將『西のかた都門を去れること、いくばくの地ぞ』と口ずさびにしつる事」など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

（考異）○すゞし　原本すゝしとあり。古本による。

評釋　○暮れぬれば參りぬ　「暮れぬれば」は廿七日のなり。「參りぬ」は職の御曹司になり。○御前に　宮のなり。○物語　作物語にて、卽ち小說なり。○にくきところ　不出來なる箇所をいふ。○定めいひしろひ品定していひ爭ひと也　「しろひ」は互にその事を求めてする意にて、熟語としてのみ用ゐる。○すゞし　源涼。空穗物語中の人物にて、嵯峨院の皇子。母は紀伊の人神南備の種松の女にて、女藏人なり。才藝明達、學またこれに副ふ。仲忠と伯仲の間にあり。朱雀院の神泉苑の紅葉の賀の時、仲忠と共に琴を奏して、神異あり。叡感ありて侍從に任ぜられ、正四位左近中將に拜す。左大臣源雅賴の十女を室

とす。尋いで參議、右衞門督より、中納言に歷任す。時に年廿六。○なかただ　藤原仲忠。空穗物語中の中心人物にて、父は右大臣兼雅、母は清原俊蔭の女なり。その母始め三條京極の第にあるや、一夕兼雅に逢ひて、仲忠を生む。『家素より貧なり。仲忠四歲、みづから魚を釣り果實を拾ひて、母に供す。時人憐みてその業を扶け、仙童現れて物を遺る。一日山中に入る。熊ありその孝に感じて、その老杉の空洞を仲忠に與へ、群を率ゐて去る。仲忠母を伴ひて樹洞に棲む。』七歲の春、母に就きて琴を學び、その妙を窮む。蓋しその祖俊蔭が異國に漂流して、仙客に學びたる神技を傳へたる也。朱雀院北野行幸の時、父兼雅この山に入り、始めて母子に會し、携へて家に還る。仲忠京に出でて三年、學ぶ所のもの、一として通曉せざるなし。十八にして侍從、廿一にして正四位左近中將たり。神泉苑の紅葉賀の時、涼朝臣と共にその絕技を奏す。神異あり。叡感の極、女一の宮を賜ふ。次いで中納言兼左衞門督より、檢非違使をかぬ。右近大將を經て、大納言に累進、二位に叙せられ、按察使を兼ぬ。時に年卅三。

○御前にも　宮の御前にもと也。○おとりまさりたる　優劣なり。○まづこれはいかにとことわれ　女房の、清少にいへる詞なり。まづこの優劣はいかなるか、論定せよと也。「これ」は涼、仲忠の優劣をさす。○童おひのあやしさをせちに云々　幼立の卑しげなるを、切に宮は仰せらるゝぞと也。中宮は涼最負になりて、仲忠をいひおとし給ふ也。「わらはおひ」は童生なり。「あやし」は卑しの意なるを、諸註、奇特の意に誤解したる爲、文意徹底せずなれり。「せち」は切の字音便にて、この頃通用の漢語。童生の卑しさは、仲忠の傳中『　』を施せる條を見よ。○何かは琴なども云々　何としても、涼はいふに足らん、琴などは天人の降るグラキのことを彈きて、甚だ劣等の人なり、そのうへ、帝の御女を賜り得たるか、否それも得はせぬと也。こは仲忠が琴の音に、天人降下以上の奇特を現して、女一の宮を得たるを下に思ひて、仲忠を揚げて、涼を抑へたる也。「ばかり」は俗言の、グラキに當らるゝぞと也。

感服して、大騷するだらうと忍はれる」と、私に仰になるのに、外の人達も「さてほんに、何時よりも思ひどほり、立派にお見えなされました」などいふ。「第一、その話を申上げうと思つて參りましたのに、つい物語の事に紛れて申おくれました」といつて、今日あつた事をお話し申上げると、人達が「誰も〳〵見ましたけれど、縫つた絲や針目までも、そんなに委しく見通しましたかい」といつて笑ふ。人達がなほいふには「頭中將が『西の京の荒れた事よ。一所に見る人があるならば、一層あはれが增すだらうと思はれました。垣根なども、皆こはれて、苔が生えて、ひどかつたので

す』など話してゐると、宰相の君が『瓦の松はありましたか』と受答へたのを、頭中將が非常に感心して『西の方都門をされること幾ばくの地ぞ』と、口ずさびに吟じられましたことよ」など、やかましい程にまで、人達のいひ聞かせたのが、面白かつた。

る。こゝの解、舊註も、天人おるばかりを仲忠の事として、わざと反對にわるくいへる也など解けるは、甚だ誤れり。これは涼の事なるをや。○天人おるばかり　空穗物語吹上の卷に、神泉苑の紅葉賀に、涼、仲忠が、琴仕うまつることをいひて「涼、仲忠が琴の音ひとし。仲忠、同じくは天地驚くばかり仕うまつらんと思ひぬ。——仕うまつるに、雲の上より開き、地の下よりとよみ、風雲動きて、月星騷ぐ。屏風のやうなる火ふり、雷鳴りひらめく。雪、衾の如凝りてふる。——涼仕うまつるに、仙人くだりて舞ふ」。○いとわろき人なり　甚だ劣りたる人なりと也。○御門の御女やは云々　空穗、吹上に「涼にはあてこそ、仲忠にはそこに一の内親王物せらるゝを、それを賜ふと仰せらる」とあるを取出でたり。○仲忠がかたうどと心を得て、仲忠最負の人々が、清少を仲忠の方人と合點してと也。「かたうど」は方人の音便にて、身方なり。「心を得て」は、清少が涼をいひ落したるを見て、仲忠方なりと合點する也。○さればよ　さればこそ、清少も仲忠の身方なるよと也。○このことどもよりは云々　その事などよりは、晝間、齊信（頭中將）が此方に參りしを、清少の見んには、如何にめで騷ぐならんと也。「この事」は涼、仲忠の優劣論をさす。「めでまどふ」は愛づることの甚しきにいふ。これは、清少はまだ齊信のことを知らじと思ひて宣へる也。女房達も一同に、頭中將を褒めたる也。「あらまほしう」はありたしの意にて、理想どほりなるをいふ。この語の下、見え給ひつゝを略けり。○まことに常よりも云々　頭中將は、實に常よりも優りて、よく見えられたりと也。○まづその事こそ啓せめと云々　自分もまづその事を申上げんと思ひて參りたるに、物語の話に取紛れて申上げざりしと也。「その事」は頭中將のことをなどをさす。○誰も〳〵みつれど云々　女房達の詞なり。○いとかくぬひたる絲、針目までやは云々　最前の事を、中宮に申上ぐればと也。「ありつる事」とは昨夜頭中將よりの文の事、曉に局を叩かれし事、晝來りて對談せられし事

縫絲や針の運びまで、いとちかやうに見抜きたる人はなきものを、よくも見て取りたりと也。「いとかく」は「見とほし」にかゝる副詞。○とて笑ふ　といひて人々の笑ふと也。○西の京といふ所の云々　以下、女房達の清少に語れる事實にて、「西の京云々」は頭中將の詞を眞似びていふ也。○あれたりつる事　の下、あはれならましを略けり。○苔おひて　の下、ありを略けり。○語りつれば　頭中將がなり。○宰相の君　前出。○瓦の松はありつや　然らば瓦の松はありたりや否やと也。これは白氏文集四、驪宮高といふ樂府の句を取出でたる也。「高々驪山上有レ宮。朱樓紫殿三四重。遲々兮春日、玉甃煖兮溫泉溢。嫋々兮秋風、山蟬鳴兮宮樹紅。槃華不レ來兮歲月久。墻有レ衣兮瓦有レ松。吾君在位已五載。何不ニ一幸ニ乎其中一。西方去ニ都門一幾多地。吾君不レ遊有ニ深意一云々」。驪山宮は、唐の帝都長安の西少許の地にあり。詩には瓦に松ありと作りたれど、瓦松は既に一の名詞となれるなり。本草綱目に「屋遊乃生ニ古屋上陰處一苔衣也。其長數寸者卽瓦松也」とある是なり。篤信の說に「しのぶ草なり」と。○いらへたりつるを　應じて問へる也。○いみじうめでて　頭中將がなり。○西の方都門を去れること幾ばくの地ぞ　驪宮高の西去都門云々を吟じて、興をもてなしたる也。但、無意味に次の句を吟じたるにあらず。西の京の、常時帝都の中心地たる東の京より、幾許もなきことを、下に思ひて也。「地」の字ところと訓むべきか。○都門　支那にては、都市に外廓を廻して、處々出入の門を設けたり。これ「都門」なり。○口ずさび　口進の義にて、口に任せていひ出づるをいふ。○しつる事　の下、よの歎辭あるべし。○かしがましきまでいひし　人々がなり。

評　前段にいつた通り、この段は長德四年二月のことである。（中宮御年廿一、齊信三十、清少卅一、二？）

鞍馬寺は、延喜の中興以來、寺運大いにいてある。齊信そこに一夜を參籠して、翌日都へ歸らうといふに、方塞だとあるから、正南に中神か金神かの障があつたのだらう。依つてや、南々西に當る西の京に、方を避けたものと見える。さて廿七日の拂曉に、清少の局をたづねたのは、何の理由か。「必ずいふべき事」とは、何を意味するか。季吟は、戀想の事らしいといつた。年配も女が年上ではあるが、さのみはかけちがはず、且草の庵以來、局は「引きもやあけ給はむ」とあるばかり打解けた間柄だから、尤もな推測である。但古人は、甚だ興趣を重んじて、夜を日に遊びまはることが珍しくないから、二日泊りの旅物語を、物の話のわかる異性に聞いて貰はうと、殘月を踏んで、清少の局を敲いたのかも知れない。

奉公人根性は、今も昔も變らぬ所が面白い。勝手に獨ぎめをやつて、寢てしまふなどは振つてる。しかしこれも無理のないことか。それはこの梅壺から、清少のとまりに往つた貞觀殿までは、一町近くも離れてをり、物好なら知らぬこと、よる夜中迎にゆくなどは、迷惑至極のことである。齊信に「などさる者はおきたる」と咎められて「いとほしくもをかしくもあり」は、甚だ氣がない。從者の言動は、その主人の心のメートルであるといひ、數多が中にも心立を見拔いて連れてあるけとやかましくいつた清少だから、もう少し感激したらしい挨拶もあつて然るべしである。但、理想と實際とは、不一致がむしろ當然で、さのみ氣にも留めなかつたのだらう。

局を敲きあぐんでから、齊信は一まづ殿上にゆき、書近くなつて退出、再び清少を訪ねたのである。梅壺は南面の殿舍だが、東に入口があるので、東面に孫廂を構へて正面としてゐる。清少はこゝに齊信を迎へた。その對話に豫期したほどの事もないが、齊信の容飾は、梅壺の梅も、顏色をうしなふばかりまばゆかつた。蓋し齊信の家は非常に富饒で、「昔より花やかなるあたりなれば」と、榮華物語にも書かれた程で、金にあかして派手に美々しく、その衣紋を繕つたとすれば、色も打目も、絲針目も、何一つソツのあらう筈はない。しかも、その「鳳凰池上の月を誦んじて、禁庭を徘徊する時は、見る者歎伏し

て、神仙中の人と爲す」とさへ傳へられてあるから、極めて人品のよい、美男子だつたらう。妹背子は花山朝の弘徽殿女御で、帝はこれが爲に御出家になつた程の美形であり、その妹三の君がまた、頗るの美人であつた。齊信の美男子たる、もとよりその筈である。

長閑なやわらかい春の日影に、紅梅白梅の繚亂たる自然の背景は、如上の人間美を映出させるに、最も有功に、最も恰好である。その西は白く東は紅梅とあるので、古來の註者も古傳の諸圖も、これを南庭の東西に配してゐるが、齊信との對面は、東面の孫廂だから、見當ちがひになつて、說明がつかぬ。これは必ず、東庭の左右にあつたのだらう。その西東は南面の場合を移していつたもので、西といふのは右（南）東といふのは左（北）なのであらう。小一條の院の段の「東を北の陣といふ」とあるので、類推が出來よう。果して石山寺緣起には、東庭の南北行に、梅樹を圖してある。

富贍艷麗な簾外の光景を、極力描寫した筆鋒は、轉一轉して、簾内の貧弱な自分の風來を記述し、この美醜の對照は、懸隔が甚し過ぎて、物ぞこなひに口をしと、我を抑へて、彼を揚げてゐる。「外より見む人は」、「奥の方より見出されたらむ」と、簾一重で、美醜趣を殊にする不調和さを、第三者の意中を藉りて寫し出したのは面白い。中間挿入の會話は、齊信の談話ばかりを、斷片的に擧げて、自分のは、只「けにさぞ」の同情的推想にとめたのは、この場合煩冗でなく、文致をそこなはないで、至極よい。

源氏物語出現前の小說界は、殆ど空穗物語の天下であつた。實際源氏も、空穗を祖述した所がすくなくない。仲忠、涼、あて宮の事などは、當時の上中社會の者の、口にせぬはなかつた。御衣伽のつれづれに、才はじけた女房連が、われ劣らじと、中宮の御前で、その辯才を振つた物語の評判は、どんなに興味をそゝつたものだらう。かういふ遊は、當時盛に行はれたことで、源氏繪合の卷に、

竹取の翁に空穗の後監を合はせて爭ふ——次に伊勢物語に正三位を合はせてまだ定めやらず。

（補）口にせぬはなかつたノ下　既に圓融院の御時にも、涼仲忠の優劣論が御前で行はれ、殿原は涼方、女一宮は仲忠方で爭つた。その時藤原公任は、沖つ波吹上の濱に家居して獨涼しと思ふべしやはと歌ひ、仲忠を方引いた話がある。

など心にくき有職共が、口々に論爭したものである。宮は一體仲忠最負で、清少が仲忠の面伏になることをいつたとて、お咎めなされた程だが、こゝではわざと非難をして、當座の興をお添へになつたのであらう。但、仲忠の下衆育なのを卑められたのは、御身分柄當然な御主張で、この事は、當時貴紳の理想とした美的生活に、一點の黑影を印したものである。けれども清少はまた、極端な仲忠最負で、仲忠が益おひおとす人と、時鳥鶯に劣るといふ人こそつらう憎けれ」と放言してゐる。さて物語の評判は惹いて、仲忠、涼の優劣論となり、仲忠が事は、齊信の話に移る導火線となつてゐる。

西京の荒廢は、一面に朝廷の衰微を意味し、主殿寮に松明多くつひえ、率分堂に草の生えた村上朝以來、ます〳〵衰頽しはじめて、圓融朝の頃には、既に坊城以南は荒蕪涉々、麥秀離々たる有樣であつた。慶滋保胤が池亭記に、

予二十餘年以來、歷二見東西二京一、西京人家漸稀、殆幾二幽墟一矣、人者有レ去無レ來、屋者有レ壞無レ造、其無レ處二移徙一無レ憚二賣買一者是居、或樂二幽隱一已命、當二入山歸一四者不レ去、若自蓄二財貨一有レ心二奔營一者雖二一日一不レ得レ住之、——莿棘鎖レ門狐狸安レ穴、夫如レ此者、天之亡二西京一、非二人之罪一明也。

この文は天元五年の記である。それから茲にまた十五年たつてゐるから、その荒廢は察せられる。齊信が「垣なども皆破れて、苦おひて」といつたも、決して誇張ではない、全く事實なのである。

西京の荒廢に感傷し切つた齊信は、一途にその實見談に熱中して、左右顧眄の餘裕なかつた所を、「瓦の松は」と、宰相の君に突込まれて、大抵の者ならドギマギして、呆然苦笑にをはる筈を、流石に才子は違つたもので、その次句が、地理的にも西京に適應することを、卽座に看取して、「西の方部門を」と朗吟し去つた、その機才、その所業、その吟聲、女房達がめでくつがへつたのも、無理はない。

一口に才子といふが、そこには相當の修養がなければならぬ。齊信は中宮の御兄伊周と學問友達で、

互に詩文の研鑽を勵み、齊信がしきりに伊周を推して、具平親王、藤原公任におとらぬと稱美すると、伊周はまた、齊信を文章の名手と許し、「詩も公任の勁敵として、「もし相撲に譬へば、公任よく摑つと雖も、齊信を打つべからず」と評してゐる。だから文集の詩などは、平生その胸臆に往來してゐるので、吟嘯の際にも、その機才を揮ふことが出來たのである。

齊信は一條朝才子の標本である。名門のうまれで、學問に長け、詩文が上手で、歌が出來、事務的才能に富んで、そのうへ諷詠の技は、當代の第一人者で、管絃の嗜は等儕を驚かし、お經はよく讀む、程はよし機智はある。しかも美男の金持で、衣裳に綺羅を飾つて、容儀をかいつくろふ。あの行成とは性行がやゝ相違して、これは十分に、婦人連に歡迎さるべき素質と資格を具へてゐる。

齊信が、中宮の御方に親密に出入するのは、こんなうはべの理由ばかりではない。實は姻戚關係があつたからである。齊信の妹三の君は、中宮の御兄伊周の奥方であつた。故に中宮から申すと、齊信は義理の御兄にあたる譯である。

この文劃然と、消息の段、職曹司御前の段の三節に分れ、前には、自分の所見から、その衣紋風采を叙し、後では、他人の口を藉りて、その機智を記述してゐる。その衣紋風采を叙した梅壺對話の段は、「めでたくてぞ」の一句から胚胎したもので、これが全文の中心となつてゐる。要するに、齊信を主人公とした讃歎の一大詩篇であるといつてよい。どこまでも齊信に渇仰して、深い同情をもつた筆致は、實になつかしくて溜らない。

この年三月四日になつて、中宮の二條の宮に出御になつたのを、榮華物語には「御妊娠による」と書いてある。さてはその準備の爲、二月廿五日に、まづ職の御曹司に出られたものか。いや〳〵、更に更に大きな驚くべく悲むべき事情のもとに、お立退になつたのである。それは外でもない。一月十六日の夜、故太政大臣爲光（齊信の父）の家で、伊周隆家の兄弟が、花山法皇を射奉つた一件が露顯し、この二月十八日になつて、明法博士に仰せて、その罪狀を審理中であつた。御連枝たる中宮が、晏然として禁中にとゞまり難い理由が、拜察されよう。いはゆる山雨欲レ來風滿レ樓の瞬間であるのに、この段の記事は、優々閑々、甚だ太平無事を極めたもので、そんな心配らしい事は、微塵も見えない。わるくいへば苟且偸安であるが、よい意味から見れば、物事に屈託せずクヨ〳〵せずして、現在に安んずる、この時代の享樂氣分である。殊によき人といふものは、自己を僞つても、さう目にあらはれて、はしたない振舞をしないのが、理想であつた。

七十二段

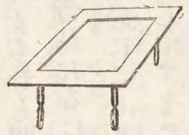
里にまかでたるに、殿上人などのくるも、安からずぞ人々いひなす。いとあまり、心に引き入りたるおぼえはたなければ、さいはむ人もにくからず。又よるも晝もくる人をば、何かはなしなどもも、かゞやきかへさむ。まことに睦ましくなどあらぬも、さこそはくめれ。あまりうるさくもげにあれば、このたび出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左衞門尉則光がきて、物語などするついでに、昨日も宰相中將殿の、「いもうとのありどころ、さりとも知らぬやうあらじ」と、いみじう問ひ給ひしに、更に知らぬよし申しゝに、あやにくに強ひ給ひし事などいひて、則光」ある事あらがふは、いとわびしうこそあ

（口）里にさがつてゐると、殿上人などがたづねてくるも、見苦しいことと、人々がいひ立てる。しかし自分は、ひどく心に祕め隱すやうな事をした覺もまた無いから、そんな噂をしようと人も、憎くもない。又夜晝いつも來る人をば、何で不在などいつて、恥かゝせて歸さうぞ。その外、

本當に懇意でない者なども、人々の噂する如くにくるやうだ。かう人の來るのが、餘りうるさくもあるので、今度は下がつた出先を、何處とも一般の人には知らせない。經房や濟政の君などだけが御承知である。處へ左衞門尉則光が來て、物語などするついでに昨日も宰相中將殿（齊信）が、「お前の妹（清少）の居所をば、何としても知らぬ譯はあるまい」と、ひどくお尋ねになつたが、一向に知らぬ趣を答へたのに、意地わるく無理にお尋ねなされた事などいつて「事實を僞つて爭ふのは、甚だ難儀でありました。あぶなく笑ひ出しさうであつたのに、左中將（經房）が、ひどく平氣で、知らぬ顔して居られたので、もしかの君と、眼でも見合はせるならば、笑ひ出しさうであつたのに困つて、臺盤の上に、あやしげな布のあつたのを、無暗に取つて喰ひ紛らはしたから、半端な時分に、妙な食物をすることよと、人も見たでせうよ。けれどそれで、いゝ鹽梅に、其處に居るとは申さないでしまつた。笑はうものならば、やくたいもないことぞよ。本當に貴女の居處を、私が知らぬさうなと、宰相中將のお思ひになつたのも、面白かつた」など語るので、「決して申上げるな」などいつて、日頃が大分たつた。

りけれ。ほと〳〵ゑみぬべかりしに、左中將の、いとつれなく、知らず顔にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば、ゑみぬべかりしにわびて、臺盤のうへに、あやしきめのありしを、唯とりに取りて食ひまぎらはしゝかば、中間に、あやしのくひ物やと、人も見けむかし。されどかしこう、それにてなむ申さずなりにし。笑ひなましかばふえうぞかし。まことに知らぬなめりと覺したりしも、をかしうこそ」など語れば、清「更にな聞え給ひそ」など、いとゞいひて、日ごろ久しくなりぬ。

釋 ○里にまかでたるに　わが里に退出したるにと也。此處より「さこそは來めれ」までは、過去の事を叙したる也。「里」は里第にて、宮中に對して私邸をいふ。なほ里人を見よ。「まかで」はまかるを見よ。○殿上人などのくるも　殿上人などのそこに來るさへもと也。○やすからず云々　穩ならず、世の人が取沙汰すると也。何か譯のあるやうに噂するをいふ。「いひなす」はざもなきを、さもあるやうにいふをいふ。○心に引入りたるおぼえ　內證事をしたる覺となり。即ち祕密の情事なり。「心に引入りたる」は心に深く祕めたるをいふ。「はた」は又におなじ。○さいはむ人も　さやうに兎や角いはん人もと也。「さ」は安からずいひなすをさす。○にくからず　心に疚しき所なければ、却つて憎からずと也。○何かはなしなども「夜も晝もくる人をば」とあるを承けて、何とてそれらの人を、不在など、口實を設けて、恥かゝせて返さんやと也。「かは」は反語。「かゞやき」は恥しさに顔のほてる事にて、赤面なり。○さこそ「さ」は數多人など來るといへるをさす。○出でたる所　わが退出したる場所なり。○なべてには　なべての人にはとなり。「なべて」は一般、普通などの意。○經房、濟政の君　經房の君、濟政の君とあるべきを略したり。「濟政」は六十九段に、箏の琴を彈きし人なり。○左衞門の尉　衞門府の三等官にて、從六位相當官なり。大少尉あり。はじめは左右二人なりしが、後には二十人、二十五人、或はそれ以上に及びしことあり。五位にてなれるものを衞門大夫といへり。なほ左衞門の陣を見よ。○いもうと　清少をさす。○宰相中將　藤原齊信のこと。宰相は參議の唐名。齊信及び參議、近衞府を見よ。○ありどころ　居る所。○さりとも　則光の知らぬ樣子したればいへる也。○あやにくに　あな憎にの意にて、意地わるきをいふ。○しひ給ひし事などいひて　强ひて尋ね聞かんとし給ひし事などいひてと也。「しひ給ひし」は齊信の動作、「いひて」は則光のいひて也。○あることあらがふ　事實を僞りて爭ふは、甚だ苦しく難儀なりと也。「あること」は實在の事をいふ。「あらがふは」爭ふなり。○ほと〳〵　殆ど。俗のアブナクに當る。○ゑみぬべかりしに　失笑せんとせしにと也。○左中將　經房をさす。○つれなし　俗の平氣に當る。○かの君　經房をさす。○見だにあはせば　目を見合はせさへもしたらばと也。○わびて窮して、と也。○臺盤　ダイハン。食物を盛れる盤を置く臺。さらば盤臺なるべきを、かくいひ來れり。今日の食卓の如きものにて、四足なり。長さ八尺にて、二人以上のものを長臺盤といひ、長さ四尺にて、一人の料をおくものを切臺盤といふ。更に小さきものを小臺盤といふ。○あやしき　見ざまの惡しきをいふ。○めぼ布、和布の類の海藻の總稱。○とりに取りて　ひたすら取りてと也。語を重ねたるときは、語氣强まるなり。○まぎらはし　可笑しきを、海藻を食ひて紛らしたりと也。○中間に中間なるをりを見よ。○あやしのくひ物や　あやしき食物をするよと也。「や」は歎辭。○かしこう　賢うなり。われとわが機智を賞するなり。○それにてなむ云々　それにて居所を其處とは言はずして濟みたりと也。「それにて」は布を食ひたることをさす。○笑ひなましかば　若し笑ひたらばと也。「まし」は



臺盤

事實の假定を表す。○ふえうぞかし　隱したることの、無益に終らんとなり。「ふえう」は不益の字音。○覺したりし　齊信が思はれしと也。○をかしうこそ　の下、侍りしかを略けり。○な聞え給ひそ　清少の詞なり。齊信に、わが居所を申給ふなと也。

（口譯）
ある夜八分更けて、門を仰山に人が叩くから、何者がかう氣になるほど、遠くも離れてゐない處を、叩くのだらうと思つて、人を出して問はせると、それは瀧口であつた。左衞門からの文といつて、文を持つてきた。家の者は皆寢たので、燈火を近くひき寄せて見ると、「明日は、御所の御讀經の結願なので、その爲、宰相中將が、御物忌に籠つてお出なさる。お前の妹の居所を申せと責められるので、仕方がない。一圖に隱しおほせますまい。そこに居ると、お聞かせ申しませうか。どうしませう。いづれとも仰に隨ひませう」と書いてある。返事も書かないで、布を一寸ばかり、紙に包んでやつた。それから後に則光が來て「あの晩は一晩中、中將に責め立てられて、據なく、いい加減な所に、連れてお上げ申しました。眞じめに責め問はれるので、甚だつらい。さて、どうともかうともお返事がなくて、呼もない布の端を包んで下されたから、返事のお手紙と取違へたのかと思ひました」といふに、變な取ちがへ物よ、人の所へ、そんな物を包んで贈る人があるものか。ちつとも、目くばせの謎の意味を解しなかつたのだと思ふのが憎いので、口もきかないで、

夜いたく更けて、門おどろ〳〵しく叩けば、何のかく、心もとなく遠からぬほどをたゝくらむと聞きて、問はすれば、瀧口なりけり。左衞門の文とて、文をもてきたり。皆ねたるに、火近く取りよせて見れば、則光「あす御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌にこもり給へるに、『妹のありどころ申せ』と責めらるゝに、すぢなし。更に隱し申すまじ。そことや聞かせ奉るべき。いかに、仰にしたがはむ」とぞいひたる。返事も書かで、めを一寸ばかり、紙に包みてやりつ。さて後にきて、則光「一夜せめて問はれて、すゞろなる所にゐてありき奉りし。まめやかにさいなむに、いとからし。さてとかくも御かへりのなくて、そゞろなるめのはしを包みて賜へりしかば、とりたがへたるにや」といふに、あやしのたがへ物や。人のもとに、さる物包みて贈る人やはある。いさゝかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、硯のあるに紙のはしに、

かづきする海士のすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ

と書きて出したれば、則光「歌よませ給ひつるか。更に見侍らじ」とて、あふぎかへして

にげていぬ。

釋　○叩けば　人の叩けばと也。○何のかく　何者のかくとなり。○遠からぬ程を　門と家屋との接近したる距離なるをと也。○聞きて　叩く音を聞きてと也。○問はすれば　人出して問はすればと也。○瀧口なりけり　それは瀧口の武士の、使に來れるなりけりと也。○左衞門の文とて　則光の書簡なりといひてと也。○火近く　「火」は燈臺の火なり。○みどきやう　「あす」よゝ「仰に從はむ」まで、則光の書簡なり。「みどきやう」は季の御讀經の略なり。毎年二月八月の春秋二季、日を勘へ定めて、四日間宮中に僧を招じて、大般若經を轉讀せしむるをいふ。江次第の頭書に、「季御讀經、春秋二季、請二百僧於南殿一讀二大般若經一」と見ゆ。○結願　ケチグワン。立願修法の最終の日をいふ。○宰相中將御物忌に　の上、その爲只今を補ひて聞くべし。讀經結願の前夜とて、禁中に御物忌ありける也。○すぢなし　手段なしの意、こゝは遁るべき方法のなきをいふ。「すぢ」はもと條理の意。○さらにえ隱し申すまじ　一向に隱し能はじと也。○そことや云々　貴女の居所を其處なりときかせ申すべきかと也。○いかに　如何にすべきかの略。○仰に　清少のなり。○めを一寸ばかり　布を一寸程、紙に包みて、返事の代に遣れりと也。そは、わが居所をいふ勿れの意なり。前に則光が布を食ひて、いはずなりしことあるによりて、此度も言ふ勿れとの謎に贈れるなり。○後にきて　則光が後に來てと也。○せめて問はれて　齊信に強ひて貴女の居處を問はれてと也。「せめて」は迫りての意。○すゞろなる所云々　とりとめもなき所に連れて歩き申しゝと也。「すゞろ」はそゞろと同じ。漫なるをいふ。「ゐて」は率てなり。○まめやかにさいなむに　熱心に居處をいへと責むるにと也。○からし　つらしに同じ。○そゞろなるめのはしを　埒もなき布の端をと也。○取たがへたるにや　布と返事の書簡とを、取違へたるにやあらんと思ひきの略。○あやしのたがへ物や　取違ふる物に事を缺きて、文

の代に布は不思議なる間遣物よと、清少の意に思へる也。「や」は歎辭。○さる物包みて云々　左樣なるものを包みて送る人あらんやと也。○いさ、かも云々　則光が謎の意味を、少しも解し得ざりしと見るが憎ければと也。○硯のある紙　硯の下敷にしたる料紙なり。料紙の上に硯を置くは、一の作法なり。古來硯箱の中の紙と解せるは誤なり。○かづきするあまの歌　海に潛る海士の住處の定まらぬ如く、不明なる自分の住所を、其處なりと人に必ず言ふなといふ意味の目くばせの爲、布を送りしならん。然るにその謎を解き得ざりしは遺憾なりと也。「かづき」は被の義。水を潛るをいふ。「海士」は海邊にて生活を營む者の總稱。その住處の不定なることは、和漢朗詠集に、詠者不詳「しら波の寄するなぎさに世をつくすあまの子なれば宿も定めず」とあるによる。「めくはせ」は目合なり。今メクバセといふ。布食はせをかけたり。「そこ」は、其處に底をかけたり。○歌よませ給ひつるか　また例の歌を詠ませ給ひつるか、歌ならば決して見じと也。清少の歌詠むを嫌ひていへる也。○あふぎかへして　歌書きし紙を、扇にてあふぎ返してと也。

かうかたみにうしろ見かたらひなどする中に、何事ともなくて、少し中あしくなりたるころ、文おこせたり。則光「びんなき事侍りとも、ちぎり聞えし事はすて給はでよそにても　さぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は、則光「おのれをおぼさむ人は、歌などよみて得さすまじき。すべてあたかたきとなむ思ふべき。今はかぎりやがて絶えなむと思はむ時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに

くづれよる妹脊の山のなかなればさらによし野のかはとだに見じ

枕草子評釋　三九九

の代に布は不思議なる間遣物よと、清少の意に思へる也。「や」は歎辭。○さる物包みて云々　左樣なるものを包みて送る人あらんやと也。○いさ、かも云々　則光が謎の意味を、少しも解し得ざりしと見るが憎ければと也。○硯のある紙　硯の下敷にしたる料紙なり。料紙の上に硯を置くは、一の作法なり。古來硯箱の中の紙と解せるは誤なり。○かづきするあまの歌　海に潛る海士の住處の定まらぬ如く、不明なる自分の住所を、其處なりと人に必ず言ふなといふ意味の目くばせの爲、布を送りしならん。然るにその謎を解き得ざりしは遺憾なりと也。「かづき」は被の義。水を潛るをいふ。「海士」は海邊にて生活を營む者の總稱。その住處の不定なることは、和漢朗詠集に、詠者不詳「しら波の寄するなぎさに世をつくすあまの子なれば宿も定めず」とあるによる。「めくはせ」は目合なり。今メクバセといふ。布食はせをかけたり。「そこ」は、其處に底をかけたり。○歌よませ給ひつるか　また例の歌を詠ませ給ひつるか、歌ならば決して見じと也。清少の歌詠むを嫌ひていへる也。○あふぎかへして　歌書きし紙を、扇にてあふぎ返してと也。

（口譯）硯を置いた紙の端をちぎつて、かづきする海士のすみかはそこなりとゆめいふなとやめをくはせけむ（水潛りする海士のやうな、住處不定にしてゐる私の住かはそこであろと、決していふなといふので、布を贈つた、即ち目くばせをしたのだらう。）と書いて出すと「歌をお詠みなされたか。一向に見ますまいし」といつて、扇であふぎ返して、逃げて往つた。

（口譯）かう互に世話を燒き合つて、親密にしてゐるうちに、何といふ事もなくて、少し中のわるくなつた頃、左衞門から手紙をよこした。「しも不都合な事があつても、お約束した事はお忘れなさらないで、餘所ながらでも、あれは兄人の則光であると位は見て下さい」といつてある。左衞門が常にいふ事には「自分を思つて下さる人は、歌を詠んで下すつてはなるまい。歌を詠んでよこす者は、すべて仇敵と思ひませう。交際ももうこれぎり、そのまゝ絶交してしまはうと思ふ時に、そんな歌などはいつてよこせ」といつたから、その手紙の返事に、

くづれよる妹脊の山の中なれば更によし野のかはとだに見じ。（互の情交も、今は絶え果てしまつた兄妹の中であるから、貴

といひ遣りたりしも、まことに見ずやなりけむ、返事もせず。さてかうぶり得て、ほたあふみの介などいひしかば、にくゝしてこそやみにしか。

釋　○かたみにうしろみ　互に世話をしあひ、隔てなく語らひなどする中にと也。「かたみ」は相互なり。○何事ともなくて　これぞといふ明なる理由もなくてと也。○文おこせたり　則光より、文を贈りこしたりと也。○びんなき事　こゝより「よそにても、さぞなどは見給へ」まで、手紙の文句なり。「びん」は便の字音にて、「便なき」は不都合なるをいふ。○ちぎり聞えし事は　親しくせんと約束申しゝ事はと也。○よそにても　元のやうに親しく語ふことは無くとも、餘所ながらもと也。○さぞなどは見給へ　あれは兄人となりし則光ぞと見なして下されと也。「さぞ」は妹兄と語らひし間柄をさす。○常にいふ事は　則光の人に平常いへることはと也。○おのれをおぼさむ人は　自分を親しく思はん人はと也。○得さすまじき　我に得さす、即ち送りくれてはなるまじと也。○あたかたきと　我に歌よこしたらば、仇敵と思ふべしと也。○いまはかぎりやがて云々　今はこれ限り、即ち絶交せんと思はん時は、歌を詠みて送るべしと也。「やがて」は即座の意。「さる事」は歌詠むをさす。○この返しに　則光より送れる文の返事にと也。○くづれよるの歌　妹脊山が無事に並び立てる時は、吉野の川も滯りなく流るれども、一旦この二つの山の崩れては、川もうもれて見ること能はざるが如く、親しき妹兄の中も、一旦交を絶ちては、ゆきあひても、あれは昔の知人とも思はさるべしと也。「崩れよる」は妹脊山の崩れ寄るに、男女の仲違ひて、交の絶ゆるを喩ふ。「妹脊の山」は、妹山脊山の二山にて、大和國吉野とも紀伊國那賀ともいへり。親しき男女、或は夫婦に譬ふ。「吉野の川」は妹山脊山の間を流る。川に「か（彼）は」の意をかけて、則光をさせり。古今集戀五に「ながれては妹脊の山の中に落つるよし野の川のよしやよの中」

とあるを本歌として詠めり。○まことに見ずや　「更に見侍らじ」「歌をなむよみて　得さすまじき云々など、則光のいひしを承く。○かうぶり　藏人が五位に叙爵して、藏人の官をやめたるなり。かうぶりの賜はりを見よ。○とほたあふみの介などいひて　遠江の介に就任したるをいふ。介は國司の次官なり。受領を見よ。○憎くして云々　二人の仲舊に復さず、憎きまゝにて終りたりと也。

評　經房が左中將となつたのは、長德四年十月の事である。季御讀經は、二月と八月とだから、必ず翌長保元年、及び同二年のうちに、この段の出來事があつたに相違ない。則光の官歷も丁度出あふ。さて元年の八月と、二年の二月、八月とは、中宮の御出入が世話しなくて、里居の暇が無ささうだから、或は出羽辨、染殿中將、例のけがらはしきに、里にまか出てありし、云々。これで見ると、いくらお忙がしくても、月事などある折は、里に下りもするから、これも斷言は出來ない。

前に行成がいつた通り、清少は口許に愛嬌があり、顏や頸のまはりがふつくりして、聲柄のよい女であつたと見えるから、一寸男を引付る位の容色はあつたとしていゝ。その上氣が利いてゐるので、その外交的手腕には、誰も魅せられてしまう。それで清少の行く先々、男達が附いてまはつた。それを又嫉んで、男たらしでゝもあるかのやうに、蔭口を利く者もある。身に覺のない事だから、平氣でもあり、そのいふ人さへ憎くないと、神經質にも似ず、甚だ呑氣な事をいつてゐる。がこれは恐らくその本音ではあるまい。只行方不明にしておく理由の前提に過ぎないらしい。

行先は則光も知つてゐるのに、「經房、濟政の君ばかり」と書いたのは、則光は他人行儀の間柄でないから、勿論の事としていはぬのである。齊信も入懇の人ではあるが、今は慇懃の物々しい上達部で、常には氣近く、殿上を立剔らさぬから、知らせもせぬのであらう。たま〳〵殿上にこの人達が落合つた時、清少の行方が、話題に上つたのである。空知らずを使つて、失笑のごまかしに、臺盤の布を頬張つたのは、いかにも窮した手段であつて、そこに滑稽な態度が伴はれて見える。一體殿上の臺盤の物は、合子から盤まで、ひどくきたなかつたもので、後にはあまり飲食しないことになつたが、この場合、そんな奇麗きたないの贅澤はいつて居られなかつた。

四五日して、季御讀經の結願の前夜の御物忌に、齊信はじめ殿上に籠つたので、又清少の行方が問題になつた。齊信が則光を責めるに次第があつて、段々とはげしくなつてくる樣子が、旨く描かれてある。最初の則光の來談の樣子よりは、文使の時が一層急に、更にさもない處を引廻して歩くに至つて、一層の急を加へた趣が見える。則光の書簡はきび〳〵して、なか〳〵面白い。多分清少の筆によつて點化されたものだらう。

布は仲間の食物にされ、紙に包まれて謎に使はれ、しまひは歌の材料になつて、少しも無駄がない。布から海士を聯想しての比喩は、後撰集や赤染集や、その他にも類例があつて、珍しくもない緣語の鎖つづけではあるが、布を贈つたのを、布を食はせた事にして、目合にいひかけたのは、織細な技巧には相違ないが、一寸活いたいひ方と思ふ。海士の宿を定めぬことは、解釋中にいつた通り、「白波のよする渚に」の歌に據つたもので、この歌は新古今集にも出てゐるが、既に公任撰の朗詠集にある以上は、この時代より以前の古歌に違ない。さて布を贈つたのは自分の行爲であるのに、やと疑ひ、けむと想像したのは、聊か合點が往かぬが、餘り直截なのを厭つて、自分の事を他人の事らしくいひなす場合がよくある。こゝもそれである。歌を書いた紙を突附けられて、煽ぎ返して逃出した所に、いかにも歌嫌らしい趣と、その滑稽な態度とが表現されて面白い。

布の歌から筋を引いて、則光の歌嫌に及び、遂に二人の中たがひから、縁切のしるしに歌を贈つたなど、甚だ振つたものである。則光が「さぞなどは見給へ」と、一寸未練らしい事をいつてよこしたので、あの人とも見まい思ふまいと、頗る冷靜を粧つて、強硬に出てみたのは、まさかと思つたからであらう。然るにそれ切返事もよこさず、その内巡爵で藏人を罷め、遠江介で赴任してしまつたので、又禁中で出會ふ機會もなくなり、縁は全く切れてしまつた。これには却つて、清少の方が面喰つた氣味で、「憎くてこそやみにしか」の一句は、幾分の未練を語つてゐるものではあるまいか。この一小段、事件と文章との推移が、頗る自然である。

上文草の庵の段に、清少、則光の間柄を「妹兄といひ」、こゝでは妹兄と歌つてゐる。妹兄はおもに夫婦をいひ馴れてゐる所から、則光は清少の情夫であつたらうと推定されてゐる。しかしこの二人は、夫婦關係があつたのでは、決してない。それにはたしかな證據がある。この時代には、一種妙な習俗のあつた事を、まづ記憶せねばならぬ。男女の交際が、普通の朋友以上に親密の度がまして來て、しかも夫婦關係を結ぶまでには　なほ距離があつたり、或は何かの事情で、夫婦になり難いといふやうな場合に、その男女が假に兄弟の義を結んだものである。和泉式部集に、

おなじ頃、せうとにせむといひたる人の、久しう音せぬに、

いつのまにいく重霞のへだつれば妹兄の山のかたは見えぬぞ

とある「せうとにせむ」は卽ちそれである。そして男女の義兄弟のことを「妹兄」と詠んでゐる。相模集に、

はらからとのみいふ人の、關のひまあらむ折はといふも怪しければ、

あづま路のそのはらからはきたりとも逢坂までは越さじとぞ思ふ

（口譯）あはれ氣な樣子を人に見せつくるやうなもの　涙の垂れるのを、すぐかみながら物をいふ聲。女が眉を拔くさま。

（口譯）さてその左衞門の陣にいつてから後、里にさがつて暫く居る

とある「はらからとのみいふ」は義兄弟になつてゐる事で、妹兄も、「いもうとせうと」も皆同じ事である。然るに「關の隙あらん折は」と、男の熱情は、遂に義兄弟では滿足が出來かねて、逢坂の關を越えたい、卽ち夫婦になりたいといふ希望をいひ出したのである。それを相模は「越さじとぞ思ふ」と斷つたのである。かういふ關係では、概して夫婦間よりは、熱情が雙方とも低いのが當然だから、隨つてその縁の切方が、甚だ無造作に冷淡してゐる。清少、則光の例でも、和泉集の例でも、それを明に證してゐる。とにかく平安時代にかうした習俗のあつた事は、從來全く人の氣の附かなかつた事である。

七十三段

物のあはれ知らせ顏なるもの　鼻たるまもなくかみてものいふ聲。まゆぬく。

釋　○物のあはれ知らせ顏なるもの　哀氣なる樣子を、人に見するやうなるものと也。○鼻たるまもなくかみて語り出す聲は、何か悲しきことあるやうに見ゆると也。「鼻たる」云々　涙の垂るゝや否や、直にかみて語り出す聲は、何か悲しきことあるやうに見ゆると也。「鼻たる」は鼻水の垂るゝこと也。こゝの垂るゝは四段活にて、古き使ひ方なり。○まゆぬく　眉拔く眼付きは、物のあはれを知らせ顏に見ゆると也。この時代には、女年頃になれば、眉毛を拔きて、その上に黛にて眉を畫きたる也。

七十四段

さてその左衞門の陣にいきてのち、里に出でて、しばしあるに、「とく參れ」など仰ごとのはしに、「左衞門の陣へいきし朝ぼらけなむ、常におぼし出でらるゝ。いかて

と、中宮から「疾く參れ」などある仰言の御消息の端に「お前達が左衞門の陣にいつた朝朗のことが、常に面白く思ひ出されるよ。然るに、少納言は、何でさう平氣で、里に古ぼけてゐるのだらう。あの時はひどく面白かつたらうと推量したが」など仰せられた御返事に、仰かしこりましたといふ旨を申上げて、私事としては「何で面白いと思はぬことがありませう。中宮樣にも、私達ばかりの事を仰になるけれど、それにしても、空穗の涼が、『中なる處女』といつたやうに、やはり朝朗を、面白く御覽なされたでありませうと思ひました」と申上げさせると、その御使が引返して「中宮樣には『非常に御贔屓にあらせらるゝ仲忠が不面目になることをば、何で申上げたぞ。只今夜のうちに、萬事をさし置いて出仕せよ。さもなくば、ひどくお憎みなさるであらう』と仰言がありました」といふので「一通りのお憎みでさへもえらい事である。まして、ひどくとあるお詞には、命もそのまゝ打捨てても參りませう」といつて出仕した。

さつれなく、うちふりてあるならむ。いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事に、かしこまりのよし申して、わたくしには、清「いかでかめでたしと思ひ侍らざらむ。御前にも、さりとも、『中なるをとめ』とはおぼしめし御覽じけむ、となむ思ひ給へし」と聞えさせたれば、たちかへり、使「中宮」『いみじく思ふべかなるなかたゞがおもてぶせなる事をば、いかでか啓したるぞ。たゞ今宵のうちに、よろづの事をすてゝ參れ。さらずば、いみじくにくませ給はむ』となむ、仰ごとある」とあれば、清「よろしからむにてだにゆゝし。まして『いみじく』とある文字には、命もさながら棄てゝなむ」とて參りにき。

（考異）○あるならむ　原本ありしならむとあり。一本による。○思ふべかなる　原本思ふべかめるとあり。古本による。○なかたゞが　原本なりたかとあり。古本による。

釋　○さてその　は、必ず前を承けて說き出す語なれば、恐らくは六十四段の續きが、こゝに誤りて紛れ入りたるものならん。○左衞門の陣に云々　清少が女房達と、左衞門の陣の朝朗を見に行きて後と也。○里に「里」は清少の私宅をいふ。なほ上なる里にまかでたるにの條を見よ。○とくまゐれ　早く出仕せよと也。中宮より清少への御催促なり。○仰ごとのはしに　仰言の御消息の端にと也。「左衞門の陣へいきし」より「いみじくめでたからむとこそ思ひたりしか」までは、文の端なる文句なり。○つれなく　平氣に。○うちふりてあるならむ　里にこもり切りに、ふるぼけてゐるならむと也。その引込み思案なるを諷したり。○いみじくめでたからむとこそ　あの左衞門の陣の朝ぼらけは、非常におも白からんと推量したりしよと也。それを里居のみして、出仕せぬを見れば、清少はさ程面白くは感ぜざりしかの餘意を含む。○かしこまりの由　謹みて仰言にしたがふ趣なり。中宮への御答なり。○わたくしには　公事に對する私事なり。使の女房に對していふ詞なり。○いかでかめでたしと云々　何とて左衞門の陣の朝朗を面白しと思はざらんやと也。○御前にもさりとも　中宮樣にも、それにしてもと也。○中なるをとめ　中宮樣にも源涼の如く、朝朗を飽かず面白しと思ひ給ひけんと也。空穗物語吹上に「涼、彌行が大極の音のいづるかぎり仕うまつる。仙人くだりて舞ふ。涼琴にあはせて彈く。『朝ぼらけほのかにみればあかぬかな中なる少女しばしとめなむ』かへりて、いま一かへり舞ひて、のぼりぬ」と見えたり。空穗の諸本に「仲忠琴にあはせてひく」とある仲忠は、涼の誤寫なり。古註は出典に及ばず。新註は空穗の誤寫に心付かで、「中なるをとめ」を清少自身の事として、全文を曲解したり。共に非なり。○聞えさせたれば　使の女房をして、中宮に申上げさせたればと也。○たちかへり　その使が引返してと也。○いみじく思ふべかなる仲忠が　こゝより「いみじくにくませ給はむ」までは、使者の中宮の御詞を傳へたる也。非常に平生贔負に思はるゝ仲忠がと也。「いみじく思ふ」は中宮の思ひ給ふなり。諸註、清少が思ふやうに解けるは非なり。○おもてぶせなる事をば　不面目になることをばと也。「おもてぶせ」は面伏にて、恥辱なり。仲忠の競爭者たる涼が、琴を彈きて、天人が下りて舞ふ如き奇特を現したる時の「中なるをとめ」の歌を、何故に啓したるぞ。この歌を啓するは、仲忠の面伏即ち恥辱に當るなりと、中宮の清少を責め給へる也。○よろづの事をすてゝ　萬事を擲ちてと也。○にくませ給はむ　中宮の清少を憎み給はんと也。○仰ごとある　中宮の仰言あると也。○よろしからむにてだに　たゞ普通の御憎しみにても畏多し、況やと也。「よろし」は俗に可成、いゝ加減などいふ意。○いみじくとあるもじには　いみじく憎まんとあるお詞にはと也。「もじ」は文字にて、詞といはんに同じ。○命もさながら云々　命もそ

のまゝ打棄てゝ、參るべしと也。「なむ」の下、參るべきを略けり。

評釋　中宮が左衞門の陣の朝朗のことを、頻にめでたきように仰せられたのは、意味のある事で、これで清少の心をそゝつて、早く宮中に戻らせようの御計略である。

中なる少女と窄穗物語の歌を引用したのは、左衞門の陣へ往つた時は、

あり明のいみじう霧り渡りたる庭におりてありくを聞召して、上なる人々の限り、皆おりなどして遊ぶに、やうやう明けもてゆく。

とあつて、丁度窄穗の涼が極祕の手を盡して、琴を彈いた時が明方であつて、天人が下りて舞つたのと、その景趣が類似してゐるからである。

清少がうつかり、涼が神異を現した折の歌を典據としたのに附込んで、中宮には大の最負の仲忠の引目になるやうな事を申上げたのは、甚だ不埒と仰になる。何その癖、前には仲忠の童生のあやしさを御非難遊ばされたのに。かうして見ると、中宮もなか〳〵、外交的辭令に富ませられた御方であるが、これ程までにしても、清少を御手許に引付けたく思召された御厚志をば、清少は何と御答したゞらうか。乃ち「いみじくとある文字には命もさながら」といつた。これは前に「よろづの事をすて、參れ」と仰せられたのを承けたので、誠に嬉しい心意氣ではないか。臣民が君主に對しての一切は、命の一字で解決してしまうのが、わが往古からの國風である。

この文全然會話で組織されてゐる。しかもその兩者の辭令が、單に面白いばかりでなく、底に一種のなつかしみと熱とがあるので、文章が活き〳〵してゐる。

七十五段

（口譯）職の御曹司にお出なさる時分、西廂の間で、不斷の御讀經があるので、本尊の佛の畫像など懸奉り、法師達が詰めてゐるのは、今更いふまでもないことである。それから二日程たつて、緣のもとで、早しげな者の聲で「やはり御供物のおさがりが御座いませう」といふと、法師が「どうしてゐう早くには、おさがりがあるものか」と返事するのを、何者がこんな事をいふのかしらと思つて、立出て見ると、年寄つた尼が、ひどく汚れた狩袴の、筒とかいふものゝやうに細く短いのをはいて、帶から下が五寸程な短かさの、衣ともいへばいはれようかといふ物で、狩袴

職の御曹司におはしますころ、西の廂に、不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、法師共の居たるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、緣のもとにあやしき者の聲にて、「なほその佛供のおろし侍りなむ」といへば、法師「いかでまだきには」といらふるを、何のいふにかあらむと、立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじくすゝけたる狩袴の、筒とかやのやうにほそく短きを、帶より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべからむ、同じやうにすゝけたるを着て、猿のさまにていふなりけり。清「あれは何事いふぞ」といへば、聲ひきつくろひて、尼「佛の御弟子にさぶらへば、佛のおろしたべと申すを、この御坊たちのをしみ給ふ」といふ、はなやかにみやびかなり。かかる者は、うちくんじたるこそあはれなれ。うたても花やかなるかなとて、清「ことものは食はで、佛の御おろしをのみくふか。いとたふときことかな」といふけしきを見て、尼「などかこと物もたべざらむ。それがさぶらはねばこそ、取り申し侍れ」といへば、くだもの、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、むげに中よくなりて、よろづの事をかたる。若き人々出できて、「男やある」「いづこにか住む」などど、口々に問ふに、そへごとなどすれば、（人々）「歌はうたふや。舞などするか」と問ひもはてぬに、尼「よるはたれとかねむ。常陸の介とねむ。ねたるはだもよし」。これが末いと多かり。又尼「男山の峯のもみぢ葉、さぞ名はたつ〳〵」と、かしら

と同じやうに汚れたのを着て、猿のやうな恰好でいふのであつた。「あれは何事をいふのか」といふと、その尼が聲づくろひして「私は佛の御弟子でございますから、佛のおさがりを下さいと申すのを、この御坊樣達がお咎みなさる」といふ。その聲が晴やかに雅びてゐる。こんな乞食のやうな者は、衰れ返つてゐるのが可愛さうである。それをいやに晴れやかであることよと思つて「外の物はたべないで、佛のおさがりばかりたべるのか。大層尊いことよ」と冷かしていふ樣子を見て「何で外の物も頂かないことがありませうか。それがございませぬから、佛のおさがりをばたべるのであります」といふから、果物や點斗餅などを、何かに入れてくれたので、ひどく申よしになつて色々な事をその尼が話す。若い女房達も出て來て「亭主があるか」、「何處に住むか」など、日々に問ふと、「可笑しい事や、皮肉な笑談などをいつて話すので、「歌はうたふか」、「舞など舞ふか」と問ひきらぬうちに「よるは誰と寢む、常陸の介と寢む、寢たる肌もよし」と歌ひ出して、その歌の末がまだ澤山ある。又「男山の峯のもみぢば、さぞ名は立つ〳〵」と歌ひながら、頭をぐる〳〵と振まはす。その樣子がひどく醜いから、笑ひ憎んで皆が「あつちへ往け〳〵」と、追立てるのも、甚だをまろがしふる。いみじくにくければ、笑ひにくみて、人々「いね〳〵」といふもいとをかし。「これに、何取らせむ」といふを聞かせ給ひて、宮「いみじう、などかくかたはら痛きことはせさせつる。えこそ聞かで、耳をふたぎてありつれ。その衣一つとらせて、とくやりてよ」と仰ごとあれば、取りて、「それ賜はするぞ。衣すゝけたり。しろくて着よ」とて投げ取らせたれば、伏し拜みて、肩にうちかけて舞ふものか。まことににくゝて皆入りにし。後にはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。やがて常陸の介とつけたり。衣もしろめず、同じすゝけにてあれば、いづちやりにけむなどにくむに、右近の內侍の參りたるに、宮「かゝる者なむかたらひつけて置きためる。かうして常にくること」と、ありしやうなど、小兵衞といふ人して、まねばせて聞かせ給へば、右近「あれいかで見侍らむ。かならず見せさせ給へ。御得意ななり。更によもかたらひ取らじ」など笑ふ。そののちまた尼なるかたはの、いとあてやかなるが出できたるを、また呼び出でて物など問ふに、これははづかしげに思ひて、あはれなれば、衣ひとつ賜はせたるを、伏しをがむはされどよし。さてうち泣きよろこびて出でぬるを、はやこの常陸の介、いきあひて見てけり。その後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でむ。

（考異）○いづこにか　原本いづ事にかとあり。一本による。○肩に　原本肩にぞとあり。古本による。

釋　○西の廂にて　母屋の西廂の間にてと也。○不斷の御讀經　晝夜不斷の御讀經なり。略して不斷經ともいふ。その方法は、一晝夜を十二時として、十二人の僧を置きて、毎時輪番に、間斷なく讀誦せしむ。經は大般若經、最勝王經、法華經等とす。○佛などかけ奉り　本尊として佛の畫像などを掛け奉りと也。○更なることなれ　尊きことはいふも更なるものゝたるとを承く。○二日ばかりありて　不斷經始りて、二日ばかり經ちてと也。清少の參上して二日ばかりと釋くは、この段を前段の續きと思ひ誤れる說也。○緣のもと　緣の際なり。○あやしき者　卑しき者なり。○なほその佛供のおろし云々　例の通り、佛前の供物のおさがりがあるならん、賜はりたしと也。○いかでまだきには云々　これは法師の詞なり。何とてその時に未だならぬに、御さがりの「まだき」は未しきにて、時の早きをいふ。「いかで」の下、かを「まだきにには」の下、御おろしのあるべきを略けり。○何のいふにか云々　何者のかくいふにかあらんと思ひてと略けり。○すゝけたる　煤けたるにて、汚れ黑みたるをいふ。○狩袴　狩衣の袴にて、布の奴袴をいふ。○筒とかやのやうに　筒とかいふ物の如くにと也。その袴の細くて、見だてなき形容なり。「か」は疑辭、「や」は歎辭。○短きを　の下、はきてを略けり。○五寸ばかりなる　これも丈の短きをいへる也。○衣とかやいふべからむ　衣なれども、衣とも見えざる樣なり。この句の下、物のを略けり。○煤けたるを　煤けたる物をなり。○猿のさま　猿の如き樣子なり。○あれは乞食尼をさす。清少の詞なり。○聲ひきつくろひて　乞食尼が聲繕ひしてと也。○佛の御弟子に云々　自分は佛の御弟子なればと也。比丘(僧)比丘尼(尼)優婆塞(信男)優婆夷(信女)を、佛の四部の弟子とも、四衆ともいふ。○佛のおろしたべ　佛の供物のおろしを賜へとなり。「たべ」は賜への約。○御坊たち不斷經仕うまつる法師共をさす。「御坊」は一坊の主を敬ひていふ。又坊主ならねども、法師の敬稱とす。

○をしみ給ふ　「いかでまだきには」といへるを、吝みてくれぬやうに思ひ僻める也。○花やかに云々　その聲花やかに雅びたりと也。美隆の説に、花やかとは、つゝましけなく、晴やかなるをいふと。○かゝる者は云々　以下清少の意中なり。「かゝる者」は乞食尼をさす。○うちくんじ　力なけに屈託したるをいふ。「うち」は接頭語。「くんじ」は屈じの音便なり。くつし、くし、くし痛く、くんじ痛くなど、源氏にも見えて、この頃の通語なり。○花やかなるかなとて　花やかなる哉と思ひてと也。○こと物は食はで云々　以下「いと尊き事かな」までは、清少の尼に戯れたる詞なり。「こと物」は異物なり。「か」は疑辭。○けしきを見て　わがけしきを、尼が見てと也。○などかこと物も云々　乞食尼の詞なり。○たべざらむ　頂かざらんやと也。食ふことを給ぶといふも、この「たべ」の用法より轉れる也。○それが　異物をさす。○とり申し　佛の御おろしを取申しと也。「とり」は取食むこと也。取食のこと、下文にも見ゆ。諸註、機嫌を取ることと解したるは非。○くだもの　水菓子なり。但この頃には、餅類の菓子をもいへること、朝野群載、江次第等に見ゆ。○ひろきもちひ　薄く廣くしたる餅。奉註に、のし餅とあり。○物に取入れて　何かに入れてと也。○取らせなどして　乞食尼に與へたるにと也。○よろづの事を云々　乞食尼が種々の事を、清少に語ると也。○わかき人々　若き女房達なり。○男やある　「男」は夫又は情夫をいふ。○いづこにか住む　汝は何處に住むかとなり。男の住處を問へるにはあらず。○をかしき事云々　返事に可笑しき事をいひ、又そへ言などすればと也。○そへごと　擬言の意。當てつけたる冗談口をいふ。遊仙窟に、譏警の字を訓めり。（○歌はうたふや　歌はうたふや否やとなり。これも女房達の詞。○問ひもはてぬに　女房達がなり。詞の終らぬうちに、早くも乞食尼の歌ひ出せる也。○よるはたれとねむ云々　當時の俗謡ならん。○常陸の介とねむ　常陸の介といふ男と共に寐んと也。○寐たる肌もよし　共寐したる男の肌理も細かにて、その肌ざはりよろしと也。この句の下、と歌ひ出すを略け

面白い事。この尼に何をくれよう」といふのを、中宮がお聞きなされて「なぜそんなひどく苦々しいことはさせたぞ。聞いてもゐられないで、耳を塞いで居つた。その衣を一つくれて、早く追遣りなさいよ」と仰になるから「これをお上から下さるぞ。お前の着物が汚れてゐる。きれいにして着なさい」といつて、投げてくれると伏し拜んで、いゝ方の眞似をして、それを肩に懸けて舞つたものよ。ほんに憎らしくて、皆奥へ引込んでしまつた。その後は癖になつたのか、常に人目につくやうにして歩きまはる。そこで、それに常陸の介と名づけた。着物もきれいに着換へず、以前の通りの汚れ方であるから「あの下された衣は、何處へやつてしまつたらう」などいつて皆が憎む。折柄右近の内侍が參つたのに、中宮が「こちの女房共は、物好にも、かういふ乞食尼を手なづけて置いたやうである。それでもつて、何時もそれが來ることよ」と仰になつて、小兵衛といふ女房に、その乞食尼の有樣を眞似させてお聞かせになると、右近が「それをどうぞして見たいものです。屹度お見せ下さいませ。御得意樣であります。決して話をつけて横取することは致しますまい」などいつて笑ふ。その後又、かたはの尼の大層品のいいのが遣つて來たのを、又呼出して、物を

り。○これが末いと多かり　「夜は誰と寐む」の同調の歌が、幾章もまだありたるをいふ。この「末」は、短歌にいふ下句にあらず。○男山の峰のもみぢ葉　これも乞食尼の歌へる別の歌なり。男山の峯の紅葉はよくて、かくも世間に評判が高しと也。その寓意は男山に男をよそへ、色ある紅葉を戀の色に出たる女によそへて、さればかくも世間に浮名が甚しく立つと、女の戀を歌へるものなり。「さぞ」はしかぞの約にて、かくの通りの意なるを、諸註、想像の意に解きたるは、後世の俗意なり。「立つ〳〵」は立つことの甚しきにいふ。「男山」は山城綴喜郡にありて、石清水八幡宮の所在地なり。高頂を鳩が嶺といふ。○立つと　立つと歌ひつゝを略けり。○まろがしふる　ぐるぐると振動したりと也。○いみじくにくければ　その擧動の甚だ見苦ければと也。「にくければ」は醜きをいふ。○いねいねといふも　女房達がなり。「いね」は去ねなり。○これに　女房達の詞なり。「これ」は乞食尼をさす。○聞かせ給ひて　中宮がなり。○いみじうなどかく云々　「とくやりてよ」まで中宮の御詞なり、何故かゝる非常に笑止なる事は、乞食尼にせさせたるぞと也。「いみじう」は「かたはら痛き」にかゝる副詞。○えこそ聞かで云々　卑猥にて聞くに堪へざる故なり。○ふたぎ　塞ぎの古言。○とくやりてよ　早く追返せよと也。「やりてよ」は遣りてあれよの略。○取りて　その衣を女房達がなり。○それを汝に　中宮樣が頂かするぞと也。「それ」は「その衣」をさす。○きぬすゝけたり　汝の着物は汚れ黒みたりとなり。○しろくて着よ　白くして着よと也。着換へて新しくせよといふに同じ。「しろく」は清新なるをいふ。○投げ取らせ　衣をなり。○肩にうちかけて　衣を肩にうち掛けて舞ふことよと也。祿を肩に掛けて拜舞するは、身分ある人の所作なり。それを乞食尼が眞似したれば、驚歎したる也。「まふ」は拜舞なり。「ものか」は驚き怪しむ意の歎辭。○皆入りにし　女房達が皆奥に入りにしよと也。「入りにし」の下、よの歎辭を略けり。○ならひたるにや　衣服下賜の爲に馴れ付きたるならんかと也。「ならひ」は馴

れの延言、「にや」の下、あらんを略けり。○見えしらがひ　わざと人に見らるゝやうにしてと也。「しらがひ」は動詞の意を強むる接尾語と見るべし。源氏竹川に、見えしらがひさまよふ、今昔物語に、瞰ひしらがふ、追ひしらがひてなど見えたり。○やがて常陸の介と　即ち常陸の介と、綽名を付けたりと也。「常陸の介云々」と歌ひし故なり。「やがて」は即坐にの意。○おなじすゝけにてあれば　前同樣のよごれ着物にて居ればと也。○いづちやりにけむ　賜はりし衣は、何處へ遣りてしまひしならんと也。○右近の内侍　主上附の女房の名。翁丸の段に出でたる人なり。○かゝる者なむ云々　「かうして常にくるること」まで、中宮の内侍に宣へる御詞なり。こゝの女房共は物好にも、かゝる乞食尼を手なづけて置きたる樣子ぞと也。「語らひつけて」は話をつけて、手なづけてなどの意。○常にくること　の下、よの歎辭を略けり。○ありしやうなど　乞食の爲し、樣子などをと也。○小兵衞　女房の名。○まねばせて　乞食尼の眞似をさせてと也。○聞かせ給へば　右近の内侍に聞かせ給へばと也。○あれいかで云々　「語らひ取らじ」まで、右近の詞なり。彼の乞食尼を、何卒して見たしと也。「あれ」は乞食尼をさす。○御とくいなり　御最負筋にてあるなりと也。「とくい」は得意の字音。懇意の人をいふ。今日顧客を御得意とよぶは、この一轉したる也。○よも語らひ取らじ　決して語らひてわが物とすることはせじと也。○尼なるかたは　これも乞食尼なり。「かたは」は片端の義にて、不具なるをいふ。○あてやかなる者がと也。「あてやか」は品のよきをいふ。○はづかしけに　遠慮したる樣子に、臆したる狀になどの意。先のに似ずこれは愼ましやかなる也。○されどよし　伏拜むはおなじ乞食ながら、常陸の介とは違ひ、しとやかにてよしと也。○うち泣ぎ　尼の感泣したる也。○いきあひて見てけり　行合ひて、その衣を賜はりたるを見てしまひたりと也。○久しく見えねど　新しき尼に思ひ出でむ　常陸の介がなり。○誰かは　さやうの乞食などを誰か思ひ出すべきと也。

尋ねなどするに、これはきまりわろさうに思つて、可愛さうであるから、衣を一つ、中宮の下されたのを、有難がつて伏拜むのは、おなじ乞食だけれど、常陸の介とは違つてよろしい。さて嬉し泣きに泣いて喜んで出てゆくのを、早くもこの常陸の介が行逢つて、衣を頂いたのを見てしまつた。その後久しく常陸の介が見えないが、誰がそん者を思ひ出さうか。

（口譯）さて十二月の十日餘りの時分に、雪が大層高く降つたのを、女房達などでもつて、その雪を何かの蓋に入れて、大層澤山置くのを、女房達が「おなじ事なら、庭に本當の雪の山を拵へさせませう」といつて、侍を呼出して、中宮樣の御命令としていひつけると、大勢集つて作るに、主殿司の役人で、御掃除に參つた者なども、皆一所になつて、大層高く拵へあげる。そこへ中宮職の役人なども參り集つて、助言をして、格別に立派に拵へるので、藏人所の衆も三四人參つてくる、主殿司の人も段々寄つて來て、二十人程になつてきた。まだ足らぬとて、里

さてしはすの十餘日のほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝ、いと多くおくを、女房「おなじくは、庭にまことの山を作らせ侍らむ」とて、侍召して、「仰ごとにて」といへば、集りてつくるに、主殿司の人にて、御きよめに參りたるなども、皆よりて、いと高くつくりなす。宮づかさなど參り集りて、言くはへことにつくれば、所の衆二四人參りたる。主殿司の人も、二十人ばかりになりにけり。里なる侍召しにつかはしなどす。「今日この山つくる人には、祿賜はすべし。雪山に參らざらむ人には、同じからずと〻めむ」などいへば、聞きつけたるは惑ひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召して、きぬ一ゆひとらせて、緣に投げ出づるを、ひとつづつ取りによりて、をがみつゝ腰にさして、皆まかでぬ。袍など着たるは、かたへさらで狩衣にてぞある。宮「これいつまであるなむ」と、人々にのたまはするに、人々「十日はありなむ」「十餘日はありなむ」などたゞこの頃の程を、あるかぎり申せば、宮「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日までさぶらひなむ」と申すを、御前にも、えさはあらじと思すめり。女房などは、すべて「年の內、晦日までもあらじ」とのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな、げにえしもさはあらざらむ。朔日などぞ申すべかりけると、下には思へど、さばれさまでなくと、言ひそめてむことはとて、かたうあらがひつ。

に下りてゐる侍を呼びに、使をやりなどする。その口上には「今日この雪山搔へる人には、御褒美を下されう。雪山搔へに參らなからう人には、これは遣うからず遣るまい」などいふと、それを聞付けた侍は、周章てふためいて參るもある。里の遠い者は、據なく告げてやらない。雪山を搔へあげたから、職の役人を呼出して、皆の者に絹二結ひ一しめにしたのを、褒美として下さつて、緣に投出すのを皆の者が、一つ宛取りに寄つてきて、拜みながら、それを腰にさして、皆退出した。職の役人の内身分ある、袍を著た者は、一部分殘つて、狩衣に着換へて詰めて居る。この雪の山

（考異）○仰ごとにては　原本と文字なし。抄本による。○人々に　原本に文字なし。古本及び濱臣説により補ふ。○十日はありなむ　原本になし。古本による。○ありなむなど　など原本になし。古本による。

（評）○十餘日　トヲカアマリと訓む。○高う降りたる　澤山降積みたるをいふ。○女房どもなどして　女房達などにてと也。「して」は、俗のデモッテに當る。○物の蓋に入れつゝ　櫃や筥やの蓋を反して、それに雪を山の如くに取入れたる也。○同じくは　同じ雪山をつくるならばと也。○まことの山を云々　蓋などに小さく盛らで、庭に大きく實の山を作らせんと也。○侍召して　こゝの侍は、中宮職の定制の役人以外の格勤者なり。なほ侍を見よ。○仰ごとにてといへば　中宮の仰言にて、作らするぞといへばと也。○集まりて　侍共がなり。○主殿司の人にて　主殿寮の下司にてと也。なほ主殿司を見よ。○御きよめ　御掃除なり。主殿式に「毎日早朝、頭率二僚下一掃二治御前及宮掖所々一」。○宮づかさ　中宮職の大夫、亮などの身分ある役人をいふ。なほ中宮職を見よ。○ことくはへ　助言するをいふ。旁註に外の雪を加へてと解きて、禁秘抄の「雪不足之時、被レ召二諸御願寺一」の文を引けるは鑿說なり。○ことに作れば　格別に立派に作ればと也。○所の衆　藏人所の衆の略。毎月末日御所の煤拂をなし、又御殿中の裝置、その他の雜役を勤む。定員二十人なり。職原抄藏人所の條に「所衆五六位侍所レ然之輩補レ之」と見え、これよりま、藏人に擇任せらる。藏人所を見よ。○里なる侍　私宅に下りゐる侍なり。非番の者なるべし。○つかはしなど　使をなり。○この山つくる人には云々　「とゞめむ」まで、使の觸れまはりたる御口狀なり。○雪山につくりに參上せざらん人には　雪山つくりに參上せざらん人にはと也。○おなじからずとどめむ　祿賜はすることは止めんと也。○聞付けたる　これを聞付けたる者はと也。○まどひ參る　周章てふためきて參ると也。○里遠きは　侍のなり。○きぬ二ゆひ　絹二結にて、卷絹二卷をいふ。雪山の祿なり。○緣に投げ出づるを　宮司がなり。○一つづつ取りによりて

は、何時までであるだらうと、中宮が人々に仰になると、「十日はありませう」、「十日餘りはありませう」など、一圖に十日位の見當のところを、居るほどの者は皆申すと、中宮が私に向つて「どうであるか」とお尋ねなさるから、「正月の十五日まで御ございませうと申上げるのを、中宮樣にも「さうはあり得まい」と思召すやうである。女房達などはすべて「この年内晦日までもあるまい」とばかり申上げるのに「あまり遙にも申上げたことよ。ほんにさうはあり得なからう。正月の朔日など位に申上ぐべきであつた」と内心には思ふが「ままよ、それまでなくとも、一旦いひ出し

雪山作りたる者共がなり。「一つ」は卷絹二結をしばりて、一つにしたる物をいふ。○腰にさして　緣の卷絹をなり。源氏、紫式部日記などに、腰ざしとあるも、緣の卷絹のことなり。○うへのきぬなど着たるは　集りたる宮司等をいふなるべし。○うへのきぬ」は袍なり。○かたへさらで　半分は居殘りてとなり。「かたへ」は片方の義。源氏にも「かたへは殘りて」とあり。○これいつまで云々　宮の御前に居るほどの人々は、いづれも十日前後のところを申上ぐればと也。「これ」は雪山をさす。○人々にの給はするに　宮がなり。○この頃の程を云々　御前に居るほどの人々は、いづれも十日前後のところを申上ぐればと也。「この頃の程」は、その頃の見當なり。「あるかぎり」は御前に在る限の人のなり。○問はせ給へば　中宮が清少になり。○正月の十五日まで云々　清少の奉答なり。正月の十五日まで消えずしてあらんと也。○おまへにも　宮の御前にもなり。○えさはあらじ　さはあり得じと也。「さ」は正月十五日までとあるをさす。○あまり遠くも云々　以下清少の意中なり。あまり時日を遙にも申上げしことよと也。○さしもさはあらざらむ　わが申上げし如く、しかも長くは消殘りてあり得ざらんと也。○さはあらざらむ　正月の朔日ぐらゐに申上ぐればよかりしと也。○下には思へど　心中には後悔して思へどと也。○さまでなくとも　さまでなくともと也。「さ」は正月十五日までといへるをさす。方なしの意に用ゐらる。○さまでなくとも　の下、いかでか易ふべきを略けり。「と」をともの意に用ゐたる例、甚だ多し。○言ひそめてむことは　固く執りて言爭ひたりと也。一旦口外したることは、何といひ換へんやと也。○かたうあらがひつ　「あらがひ」は論爭すること。

二十日のほどに、雨など降れど、消ゆべくもなし。たけぞ少しおとりもてゆく。白山の觀音、これきやさせ給ふな」と祈るも物ぐるほし。さてその山つくりたる日、式

た事は、何でいひ換へよう」と思つて、たつていひ張つた。

（日譯）二十日の時分に、雨など降るけれど、雪山は消えさうもない。只高さが少し減つてゆく。白山の觀音様よ、これをお消やしなさるな」と祈るのも氣遠ひじみてゐる。さてこの雪山を作つた日に、式部丞忠隆が、主上の御使で參つたから、茵を出し挨拶などするに「今日、雪山をお拂へなさらぬ所はない。清涼殿のお前の小庭にもお拂へてなつた。春宮御所や弘徽殿でもお拂へになつた。京極殿でもお拂へになつた」など、忠隆がいふから、こゝにのみめづらしと見る雪の山と

部丞忠隆、御使にて參りたれば、しとねさしいだし、物などいふに、忠隆「けふ雪山つくらせ給はぬ所なむなき。御前のつぼにも作らせ給へり。京極殿にも作らせ給へり」などいへば、

こゝにのみめづらしと見る雪の山ところ〴〵にふりにけるかな

と傍なる人していはすれば、たびたび〳〵かたぶきて、忠隆「返しはえ仕うまつりけがさじ。あされたる御簾の前にて、人にをかたり侍らむ」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらむ」とぞの給はする。晦日がたに、少しちひさくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた、緣に人々出で居などしたるに、常陸の介出できたり。女房「などいと久しく見えざりつる」といへば、尼「なにか、いと心うき事の侍りしかば」といふに、女房「いかに、何事ぞ」と問ふに、尼「なほかく思ひ侍りしなり」とて、ながやかによみ出づ。

うらやまし足もひかれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむ

となむ思ひ侍りし」といふを、にくみ笑ひて、人の目も見いれねば、雪の山にのぼりかゝづらひありきていぬる後に、右近の內侍に「かくなむ」と言ひやりたれば「右近」などか人そへて、こゝには賜はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかゝりつ

ころ〴〵にふりにける哉（こゝではかり珍しいと思つてゐる雪山は、もうあちこちに出來て、古臭くなつてしまつたことよ）

と詠んで、脇にゐた人（女房の一人）して取次がせると、忠隆は、度々首をかしげて感心してゐたが「下手な御返歌をして、折角の御歌をけがすことは致しますまい。風流な御簾の前で、御歌を披露致しませう」といつて、座を起つてしまつた。この人は歌はひどく好きだと聞いたのに、返歌もしないのは不思議である。中宮には、これをお聞きになつて「非常によく詠まうと思つたのだらう。それで出來なかつたのだらう」と仰になる。晦

たひけむこそ、いと悲しけれ」とあるを、又笑ふ。雪山はつれなくて、年もかへりぬ。

（考異）○けふ　原本けふのとあり。抄本による。○あされたる　原本あされたりとあり。

（評釋）○二十日　十二月廿日なり。○消ゆべくもなし　雪山がなり。○たけぞすこし云々　高さのみすこし低くなりてゆくと也。「そ」文字强く用ゐられたれば、長以外は毫も變らざる山を反辭せり。○白山の觀音　「白山」は加賀の白山にて、雪國の山として有名なり。故に今雪山につけて、この白山を思ひ出して祈れるなり。「觀音」は養老年中、僧泰澄この山を開きて佛地とし、十一面觀音をその奉佛の一とせり。○これきやさせ給ふな　清少の白山觀音に祈る詞なり。「これ」は雪山をさす。「きやさせ」は消やすの崇敬格にて、消やすは消すに同じ。○物ぐるはし　物ぐるはしに同じ。狂氣じみたりと也。○式部丞忠隆　翁丸の段に見えたる藏人忠隆なり。この時式部丞を兼ねたりと見ゆ。忠隆を見よ。○式部丞　式部省の三等官なり。六位にて藏人を兼ねたるを、殿上の丞と稱して規模とす。式部を見よ。○御使にて　主上の御使にてと也。○しとねさし出し　女房が、勅使の爲に茵を簾の下よりさし出して、簀子に座を設くるなり。○茵　敷物なり。氈褥、藁薦などの類を稱す。○物などいふに　話などするにと也。○けふ云々　忠隆の詞なり。○お前の壺にも　主上の御前の壺庭にもと也。この壺庭は、清涼殿の西なる、後涼殿との間にあり。「壺」は中庭をいふ。○春宮　トウグウ。東宮御所の意。「春」の字をトウと讀むは、東宮の東を爲レ春、萬物生長在レ東、西爲レ秋、萬物成就在レ西、以レ此君在二西宮一、太子常居二東宮一也」。又易に震を長男の卦とし、方位に東、時候に春を配せり。依りて太子を東宮と申し、その役所を春宮と稱し、時にまた相通用したり。當時の東宮は、冷泉院第二の皇子居貞と申し、のち卽位ありて三條院と申す。○弘徽殿　コキデン。清涼殿の北、七

日近くに、雪山は少し小さくなるやうだけれど、やはり大層高くてあるに、晝時分、人々が緣に出てゐなどしてゐると、常陸の介がやつて來た。「なぜ大分久しく見えなかつたか」といふと、「何ですか。ひどく怨めしい事がございましたから、それで參りませんでした」といふ。「それはどうか。何事か」と聞くと、「やはりかう思ひましたのです」と、聲を引いて歌を詠み出した。

羨まし足もひかれずわたつうみのいかなるあまに物賜ふらむ（まあ羨ましいことよ。足も引摺つてあるけない程に、どういふ素姓の尼で、あゝも物を下さるのだらう。）

間四面。皇后女御の御在所なり。當時は女御藤原義子住み給へり、閑院左大將の女御を見よ。○京極殿キヤウゴクドノ。道長の家なり。拾芥抄に「京極殿土御門南、京極西、南北二町、其南一町被レ入ニ道長家一」。○こゝにのみの歌　清少の歌なり。意は、此處ばかりに珍しく出來たりと思ひゐたる雪山は、處々方々に出來てゐて、舊臭くなりてしまひたることよと也。「こゝ」は職の曹司をさす。「ふり」は雪の降ると、雪山の舊る意とを兼ねたり。○とかたはらなる人して云々　と詠みて傍なる人して、勅使忠隆にいはすればと也。「人」は朋輩の女房なり。○たび〳〵かたぶきて　忠隆は度々頭を傾けてと也。感歎の狀なり。○返しはえ仕うまつりけがさじ　「語り侍らむ」まで、忠隆の詞なり。拙き返歌を致して、かゝる御見事なる歌を汚すことはすまじと也。「え」は「けがさじ」にかけて見るべし。○あされたるみすの前にて云々　風流なる簾のあたりにて、御歌を人々に話し申さんと也。「あされたるみすの前」は物めでなどする女房の居る處といふが如し。女は几帳や簾の中にゐて、あらはに姿を現さねば「簾の前」といへる也。「あされ」はされたる意。今シヤレタといふに似たり。「人にを」のをは歎辭。○たちにき　忠隆は座を起ちしと也。○歌はいみじく好むと云々　忠隆は歌は非常に好むと聞きしに、返歌せぬは怪しと也。○お前に聞しめして　宮の御前に忠隆の返歌なかりしことを聞し召してと也。○いみじくよくとぞ云々　中宮の御詞なり。非常に旨く返歌せんと、忠隆の思ひたる故ならんと也。並々のは詠むまじとて、遂に返歌せざりしならんの餘意を補ひて聞くべし。○つごもり方に　晦日近くをいふ。○すこし小さくなるやう　雪山がなり。○えんに　さきに祿の卷絹を投出しつる緣なり。○人々　女房達なり。○常陸の介　乞食尼なり。○などいと久しく云々　女房達の尼に問ふ詞なり。○なにか　なにかあらんの略。對手の詞を輕く承けていふ語にて、俗の何デモナイノデスといふに當る。○いと心うき事の侍りしかば　甚だ怨めしき事がありし故、參らざりきと也。今一人の尼に衣を取らせたるを、常陸介の

と思ひました」といふを、人達が憎み笑つて、誰も目もくれないから、雪山にのぼつて歩き散して往つた後で、右近の内侍に「かう〳〵でありました」と、この顚末を知らせてやると、「なぜ人を附けて、こちらへは送つて下さらなかつたのか。彼が手持不沙汰で、雪山までも上つて歩き廻つたであらうのが、ひどく可愛さうです」と返事してきたのを、又笑ふ。さて雪山は依然として、年も改まつた。

（口譯）正月の元日に、又雪

怨めるなり。「心うき」は心につらく感ずるをいふ。○いかに、何事ぞ　そは如何に、何事なるぞと、女房達の疊みかけて、その心憂き筋を問へる也。○なほかく思ひ侍りしなり　思はじとは思へど、なほかやうに思ひしなりと、尼の答へたる也。「かく」は次の歌をさす。○ながやかに云々　聲長く歌ひ出でたる也。これをながむといふ。○うらやましの歌　足も曳かれぬ程澤山に、如何なる尼なれば、かくも物賜ふならん、羨ましきことよと也。常陸の介が嫉妬の歌なり。「足もひかれず」はあるかれぬをいふ。新しきかたは尼の跛なりしより、賜多くして足も曳かれぬ趣に見立てたり。「わたつうみの」は海士の枕詞に用ゐたり。もと綿津見は海神の御名なるが、轉りて海をいへり。さてみを海の意と心得て、わたつうみといへる也。「あま」は海邊にて生計を營む者の稱にて、こゝは尼にいひかけたり。海士は「わたつみ」の緣語なり。「うらやまし」に浦、「足」に葦、「もの」に藻をかけたりとまで釋くは強ひたるべし。○にくみ笑ひて　女房達がなり。○人の目も見入れねば　誰も目もくれねばと也。常陸の介に構ふ者もなきをいふ。○かゝづらひありきて　關はり歩きてと也。雪山の彼方此方を踏あるくをいふ。○かくなむ云々　「かく」は今日常陸の介がきたる顚末をさす。「いひやり」は女房達がなり。○などか人そへて云々　以下右近の返事なり。何故案内者を添へて、常陸の介を此方には送り給はざりしかと也。○かれがはしたなくて　彼れ常陸の介が立端なくてと也。誰も目も見入れず、すて置きたれば也。はしたなしを見よ。○雪の山まで云々　そのうへ難儀なる雪の山までも登りあるきしことの、甚だ不便なりと也。雪山をまことの山に取做し、誇張して「いと悲しけれ」など戯れたる也。○又笑ふ　女房達がなり。「又」は、前に「にくみ笑ふ」とあるを承けたり。○つれなくて　平氣で、平然としてなどの意。依然として消えやらぬさま也。○年もかへりぬ　年の立返りたるをいふ。

ついたちの日、又雪多くふりたるを　うれしくも降り積みたるかなと思ふに　宮「こ

が澤山降つたのを、嬉しくも降積んだことよと思ふと、「これはやくたいもない。最初のをばそのまゝに、今のをば掻棄てよ」と仰になる。二日の朝早く部屋へさがると、侍の長らしい者が、柚の葉のやうな濃い綠の宿直衣の袖のうへに、青い紙の松の枝に付けたのを置いて、寒さに、慄へながら出て來た。「それは何處からの御文か」と問ふと「齋院から」といふに、ふとめでたく思はれて、その品物を受取つて、宮のお前へ引返した。まだ御寢なつて入らせられるから、御寢間の次の身屋の方の御格子を、碁盤などひき寄せて、踏臺にして、一人で我慢して上げるが、ひどく重い。

れはあいなし。はじめのをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、ゆの葉の如くなる宿直衣の袖のうへに、青き紙の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。清「そはいづこのぞ」と問へば、侍ノ長「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて參りぬ。まだおほとのごもりたれば、身屋にあたりたる御格子を、ごばんなどかきよせて、一人ねんじてあぐるいとおもし。片つかたなればひしめくに、おどろかせ給ひて、宮「などさはする」との給はすれば、清「齋院より御文のさぶらはむには、いかでか急ぎあげ侍らざらむ」と申すに、宮「げにいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに、かしら包みなどして、山たちばな、ひかげ、山菅などうつくしげに飾りて、御文はなし。たゞなるやうあらむやはとて御覽ずれば、卯槌の頭つゝみたるちひさき紙に、

山とよむ斧のひゞきをたづぬればいはひの杖の音にぞありける

御返しかゝせ給ふほども、いとめでたし。齋院には、これより聞えさせ給ふ。御返しも、なほ心ことにかきけがし、多く御用意見えたり。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて參るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を、知らずなりにしこそくちをしかりしか。

片方だけで持上げるのだから、ひし〳〵と格子が鳴るので、宮がお目覺になつて、「なぜそんな事はするぞ」と仰しやるから「齋院から御文が參りませうには、どうして急いで上げずに居られませうか」と申上げると、「ほんに齋院の御文は早かつたことよ」と仰しやつて、お起きなされた。御文をお開けなさると、五寸位な卯槌二つをつないで、卯杖の恰好に、頭の方を紙で包みなどして、山橘や日蔭の蔓や、山菅など、それに美しく飾つて、御文は見えない。「何も無い譯があらうかい」と仰になつて、よく御覽なさると、卯槌の頭を包んだ小さな紙に、山とよむ斧のひゞ

（考異）○こばん　原本こなはんとあり。活本による。○見えたり　原本見えたるとあり。古本による。

釋　○ついたちの日　長保元年一月のなり。○うれしくも降りつみたる　雪山の高さの增せばなり。○これはあいなし　以下中宮の御詞なり。「これ」は今ふりたる雪をさす。「あいなし」は條理が立タヌ、ミダリナリなどの意。あやなしの音便ならん。愛なしの意とするはいかゞ。○はじめの、今の「の」の下、いづれも雪を略けり。○うへにて局にいと疾うおるれば　清少その夜は當直にて、翌朝いと早くわが下屋におるればと也。「うへにて」は上臥にての意。○さぶらひのをさ　齋院司の侍の長なり。○ゆの葉の如くなる　柚の葉の如く濃綠なると也。「ゆ」は柚なり。○とのゐぎぬ　宿直衣なり。直衣をばしかいふことあれど、侍の長などの身分にて、直衣を著んこといかゞあらん。なほ狩衣なるべし。直衣を參照せよ。○青き紙の松に云々　この頃は、文を草木の枝に附くること常なり。さてこれは文の如く見えて、その實卯槌を包みたる紙なりしなり。○おきて　上の「袖のうへに」を承けたり。○わなゝき出でたり　寒さになり。「わなゝき」はをのゝきに同じ。○そはいづこのぞ

枝に物をつくる

清少の問ふなり。「そは」は松の枝につけたる文をさす。「いづこのぞ」は何處の文ぞの略。「の」の下、名詞を略するは常の事なり。○齋院より　齋院より奉るなりの略。○齋院　サイヰン。齋王ともいふ。未婚の內親王にして、賀茂の明神に仕へ奉るをいふ。天皇卽位の年これを卜定す。普通天皇御一代に一人とす。この時の齋院は選子內親王なり。○選子內親王　村上帝第十の皇女にして、圓融帝の天延三年賀茂の齋となり、後一條の長元四年やめて尼となる。在職五十七年。圓融、華山、一條、三條、後一條の五朝を經、世に大齋院と稱す。長元八年薨ず。年七十二。○とりて參りぬ　御文を取りて、宮のお前に參りぬと也。○おほとのごもりたれば　宮がなり。○身屋にあたりたる御格子　身屋と廂との間の格子

なり。廂と簀子との間の格子にあらず。職の曹司は、二重に格子ありと見えたり。○ごばんなどかきよせて　の下、足つぎにしてを略けり。葉盤を踏臺にしたる也。○ひとりねんじてあぐる　獨我慢して持上ぐるに、甚だ重しと也。大きなる格子戸なれば、二人にてすべきを、早急なる場合とて、獨にて明けたる也。○かたつ方なれば云々　獨にて一方ばかり押上ぐるなれば、きし〳〵と音のたつと也。「かたつ方」は片つ方なり。「ひしめく」はひし〳〵と音のするをいふ。○驚かせ給ひて　宮のお目ざめになりてと也。目覺むることを「驚く」といふは、この頃の常なり。○などさはする　宮の咎め給へる也。「さ」は御格子をあぐるをさす。○齋院より御文の云々　清少のお答へ申す詞なり。齋院から御文あらんには、何とて急ぎて御格子をあけざらんやと也。早く御文を御覽に入れん爲なり。○けにいと疾かりけり　まことに齋院の御文の早かることよと也。○卯槌二箇を縦にならべて　一本の卯杖の形にしてと也。○かしらつゝみ　その上部を青き紙にて裹めるなり。○山たちばな　俗にいふ藪柑子なり。林藪の間に生ずる、高さ四五寸の小木。平地木、紫金牛などの名あり。○たゞなるやうあらむやは　これのみにて、御文のなきことあらんや、必ずあるべしと也。「たゞ」は徒にて、御文のなきをいふ。○ちひさき紙に　の下、書かれたる歌を略けり。○山とよむの歌　齋院の御歌なり。山中響きわたるよきといふ名の斧の響を慕うて尋ね來てみれば、果して、祝の杖をつく音にてありけるよと也。斧はよきと訓むべし。をのにては、祝の杖に意の響くところなし。諸註悉く誤れり。後撰集「あふごなき身とはしるく戀すとてなけきこりつむ人はよきかは」の類、よきをいひかけたる歌いと多し。祝の杖は、卯杖の別名なり。これはもと卯槌なれど、歌によりて卯杖のさまに作りて包みたる也。「とよむ」は古事記には鬻豆の字をあて、萬葉集には震又は動の字を書けり。どよむと濁るは後世の轉訛。○これより聞えさせ給ふ　この音信を始にて、この後より申通じ給ふと也。古本

かづけ物

に「給ふ」の下、も文字あり。これは、此方より贈らる、御文も、御返事もと續くなり。○御返しも　齋院の御使の風情を盡されたるはもとより、宮の御返事もと也。○心ことに書きけがし　用意格別にして、書直しとなり。「書きけがし」は書損するをいふ。○おほく御用意みえたり　なるべく立派に書かんとする御用意が、十分に見えたりと也。「おほく」は「みえたり」にかゝる副詞。○御使に　の下、被け給へるはの語を補ひて聞くべし。使への祿、即ち纏頭として、女の裝束を被けたる也。○織物のひとへ　の下、及びを略けり。織物を見よ。○蘇枋なるは梅なめりかし　蘇枋色に見ゆるのは、梅襲のやうなるよと也。○梅襲　女官飾抄には、表白、裏蘇芳、桃花蘇葉には、表裏とも蘇芳とあり。十一月より二月、また十二月より正月の間の所用といふ。○かづきて參るも　その裝束を肩に引掛けて出てゆくもと也。○宮の御返事の内容を伺はずにしまひしことがと也。

雪の山は、まことに越のにやあらむと見えて、消えげもなし。くろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心ちして、いかで十五日待ちつけさせむと念ずれど、人々「七日をだにえすぐさじ」となほいへば、いかでこれ見はてむと、皆人おもふほどに、俄に三日うちへ入らせ給ふべし。いみじうくちをしく、この山のはてを知らずなりなむことと、まめやかに思ふほどに、人も「げにゆかしかりつるものを」などいふ。御前にも仰せらる。同じくはいひあてゝ、御覽ぜさせむと思へるかひなけずにしまつたことが殘念であつた。

（口譯）雪の山は、まことに越の山であるかのやうに見えて、消えさうもない。汚くなつて見立もない樣はしてゐるが、もう暗に勝つた氣がして、どうぞして、十五日を、このまゝ待つけさせたいと祈るけれど、

れば、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の、築土のほどに庵さして居たるを、縁のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじくまもりて、わらはべなどに踏みちらさせこぼたせで、十五日までさぶらはせ。よく〳〵守りてその日にあたらば、めでたき祿たまはせむとす。わたくしにも、いみじきよろこびいはむ」など語ひて、常に臺盤所の人、下衆などにくるゝを乞ひて、くだものや何やと、いと多く取らせたれば、うち笑みて、木守「いとやすきこと、たしかに守り侍らむ。わらはべなどぞのぼり侍らむ」といへば、消「それを制して聞かざらんものは、事のよしを申せ」などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日までさぶらひて出でぬ。そのほども、これがうしろめたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつることなど、かへりては笑ひあへり。

（考異）○くろゝを乞ひて　原本こひてくろゝとあり。元本及び抄本による。

評釋　○越のにやあらむ　越の山にてやあらんの略。「越」は古へ三越地方を、古志の國といひたりき。古今集、躬恒「消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける」と見えて、越路の山の雪は、何時も消ゆる時なしといへば、誇張して讐へたり。○黒くなりて　きたなくなりての意。必ず黒色になるをいふにあらず。煤けてに同じ。○勝ちぬる心ちして　年内もあるまじと誰もいひしを、今までも消

「七日をさへ過し得まい」と、相手がやはりいふから「どうぞしてこの山の成行を見きはめよう」と誰も思ふうちに、中宮は俄に三日に禁中へおあがりになる筈である。甚だ殘念にも、この山の成行を知らずにしまふ事よと、本氣に思ふうちに、外の人も「ほんに奥床しかつたものを見さしてしまふのは殘念だ」などいふ。宮のお前にも同樣に仰になる。同じ事ならば言ひ當てゝ、雪を御覽に入れよう」と思つた甲斐がないから、御引越の爲に、お道具を運んで、ひどく騒がしいまぎれに、木守といふ者が、土塀の邊に庵をさし掛けてゐたのを、緣際近くよび寄せて、「この雪山を嚴重に番して、子供などに踏散させたり壞たせたりしないで、十五日まで殘して置け。當日になつたら、結構な御褒美を、お上から下さらうぞ。また私にも厚くお禮をいはう」など手なづけて、何時も臺盤所の人が、下衆などにくれる品物を貰つて、果物や何やと、大層澤山くれて遣ると、木守がにこ〳〵して「何の造作もないこと。たしかに番を致しませう。定めし子供などがのぼることでありませう」と、ふから「それを制止してきかなからう者には、事情をいつて聞かせよ」などいひ聞かせて、中宮がおあがりになつたから、お供をして、七日まで御そばに侍うて退出した。その

残りたれば也。○十五日　の下、をを略けり。○念ずれど　「念」は祈念の意なり。白山の觀音を念じたるなるべし。こゝは辛棒、又は我慢の意にあらず。○七日をだに云々　清少と爭へる人々の詞なり。○なほいへば　なほ人々のいへばと也。○いかでこれ見はてむ　何卒して、この雪山の結果を見届けたしと也。○内へ入らせ給ふべしと也。○いみじうくちをしく　次の「まめやかに思ふ」につゝく。○知らずなりなむことと　「こと」の下、よの歎辭を含めり。○ゆかしかりつるものを　の下、この山の果を知らずなりなんことくちをしを略けり。○お前にも仰せらるしか仰せらると也。「しか」は「けにゆかしかりつるものを云々」をさす。○同じくはいひあて、御覽ぜさせむ　清少の意中なり。いひ當てて、同じ事ならば、殘れる雪を御目にかけたしと也。「同じくは」は「御覽ぜさせむ」にかゝる。○かひなければ　の下、いかゞはせんを補ひて聞くべし。○御物の具はこび　宮の御道具を、禁中に運ぶと也。○騒がしきにあはせて　騒に紛れてといふが如し。○木守　樹木の番をする者にて、植木屋なるべし。○庵さして　庇をさしかけてと也。この庇は今いふ庇に同じ。殿舎の廂の間の廂にはあらず。○踏みちらさせこぼたせで　踏散らさせで、こぼたせでと也。上にての否定の辭あるべきを、下のにゆづりて略ける也。○さぶらはせ　命令格なり。○その日に　十五日になり。○祿たまはせむとす　中宮よりなり。「とす」は輕く添へたる詞と見るべし。○わたくしにも　清少自身にもと也。中宮の賜は公の事なれば、それに對していへり。○よろこびいはむ　謝禮をせんと也。○臺盤を見よ。○くろゝをこひて　呉くるゝ品物を、臺盤所の人に乞ひてと也。○うちゑみて　木守がなり。喜べる樣なり。○やすきこと　の下、なりを略けり。○わらはべなどぞ　の上、たゞしを補ひて聞くべし。○のぼり侍らむ　頑是なき童兒など、雪山に上りて崩し候はん、これをいかに致すべきかと也。

「侍らむ」の下、これをいかに仕るべきを補ひて聞くべし。○制して　「制」はとゞむること。○事のよしを申せ　この事情を申聞かせよと也。上なる「ものは」を、者にはの意に解すべし。又その事情を申來れの意にも解せらるれど、上文への打合、まづ〳〵覺束なかるべし。○入らせ給ひぬれば　の下、すぐに御供申しての字を補ひて聞くべし。○さぶらひて出でぬ　宮の御方に侍ひて、里に出でぬと也。○その程も　禁中に居りし間をさす。○これが　「これ」は雪山をさす。○おほやけ人　公人をいふ。禁中奉仕の下輩なり。○すまし　禁祕抄に、主上御湯の條に「須磨志女官」とある者ならん。「すまし」は清しの義なれば、御湯殿の掃除などする女官と見ゆ。○いましめに　警めにて、氣を附くるをいふ。○七日の御節供のおろし云々　御節供の奉り物のおろしなどを持たせて、木守にやりたればと也。七日は七種粥を奉る祝日なれば、中宮に奉りしそのお下りを、清少の頂戴したるを、木守に遣りたる也。○歸りては　公人すまし等の歸りては、いひ笑ひあへりと也。以上七日までの事を書ける也。

（口譯）
里に居ても、この雪山を大事と思つて、夜があけるとすぐに見せにやる。十日頃には「まだ五日間を待つほどはある」と使がいふから嬉しく思ふと、十三日の夜、雨がひどく降るので「この雨で消えてしまふだらう」と、ひどく殘念である。もう

里にても、あくるすなはち、これを大事にして見せにやる。十日のほどには、「五日まつばかりあり」といへば、うれしく思ふに、十三日の夜、雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらむと、いみじうくちをし。今ひと日二日もまちつけてと、よるも起き居てなげけば、聞く人も物ぐるほしと笑ふ。人の起きて行くに、やがて起きいで、下衆おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「わらふだばかりになりて侍る。木守いとかしこう。わらはべも寄せで守りて、明日あさてまでもさぶらひぬべし。木ぜ『祿賜はらむ』と申す」といへば、いみじくうれしく、

一日二日も待おほせないで、消えることよ」と夜も起きてぬて歎くと、聞く人も氣違ひじみてぬるといつて笑ふ。人が起出すので、すぐに自分も起出して、下衆を起させると、一向に起きないから、憎く腹が立つて、先に起出た者を遣つて見せると「圓座位殘つてをります。木守が『大層嚴重に番をして、子供も寄せ付けません。此分では明日明後日もございませう。御褒美を頂きませう』と申します」と歸つて來ていふから、ひどく嬉しくて、早く明日にもならば、大いそぎに歌を詠んで、物にその雪を入れて差上げようと思ふのも、ひどく待遠に氣がいりで、十五日の朝まだ暗い

いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れて參らせむと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、大きなる折櫃などもたせて、「これにしろからむ所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならむはかき捨てゝ」など、いひくゝめて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、「はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしうよみ出でて、人にもかたり傳へさせむと、うめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならむ。昨日さばかりありけむものを、夜のほどに消えぬらむこと」といひくんずれば、「木守が申しつるは、『昨日いと暗うなるまで侍りき。祿を賜はらむと思ひつるものを、賜はらずなりぬる事』と、手をうちて申し侍りつる」といひさわぐに、うちより仰言ありて、「さて雪は今日までありつや」との給はせたれば、「『年のうち朔日までだにあらじ』と、人々啓し給へし、昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなむ思ひ給ふる。今日までは、あまりの事になむ。『夜のほどに、人のにくがりて、取りすて侍るにやとなむ推しはかり侍る』と啓せさせ給へ」と聞えさせつ。

（考異）○五日まつ　原本五六尺とあり。抄本による。○二日　原本になし。抄本による。○給へし　原本給ひしとあり。古本による。

（評）○里にても　里に居ても也。○あくるすなはち云々　夜が明くるとすぐ、見せに人をやると也。「こ

れを大事にして、あくるすなはち見せにやる」と、前後にして心得べし。○五日待つばかりあり　ま
だ五日間をたふる位は、雪のありと也。○今一日二日も待ちつけで　今一兩日も待おほせで、消ゆるこ
とよと也。「待ちつけで」の下、消ゆることよを略けり。○よるも　十三日の夜なり。○人の起きてゆく
に　人の起きてくるにと也。「人」は清少の家族なるべし。○やがて起きいで　おのれもすぐに起出でと
也。「やがて」は即ち、直にの意。○起きいでたる他の者をやりてと也。○わ
らふだばかりに云々　以下下女の復命なり。雪山は圓座ほどになりて、殘りて候ふと也。「わらふだ」は
藁蓋の義。藁を編みて作れる敷物なり。「侍る」の下、よの歎辭と含めり。○いとかしこう云々　木守が
子供も寄せつけず、非常によく番をしてと也。「いとかしこう」は「まもりて」につゞく。○あすあさてま
でも　上にこの樣子にてはを補ひて聞くべし。○木守　約束の御褒美を頂かんと、木守
が申すと也。○いつしかあすにもならば　早く明日にもならばと也。「いつしか」は何時かと待遠く思は
るゝ意。「あす」は十五日なり。○物に入れて　何かに雪を入れてと也。○いと心もとなうわびしう　非
常に待遠しく、氣がかりにてと也。「わびしう」の下、ての辭を補ひて聞くべし。○まだ暗きに　十五日
の未明になり。○折櫃　ヲリビツ。檜のへぎ板など打曲げて作れる筥にて、今の菓子折の如
きもの。○もたせて　使に持たせてと也。○白からむ　雪のなり。○ひたものの入れて　一杯に入れてと
也。「ひたもの」はひたすらと同じ。○かきすて、入る、などの略。○いひく、めて
使になり。「く、め」は懇に含むる意なり。幼兒に乳や食物を與ふるを、くゝむといふもおなじ。○もた
せてやりつる物　即ち折櫃なり。○ひきさけて　使の者がなり。この句の下、歸り來てを補ひて聞くべ
し。上の「いととく」は、この「歸り來て」にかゝる副詞。○はやうせ侍りにけり　雪はなり。「はやう」
は疾くにといふが如し。○詠みいでて　歌をばなり。○うめきずんじつる　呻き誦んじつるにて、苦吟し
たるをいふ。○さばかりあちける　藁蓋ばかりになりてありたるをさす。○消えぬらむこと　の下、は
み略けり。さて「いかにしつらん」につゞく。○くんずれば　屈すればの音便。打萎れて鬱々としたるをい
ふ。なほくしを見よ。○木守が申しつるは云々　使の者の復命の一節なり。○賜はらずなりぬる事　の
下、よの歎辭を含めり。○手を打ちて　驚き失望したる時の所作なり。この頃の物語などに多く見ゆ。○
といひ騒ぐに　使の者がなり。○内より仰言ありて　中宮の御使の來れるをいふ。「仰言」は中宮のなり。
○ありつや　在りたるか否かと也。○啓し給へし　の下、雪がを補ひて聞くべし。抄本には、啓し給へし
にとあり。これは明なり。○かしこし　賢しの意。○思ひ給ふる　我ながら思ひ申すとなり。豫言の殆
ど適中したるを、賢しと自讃したる也。○けふまでは餘りの事になむ　今日まであらんことは、餘り適中
し過ぐることなりと也。「なむ」の下、侍るを略けり。○人のにくがりて　清少の賭に勝ちて名譽を得ん
ことを、人の憎がりてと也。○侍るにや　の下、あらんを略けり。○啓せさせ給へ　中宮に申上げて下さ
れと也。○聞えさせつ　御使に申上げさせたりと也。

さて二十日に參りたるにも、まづこの事を、御前にてもいふ。皆消えつとて、蓋のかぎりひきさげてもて來りつるが、あさましかりし事、物の蓋に　小山うつくしう作りて、白き紙に、歌いみじく書きて、參らせむとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、宮かう心に入れて思ひける事を、たがへたれば罪得らむ。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて、取りすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出でゝきて、いみじう手をすりていひけれど、『仰言ぞ。かのよりきたらむ人に

かうきかすな。さらば屋うちこぼたせむ』といひて、左近のつかさの、南の築土の外に皆取りすてゝけり。『いと高くて、多くなむありつる』といふなりしかば、げに二十日まで〻も待ちつけて、ようせずは、今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞し召して、『いと思ひよりがたくあらがひたり』と、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌を語れ。今はかくいひあらはしつれば、同じごと勝ちにたるなり。語れ」などいふもの給へど、「なにせむにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らむ」など、まめやかに心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは多くの人なめりと見つるを、これにぞあやしく思ひし」など仰せらるゝに、いとどつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。清「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。のちに降り積みたりし雪を、うれしと思ひしを、宮『それはあひなしとて、かき捨てよ』と仰ごと侍りし」と申せば、「げに勝たせじとおぼしけるならむ」と　うへも笑はせおはします。

（若異）○も〻て来り　原本まうで来りとあり。古本による。○とりすてゝけり　原本とりすてしとあり。抄本による。○ありつる　原本ありつとあり。抄本による。○勝ちにたるなり　原本勝ちたりとあり。古本による。○仰ごと侍りし　原本本侍りしかとあり。活本による。

釋　○まゐりたる　内になり。○蓋のかぎり　蓋だけなり。この蓋は折櫃の蓋なり。○帽子のやうにて云々　折櫃の身をば頭に被りて、帽子のやうにして、すぐに返りて参りたるがの略。○あさましかりし事ひ當てたのが面白かつた。その木守の翁が出て来て、ひどく手を擂つてわびたけれど『中宮の仰言で取り棄てるのであるぞ。この雪のあたりに何時も寄つて来う人に、かうと知らせるな。もし知らせるなら、あの住んでゐる小屋を壊させよう』といひおどして、左近衛府の南の土扉の外に、皆取棄てゝしまつた『大層高くて澤山あつた』といふ事だから、ほんにこの二十日までも待おほせて、わるくすると、今年の冬の初雪も降添ふだらう。主上もお聞きになつて『甚だ思ひ寄りにくく、意外の所をいひ爭つた』と、殿上人などにも仰しやれた。さてもその詠んだといふ歌を話し

（口譯）さて二十日にあがつた時にも、一番にこの雪山の事を、中宮の御前にてもいひ出す。皆消えてしまつたといつて、折櫃の蓋だけぶらさげて持つて来、身の方をば帽子の様に被つて、すぐに歸つて来たのが案外で、贈のつぶれた事や、物の蓋に、その雪で小山を美しく拵へて、白い紙に、歌を上手に書いて差上げようとした事などを申上げると、中宮は非常にお笑ひなさる。お前にゐる人達も笑ふと「かう心にかけて思ひ込んだ事をくひ違はせたから、佛のお罰を受けるだらう。本當は四日の夕方、侍達を遣つて、取棄てさせたのであるぞ。そちの返事に、この事をい

「蓋の限りひきさけて持て来りつるが」と、「帽子のやうにてまうで来りつるが」との二句を承けたり。○物の蓋　硯、小筥などの蓋を、古へは盆の代りに入物に用ゐたり。盆はこの時代にはなかりき。○小山　雪の小山なり。○いみじく書きて　非常に上手に書きてと也。○かう心に入れて　清少がなり。以下「同じごと勝ちにたるなり語れ」まで、中宮の御詞なり。○たがへたれば　齟齬せしめたればとなり。○非得らむ　佛の罰を蒙らんかとなり。○四日の　十四日の略。○夕さり　夕しありの約にて、夕方なり。○取すてさせしぞ　雪をなり。○返りごとにいひあてたりし　曩の清少の返事に「人の憎みて取すて、侍るにや」といひたるをさす。○その翁　木守の翁なり。○手を擂りて　手を合はせてといふに同じ。拜みて詫入る態なり。○いひけれども　斷りいひたれども也。○仰ごとぞ　宮の仰言ぞとなり。以下「屋うちこぼたせむ」までは、侍の詞を、宮の語らせ給へる也。○よりきたらむ人に云々　此處へ近寄りてこん人に、かく取捨てたることを聞かすな也。「よりきたらむ人」は清少の使などをさす。○さらば屋うちこぼたせむ　若し聞かするならば、汝の小屋を打毀させんと、木守を恐喝したる也。○左近のつかさ　左近衛府にて、上東、陽明二門の間、職の御曹司の東南にあり。○築土のと　築垣の外なり。○いふなりしかば　侍共がなり。○二十日までも　十五日は勿論、二十日までもと也。○ようせずば　ルクスルトと也。○今年の初雪にも云々　雪山の初雪にも降りそひなましとは理り立たず。「にも」を、のと改めなば調ふべし。或はに文字衍にて、「初雪も」とありしならん。さて「初雪」は冬にはじめて降る雪をいへるなれば、この春より夏秋を經て、今年の冬の初雪の頃まであらんと、恐ろしく誇張したる也。○うへも　主上もなり。○渡らせ給ひて　中宮の御殿になり。○思ひより難く云々　普通人の思ひ寄りにくき、意外の所をいひ爭ひたりと也。○いひあらはしつれば　隱したりし事を白狀したればと也。○おなじごと勝ちにたるなり　勝ちたると同様なりと也。○何せむにか云々　それ程の心憂きお話を承り

なさい。今はこの通り白狀したのだから、そちが勝つたのも同じ事である。だからその歌を話しなさい」など、中宮にも仰になり、人達もいはれるが「さほどつらい事を承りながら、何の爲にか、歌を申上げませうぞ」など、眞實につらがると、そこへ主上も御出になつて「ほんに年來は、いくらもある當り前の人さうなと見たのを、今度の事で、不思議に思つた」など仰せられるので、いよ〳〵つらく、泣出しさうな氣持がする。「いやさ、まあ辛氣な世の中でありますぞよ。後に降積んだ雪を、嬉しいと思ひましたのを、中宮樣の『そはやくたいもない。搔棄てよ』など、仰言がございましたよ」と申すと、主上が「ほんに中宮は、お前を勝たせまいと思はれたのだらう」と仰せられて、笑つてお出なさる。

ながら、何しにか歌をば申上ぐべきと也。「何せむにか」は「啓し侍らむ」につゞく。○おほくの人　世の中に數多くある人、即ち並々なる人なり。○これにぞ　雪山の日數をいひあてたるをさす。○あやしく奇しきをいふ。清少を非凡の者と仰せられたる也。○いとゞつらく　雪を取捨て給へるがつらき也。○いであはれいみじき世の中ぞかし　イヤサアヽ、厭なる辛氣の世の中ぞよと也。○侍りし　の下、よの歎辭を略けり。○勝たせじと　中宮が汝をなり。

評　内裏は禁中(中の重)こそ、出入嚴重であるが、それ以外は、甚だ寛大だつた。尤も車などは、ひどく喧ましくて、身分に應じて何處そこまでといふ制規もあつたが、徒歩の雜人原などは、案外通行自由で、門鑑も何もなかつた。伴大納言繪卷に、應天門の燒亡に、いろ〳〵な彌次馬が進入して見物してゐる圖や、年中行事やその他の繪卷に、衞府の舍人が、雜人を弓で追拂つてゐる圖が、澤山ある。夜は追剝さへ出入した。だからこの職のあたりへも、乞食尼がうろついたり、いたづら小僧が遊びまはつたりするのは、何の不思議もない。乞食尼は中宮の御慰に窃に呼んだのだらうといふ說もあるが、それはこの消息を知らない臆說である。

「たち出でて見れば」の一句から、乞食尼の一節は展開した。「筒とかやのやうに」、「衣とかやいふべからむ」の輕罵はまだしも、「猿のさまにて」の筆鋒の辛辣さ、しかもこの一語に、簡單に象徴され盡してゐるから妙だ。明衡の新猿樂記に「上下齒落若二飼猨顏一」と老女を嘲つたのも、この類想であらう。狩衣、狩袴は、もと勞働服だから、こんな歩き廻る商買の者は、女でも狩袴をはいたのである。「聲引繕うて」氣障なうへに「御坊達の吝み給ふ」など、甚だ圖々しい。「佛のみおろしのみ食ふか」と冷かしたくなるではないか。そこへ又、若女房達が加はつては、話がます〳〵露骨になるのも止むを得ない。

一體歌をうたつたり舞をまつたりする、所謂遊法師、雜藝法師は、この頃澤山ゐたもので、琵琶法師の物語を聞くことは、實資公の日記にも見えてゐる。されば尼たとて遠慮はない。「よるは誰とねむ」など、頭でのの字を書いて、浮調子の聲でうたふ。大いに肉感的の油ぎつた奴で、そして雲上人の眞似をして舞蹈したり、情夫にでもやつたか、「衣も白めず」に、折角の思召を無にしたり、甚だいやな奴である。「いみじく憎ければ」「笑ひにくみて」「まことに憎くて」「など憎む」と、ひどく憎まれ續きなのも無理はない。不具尼の方は、この對照ではあるが、わざと描寫を大に端折つてある。場面の統一は、かうして得られるのである。

雪山は禁祕抄に、「一條院以後の事」とあるが、諸方で申合はせたやうに作つたことを思ふと、夙くからこの行事が禁中及び貴族の間にあつたことが推定される。村上御記の應和三年十二月廿日の條に、

令下ニ右衞門志飛鳥部常則一、堆レ雪作中蓬萊山於女房小庭上、今日功畢。賜二常則及畫所雜色役夫三人祿一有レ差。

とあるのは、この濫觴であらう。永觀三年(圓融)にも、後涼殿の壺に作られた。抑も雪で盆中に小山や兎など作るのは、今もやる事で、女子供のやさしい慰である。經信母集にも、

師走のつごもりに、筥の蓋に、雪山を作りて、

とある。こゝも最初は、物の蓋に多く置くぐらゐの盆山であつたのを、何がな事あれがしの女房達が叩いたお太鼓に、忽ちまことの雪山が出現することゝなり、女の業くれは一轉して、男の大仕事となつた。「侍召して――集りて作る」「主殿司の人にて、御淸めに參りたるなども、皆よりて」「宮司など參り集りて」「所の衆三四人參り」「主殿司の人も廿人ばかりになり」「里なる侍召しに遣はし――聞付けたるは惑ひ參る」と、層一層漸一漸、大袈裟になつてくる光景が、まことに旨く面白く描かれてある。源氏物語、槿の卷に、

童おろして、雪まろばしせさせ給ふ。――一年、中宮の御前に、雪の山作られたりし、世にふりたる事なれど、なほ珍しうも、はかなき事をしない給へりしかな。云々。

とあるのは、この雪山の事を、下に思つて書いたのであらう。とにかく大勢で、柄振をふるつて、屋の棟の雪までおろして（禁祕抄による）作つたらうから、可なり高い山が出來たに相違ないと思ふ。台記久安二年十二月の條に、

廿一日戊刻終二雪山之功一、東西一丈五尺、南北一丈二尺七寸、高一丈八尺七寸。

これで略類推が出來よう。そこでこれが何時までであらうかの問題も、當然起つてくるのである。

來年の正月の十五日と切出したのは、清少の性質として、附和雷同を嫌つたからである。そこに例の負けじ魂がほのめいてゐる。自分でも「あまり遠くも」と後悔しながら、なほ「いひそめてむ事は」と、固うあらがふのは、負けじ魂の露骨である。白山の觀音を擔ぎ出すに至つては、負けじ魂の躁狂である。

雪山の祈に白山の觀音は、思付といはねばならぬ。白山はその本歌の語る如く、雪に原づいた名だからである。まして、觀音の慈悲は廣大無邊で、その念彼觀音力は、忽ち刀尋段々壞となり、火坑變成池となる。雪の消えぬ位のことは、お茶の子である。

式部丞忠隆勅使の條は、元來雪山作りの處にあるべきだが、山作りの叙事が、あまりいそがしく、筆を轉ずる遑がなかつた爲、遂にこゝに持込んで、挿話のやうな形式を取つたものである。「こゝにのみ」の歌は、珍しとふりの對照で、「ふり」の秀句が厭味ではあるが、この頃の歌としては、案外さらりとした方であらう。「作らせ給へり」の三疊を、「ところ〴〵に」でおさへたのは、適當な措辭である。「あされる御簾の前にて」の挨拶は、とても翁丸を打擲した同一人とは思はれぬ、なつかしみがある。元來彼は「歌はいみじく好む」風流男であつた。

常陸の介の歌は、物羨みの點こそ憎まれても據ないが、修辭の技倆は、あへて「ところ〴〵にふりにける哉」の詠に遜るものではない。流石に此奴は曲者である。かういふ秀句がかつた修辭は、當時にお

（補）方であらうノ下但拾遺集や朗詠集に見える源景明の都にて珍しと見る初雪の吉野の山にふりにけるかな。が先鞭を著けてゐるから、一向清少の手柄にならない。

ける新派で、大に流行した歌風である。この働のないのを、昔おぼえてことなることなき歌として、排斥したものである。

右近は殆ど理想的の婦人と評してよからう。その情深い性質は、翁丸の段に見え、こゝでは又、その才がつた機智が閃いてゐる。「御得意ななり、更によも語らひ取らじ」「雪の山までかゝり傳ひけむこそ悲しけれ」などの猿樂言、決して尋常の者にいへるものではない。

齋院御使の條、柚の葉の衣、松の枝、青き紙など、悉皆青綠の冷たい色で仕立てたのは、一趣向である。早朝ではあり、冴えた雪の色と對映して、いかにも寒さうである。この背景では「わなゝき出でた」も無理はない。抑も齋宮、齋院は、神に奉仕するといふ神祕的理由の外に、一生不犯といふ聖者的行爲に、一種の信仰がたもたれてゐた時代である。殊にこの時の齋院選子内親王は、一人で五代の天子の齋院を勤められ、破格な典例を啓かれた方である。賀茂齋院記に、

選子善詠二和歌一、管遺二入于上東門院一、請見二新奇之草子一、於是、上東門院命二紫式部一、新選二源氏物語一、以遺之、云々。

とあつて、源氏物語の出現も、この御方が種蒔であるといはれ、老才媛として、一世の仰高する處となつてゐた。その御使と聞いては、「ふとめでたく」覺えるのも、當然の事である。碁盤を踏臺に、格子をあけるあたり、實に印象深く、面白く書けてゐる。一體御格子行ふのは、殿司の役だが、その來るのを待つ暇がなかつたのである。

卯槌を卯杖の形に、青紙に包み、山橘、女蘿、山菅を飾つた樣は、丁度、今の正月の鏡餅などの飾具合と同じで、何處までも青い御趣向である。杖の頭を包むのは、この頃一般の習慣で、卯杖に限つた譯ではない。包紙に歌ばかり書いたのも面白い。歌は格別の事もないが「よき」の秀句で、祝の杖の取成

しは、全く古い人とは思はれぬほど、新時代的の調子を詠まれたもので、時世を察るに、實に機敏な方だつた。中宮の御兄伊周公は、老狐と譏られた位である。されば、この御返書には、流石の中宮も、多大な御注意を拂はれたと見える。その内容を承らなかつたのが殘念と、清少はいつたが、叙法の方から見ると、却つて承はつても書かない方が、錯落參差の妙があつてよい。綠衣の侍が、梅襲やなどを被いで、雪中をゆく光景は全くわるくない。

卯槌の贈物は、この年は元日が乙卯に當つて、初卯だから、卯杖に趣向して贈られたものと見える。そして齋院から卯杖を賜はることが、馬内侍集にもある。禁中では、卯杖は衞府、卯槌は絲所から獻る例だが、齋院からも、處々へ贈られたものと見える。

木守の條から以下は、この段の中心をなす大文字である。まづ日數評定に筆を起して、清少も反對者も、各わが勝を豫想して、雪山のはてを見ぬことをくちをしがるなどは面白い。勝氣な清少は、何でも勝つて見せうの意氣組で、引越騒ぎのまぎれに、中宮の仰事らしく取繕つて、恩賞の豫約や、食物の惠與で、欲から木守を懐き込むなどは、用意周到、下衆を使ふ祕訣を得たものである。七日の節供のおろしには、唐菓子、かく繩、椿餅などの甘物で、水菓子なども、澤山あつたらう。當時の女房は月事になると、里に下りたものである。さてこの里居の一節は、殊によく書けてゐる。三日雪山に別れてから、絶えず人を遣つて警戒する。雨が降れば、夜の目も寢ずに歎く、苛々して、下衆の朝寢も腹が立つといふやうな狂的の熱中が、愈失望の度を、強く反映させる。木守は「祿賜はらむ」といひ、自分は「きたなげならむは搔棄てゝ」など、贅澤もいつて見、勝關がはりの歌まで出來たのに、「早う失せ侍りにけり」は、狐につまゝれた形である。そこへ中宮の御使の「けふまでありつや」は、皮肉も亦甚しい。かうなつてはいくら勝氣な清少でも、泣言の出る筈である。

中宮御自白の一節は、清少の勝を說明する大事の文であるが、畢竟するに、前文の餘波である。「おなじごと勝ちにたる也」と仰せられても、歌を申上げぬなど、なか〳〵剛情である。それだけひどく怨めしく思ひ入つた趣が、深く印象される。

雪山が段々に消えて、縮小してゆく有樣を、文中所々に點出して、讀者の注意を惹くことを怠らない。卽ち、

「廿日のほど、たけぞ少し劣りもてゆく。

「晦日がたすこし小さくなるやうなれど、尙いと高くてあるに、

「晦日、つれなくて年も返りぬ。

「一月二日頃、雪の山はまことに、越のにやとみえて、消えげもなし。黒くなりてみるかひもなきさましたる。

「十日のほど、五日まつばかりはあり。

「十四日の朝、藁蓋ばかりになりて、

「十五の朝、早う失せ侍りにけり。

所謂灰線草蛇の筆法で、そして知らず識らず、讀者が釣込まれてゆく。そのうへ清少に不利な故障、卽ち、新しい雪の搔棄や、入内、里下りや、降雨やの、天爲人爲の故障の續出が、いよ〳〵讀者の好奇心と同情心とをそゝつて、何時かおなじ渦中の人にしてしまふ。

雪山の出現以來、この文はまた、一面に、日記の性質を帶びてゐる。卽ち、

「師走の十よ日のほど「廿日の程「つごもり方「年もかへりぬ「ついたちの日「三日「七日「十日のほど「十三

（口譯）めでたいもの　唐錦、鎊太刀、佛像の木目がめでたい。色合がよく、花房の長くさいた藤が、松の木にかゝつたのがめでたい。六位の藏人がやはりめでたい。立派な君達でもよう着得ない綾織物を、思のまゝに着てゐる青色姿などがめでたいのである。もとは所の衆、所の雜色だつたり、普通の人の子供などで、四位五位六位の殿原の官職ある者の下に使はれて、何とも見えなかつたのも、藏人になつたとなると、何ともいへない程めでたいことよ。宣旨を持つて參り、又大饗の甘栗の使などで參つたのを、その家の御主人が接待し饗應しなさる有樣は、もと何處にゐた天人だらうと思はれる。御娘の今は女御后でおありなさるが、まだ里にゐて、姫君などいはれる時に、藏人がお使で參ると、主上からのお懸想文を取入れるから始めて、茵をさし出すその家の女房の晴の袖口などを思ふと、明暮見馴れた人間とも思はれない。衞府の役を兼ねた藏人は、裾を引散

めでたきもの　唐錦。かざり太刀。つくり佛のもく。色あひよく、花ぶさ長くさきたる藤の松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき君達なれども、えしも着給はぬ綾織物を、心にまかせて着たる青色すがたなど、いとめでたきなり。所の衆、雜色、たゞの人の子どもなどにて、殿ばらの四位五位六位も、つかさあるが下にうち居て、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨もてまゐり、大饗の甘栗の使などに參りたるを、もてなしきやうようし給ふさま、いづこなりし天くだり人ならむとこそおぼゆれ。御むすめの女御、后におはします、まだ姫君など聞ゆるに、御使にてまゐりたれば、御文とり入るゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖口など、あげくれ見しものともおぼえず。下襲のしりひきちらして、衞府なるは、今すこしをかしう見ゆ。みづから盃さしなどし給ふを、わが心にも覺ゆらむ。いみじうかしこまり、べちに居し家の君達をも、けしきばかりこそかしこまりたれ、同じやうにうちつれありく。うへの近くつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへこそ覺ゆれ。御文かゝせ給へば、御硯の墨すり、御うちはなど參り給へば、われ仕うまつるに、三とせ四とせばかりのほどを、なりあしく、物の色よろしうてまじろはむは、いふかひなきものなり。かうぶり得て、おりむこと近くならむだに、命よりはまさりて惜しかるべき事を、その御たまはりなど申して、惑ひけるこそくちをしけれ。昔の藏人は、今年の春よりこそ泣きたちけれ。今の世には、はしりくらべをなむする。

（考異）○聞ゆるに　原本聞ゆるもとあり。抄本による。○參りたれば　原本參りたるにとあり。一本による。

【釋】○めでたき　愛で痛きの意。痛きはその甚しきをいふ。極めて佳き、結構ななどの意。○唐錦　唐土より舶來の錦なり。邦製の大和錦に對していふ。○かざり太刀　裝飾を施したる太刀。後世にカサダチともいへり。勅授帶劍の人、束帶の時佩用す。延喜式に、五位以上に許すこと見ゆ。飾には蒔繪、金銀等あり。大臣金作、大納言銀作の定なりしが、後世その制亂る。桃華蕊葉に「鎊劍、三節會、內宴、御禊、行幸等、五卿用レ之」と見ゆ。○つくり佛のもく　造佛の木目なり。「造佛」は佛像をいふ。「もく」は木目の下略。○なほめでたけれ　六位藏人は卑官なれども、やはりめでたしと也。○いみじき君達　立派なる

御家の若殿方となり。○えしも着給はぬ綾織物　ようも着えぬ綾織物となり。「綾織物」は綾と織物とにて、袍の織地なり。延喜式に「凡綾者聽レ用ニ五位已上朝服一、六位已下不レ得ニ服用一」と見ゆ。織物を見よ。○青色姿　麹塵の袍を着たる姿なり。この色の袍は、天皇著御の料なり。なほ藏人などの具に及び青色を見よ。○所の衆　藏人所の衆の略。委しくは藏人所の雜色といふべし。禁祕抄に「公卿子孫又可レ然諸大夫多補レ之」と見ゆ。定員八人。藏人に進むを例とす。○たゞの人　平人なり。こゝにては、官職なき六位などをいへりと覺し。○殿ばらの四位五位六位も云々　殿原の四位五位六位などにて、官職あるその者の下に使はれてと也。○何と見えざりしも　何とも見えざりし者もと也。○めでたきや　「や」は歎辭。○宣傳の方法の一種にて、勾當內侍（內侍中の上席）勅旨を承りて、職事の藏人に傳へて宣下する文書なり。その太政官を經て、公式に宣傳したるは詔勅となる。○もてまゐり　藏人頭の奉承したる宣旨を、六位の藏人持行くと也。○大饗　ダイキヤウ。大なる饗宴の義にて、二宮の大饗と、大臣の大饗とあり。二宮の大饗は、毎年正月二日、東宮、中宮にて、親王公卿以下を饗するをいふ。大臣の大饗は大臣任官の時、諸大臣以下、太政官の官吏を饗するをいふ。○甘栗の使　大臣の大饗の時、天皇より、甘栗を大臣に賜ふ使なり。六位藏人の役とす。「甘栗」は栗の實を乾して製したる物にて、江次第抄に「甘栗平栗也」と見ゆ。江次第、大臣家大饗の條に「藤氏一大臣用ニ朱器臺盤一、（中略）可レ遣ニ蘇甘栗使一竝饗祿樂部等事一」歟、藏人到ニ中門一、以ニ家司一令レ奉ニ蘇甘栗一、盛ニ折櫃二合一、一合（蘇大二小二）一合（甘栗大八中八）各居ニ土高杯一、入ニ外居一荷一、小舍人二人衣冠相具、仕丁二人著ニ荒染一持レ之、藏人著ニ青色袍一、於ニ對庇一可レ進歟」○參りたるを　參りたる藏人をなり。○きやうよう　「きやうよう」は饗應の字音便。○いづこなりし天くだり人ならむ　もとの住處は何處なりし天くだり人ならんと也。「天くだり人」は下界に降りたる天人をいふ。○御むすめの女御后にておはします　高貴の家の御女の今は女御后にておはしますが、と也。「女御后」は殆ど熟語の如く用ゐられ、「女御」は天皇侍妾の官名、「后」は侍妾の總稱なり。○まだ姫君など云々　家に在りて、まだ姫君など申さるゝ時にと也。○御使にて　藏人が主上の懸想の御文の御使にてと也。○御文とり入るゝ　主上の御文を姫君の方へ取入るゝと也。○しとねさし出づる袖口　勅使のもてなしに、茵を簾の内よりさし出でて敷く女房の袖口なり。勅使に對して、女房も殊に晴の裝したれば、袖口の美しく見ゆるをいふ。「袖口など」の下、見ればを略けり。○あけくれ見し者とも　朝夕見馴れし六位藏人とも思はれずと也。人間の變りし如く、平生に似ず、甚しくその款待せらるゝをいふ。○下襲のしり　「しり」は裾なり。下がさね及びうしろをまかせてを見よ。○衞府なるは　衞府なる藏人はと也。衞府の役人を兼ねたるをいふ。六位の藏人の兼仕は、式部丞及び兵衞、衞門の尉などなり。「衞府」は近衞、兵衞、衞門の三府を稱す。尉はその三等官なり。左衞門尉を見よ。さてこの句、上へ反りて「衞府なるは、下襲の尻引散して」と續く文脈なり。○今すこしをかしう見ゆ　衞府を兼ねざる藏人よりは、今少し立優りて、よく見ゆると也。○みづから　藏人のわが心にも、いかに覺ゆらむと也。「覺ゆらむ」の上、いかにを補ひて聞くべし。○いみじう畏り　藏人にならぬ以前は、大に畏敬してと也。○べちにゐし家の君達をも　同席を避けて別に居し、尊き家の若殿達をもと也。「べち」は別の字音便。○けしきばかりこそ云々　一寸樣子だけは會釋して、尊敬したりと也。○同じやうにうちつれありく　されどもその君達と同樣に連立ちて歩くと也。○うへの近く使はせ給ふ　主上の藏人を御身近く使はるゝと也。○御文書かせ給へば云々　主上の御文書かせ給へば、藏人御硯の墨摺りとなり。○御うちはなど參り給へば云々　主上の御園扇など召されば、藏人自分が、園扇の役を奉仕するにと也。園扇の役を奉仕するとは、煽ぎ奉るをいふ。「われ」は自殿上をおりる日の近くなることさへ、命よりも惜からう筈なのに、藏人在任の勢に給はる官職などを申請して、騒いでゐるのが殘念である。昔の藏人などは、巡爵で下りるときまつたその年の春から、殿上をおりる事を歎いて、泣立つた。それを今の世では、前途の官職の事で、競をしてゐる。

分がの意。〇二とせ四とせばかりの程　藏人にてある三年四年の間となり。六位の藏人の在任の年限をいへり。年期をはれば巡爵とて、五位に叙せられ、殿上をおりて地下人となる。但こゝに三四年の年期のやうにいへれど、實は六年なり。大槐祕抄に「藏人の受領に任ぜし事は、六年侍中の勞に候」とあり。なほ藏人の五位を見よ。〇物の色　物の樣子具合なり。「色」はこの時代にいへる「色節」の色にて、染色にはあらず。〇よろしうてまじろはむは　竝大抵の程度にて、殿上に立交らんことはと也。よろしうを見よ。〇いふかひなきものなり　折角藏人になりたるかひなきをいふ。「それ故在任中は、成るべく派手に立派にして、出仕するがよからん」の餘意を含めり。〇かうぶり得て　叙爵、即ち五位に叙せられてと也。なほかうぶり賜りを見よ。〇おりむこと近くならむだに　殿上を下りんことの近づかんことさへもと也。この「だに」は、いよいよ下るゝ時の口惜しきは無論の事としたる辭樣なり。〇その御たまはりなど申して　藏人在任中の功勞に對して賜はる官職など所望してと也。「その」は在職中の勞をさす。巡爵したる藏人は、多く諸國の受領に拜任す。これを「御給り」といへる也。一本「臨時の御給り」とあり。これは臨時給とて、大臣以下、辨官以上の年官年爵を給りたる人が、更に臨時に官職を給せらるゝことあり。給りたる人は、その公給を自己の所得とし、名義のみを他人に與ふ。されば藏人がその受領などの名義を所望する由となる。〇まどひけるこそ　甚しく奔走するをいふ。〇今年の春よりこそ云々　巡爵にて殿上下りんとする年の春、即ちその年の始より、泣立ちて悲みたりとなり。〇はしりくらべを云々　驅競をすると也。御給りなど所望して、殿上をおるゝ支度を、大いそぎにするをいふ。實際に驅廻るにはあらず。

博士（はかせ）のざえあるは、いとめでたしといふもおろかなり。顏もいとにくげに、下臈なれども、世にやむごとなきものに思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべき事など問はせ給ふ御文の師にてさぶらふは、めでたくこそおぼゆれ。願文、さるべきものゝ序作りいだしてほめらるゝ、いとめでたし。法師のざえある、すべていふべきにあらず。持經者の一人して讀むよりも、あまたが中にて、時など定まりたる御讀經などに、なほいとめでたきなり。くらうなりて、特經普「いづら、御讀經あぶらおそし」などいひて讀みやみたるほど、忍びやかにつゞけ居たるよ。后の晝の行啓。御うぶや。みやはじめの作法、しゝ、狛犬、大床子などもてまゐりて、御帳の前にしつらひする、内膳、御へつひわたし、姫君など聞えしたゞ人とこそ、つゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日まうで。蒲萄染の織物。すべて紫なるは、なにもくめでたくこそあれ。花も、絲も、紙も。紫の花のなかには、杜若ぞすこしにくき。色はめでたし。六位のとのゐ姿のをかしきも、紫のゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりしきたる。

（考異）〇願文　の下、原本、文字あり。抄本による。〇しゝ　原本しくとあり。一本による。〇をかしきも　原本をかしきにもとあり。古本による。

釋　〇博士のざえある　博士の文才あるとなり。「ざえ」は才の字音。こゝの「博士」は文章博士なり。〇文

は、至極めでたいといふも、並々の事である。顏も大層見にくげで、下臈だけれども、世上に大した者に思はれ、尊貴の御前にも近く參上して、然るべき事などお尋ねなさる御學問の師として奉仕するのは、めでたく思はれる。願文や然るべき詩文の序など作り出して褒められるのも、大層めでたい。法師の才學あるのは、すべてめでたいといふまでもない。持經者が一人で讀むよりも、大勢の中で、時刻などの定まつた御讀經などに、その才學が顯れて、やはり大層めでたいのである。暗くなつて經の文字が讀めないので、「かゝりの者はどこぞ。御讀經の燈明が遲い」などいつて、

皆が讀みやめてゐるうち、その才學ある法師は、聲をひそめてあとの文句をよみ續けてゐたことよ。后の晝の行啓、おなじく御產屋がめでたい。立后の作法がめでたい。立后の時には獅子狛犬大床子などを持つて來て、御帳臺の前に設けすゑ、內膳司から御竈神を遷し奉りなどしたのは、めでたくて、以前姫君など申上げた普通のお方とは、更にお見えなさらぬ。攝關のお外出や、春日明神への御參詣がめでたい。葡萄染の織物がめでたい。葡萄染ばかりではない、すべて紫色の物は、花でも絲でも紙でも、何でもかでもめでたい。しかし紫の花の中では、杜若がすこし、花の形がいやだ。色はめでたい。六位の宿直姿のよいのも、その指貫が紫色の故と見える。廣い庭に雪の降敷いたのがめでたい。

章博士　大學寮の被管なり。紀傳道、及び詩文を掌る。定員二人。(從五位下)下に文章得業生(トクゴウジヤウ)、文章生(モンジヤウシヤウ)あり。○下﨟なれども　文章博士は五位相當官にて、昇殿を許されねばいふ。上﨟を見よ。○かしこき御前　尊貴の御前なり。主上、中宮、東宮などの御前をいふ。○御文の師　御侍讀なり。今の侍講におなじ。○願文　グワンモン。佛事を營む時に、施主の願意を述べたる敬白文をいひ、又神佛に祈誓して立願する文をもいふ。○さるべきものゝ序　おもに詩歌の小序をいへり。「序」は端書の文なり。○いふべきにあらず　めでたしと今更にいふべきにあらずの略。○持經者　ヂキヤウザ。法華經を受持して、これを讀むものを、特に持經者とも、持經の僧ともいふ。他の修業はせずして、不斷、法華經をのみ讀む。同經序品に「佛滅度後、

円融院四十九日御願文(菅相公)
奉造白檀阿彌陀佛一軀觀世音菩薩得
大勢至菩薩各一體
奉寫金字妙法蓮華經一部八卷無量義
經觀普賢經阿彌陀經般若經各一卷以
前御經供養演說云々(下略)

願文

妙光菩薩持(ス)妙法蓮花經(ヲ)」。○時など定まりたる　晝夜六時に、佛道の勤行あり。晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜これなり。○御讀經などに　の下。その才學顯れてを補ひて聞くべし。○くらうなりて　これは日沒の勤行なるべし。この句以下、そのめでたき所以の說明なり。○いづら　委しくは燈明掛の者はいづらなるぞの略なるが、既に俗のドウシタゾの意に轉りたる也。○御讀經あぶらおそし　「御讀經油(あぶら)」は御燈明なり。なほ大殿の燈火を、大殿油(おほとなぶら)といふが如し。「おそし」とは持ち來ることが遲しの意にて、早く持來れとの催促なり。○つゞけゐたる　諳誦にて、讀經を續け居たると也。○后の晝の行啓　皇后(中宮)の晝間のいでましはめでたしと也。「行啓」とは皇太后、皇后、皇太子の御他出をいふ。女房の出車(いだしぐるま)や、騎馬の女官など美しく裝ひて隨從する故、晝は見立ありてめでたき也。古事類苑帝王部に「凡そ皇后中宮の行啓には、期に先だちて、所司供奉官人の名を錄奏し、外記命を其官人に傳ふ、之を召仰といふ。其儀衞絲毛の御車にて、女官騎馬にて之に從ひ、大夫亮は前に、近衞次將二人は左右に、進等は後に列す。還御の時、諸司名謁し、或は饗祿を賜ふ。云々。後世女騎をば廢せらる。行啓の類別は父帝を訪ひ、子女を訪ひ、遊覽方違等にして、上皇の御幸と大同小異なり、云々」。○御うぶや　后の御產屋はめでたしと也。こは御產屋における始終の御儀式をめでたく思へる也。御產前には、連日僧侶陰陽師などの祈禱あり、御產後には、衣服布帛等、すべて白色にあらため、御湯を參るに御佩刀、虎の頭を供し、撒米を打つ。博士、史記孝經を讀む。續いて產養の儀式再三あり。○宮はじめの作法　后の宮はじめの作法はめでたしと也。「宮はじめ」は后に立つをいふ。江次第に、「勅使次將參本宮申宣命由、先敷座令著之、公卿一人執女裝束給之、藏人令持御倚子一脚、(紫檀地螺鈿、白織物敷物、加白地紫文綾毯代、鎭子四枚)大床子二脚、(塵蒔螺鈿蠻繪、高麗褥、加圓坐一枚)師子形二、御挿鞋一足、(盛柳筥或加御膳具銀器、並御臺盤)其儀如前、藏人下地再拜、退立御倚子、即立於晝御坐跡、御挿鞋(置鏡臺下)獅子形(立御帳南面左右)大床子二脚立帳東頭、(東西妻、其上敷圓坐一枚)炬火屋(立於庭中)——皇后著御倚子(白織御唐衣、白羅御裳、御挿鞋、先是上御髮)公卿參入列立再拜、云々。」○しゝこま犬　御帳臺の帷の裾に布く鎭子なり。邪氣を避くる禁厭ともしたり。禁祕抄に「獅子、狛犬、在帳南北、左獅子」とあり。獅子と狛犬と二つにいへど、江次第には、二つながら獅子形といへり。はじめ高麗よりこの獅子像の傳はれるより、犬の類なれば、一對に作る時は、その口を開きて黃色なるを獅子とし、口を閉ぢて白色に、頭に一角を具ふるを狛犬として區別したる也。○大床子　ダイシヤウジ。机の如き食臺なり。淸涼殿の大床子は、長さ四尺五寸、弘さ二尺四寸、高さ一尺三寸なり。雅亮裝束抄に「大床子はその體、上は簀子にて、云々。二つさし合はせて据ゑて、上に高麗を只半帖のやうに、打裏をつけて敷きて、云々」。○しつらひ　裝置すること。爲繕(しつくろひ)の義か。眞賴說に室札の活用とするは、本末轉倒せり。○內膳　內膳司なり。多くの場合音讀す。宮內省の被管なり。天

皇の御膳のことを管し、進食をまづ嘗むることを掌る。〇御へつひ渡し奉り　内膳司より、竈神を中宮の内膳屋に渡し奉ると也。内膳司の竈殿に、神代より傳はれる平野、齋火、庭火といふ三つ足の釜三口あり。そのうち平野、庭火の御釜は、閑融帝の朝に盜まれて、この頃は齋火のみなりき。他所行幸の折は、必ず共に遷し奉らるゝ物にて、禁祕抄に「可レ爲二竈物一」とあり。故にこれを崇めて竈神とせり。「御へつひ渡し」は、この竈神の靈を、中宮の御方の竈神屋に分祀するをいふ。これを以て、皇后が炊事を掌る意味とする説あれど附會ならん。たゞ天子と御同格の地位に就きたる爲、その御炊屋に、この神を遷し祀れるのみ。〇姫君など聞えし　后に立たせ給はぬ前をいふ。〇たゞ人　平人、皇族以外の者を、ここにてはいへり。〇一の人　攝政、關白たる人をいふ。職原抄に「執柄必蒙二一座之宣旨一、故稱二一人一（又云二一所一）」とあるを、通考に「爲二攝關一之人、不レ守二官次一、着二一坐上一之宜也」といへり。〇御あそびき　御外出なり。〇春日まうで　大和の春日明神に參詣するをいふ。この明神は藤原氏の祖天兒屋根命を祀れるなれば、藤氏の攝關たる人は、必ず參詣するなり。この句の下、などめでたしを略けり。〇えび染の織物　の下、めでたしを略けり。〇花も絲も紙も　「すべて紫なるは、花も絲も紙も、何も〳〵めでたくこそあれ」とあるべきを、前後にいへり。〇すこしにくき　少し花のさまにくきと也。〇六位のとのゐ姿　六位の藏人の宿直姿なり。「宿直姿」は冠袍に指貫をはきたる姿、所謂衣冠なり。當時禁色として、深紅深紫の服は、勅許なくしては著られざるも、藏人は六位にてもこれを聽され、麴塵の袍を著、紫色の指貫をはけり。〇降りしきたる　の下、めでたしを略けり。

今上一の宮、まだ童にておはしますが、御をぢに上達部などの、わかやかに清げなるにいだかれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬引かせて御覽じ遊ばせ給へる、思ふ事おはせじとおぼゆる。

釋　〇今上　一條帝。〇一の宮　第一の皇子敦康親王なり。御母は定子の中宮。〇御をぢに　御伯叔父にてと也。準大臣伊周、兵部卿隆家などをさすか。或註に大納言道頼をも數へたれど、道頼は一の宮の未生前五年に薨じたりき。〇おぼゆる　の下に、よの歎辭を添へて聞くべし。

評　はじめ「から錦」と呼んだのは韓國の錦で、次に漢土の錦をも呼んだ。そこで區別の必要上、韓國からのを高麗錦、漢土からのを唐錦とも呼んだ。尤も、それ等の織法を傳授した内地製の東京錦などもあつたが、上等の物は多く輸入に仰いだのである。源氏物語に、

からの東京錦のことゝくしき端さしたる茵、

とあるのでも、唐製の錦を立派な物としてゐた事がわかる。鐓太刀は玉海に、

後白河法皇御賀に、菩提院關白、紫檀地の金作の螺鈿を帶す。鞘の上下に、臥龍を水精にてせり。

とあつて、絲卷や衞府の太刀に比べると、その見事な物であることが、ほゞ想像がつく。堂塔建立の盛んだつた當時は、金岩の燦然としたのや、漆塗の宵黒な佛像が普通であつた中に、大佛師康尚などが、腕を揮つた素木の佛像の木目は、どんなにか、神祕的な感じを、賽詣者に與へたであらう。松上の藤は月竝だが、藤にも松にもえらい信仰のあつた時代だから、仕方がない。

殿上と地下とで、身分に格段の相違のあつた時代では、六位で昇殿する藏人は、非常な名譽な職であつたのである。そこを主眼にして、筆の限り盛んに形容を盡してゐる。だからその間は思ひ切つて身形を立派にして突合へは、例の清少一流の持論だが、隨分しみたれた形で、勤めてゐた者もあつたと見える。いや却つて、その方が古風なので、醍醐天皇時代には、一枚の袍で三年も勤めたものであつた。そ

（口繪）今上帝の第一の皇子が、まだ童で入らせられるが、御伯叔父で、上達部などの年若で綺麗な方におだかれなされて、殿上人などを召使ひ、御馬を引かせて、御覽になつて遊んで入らせられる樣子は、めでたくて、思ひ事はおありなさるまいと思はれる。

れが段々驕奢になつてきて、この時代にも儉約の令は布かれたけれども、一片の空文にをはつて、延喜式には喧しくいつた薄物(羅)などとも、この草子中にも散見する通り、やたらと人が着るやうになつた。但六位の藏人などは、もと〳〵身分の卑くて、有福でない者もまじつて居るから、思ふに任せぬ人もあつたらう。青色の袍や下襲の尻などをいつたのは「物の色よろしうて」の伏線である。そして青色がいゝ、綾織物がいゝ、紫の指貫がいゝと、頭から尻まで褒立てゝしまつた。何だか、餘り褒過ぎるやうな氣もする。或は清少の頭の中には、暗に兄公の則光が聯想されてゐたのではあるまいかといふ疑も起る。しまひに人情の變遷を歎いたいひ方が、殊に面白い。清少は「走りくらべをする」と誹つたが、皆が皆さうだつたのでもあるまい。この時代以後にも、殿上をおりるのを歎いた歌もあり、中には五位を辭退してゐたのもあり、はじめから叙爵を辭して、重任したのもあつた。

博士中最も氣の利いた、しかも羽振のよい文章博士でも、隨分現代離れのしたもので、親爺が「わが二つの道歌ふを聞け」と鯱鉾張ると、娘は「ごくねちの草藥をぶくして」といつたことが、源氏物語にも出てゐる。既に第六段姫宮の御方の段で批評した通り、學生あがりの先生だから、それも據ない譯である。「顔もいとにくけ」は、何も目鼻立のわるいのではない。博士でも美男はあらう。しかし身分がもと〳〵卑いから、人品が賤しく、隨つて何處か下相に見えるのをいつたものである。だから女房連からは何時も安く扱はれてゐるが、それでも斯道の第一人者として、天顔に咫尺し奉る光榮をいな譯にはいかない。當時の博士達が、願文や小序などに心血を濺いで、彫肝鏤骨の名文句を捻り出したのは、丁度今日の學者連が、その研究の新説を發表して、可否を學界に問ふのと、場合がよく似てゐる。それが好評を得て喝采されるか、不評に終つて徒勞をくやむかが、懸命の問題であつた。

夫以無二處不一レ花、無二花不一レ好、山桃復野桃、日曝二紅錦之幅一、門柳復岸柳、風宛二翠麗之絲一(遂處花皆好、

齋名)

楊岐路滑、吾之送レ人多事、李門淚高、人之送レ吾幾日。(別路花飛白、以言)

班婕妤陋雪之扇、代二岸風一以長忘、燕昭王招涼之珠、當二沙月一而自得。(避暑對水石、匡衡)

念二極樂之尊一一夜、山月正圓、先二勾典之會一三朝、洞花欲レ落。(勤學會詩序、齊名)

佛僧不レ見、只見二春花秋月一、法音不レ聞、只聞二溪鳥嶺猿一。(爲二左大臣一供二養淨妙寺一願文、匡衡)

などは皆一條朝の名家の作で、當時公任は、多くこれを朗詠集中に收め、齊信は既にその中の或者を吟誦したほどの金玉である。かうなると、いとめでたい譯である。

詰誦の法師は、甚だ皮相なところに感心したものであるが、しかし、一寸信仰の起りさうな仕打である。紫に力瘤を入れてめでたがつた擧句に、廣庭の雪を出したのは、日先が變つて、氣が利いてゐる。

后の書の行啓は第一公式の鹵簿だから、立派な筈である。その御産屋の有樣のめでたいことは、紫式部日記の中宮(上東門院彰子)御産の記事が、これを盡してゐる。長いから本書に就いて見るがよい。

立后の記事は、何時のを見て書いたものか。長保二年二月に、定子中宮が皇后になつた事實はあるが、今まで十餘年も中宮で居られたのだから、「姫君など聞えし云々」の句が、今更らしく聞える。一體中宮は皇后の稱呼だから、立中宮の作法は卽ち立后の作法であつた。否、皇后、中宮分立後でも、立中宮をなほ立后といひ、その作法を行つたものである。清少が宮仕中の立中宮の儀式は、二回あつたが、後の宮に立たれた、正曆元年十月五日の事だらう。尤も入内は同じ年の正月であつたが、まだ間もないから、「姫君など聞えし云々」の句もあてはまつてゐる。そこで、鳥はの段で既にいつた通り、清少は、定子の君が御入内當時から奉仕した女房であるといふ事實が、いよ〳〵確實になる。さてその光景は、榮花物

語、耀く藤壺の巻にも、同じ事が書いてある。これは彰子の中宮の時のである。

中宮は四月つごもりに入らせ給ふ。（中略）この度は藤壺の御しつらひ、大床子たて、御帳の獅子狛犬なども、常の事ながら、目とまりたり。

臣妾の身分から一躍坤位に備はるといふ理由と、それを立證する事實の展開とが、めでたいと感じさせ、目とまるといはせたものである。

關白の春日詣は、餘程大業なもので**あつ**たらう。年々ある賀茂詣でさへ、江次第で見ると、なかく荘重な儀式で、年中行事の繪巻で見ると、その行列は、上下合算すると、百人からの人數である。空穂物語や兵範記や台記の春日詣の記を見ても、その行粧の盛んな事が伺はれる。それに行幸とはちがつて、上達部連は牛車で行列に加はるから、いよ〳〵美々しい。のみならず世の一の人として、おのれが祖先の神に詣でるのだから、これに超したためでたさはあるまい、さてこの春日詣はたまさかな事で、清少の見たのは、長保二年二月の關白道長の參詣だつたらう。

七十七段

今上の一の宮を「まだ童にて」といつたのは、少くも六七歳以上の趣と察する。この宮は、中宮崩御の年は、漸く二歳で入らせられたのだから、清少は中宮崩後も、尚宮中に奉仕してゐたものと見なければならぬ。そこで、一の宮の御母代として御後見をなされた、中宮の御妹貴觀殿の御匣殿に續いてお仕したといふ榮華物語の記事が諸はれる。但この御方は寛弘元年に御逝去になつたのだから、清少の宮中生活も、その年で幕がおりたものと見てよい。そして、この記事は、その最後の寛弘元年の事と見るが至當であらう。なほこれには、幾分の疑問の存することは勿論である。

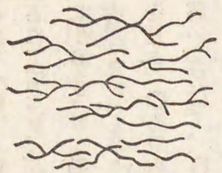
（口繪）優美なもの　痩さて綺麗な君達の直衣姿は優美である。美しげな童女が裘袴など、殊更らしくはかないで、ひら〳〵し勝な汗衫だけを着て、藥玉など絲を長くして、袖脇につけて、扇で顔を隱してゐたのが優美である。若い婦人の美しげなのが、夏の几帳の帷子の裾を、上に引懸けて、白い綾の單に、二藍の羅の表着を着かさねて、手習をしてゐるのが優美である。薄樣の草子を紫の村濃の絲で、面白く綴ぢたのは優美である。柳の芽の出た枝に、青い薄樣に書いた文をつけたのが優美である。鬚籠の面白く染めたのを、五葉松の枝に附けた

なまめかしきもの　ほそやかにきよげなる君達の直衣すがた。をかしげなるわらはめのうへの袴などわざとにはあらで、ほころびがちなる汗衫ばかり着て、藥玉など長くつけて、勾欄のもとに、扇さしかくして居たる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたうち懸けて、しろき綾、二藍引きかさねて、手ならひしたる。薄やうの草子、村濃の絲してをかしくとぢたる。柳のもえたるに青き薄樣に書きたる文つけたる。五葉の枝につけたる。三重がさねの扇、五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。よくしたるひわりご。白き組のほそき。新しくもなくて、いたく舊りてもなきひはだ屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる。青やかなる御簾のしたより、朽木形のあざやかに、いとつや〳〵かにてかゝりたる。紐の吹きなびかされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる、簾の外の勾欄のわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、いかりの緒くひつきて、引きありくもなまめいたり。五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづら、赤紐の色にはあらぬ、ひれ、くたいなどして、藥玉を皇子たち、上達部などの立ちなみ給へるに奉るも、いみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて、舞蹈し拜し給ふもいとをかし。六位の青色のとのゐ姿。臨時の祭の舞人。五節のわらはなまめかしき。

のが優美である。三重がされの扇が優美である。五重がされは餘り厚くなつて、手許の處など憎らしい。よく拵へた檜破子、白い組絲の細いのが優美である。新しくもなく、さう古くもない檜皮屋に、菖蒲を行儀よく葺渡したのが優美である。靑やかな御簾の下から、几帳の帷子の朽木形の模樣があざやかで、大層艶めて懸つたのが優美である。帷の紐が風に吹靡かされたのもおも白い。夏の帽額の鮮やかな御簾の外の勾欄の邊に、大層愛らしげな猫が、赤い首輪に白い名札がついて、重りの紐をくひついて、じやれながら引あるくのも優美である。五月の節會の菖蒲の女藏人が菖蒲の蘰をかけ、小忌の赤紐の色とは違うが、形の似た領巾や裙帶などつけて、主上から賜ふ藥玉を、皇子達や上達部などの並列して居られるのに奉るのも、甚だ優美である。皇子達や上達部が、それを受取つて、腰につけて舞蹈なさるのも、大層おもしろい。五節に薫爐をもつ童女、小忌衣を着た君達も、大層優美である。六位の藏人の靑色の袍を着た宿直姿、臨時の祭の舞人、五節の舞姫の附添の童女も優美である。

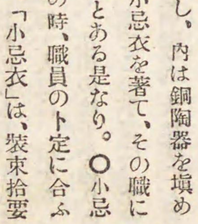
（考異）○いとつやゝかにて　の上、原本紐の字あり。次句にもこの語あれば、こゝは衍なるべし。よりて削る。○色にはあらぬ　の下、原本を文字あり。光本による。

【釋】○なまめかしきもの　優美なるものにて、無骨の反對なり。○をかしげなる　愛らしげなるをいふ。○わらはめ　日本紀に、童女を訓めり。めのわらはと同じ。○うへの袴　表袴なり。童女のは紅の張袴なり。雜要抄に「表袴長四尺五寸、下袴長八尺、云々」とあり。女官飾抄に「童女は、晴の時は浮紋の表袴をきる。よの常にはきず、云々」。○わざとにはあらで　わざと着たるにはあらでと也。表立ちて、晴の表袴などは着ざるをいふ。○ほころびがちなる　縫ひ合はせたる所の少なきをいふ。汗衫の製を、雜要抄に「右の端袖ハ外へ返スベシ。左の端袖ハウルハシクテ、袙ノ袖口見ルバカリ、喬ヨリ下ザマニ綻ビテ、八寸許裁チテ、トヂムル也」とあり。なほ汗衫を見よ。○藥玉など長くつけて　藥玉など組絲を長くして身に附けてと也。（すさまじき物の段の附圖參照）。○扇さしかくして　扇にて顏を蔽へるをいふ。○若き人の云々　「若き人は」若き女房なり。「おかしげなる」の下、がを略けり。○夏の几帳　夏は帷子に白の生絹を用ゐる。冬は裏付の打物なり。几帳を見よ。○したうち懸けて　几帳の帷子の裾をまくり上げて、几帳の手に打掛けたるをいふ。風通しをよくする爲なり。「した」は裾なり。○しろき綾二藍引きかさねて　白綾の單に、二藍の羅の表著を引重ねてとなり。○薄やうの草子　薄樣紙を重ねて綴ぢたる本なり。○柳のもえいでたるに　柳の芽ぐみたる枝にと也。○鬚籠　ヒゲコ。竹にて編みたる籠にて、編みあまりを殘して、鬚の如くに立てたるをいふ。今も密柑など入るゝ籠に、この製あり。○をかしう染めたる　綠色に美しく染めたるをと也。五葉の枝に附くるを思へば、こゝは松の葉色と同色なるべし。眞賴の色々に染めたりといへるはいかゞ。○五葉　五葉の松なり。○三重がさねの扇　檜扇の兩方の親骨になる處を、檜の薄板を三枚重ねて、その上を薄樣にて包みたるをいふ。元來檜扇は、檜の薄板を幾枚も編みたる物にて、その編み餘りの絲を、兩端にあはび結びにして長く垂る。板數三十九枚を普通とし、胡粉地に彩色して、松竹龜鶴等を描く。これを袙扇ともいふ。女房の袙姿にて持つ故なるべし。男の檜扇は、位階によりて板數廿五枚、廿三枚、十二枚等種々あり。白絹の絲にて綴ぢ、そのあまりの絲を花形、あはび結びなどにす。繪樣は老少によりて異なり。○五重は　五重の扇はと也。親骨の板を五枚がさねにしたる扇をいふ。○もと　扇の手元なり。○ひわりご　檜破子。檜にて作れる破籠なり。「破籠」は、和名抄に「樏、俗所謂破子、和利古、樏子中有障之器也」とありて、中仕切ある食器なり。○白き組　「組」は組絲の略。○ひはだ屋　檜皮屋なり。檜皮にて葺きたる家をいふ。○うるはしくキチンとして美しきをいふ。端麗の意。○靑やかなる　御簾の新しくて、簾の竹の色靑きなり。○朽木形　几帳の帷子の模樣をいへるにて、「朽木形」は朽ちたる板目形なり。濃色を以て出す。禁祕御抄、清涼殿の處に「四面有几帳、帷夏生以胡粉畫葦雀、冬朽木形、云々」とあり。○いとつやゝかにて朽木形の帷子の鮮麗にて、甚だ光澤ありて、几帳に掛りたると也。○紐の　几帳の帷子の飾に附けたる紐なり。平絹にて、細く長く作る。臨時には赤色を用ゐることあり。○夏の帽額　帽額の簾の布帛の、薄地にて夏向なるをいふ。帽額の簾を見よ。○すのと　簾の外なり。これを上文に續けて、「あざやかなる簾の外」とする說と、「あざやかなる」にて切る說と兩說あり。題意より見れば、帽額のあざやかなるを、なまめかしとはいひ難きこゝちす。よりて前說に從へり。○白き札つきて　猫の名など書きて附けたるべし。夫木抄、雜九に「御集、花山院御製、敷島のやまとにはあらぬから猫を君が爲にぞもとめいでたる」此御歌は、三條の太皇太后宮より、猫やあるとありしかば、人の許なりしがをかしげなりしを、取りて奉りしに、扇の折を札に作りて、首に



朽木形

つなぎて、遊ばされし御歌と、云々」。○いかりの緒　くひつきて　碇の緒食ひ附きてと也。春註に「猫の綱に碇をつけて、物にかけて、猫を引とめん爲にしたるなり。その緒を猫の食ひてされたるさま也」とあるにて明なり。「碇」は何にても重石になれる物をいふ。○引きありくも　綱の先に碇の附きたれば、物に引きかゝりて動き得ぬ筈なれども、綱にくひつきてジャレ廻る故に、碇のをどりて引歩かるゝ也。一本「白き札つきて」の下、「村濃の綱いと長う引きてありくも」とあり。○五月のせち　端午及び五月にを見よ。○あやめの藏人　端午の節に、菖蒲、藥玉を、親王公卿に取傳ふる女藏人をいふ。女藏人は下臈の女房にて、内侍、命婦、などよりは下位にあり。御殿の御裝束、裁縫等の事より、殿上の雜物を檢閲守護することを掌る。○さうぶのかづら　菖蒲の蘰なり。端午の節には、主上よりはじめて、菖蒲を男は冠帽につけ、女は髪につく。續日本紀、天平十九年五月の條に「太上天皇詔曰、昔者五月之節、常用二菖蒲一爲レ蘰、比來已停二此事一、自今以後不二菖蒲之蘰一者勿レ入二宮中一」と見えたれば、既に奈良朝の始より行はれたりし習俗なるが如し。こは女藏人が、髪に菖蒲の蘰したる也。柳のかづらを見よ。○赤紐の色にはあらぬひれくたい　赤紐の色とは違ひたる領巾、裙帶なり。形の類似したれど、色の異なるよりいへるなるべし。○赤紐　垂紐、紅垂紐ともいふ。小忌衣に着くる紐なり。大嘗祭式に「小齋親王以下、皆青褶袍、五位以上紅垂紐、（深淺相副）、内親王及命婦以下女孃以上亦青褶袍、紅垂紐、（深淺相副）」とあれど、後は通じて濃打、蘇枋打となれり。廣さ三分、或は三分半、長さ八尺、又は一丈なるを、二つ折にして、あはび結にして、小忌衣の右肩につく。舞人は左肩なり。地は平絹或は綾と、連阿の抄にあり。三つ打にしたるは、いと後世の事なり。○ひれ　領巾。又肩巾。上左頸より肩にかけたる巾にて、蟲を逐ひ拂ふにも用ゐる、恰も今日の田舍女などが、手拭を襟の覆輪にかけ、用ある時は外して用るに似たり。後に婦人の正裝の時の裝飾となる。和名抄に「肩子、婦人表衣、以レ錦爲二之領巾一。日本私記云、比禮、婦人項上飾也」と。その製今審ならず。延喜式の縫殿式、中宮の條に「領巾四條料、紗三丈六尺、別二九尺一」、○くたい　裙帶。中古女官の正裝の裝飾にひく紐なり。北山抄に「其製紫綾半合、如二帳紐一兩端縫形一云々」。また紫式部日記に「青色の無紋の唐衣、裾濃の裳、ひれ、くん帶は浮線綾を撫綾に染めたり」とあり。同時代にて、その染色裁縫の異なるより思へば、當時定制なしと見えたり。延喜式中宮の條に「表袴、裙二腰、絹二疋一丈、同腰料絹一丈、別二五尺一」と見えて、腰は即ち裙帶なり。堅世服飾考に「古くは裙を用ゐたるを、中古よりは裙を去りて、唯二つの紐ばかりを、裙帶として用ふるか。中古以前裳を載せたる書には、裙帶見えず。中古に至りて、裙帶を載せたる書には、裙帶見えず、云々」。貞丈の説に「後世、領巾裙帶は、獨立の力を失ひて、皆裳に附屬し、領巾は裳の掛帶となり、裙帶はその引腰となれるが如し」といへり。○とりて　腰に引きつけて「とりて」は皇子上達部がなり。小野宮年中行事に「九條右相府記、佩二纓命縷一體（件縷緒有二四筋一）先留二左脇一以二一筋一從二右肩一超、以二一筋一自二左脇一出、而相合當レ前結、以二二筋一當二革帶上一自レ後前廻而、結二右袖下一、但二重之緒四筋、隨草垂也。○ひとりのわらは　五節の舞姫のまゐる時、火取を持つ童女なり。江次第に「舞姫等次第參入、先童女一人持二火取一、次童女一人持レ茵」。○ひとり　火取。薫爐。薫物をたく香爐なり。銀にて作り、上に銀の籠を蓋へり。或は外は木にて作り、蒔繪を施し、内は銅陶器を塡めて、上に金の籠をするもあり。○小忌の君達　小忌衣を著て、その職に服する君達なり。江次第に小忌王卿、小忌大夫とある是なり。○小忌ヲミ。ヲイミの略。大嘗會、新嘗會（五節會）の時、職員の卜定に合ふをいふ。齋戒し、小忌衣を著て、神膳を奉仕す。「小忌衣」は、裝束拾要抄に「小忌ト云ハ神事ノ衣服也。白布ヲ張テ、山藍ト云草ニテ、形木ヲ摺シ物ナリ」。○臨時の祭　賀茂、



火取

および八幡のなり。○五せちのわらは　五節の舞姫に附屬する童女なり。舞姫一人に、二人づつ附く。

評　君達は細やかとあるのが眼目である。これは隨身などのうへでもいつた事で、尊貴の方も若いうちは太やかではい、感じがしない。童女がないがしろな姿で、藥玉の絲を引いて、その癖大人竝に、扇をさし隱したなどは、勾欄のつらだけに、ことに風情がある。若い女房と、白綾二藍と、生絹の帷子を捲りあげた几帳と、手習と、これだけを湊合して見ると、何となく優美な感じがする。處でこの手習は、今の習字とは違ふ。何がなしに書散すのをいふのである。薄手の鳥の子を、紫の村濃の絲で、大和綴にとぢたのは美しからう。源氏物語、初音の卷にも、

「まだ書かぬ草子どもつゞり加へ、表紙紐などいみじうせさせ給ふ。

など、當時はかういふ事に、ひどく趣味をもつた時代であつた。芽出し柳と青簿樣、五葉の松と綠色の鬚籠は、同色の配合で、これが消息や贈物を、草や木の枝につける時の慣例であつた。三重がさねの扇は、紫式部もなつかしい物のやうに書いてゐる。細い白絲の組はなまめかしからうが、檜破子はどうだらうか。只白くて品のいい位の處ではあるまいか。

中古の檜皮屋は、なか〳〵よく趣味を解した言で、眞新しい落つきもない建築を喜ぶ低級趣味者と、その選を殊にしてゐるのは、感心である。軒端の菖蒲も、それで落つきが全くよくなる。青簾の下からこぼれ出た、白地の瀟洒な朽木形の帷の艶のあるのも、氣持がいゝ。そして紐が風になびいた動的の景致もわるくない。青い簾、白い札、赤い綱、色彩の配合が、くつきりしてゐる。そしてその猫が、清少好みの背黒の白猫でもあつたら、なほあざやかだらう。猫のじやれる具合も一寸いゝ。猫に首綱をつけて飼ふことは、この頃には普通の事で、綱で御簾がはね上つたばかりに、女三の宮と柏木の情事が出來したことが、源氏にある。

（口譯）中宮が五節の舞姫をお出しなさるのに、その世話役の女房が十二人で、一體御息所の女房を餘所へ借すのなれば、わるい事としてあると聞くのに、どう思召すのであらうか、この時は宮の女房を十人お出しなさる。あと二人は女院と淑景舍との

小忌の赤紐のやうに、領巾裙帶を、ひら〳〵させた女藏人は、凛々しく粧うた王卿に對して、殊になまめかしさが引立つ。王卿の藥玉を佩びて舞蹈するのは、筆の序に言及したもので、をかしくはあるが、なまめかしいのでない。小忌の君達は、その容子からして意氣である。

以上の光景を一括して、想像を描くと、藤原氏時代のなつかしい優しい情調が、夢のやうに漂うてくる。これも畢竟は、筆者の敏慧な觀察を、清警な筆致で寫し出したからである。

末節なまめかしい物も、五節關係の事件が、かう多くなつてきては、勢ひ五節の盛儀を稱へずには居られなくなる。隨つて文章は一轉換を要する。そこで次段が生まれた。

七十八段

宮の五節いださせ給ふに、かしづき十二人、こと所には、御息所の人いだすをば、わろき事にぞすると聞くに、いかにおぼすにか、宮の女房を十人いださせ給ふ。いま二人は女院、淑景舍の人、やがてはらからなりけり。辰の日の夜、青摺の唐衣、汗衫を着せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隱して、皆さうぞくしたちて、暗うなりたる程に持てきて着す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくえうしたる白き衣に、かた木のかた繪にかきたる、織物の唐衣のうへに着たるは、まことにめづらしき中に、童は今少しなまめきたり。下づかへまでつ

づき立ちて居たる、上達部、殿上人おどろき興じて、小忌の女房とつけたり。

（考異）○おぼすにか　原本おぼすかとあり。活本、抄本、素本による。○辰の日の夜　原本夜なし。古本による。

新釋　宮の五節いださせ給ふに　中宮の御許より五節の舞姫を出させ給ふにと也。大嘗會には五人、年毎の新嘗會には四人の舞姫を出し、その中二人は國司の女、その餘は公卿の女、いづれも未だ嫁せざる者を獻る例なり。この御時中宮より獻られたるは、蓋し特例なり。○かしづき　舞姫の世話をする女房をいふ。即ち陪從の女房なり。かしづかせを見よ。○十二人　の下、ありてを略けり。○こと所には云々　女御、御息所の御方の女房を、餘所には出すことを惡き事にすると也。「こと所には」は異所にはにて、「出す」につゞく。「異所に出す」は餘所に借すこと也。これはその頃の慣習上の不文律にて、次に淑景舎の方の人を出し給へるをいはんとて也。○御息所　ミヤスンドコロ。こゝにては東宮の妃をいへり。當時東宮所とさしていへり。源氏物語にも、六條御息所とあるは、前太子の妃なり。古事類苑帝王部に、「御息所トハ、天皇ノ御寢ニ侍スルモノナリ。其名モト、天皇ノ休憩シ給フ便殿ヨリ起レルヲ以テ、更衣ヲ指シテ言ヘルナリ。然レドモ、亦女御ヲモ謂ヒ、或ハ御寢ニ侍スレドモ、其職名ナキ者ヲモ謂ヘリ。之ヲ要スルニ、一箇ノ私稱ニシテ、東大寺要錄ニ於ケル惠運ノ記ニ、既ニ此名アルヲ視ヾバ、清和天皇ヨリ前ニ起リシナリ」。○いかにおぼすにか　次に淑景舎の方の人を出したるに就いて疑へる也。この下、あらんを略けり。○女院　ニョウキン。國母、准母、又は内親王などの、太上天皇に准ぜられたる者の尊稱。後に宮城の門號を附けて、某門院と稱せり。こゝの女院は皇太后藤原詮子にして、正暦二年院號を得、東三條院と稱せり。これを女院號の始とす。○詮子　藤原彙家の女にして、道隆道兼の妹、道長の姉なり。圓融帝の女御となり、一條帝を生む。長保二年閏十一月崩ず。年四十。○淑景舎　シゲイシャ。内裏五舎の一にして、桐壺と稱す。庭に桐樹ある故なり。南（五間四面）北（五間二面）の二舎あり。渡殿にて相通ず。（附圖參照）こゝは淑景舎の御息所藤原原子をさす。○原子　道隆の二女にして、定子中宮の妹なり。長徳元年東宮（三條）に入りて尚侍となり、尋いで女御となり、淑景舎に住む。長保四年八月卒す。年廿一、又廿二と。○女院淑景舎の人　の下、を借からせ給へるにてこの二人はを略けり、「人」は召仕人にて、即ち女房なり。○やがてはらからなり　女院の人と淑景舎の人とは即ち同胞なりと也。○辰の日の夜　五節の當夜なり。雲圖抄に「十一月五節事、丑ノ日帳臺ノ試、寅ノ日淵酔竝ニ御前ノ試、卯ノ日童御覽、辰日節會、云々」。○青摺のから衣、汗衫　青摺の唐衣、青摺の汗衫の略。「唐衣」はかしづきの女房の、「汗衫」は童女の料なり。「青摺」は山藍にて布帛を染めたるをいふ。委しくは次のかた木のかた繪にかきたるを見よ。

部や殿上人が騒き興がつて、小忌の女房と名を付けた。

舞姫の參上（承安五節繪卷）

よ。花鳥餘情に「舞妓の裝束、丑の日は赤色の唐衣、寅の日は青摺の唐衣、赤紐、日蔭の蘰等也。青摺は小忌の事なり」。○をきせ給へり　をかしづきの女房、及び童女に著せ給へりと也。○女房にだに　他の女房にだにと也。童女、及び陪從の女房の裝束をば、近くさむらふ女房にさへも知らせず、まして殿上人には、いたく隱したりと也。○皆さうぞくしたちて　「皆」は他の舞姫や、童女、陪從の女房をさす。「さうぞくしたちて」は支度をはじめてと也。○もてきて著す　上に「著せ給へり」とあるは、一旦概括的にいへるにて、更に詳細に說明したるにて、重複にあらず。一種の文體なり。○むすび下げて　赤紐を、右の肩よりあはび結に結びて下げたる也。○えうしたる白き衣　澤を出したる白衣なり。「えう」は螢なり。磨く義。貞丈の說に「張りたる絹を、貝にて磨りて、光を出すをいふ」。○かた木のかたるにかきたる　青摺の衣のさま也。板木の形絹を、衣に摺出したるをいふ。摺出すには山藍を用ゐる。「かた木」は形木の義にて、延喜式に青摺模とあるは是なり。平治或祕記にいはく「形木の文は小草、梅、柳、水、蕨、雉、蝶、小鳥等なり。續飯を布に裏みて、形木の上を叩いて、布の面を上にて押付けて、物を覆うてこれを踏む。その後形の上に、山藍を葉ばかり取集めて、これを摺る。木にて墨を摺るやうに摺るなり。云々」。「かきたる」の下に、をを補ひて聞くべし。○まことに珍しき中に云々　陪從の女房の青摺を着たるは珍しき中に、童女の着たるはとなり。○今すこし　陪從の女房よりも、今すこしと也。○下づかへ　舞姫の雜役を取まかなふ女なり。一人の舞姫に、二人、又は三人を隨ふ。○つゞき立ちてゐたる　行列して居たると也。「たる」の下、にを略けり。○おどろき興じて　童女、陪從の女房などが青摺を着ることは、例になく珍しき事なればを小忌の君達は、外に居て物いひなどす。宮「五節の局を皆こぼちすかして　いとあや

（口譯）小忌の君達は、簾の外に居て、女房達に話などをする。中宮が「五節の局を、まるでしつらひを取拂つて、變な樣であらせるのは、甚だ不體裁である。その晩までは、やはりちやんとしておくがよからう」と仰になつて、例年のやうに、さうも舞姫や女房達を迷惑させない。几帳などの裾を結びあげて、袖口どもをこぼし出してゐた。小兵衞といふかしづきの女房が、赤紐の解けたのを「これを結びたい」といふと、小忌の公達實方の中將が、そばへ寄つて繕ふに、何か樣子ありげで、

あし引のやまゐの水は氷れるをいかなるひものとくるなるらむ（山井の水は氷つてゐるのしくてあらする、いとことやうなり。その夜までは、なほうるはしくこそあらめ」との給はせて、さもまどはさず、几帳どものほころびゆひつゝ、こぼれ出でたり。小兵衞といふが、赤紐の解けたるを「これを結ばばや」といへば、實方の中將寄りてつくろふに、たゞならず。

あしひきのやまゐの水はこほれるをいかなる紐のとくるなるらむ

といひかく。年わかき人の、さるけそうの程なれば、いひにくきにやあらむ、返しもせず。その傍なるおとな人たちも打ち捨てつゝ、ともかくもいはぬを、宮司などは、耳とゞめて聽きけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、こと方より入りて、女房のもとに寄りて、宮司「などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりを隔てゝ居たれば、よく思ひ得たらむにもいひにくし、まして歌よむと知りたらむ人のおぼろげならざらむは、いかでかとつゝましきこそはわろけれ。宮司「よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ふとこそはいへ」と、爪はじきをしてありくも、いとをかしければ、

うす氷あわにむすべる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりを

と、辨のおもとゝいふに傳へさすれば、消え入りつゝえもいひやらず。實方「などかな

に、どういふ氷が早く解けるのであらう。裏面の意は、自分にはうち解けてくれない人なのに、その人の紐の解けるといふのは、どういふ紐だらう、變な。）

といひかける。小兵衛は年若の人で、あらはな表立つた時なので、いひにくいのだらうか、返歌もしない。その脇にゐる年嵩な人達も棄置いて、何ともかともいはないのを、職の役人などは、今返歌があるかと、耳を澄して聞いてゐたのに、あまり久しくなる氣の毒さに、脇の方からはひつて來て、女房のそばに近寄つて「なぜかう返歌しないで、皆さんはお出なさる」などさゝやくのに、自分は、小兵衛との間に四人ばかりを置いてゐたから、旨く返歌を思ひ得たにしても、いひにくい。まして世に歌讀みと知られて居る人の、一通りでない晴の歌に對しては、どうして返歌が出來ようかと、遠慮されるのはよくない。宮司が「平生歌詠む人は、さう遠慮して居るべき事か、大してよくなくても、ひよつと詠むものです」といつて、皆が默つてゐるのを爪彈をしてあるくのも面白いから、

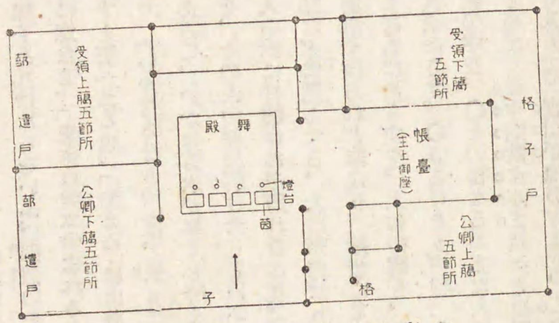
薄ごほりあわに結べるひもなればかざす日影にゆるぶばかりを（薄氷のはかなげに結んだのだから日影のさすとすぐ解けたまでの事よ。裏面の意は、あわ結には

どか」と耳をかたぶけて問ふに、少しことどもりする人の、いみじうつくろひめでたしと聞かせむと思ひければ、えもいひ續けずなりぬるこそ、なか〳〵恥かくす心地してよかりしか。

おりのぼる送などに、なやましといひ入れぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎり群れ立ちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなめれ。舞姫は、すけまさのうまの頭の女、染殿の式部卿の宮のうへの御おとうとの四の君の御はら、十二にていとをかしげなり。はての夜も、おひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて、清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにて、うへの御局へ參りしほどをかしかりき。

（考異）○おとな人達　原本おきな人達とあり。抄本、活本による。○ふとこそは　原本ねたふとこそはとあり。古本による。○辨のおもと　原本辨のおとゞとあり。抄本による。○式部卿の宮のうへの　原本うへのの三字なし。抄本、一本による。

釋　○とにゐて　五節の局の簾の外に居て、册の女房などに物いひなどすと也。○五節の局　五節の舞姫の控室なり。五節の舞殿なる常寧殿内の四隅にしつらふ。これを五節所といふ。公卿、受領より出せる舞姫四人、各その一隅を占む。江次第に「殿内四角、各卜五節所」とある是なり。諸注、辰の日の舞を奏する舞臺と解けるは非なり。舞臺は常寧殿の中央にて、五節の局はその四隅なり。辰の日と限れるもわるし。江次第に「舞妓進舞、女官四人秉脂燭、副南柱立、件舞姫立於御前並左右間、上臈二人當御座間、次二人各立其東西間、闈司引導、舞畢退入」。この退入は、五節の局に入るをいふ。（常寧殿帳臺の試の圖を參照せよ）。○こぼちすかして　簾几帳など取放ちて、あらはにするをいふ。五節は、辰の日は最終日なれば、儀式はてゝ、舞姫のまだ五節所に居る中より、その局のしつらひなどを取片附くる也。○あやしくてあらする　見樣あしくてあらすると也。舞姫の姿のあらは過ぎて、見ともなきをいふ。○ことやう　異樣なり。○その夜までは　辰の日の夜のうちまではと也。この日の終夜をかけていへり。○うるはしくこそ云々　端嚴に飾立てゝ置くべしと也。○さもまどはさず　さも舞姫及び一同を當惑せさせずと也。「さ」は「あやしくてあらする」をさす。○ほころびゆひつゝ　几帳の帷の下に垂れたる所を、上の方に結び上ぐるなり。几帳の帷は、上部は皆縫付けたれども、少し下りては一幅づつ、別にさばけたり。そこを「ほころび」といふ。○こぼれいでたり　陪從の女房どもの袖口が、その陰より顯れ出でたりと也。當時の女の袖口は、今の衣類と異なりて、いと長きものなれば、膝の前にゆるらかに下り付くほどなりしなり。故に几帳を上ぐれば、打並べる袖口は明らかに見えて、いかなる衣服を着たるか、一見して判別すべきなり。○小兵衛　雪山の段に出でたる女房なり。この日のかしづきの女房十人のうちなるべし。後拾遺集、雜五に「一條院御時皇后宮（定子）五節奉らせ給ひけるに、かいつくろひ仕うまつりける人の、つけて侍りける赤紐のとけて、云々。藤原實方朝臣」として、次の「薄



常寧殿帳臺の試（雲圖抄）

氷」の歌を擧げたり。「かいつくろひ仕うまつりける人」は卽ちかしづきの女房のことにて、小兵衞なり。○これを結ばばや　小兵衞が傍の人に向ひていへる詞なり。赤紐の結び方はあはび結なり。○實方の中將　外にゐて物いへる小忌の君達の一人なるべし。○たゞならず　尋常ならずと也。實方の氣色の、樣子ありげなるをいふ。戀想のおもむき也。○あしひきの　「あし引」は山にかゝる枕詞にて、下に意なし。「やまゐの水の氷れるを」は山井の水の氷れる如くにうち解けずと譬へたる也。「やまゐ」は山井にて、山の井におなじ。青摺を摺る山藍（ヤマアヰの約）をいひかけたり。「いかなるひもの」は、氷もに赤紐の紐をいひかけたり。歌の表面の意は、山の井の水はまだ氷りてあるに、いかなる氷が早くも解くるならんと也。裏面の意は、私にはつれなくて、更に打解けぬ人なるを、その人の紐の解けたりといふは、如何なる紐ならん、いぶかしと也。紐の解けたるを訝るは、卽ち人の我に打解けぬを訝れるなり。この下句を、誰が戀想して解けしにやの意に解して、萬葉集、伊勢物語などに見えたる、人に戀想せらるゝ時は、わが下紐の解くるといふ傳說を、こゝに湊合したる說は、面白くはあれど非なり。戀想にて解くる意ならば、誰がと疑ふまでもなき事にて、既に實方自身が戀想し居るにあらずや。上句の解も、諸家の註、大抵非なり。煩しければ一々いはず。○年わかき人の　小兵衞をさす。○さるけそうの程　人々の大勢、あたりに見て居るをいふ。「けそう」はあらはなる意。顯證の字音。○その傍なるおとな人達も　他の年嵩の女房達をいふ。○宮づかさ　中宮職を見よ。○耳とめて　今や返歌するとて耳をとめてと也。○久しくなりにける　返歌なくて程經たると也。○こと方より入りて　宮司が他の方より、この局に入來てと也。「こと方」といへるは、簾の外には、實方中將の如き小忌の公達の居給へれば、それを避けて、他の入口より入れる也。○などかうはおはする　などかう返歌せずして人々は居給ふぞと也。本人返歌出來ずば、誰か代りて詠めなど囁けるなるべし。○さゝ

かなく結んだ紐だから、日陰の蘰をかざす程の事に弛み解けたるまゝの事よ。仰しやうに、別に譯があつて解けたのではない。）

と詠んで、辨のお許といふ人に取次いでいはせると、この人は恥かしがつて、よういひ得ない。實方が「何ですか、〳〵」と耳を傾けて問ふが、少し吃る人が、ひどく聲を繕つて、立派に聞かせようと思つたから、よういひ續けずにしまつた事が、却つて下手な歌を詠んだ恥を隱すやうな氣がしてよかつた。

舞姫の往復の送などに、所勞をいひ立てゝぬた人をも出仕するやうにと、中宮の仰せられたから、御殿に居るだけの女房が群がり立つて、外から出す五節の樣子とは違ひ、餘りうるさうである。中宮から出された五節の舞姫は、相尹の馬頭の舞姫で、染殿式部卿の宮の御妃の妹の、四の君といはれる方のお腹で、年が十二で、大層美しげである。最終の夜も、人々が大勢おひかぶさつてゆくのも、この舞姫は曉がない。そのまゝ仁壽殿から通つて、清涼殿の前の東の簀子から、舞姫を先に立てゝ、中宮の（弘徽殿の）上の御局に參つた折は面白かつた。

めくなるに　この句、下の「つゝましきこそはわろけれ」につゞく。○四人ばかりを云々　清少自身は小兵衞との間、四人ほど隔り居たればと也。○よく思ひ得たりとも、前に居る人をさし越えてはいひにくしと也。○歌よむと知りたらむ人　實方をいふ。この實方は有名なる歌人にて、その作の勅撰歌集に入るもの、六十餘首に至る。「知りたらむ」は知られてあらんの意。○おぼろけならざらむは　おぼろけならざらむ歌にはと也。卽ち尋常ならぬ歌にて、名歌なるをいふ。おぼろけを見よ。○いかでかとつゝましきこそはわろけれ　いかでか返歌し得べきと、遠慮せらる、はよからずと也。興を醒すを厭ふなり。「つゝまし」は愼まる、也。○よむ人はさやはある云々　平生歌詠む人は、さやうに躊躇して居るべきことかはと、宮司の淸少等を激勵したる也。○ふとこそはいへ　返歌はふといふなりと也。○爪はじきをして　指彈すること。惡み疎んずる場合に、指にて彈くことは、わが邦も支那もおなじ習俗なり。○うす氷の歌　「あわにむすべる」は泡の如くに結びたるの意にて、それに紐を解け易きあわ結に結びたる意を含めたり。「に」は如くの意の辭。貞丈雜記に、あわに結べるは、あわび結の事なりとありて、容解しやすき結方なり。萬葉四に、あわ緒とあるを、碩鼠漫筆に、今の打紐の如く、中を虛に縫合はせたるなるべしといへるは、泡の形にはかなへど、解け易きには與からず。いかゞ。「日かけ」は日影に、蘰の日蔭をいひかけたり。但この日蔭の蘰は植物のにはあらず。別に組絲にて揚卷に長く結びたる物にて、冠帽などにつく。「ゆるぶ」は氷の融けかゝるに、紐の弛み解くるをかけたり。「を」は歎辭。歌の意は、薄氷の、泡のやうにはかなく結びたるなれば、日蔭の蘰をかざすほどの事に、弛みて解けたるばかりよと也。裏面の意は、あわ結に、はかなく結びたる紐なれば、日蔭の蘰をかざすほどのすぐ融けたるばかりよと也。この歌、千載集にも出でて、初句うは氷、結句ゆるぶばかりよとあり。撰者俊成卿の加筆ならん。○と辨のおもととといふに云々　と詠みて辨の御許といふ人に仲繼せさせ

て實方にいひ傳へさすればと也。○辨のおもと　四十五段職の御曹司の云々の條に、辨內侍とあると同人か。○消え入りつゝ　辨のお許がなり。「消え入る」は恥かしがりて臆する樣なり。○などかくと　實方がなり。聞取りかねて問ふ詞なり。○ことどもり　言吃なり。法華經に、瘂の字を訓めり。○つくろひ　聲を繕ひと也。○なかくに　恥かくすを心ちして　却りて拙き歌の恥を隱す心持がしてと也。○おりのぼるおくりなどに　舞姫の御殿を下り上りする送りなどにと也。○なやましといひ入れぬる人をも云々　不快の屆出をして缺勤したる女房をも、強ひて出仕せよと、中宮の仰ありしかばと也。○ことにも似ず　異なる折にも似ずと也。「こと」は餘所の意にあらず。○ある限むれたちて　中宮に奉仕する女房は悉く、この五節所に群れ立ちてと也。○すけまさのうまの頭の女　の下、にてを補ひて聞くべし。この女は、九十段中宮淑景舍御對顏の段に「すけまさの馬の頭の女」とある人の妹か。右馬頭藤原相尹の女なり。（尹ノ字マサト訓ム。攝政伊尹ヲコレマサト訓ムニ同ジ）古事談に據るに、相尹は中宮方親昵の人にて、長德二年の伊周、隆家配流の際には、連坐勅勘を蒙りし人なり。春註、助正の字をあてたるは臆測なり。又菅原輔正と註したるもあれど、輔正は當時參議式部大輔大和守にて、別人なり。○染殿の式部卿の宮　爲平親王。村上帝の皇子なり。紹運錄に「爲平親王、一品式部卿、號二染殿式部卿一」。○うへの御おとうとの四の君の御腹　の下、なるがを補ひて聞くべし。「うへ」は北の方「おとうと」は妹なり。即ち爲平親王の御北の方の妹に當る、四番目の姫君なり。爲平親王妃は、左大臣源高明の娘なれば、この四の君も高明の四番娘にて、相尹の右馬頭の奥方となれるなるべし。この四の君は、卽ち今日の舞姫の母君なり。○はての夜　辰の日の夜なり。○おひかづきいくも　蔽ひ被きゆくもと也。童女二人、陪從十二人、下仕二人など、大勢前後を取卷くを「おひかづく」といへる也。おひかぶさるに同じ。○仁壽殿より通りて云々　常寧殿の舞の儀はて、、仁壽殿を通りこして、清涼殿なる弘徽殿の上御局に參り

（口譯）細太刀の平緒を附けて、綺麗な男が持つて通るのも、甚だ優美である。紫の紙を包んで封じて、花房の長い藤の枝に附けたのも、大層面白い。

（口譯）內裏は五節の時分が、何となく常とは違つて、出倉ふ人もよく見える。殿司の女官などが、色々の小切を、物忌の簡のやうにして、釵子に附けたのなども、珍

たると也。

細太刀の平緒つけて、清げなるをのこのもてわたるも、いとなまめかし　紫の紙を包みてふんじて、房ながき藤につけたるも、いとをかし。

譯　○細太刀　束帶の時に用ゐる儀刀にて、螺鈿劍、蒔繪劍等、皆細太刀なり。實用の物ならねば、身を細く作れり。故に名づく。（附圖參照）○平緒　ヒラヲ。もと太刀の帶にて、平たく組みたる緒なればいふ。色には紫、紺、青、白、櫨、樗等さまざまありて、小忌の時には白地を用ゐる、凶服には鈍色を用ゐる、大抵の場合には紫綸を用ゐる。蘇枋綸は、執柄の外は用ゐず。昔は唐組、綺、新羅組等を用ゐたりしが、後世は捻絲にて組み、それに色絲にて、桐竹鳳凰、唐花、唐草等、種々の模樣を刺繡し、太刀の帶とは別にして、只前に垂るゝことゝなれり。（附圖參照）○紫の紙を包みてふんじて　紫色の紙を包みて封じてと也。消息文の樣なり。「ふん」は封の字音。古本に「紫の紙」以下なし。これによれば「細太刀云々」の句の平緒を、小忌の白地の平緒を太刀に附けたるものと解して、この前後の五節のつゞきの文と見るを得べし、但本文のまゝにては、この一節は前段の中に入るを可とす。

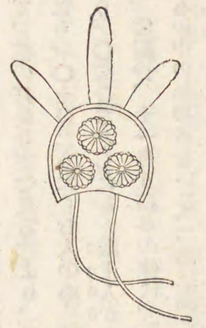
內裏は、五節のほどこそすゞろにたゞならで、見る人もをかしうおぼゆれ。主殿司などの、いろ〳〵のさいでを、物忌のやうにて、さいしにつけたるなども、めづらしく見ゆ。清涼殿のそり橋に、もとゆひの村濃、いとけざやかにて出で居たるも、さまざまにつけてをかしうのみぞある。上雜仕、わらはべども、いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり。山藍、日蔭など、やない筥に入れて、かうぶりしたるをのこ

しく見える。清涼殿の假の反橋の上に、村濃染の元結の大層あざやかなのをして、出て居たのも、何かにつけて面白い事ばかりである。臨時にあがつた上雜仕や童どもが、この五節をばえらい晴な事と思つたのは、至極尤もである。山藍や日影蘰などを柳筥に入れて、叙爵した散位の男が持つて歩くのが、甚だ面白い。殿上人が直衣の肩を脱垂れて、扇や何かを拍子にして「つかさまされとしきなみぞたつ」といふ歌を歌つて、局などの前を通る折は、その面白さに、簾際などに寄添うて見物する女房の心も、打騷ぐことであらう。まして、その人達が一度にどつと笑ひなどしたのは、甚だ恐ろしい。行事の藏人の搔練がされが、何より殊に又綺麗に見える。その爲に茵など出して敷いたけれど、反つてそれに坐つても居られないで、女房の出立など褒貶したりして、この頃はこの五節の噂より外の事はないやうである。帳臺で御覽のある夜、行事の藏人が、非常に嚴重に指圖をして、舞姫の世話をする女房二人と童女の外には、一切入れまいと、戸を抑へて小面にくい程にいふと、殿上人などが「やはりこの身一人位は入れても」といはれるのを「うらみつこが出來ます、とても入れられません」など頑固にいふのに、中宮の御方の女房が、廿人ばかり押

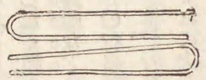
もてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇やなにやと拍子にして「つかさまされとしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どもの前わたる程はいみじく、そひたちたらむ人の心、騷ぎぬべしかし。ましてさと一度に笑ひなどしたる、いとおそろし。行事の藏人の搔練がさね、物よりことにきよらに見ゆ。褥など敷きたれど、なか〳〵えものぼり居ず。女房の出でたるさま譽めそしり、このごろは異事はなかめり。帳臺の夜、行事の藏人、いときびしうもてなして、「かいつくろひ二人、童より外は入るまじ」とおさへて、おもにくきまでいへば、殿上人など「なほこれ一人ばかりは」などの給ふ。藏人「うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人ばかりおしこりて、こと〴〵しういひたる藏人何ともせず、戸をおし開けてさゝめき入れば、あきれて、藏人「いとこは、すぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞ、かしづきどもゝ皆入る。けしきいとねたげなり。うへもおはしまして、いとをかしと御覽じおはすらむかし。童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顔ども、いとらうたげにをかしかりき。

（考異）○さいで　原本さいくとあり。活本による。○さいしに　原本さゐしきとあり。別本による。○ぞある　原本になし。抄本、一本によりて補ふ。

【釋】○見る人　出會ふ人なり。○とのもり司などの　雲圖抄裏書、辰の日の條に「舞姫參上、於第三間列舞、主殿女孺四人秉燭照、舞畢舞姫退下、云々」と見えて、今日の舞に、秉燭の役など勤むる女孺なり。とのもり司を見よ。○さいで　布帛の小切なり。○さいし　釵子。朝廷にて婦人正裝の時、頭髮に飾るもの也。平安朝の中頃（一條朝時代）より出來しものかといふ。銀にて作る、形圖のごとし。これを附くるには、垂髮の頭の中央に小枕を入れて、瘤の如きものを作りて結びつく。この瘤だちたるものを寶髻と稱す。さて思ふに、古へ釵子といひしは、圖に示せる笄のことならんか。紫式部日記畫卷の寶髻の圖を見るに、笄はあれど、平打の如き釵子はなし。これは後世に作れるものか。元來笄は卽ち釵子なり。字彙に「釵婦人岐笄」とあり。又白樂天が長恨歌に「釵留一股合一扇」とありて、釵子は岐のある物なるをや。和名抄、新撰字鏡などに、釵子の名見えぬも、その故ならん。この考長ければ略く。○物忌のやうにて　物忌の簡のやうにての略。○清涼殿のそり橋に　五節のために、臨時に清涼殿の北階より、承香殿へと造り渡したる假橋なり。江次第に「自清涼殿東廂北階下、到承香殿坤角、假作長橋、云々」。○もとゆひのむら濃　「もとゆひ」は垂髮の元を結ぶ物なり。古へは薄樣紙などよりて作りし也。髻の字を充つ。「むら濃は」紫の村濃染なるべし。○けざやか　氣鮮の義。あざやかなるをいふ。○出でゐたる　とのも司がなり。○うへ雜仕、わらはべ　上雜仕と上童部となり。いづれも婦人にて、五節又は女御入内などの折に限りて、殿上に奉仕する臨時の役なり。○いろふし　色節の義。晴なる事をいふ。この時代多く用ゐたる語にて、空穗、源氏、蜻蛉日記などにも見ゆ。○山藍　諸註、山藍にて摺れる衣とせり。たゞ字の如く青摺の料の山藍や、かざしの料の



釵子



笄

日陰を持歩くものとすべし。山藍は自然生の藍草。○やない筥　柳筥なり。柳の木を、廣さ五分ほどに三角に削りて、絲にて編みたる箱にて、後世には紙縒にて綴ぢたり。その蓋の棧を高くして脚として、置物臺の如くに用る、冠、經巻、筆墨硯など載するも、後世の事なり。貞丈の說に「延喜式、その外上古の書にある柳箱は、柳行李のことなり」と。尚考ふべし。○かうぶりしたるをのこ　叙爵したる男なり。六位の藏人の五位に進みて、藏人を罷めて、無役の地下になりたる者、即ち藏人の五位をいへるなるべし。當時散官なれば、かやうの行事の際には、宮中に召出でて仕はれたりしと覺し。諸註、衣冠したる殿上人と解けるは、衣冠の語無意義なり。藏人おりたる人、及び藏人の五位を見よ。○直衣ぬぎたれて　直衣を脱げさうに、ないがしろに着なしたる體なり。袒褐といひて、右の袍を肩ぬきたるさまか。雲圖抄裏書に、次袒レ褐、着レ沓通二渡殿竝朝餉御湯殿一、廻二五節所一」。○扇や何や　「何や」は笏などもあるべし。○拍子にして　古へ拍子を取るに、扇拍子、笏拍子は常の事なり。○つかさめされとしきなみぞたつ　諺物の一節なり。欄外に注す。官位を昇進さする御使の頻に來ると也。「しきなみ」は重波にて、波の打重り寄せ來る意より、世話しなく頻ることにいふ。「たつ」に波の立つに、御使の立つをかけたり。○そひたちたらむ人の心　局の簾際などに立添ひたらん人の心となり。見物する女房の心をいへり。○笑ひなどしたる　殿上人がなり。○行事の藏人　上官の命を受けて、その事を奉行する藏人なり。雲圖抄、十一月五節事の條に「一腐藏人爲二行事一、有二故障一之時、二腐三腐勤レ之」。一腐の藏人とは、藏人の中の年功者をいひ、二腐三腐とは、それに次ぎたる藏人をいふ。○かい練がさね　二百四十四段を見よ。○しとねなど敷きたれど云々　行事の藏人の局の前にきたる時、褥（坐蒲團）などさし出し敷きたれど、坐する樣子は見えずと也。事多く急がしくて、落着きて坐しても居られぬ樣なり。○女房の出でたる樣云々　女房等の扮裝など、色々と品評して、善惡をいふと也。「出でたる樣」は立出でたる樣子なり。「そしり」の下、などしての語を補ひて聞くべし。○この頃は云々　この頃は、他事はなく、皆五節に關しての話ばかりの樣なりと也。○帳臺の夜　帳臺の試の夜をいふ。十一月中丑の日を用ゐる。この夜、主上常寧殿に出御せられて、舞を御覽あり。五節の當日は辰の日なれど、豫め試み調ぶといふ義にて、試樂とも調樂ともいひ、主上帳臺にましまして御覽あり。五節の舞姫參る。四人の内一兩人、參りの儀式あり。其外は内々參るをば曉參といふ。みな參りと、のほりて、帳臺に出御あり。殿上人ども紙燭に候ふ。主上御直衣御指貫にて、御沓をめさる、事は、此時の外はなし、云々。帳臺におはします程、亂舞あり。びんたゝらなど歌ふ。また大歌小歌などいふ事あり」と。尚委しくは江次第、雲圖抄等を見るべし。○きびしうもてなして　主上御覽の際なれば、嚴重に他の者の出入を禁ずる也。江次第十に「執柄竝藏人頭、行事藏人、立二舞殿東戸下一開闔、舞間禁二關人一」とありて、註に「理髮童女、陪從、下仕外不レ可レ入、頭若行事藏人之外不レ能レ伺二戸外一」とあり。○かいつくろひ　掻繕ひの義にて、舞姫の身のまはりの世話をする女房なり。上の「あし引の山井の水は」の解に引ける後拾遺集の詞書にかいつくろひ仕うまつりける人」とあるは「かしづき」即ち陪從の小兵衛の事なり。されば「かしづき」を世話燒、介錯などの意にて「かいつくろひ」ともいへるならん。諸註、理髮の童女とせるは、次に「わらは」とあるにさし合ひて非なり。○わらは　江次第の註に見えたる理髮童女なり。○おさへて　人を抑へてと也。制するをいふ。○おもにくき　面憎きとなり。○これ一人ばかりは　これ一人ばかりは入れ給へなどの意。「いかでかし」の下、入るべきを略けり。○かたくいふ　頑固にいふと也。○おしこりて略、「これ」は殿上人自らさしていへる也。○うらやみあり云々　貴公だけ許す時は、他人の羨みとなる、故に一人なりとも、何とて入れ申さんやと也。「うらやみあり」は俗のウラミツラミがアル、ウラミツコニナルなどの意。「いかでかし」の下、入るべきを略けり。○かたくいふ　頑固にいふと也。○おしこりて　閉まつて、仰山にいつた藏人を何とも思はず、戸を引開けて、ざんざめいて這入ると、藏人が呆れて「これはひどく無法な世であるよ」といつて立つてゐるのも、面白い。その後に附いて、かしづきの女房達も、皆はひろ、それを見た藏人の氣色は、ひどく殘念さうである。主上も帳臺にお出遊ばされて、久層面白いと御覽なされて居らるゝであらうよ。童舞の夜は甚だ面白い。燈臺に對つてゐるその顏などが、大層愛らしげに美しかつた。

（補註）梁塵秘抄の神歌に、「お前より打上げ打おろしこす波はつかさまきりのしき波ぞ立つ。」の外一首見ゆ。

押凝りてにて、押固まりたるをいふ。この句「さゝめき入れば」につゞく。○さゝめき入れば　騷ぎ立ちて入ればと也。「さゝめき」は俗のザンザメクに當る。○あきれて　行事の藏人がなり。○すぢなき世かな　無法なる世の中よと也。○それにつきて　先に闖入したる女房共の後に附きてと也。○けしきいとねたげなり　これを見たる藏人の氣色が、甚だくやし氣なりと也。「けしき」を、諸本、上に續けて、皆入るけしきと讀みたるは誤れり。○うへもおはしまして　主上も御帳臺におはしましてと也。○わらは舞の夜　卯の日の童御覽の夜なり。これは舞姫の介錯する童女を、主上の御前に召して見そなはす儀なり。清涼殿第一の間に參る。童女は舞姫一人に二人の定なれば、例年は舞姫四人なれば童女は八人なり。しかし召さるゝはその全部にあらず。同時に下仕をも、庭上に召し給ふなり。

評　五節は平安時代の大公事で、また大遊宴であつた。抑も子の日の調習から始まつて、四五日間、毎日〳〵の歌舞遊宴、宮中は引くり返る大騷ぎで、上達部も、殿上人も、女房も、童女も、有頂天となつてしまう時季である。一寸プログラムを作ると、

○丑日　帳臺ノ試(常寧殿)。殿上人ノ亂舞(びんたゝらチ歌フ)。　○寅日　淵醉。諷詠亂舞。御前ノ試。

○卯日　飲宴。童御覽。小忌。國栖ノ奏。猿樂事。　○辰日　豐明節會。五節。小忌大夫大和舞チ奏ス。

こんなやうなものになる。その立派づくめ、綺麗づくめ、面白づくめであつた事はいふまでもない。公卿分、受領分の規定以外に、尊貴の方が、被管筋の者の女をお手人として、舞姫に出されることが、ずつと古くからあつた事は、三善清行の封事にいつてゐる。現に一條帝の永延二年には、四條の皇太后(遵子)から獻られ、源氏物語にも、源氏の大臣が出してゐる。勿論かういふのは、金にあかして磨き立てゝ出す。それがまた見物で、ます〳〵綺羅が張るやうになつた。尤も舞姫を獻るのは、公卿でも受領でも、工面のよい、時の人であるから、競爭的に張合つたものである。榮華物語初花の卷に、

五節二十日まゐる。舞姫の裝束つかはす。右宰相中將の五節に、御かつら申されたるついでに、箱一よろひに薫物入れてつかはす。心葉梅の枝なり。今年の五節いみじう挑みかはすなど聞えあり。東の御前に向ひたる立蔀に、隙もなく打ち渡しつゝともしたる火の光に、つれなうあゆみ參るさまどもゝはしたなけれど、その道にえさらぬ筋どもなればこそと見えたり。業遠朝臣のかしづきに、錦の唐衣着せたりとのゝしるも、實に樣ことに、さもありぬべかりけりときこゆ。あまり衣厚く着せて、たをやかならぬ樣なりといふもどきはあれど、それ今の世の事にはわろからず、右宰相中將もあるべき限したり。ひすまし二人とゝのへたる姿ぞさとびたりと、人ほゝゑみたりし。内の大臣の藤宰相のはた、今すこし今めかしき方はまさりて見ゆ。かしづき十人、小廂の御簾おろして、こぼれ出でたる衣のつまども、したり顔に思へる樣どもよりは、見所まさりて、火影にをかしう見えたり。又春宮大夫の五節に、宮より薫物つかはす。大きやかなる白銀の箱にいれさせ給へり。尾張守匡衡も出したれば、殿の上ぞそれは遣しける。

これを參考にしたら、本文の模樣も、ほゞ見當が附かう。

しかし名譽だけでは、流石に親達も、これだけの大物入をする譯にはいかない。この頃の舞姫には、叙位の恩典がなくなつたから、何の報酬もなくて詰らぬやうだが、只一つかういふ事がある。清行の對事に、

弘仁承和二代尤好内寵、故遍令諸家擇進此妓、即以爲選納之便也、諸家僥倖天恩、不顧靡費、盡財破産、競以貢進。

とあるやうに、御前の試の夜、舞姫が色紙に櫛を包んで、主上の御前においてさがると、その櫛によつて、お目にとまつた舞姫をさゝれて召置かれる、又全部そのまゝ、宮仕を命ぜられて、典侍になつたり、何かする事もあるので、源氏物語にも、

皆とゞめさせ給ひて、宮仕へすべく、仰言ごとなる年なれば、「娘をおの〳〵奉り給ふ。（少女の巻）

とある。

中宮方の女房は、三十人以上四十人近くもあつたらしく思はれるのに、僅十二人のかしづき（陪從）に、餘所から二人も借りるといふのは、非常に尤物を精選するからである。卯の日は小忌の日で、童御覽はあるけれど、舞姫は出ない。そこで、辰の日の節會の夜を、うんと氣を入れて、上達部殿上人の荒膽をひしがうの御趣向と見えた。不意に赤紐つけた青摺の揃ひで、小忌の公達の向を張つた扮裝で押出したのは、他が光つてゐればゐるほど、反つて大當であつた。寛弘五年の五節にも、行成卿がこの蒸し返しをやつて、やはり喝采を博してゐる。その折、大齊院（選子内親王）などは、歌まで贈つて珍しがつたのは、少し頭がおわるい。一時の御趣向に、定制を破つて、後世小忌の女房が出來てきたなどは、面白いともいへる。

五節の局は、廂に舞姫が居り、孫廂などにかしづき共が居並んでゐる。皆一粒選の美人揃だから、君達連がゆかしがるのも、無理はない。實方中將は、この時代の紳士の典型をそなへた才子である。臨時の祭の舞人に召されて、試樂の日、すこし遲刻した爲、もう樂が始まつて、挿頭の花を賜る暇がなかつた。するとすぐ、清涼殿の庭前の竹の臺の竹の枝を折つて、冠に挿して舞出した。その機轉と風情とが、滿場の賞讃を買つて、舞人が竹の枝をかざす先例を開いた。そして小白河殿の八講の段にも、「兵衛の佐返し思ひまうけよ」といはれた程の歌人である。しかし、山井の水の歌は「おぼろげならざらんは」と褒立てるほどの佳作では決してなく、伊勢や小大君の集などに、類歌もあるが、雕蟲の小技をよろこんだ、この時代の好尚に慊つたのである。この人の家集に、

新嘗會の夜、赤紐の亂るゝと、宣方の中將うれふれば、「いかなる紐のとくるなるらん」、宣方「あし引の山井の

水はさえながら」。

とあるのは、本文のと同じ物としか思へない。名までさしてあるから、全く形のない事でもなさゝうだが、尙この草子の方を信ずるのが當然だらう。

返歌の製造は、宮司が一枚加つたので、事件が面白く發展した。返歌も、かけ歌と同調子のもので、旨いとはいへない。しかし、當坐の作は、善惡に關はらず、その場次第で、出藥のするものであること を忘れてはならぬ。小兵衛は、雪山の段で、乞食尼の口眞似をした程の色氣なしだから、年若なうぶな女らしい。辨のお許は大人女房だが、吃だからをかしい。それが忸怩んでいひそこねたのが、自分に取つて仕合はせだとは、大いに謙遜である。實際歌だけは、清少は棄權して居つた。

この記事で見ると、實方は小兵衛に懸想したらしいが、何時か清少と戀するやうになつた。或は、この返歌が取持つ緣の端となつたのかも知れない。

一人の舞姫をはやす爲に、その出入の送迎に、所勞引籠りの女房まで狩出したのは、あまりなやうだが、寛弘五年の五節の時にも、道長が女房の局に來て、居催促で、紫式部などを引張り出した事がある のを見ると、誰もかうした際には、そんな氣持になるものと見える。さてうるさい程に女房の加はつた、この一群の行列は、あら方、左の通りである。

童女二人（持二火取及沓一）。舞姫一人。下仕二人（持二几帳一）。陪從十二人。樋洗二人。上雜仕一人。上童一人。送迎女房二十人

合算すると、ざつと四十一人ある。舞姫の定員は四人だから、この四倍の人數とする。

舞姫の女連が集る。その賑やかさは想ひやられる。その上舞姫の親達まで、五節所には詰めてゐる。

「見る人もをかしう」の句は、主殿司をはじめて、人々の噂を持出す爲の準備である。舞の際に脂燭の

役をつとめる女嬬や、上雑仕、上童も、折柄のめでさにもてはやされるのである。閑人の散位さへ、柳筥などを捧げていそがしさうなのも、興を添へる。殿上の淵酔（酒宴）に、朗詠、雑藝の藝盡し、三獻の儀もすんで、亂舞に風情を盡した上達部、殿上人が、袍衣の肩を脱ぎ垂れて、ほろ醉機嫌に、五節所を廻つてあるいて、實方のやうに、歌を詠みかけるのもある。白酒黒酒の醉ごこちに、扇拍子や笏拍子で、催馬樂や今樣を歌つておしかけるのもある。實に盛んなものだ。どつと笑つたのを恐ろしがつたのは、甚だ女らしい。かうした公事の立役者だとすると、藏人の掻練襲も思なしがちがふ。紫式部日記の、

この頃の公達は、只五節のをかしき事を語る。「すだれのはし、帽額さへ、心々にかはりて、出居たる頭付、もてなしけはひなどさへ、更にかよはず、樣々になんある」と聞にくく語る。

帳臺の夜の一章は、最も勝れて面白い文である。一體、男は藏人頭と行事の藏人、女は舞姫及び童女は、こゝの「女房のいでたるさま——この頃はこと事はなかめり」に全く符合する記事である。

かしづき四五人の外は、一切入場させない規則なので、戸口の處には、藏人頭と行事の藏人とがゐて、開閤を嚴重に司つて、小面にくいほど、闖入者を追拂つてゐる。「これ一人は」、「うらやみあり」の一問一答は、相互の氣持と、この場合の氣持とを、簡單明瞭によく現してゐる。女房の亂入は、多勢に無勢といふ形ではあるが、元來その眼中に藏人などはない、驕慢な振舞であることが、歷々と見えてゐる。かしづきは役柄だけに、聊か遠慮してゐたのが、無役の女房連がはひる位ならばと、續いてはひる。所で職務執行の妨害をされた藏人は、「ねたけなり」位の事で、指を食はへて引込んでゐる。甚だ意氣地がないやうだが、これも時の興だから、やかましくいふのは、畢竟野暮であらう。「上もをかしと御覽ずる」ではないか。童の顔の美しさは、燈臺の火があるので、よく現れてくる。

この段は、只五節の繁華を叙したものとして見るが至當であるが、中宮の五節をお出しなされたのは、

（口譯）或者が「無名といふ琵琶を、主上が中宮のお方へ持つてお出なされたのを、女房達が見などして彈鳴しなどする」といふから、上の御局にきて見ると、女房達はそれを彈くのではなくて、緒などをおもちやにしてゐる。この琵琶の名は、何と申しますか」など申上げると、中宮が「たゞたわいもない物で、名もない」と仰になつたのは、面白い御返事で、中宮樣は、やはりすぐれてめでたいと思はれた。淑景舍などがこちらへお出なされて、御

何時頃の事かも知りたい。實方が中將になつたのは正暦二年九月で、長徳元年一月には陸奥守になつて、京には居ない。正暦二年は、圓融院の諒闇中だから、節會はない。されば、正暦の三、四、五年のうち（五年の翌年は長徳元年）の五節である。さて實方集に、清少と長く情交のあつたやうに見えて「絶えぬ中にてあるを、久しく音づれぬを」などあるのによると、正暦五年では、あまり間が無さ過ぎる。多分正暦三、四年のうちの五節であらう。

七十九段

「無名といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせ給へるを、見などして、かき鳴しなどす」といへば、ひくにはあらず、緒などを手まさぐりにして、女房「これが名よ。いかにとかや」など聞えさするに、宮「たゞいとはかなく、名もなし」との給はせたるは、なほいとめでたくこそ覺えしか。淑景舍などわたり給ひて、御物語のついでに「まろがもとに、いとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都の君の「それは隆圓にたうべ。おのれが許にめでたき琴侍り　それにかへさせ給へ」と申し給ふを　きゝも入れ給はで、なほこと事をのたまふに、いらへさせ奉らむと、あまたたび聞え給ふにたるものを」との給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。この御笛の名を、僧都の君もえ知り給はざりければ、唯うらめしとぞおぼしためる。これは職の御曹司

詰の序に、「私の所に大層美しげな笛の笛がありまます。故殿が下さいました」と仰になるのを、僧都の君が「それはこの隆圓に下さい。手前の所に結構な琴がございます。それにお換へ下さい」と仰しやるのを、淑景舎がお耳にも留めないで、やはり餘所事を仰になるので、御返事おさせ申さうと、僧都の君が度々申上げられるのに、やはり何とも仰せられないので、中宮様がついな換へじと淑景舎は思召したものを」と仰になつたが、非常に面白い事が限もない。いな換へじといふ笛の名を、僧都の君も、御承知なかつたので、只怨めしいと思召してゐるやうである。これは職の御曹司に、中宮のあらせられた時の事である。主上のお手許に、否換へじといふ名の御笛があつたのである。その名を借りてお洒落になつたのである。

（口譯）一體主上の御前にある物は、琴も笛も皆珍しい名が附いてゐる。琵琶は玄上、牧馬、井手、渭橋、無名など、また和琴なども朽目、鷽釜、二貫などいひます。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二、何やかやと、その外多くその名が聞えたが、忘れてしまつた。「宜陽殿の一の棚に」といふいひ草は、頭中將が何時もいつて居られた。

におはしましゝ時の事なり。うへの御前に　いなかへじといふ御笛のさぶらふなり、

釋　○無名　ムミヤウ。江談抄に「无名ト云高名ノ琵琶ヲ、上東門院寶物ニテ令レ持給之間ニ、濟畋三位ノ三條亭令ニ御座一間、燒亡了」とあり。春註に「昔より禁中にありし故、定子の御方へもて渡らせ給へるなるべし。さて後、上東門院の名物とはなれるにや」とあり。○御琴　樂器の絲物を、古はすべて琴といへり。故に琵琶をも琴といふ也。○うへのもて渡らせ給へるを　主上の中宮の御方に持ちて來給へるを也。○見などして　或女房の見などしてと也。○といへば　と女房達のいへばと也。「無名云々」より「鳴らしなどす」までは、女房達の取沙汰する詞なり。○ひくにはあらず　この句上文に旨く續かず、必ず脫文あるべし。今は假に、來りてみるにその女房はを、この句の上に補ひて聞くこと、せり。○緒　絃をいふ。○いかにとかや　いかにとかや申すの略。○いとはかなく名もなし　これはいとはかなくて、名も無しと也。「はかなく」は、しかとしたることもなき詰らぬ物にての意。「名もなし」に琵琶の銘の無名を利かせて知らせたる也。○なほいとめでたくこそ云々　この「なほ」は中宮の何時もめでたくあらせらるゝを承けていへる也。○淑景舎　中宮の御妹。原子を見よ。○渡り給ひて　中宮の御方に渡り給ひてと也。○故殿　御父道隆をいふ。三位中將を見よ。○えさせ給へり　下されたりと也。○僧都の君　隆圓。道隆の第四男にて、中宮の御弟なり。早く出家して、正暦五年十五にて權少僧都となる。寬弘八年四月權大僧都となり、長和四年寂す。年三十七。小松僧都と號す。○たうべ　たべの音便にて、給への意。○いな換へじとおぼいたるものを　否換へじと思ひたるものをと也。「おぼいたる」は覺しの音便。否換へじといふ御物の笛あるにより、その名の如くに、淑景舎の御笛も、琴には換へじと思し召しなどせるものを、しか强ひ給ふなと洒落れ給へる也。○この御笛　御物の否換へじの笛をさす。○僧都の君も「も」文字重く見て、俗のサヘモの意に解すべし。○たゞうらめしとぞ云々　洒落がわからずして、換へぬことをのみ、ひたすら怨めしく思したるやうなりと也。○これは　この笛の話はと也。○うへの御前に云々　否換へじの笛のことを、こゝにて說明せる也。江談抄に「不不レ換、是笙名也、唐人賣レ之、千石ニ買ハント云、伊奈加倍志ト云クレバ、以レ之爲レ名」。

御前にさぶらふものどもは、琴も笛も、皆珍しき名つきてこそあれ。琵琶は玄上、牧馬、井手、渭橋、無名など、又和琴などぞ聞ゆる。水龍、小水龍、宇多の法師、釘打、葉二、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。「宜陽殿の一の棚に」といふことぐさは、頭中將こそし給ひしか。

（考異）○井手　原本ゐいへとあり。一本による。

釋　玄上　ゲンシヤウ。玄象とも書く。禁祕抄に「玄上、累代寶物也、置ニ中殿御厨子一、根源、樣人不レ知レ之、掃部頭貞敏渡唐之時、所レ渡琵琶二面、其一歟。凡此琵琶、云レ體云レ聲、不可說未曾有物也。撥面文消所々有ニ赤色一、不レ知ニ其繪一、代々有ニ沙汰一未レ決。俊房（堀河左大臣俊房也）云、良逋云琵琶移ニ玄上一、彼撥面文不レ可レ違。彼唐人打毬之形也」。又いふ「或曰、玄象呑ニ青鉢水一、所謂號ニ玄象一。又玄上宰相獻ニ延喜帝一仍號ニ玄上一雨說也。但妙音院入道藤原師長付ニ玄上一說歟」。○牧馬　モクマ。拾芥抄に「與ニ玄上一雙名物也」。絲竹口傳に「牧馬は、槽に四角ある馬の形を木繪に彫入れたり」。○井手　ゐで。江談抄に「井手ト云琵琶、高名者也。延喜孫ニテ十五皇子ニ、愛宮ト申人ノ琵琶、傳レ今在ニ宇治寶藏一」。○渭橋　キケウ。拾芥抄に「渭橋、又高名琵琶也。一云大和琴」。○和琴　ワゴン。一に大和琴とも東琴とも、單にアヅマともいふ。體は箏に似て短小、桐を以

て製し、大中小の三種あり。大は長さ六尺二寸、中は六尺、小は五尺或五尺八寸、横六寸なり。無名抄に「和琴の起りは、弓六張をひき鳴して、之を神樂に用るけるを、煩はしとて、後の人の琴に造りなせると申傳へたり、云々」。○朽目　江談抄に、その名出でたり。拾芥抄に「或朽部」。○臨竈　拾芥抄、絲竹口傳には箏の名物とあり。いかゞ。○二貫　フタヌキ。未詳。○水龍、小水龍　江談抄に「横笛者、大水龍、小水龍、天曆御時寶物也」。絲竹口傳に「大水龍は震旦の商人渡海するに、海中にて船とゞまり、笛を海に入れつ。赤くいかめしき口を指出して、笛をくはへて引入りぬ。又後にかの笛を入れし程にて、この商人試にいふやう、我商ひして金千兩まうけたり——金を入るゝに、前の如く——商人この笛を得て歸りぬ。云々」。○宇多法師　同書に「宇多法師、寬平法皇御和琴也。御遊之時、先御多良志止召、云々」、河海抄に「一條院御時内裏燒亡之時、燒失、云々」。源氏にも見えたり。○螺打　未詳。拾芥抄には、笛部に見えたり。○葉二　ハフタツ。江談抄に「葉二者、高名横笛也。號二朱雀門之鬼笛一是也。淨藏聖人吹レ之時、以二藏人某一召二此笛一。藏人不レ知、笛名一、只ハフタツマキラセ給ヘト申ニ、入道殿、何事モ可レ承ニ、齒ニツコソ得カクマジケレ。若此葉二ノ笛歟トテ令レ進給、云々」。十訓抄に「この笛には、葉二つありて、一は赤く一は青くして、朝毎に露おく、云々」。○宜陽殿　ギヤウデン。拾芥抄に九間四面とあり。當時よき樂器や書籍の類を置かれたる所なり。西宮記に「納殿、累代御物在二宜陽殿一、恒例御物納二藏人所一」とあり。（附圖參照）○一の棚にといふことぐさは云々　よき樂器を褒むる詞に、頭中將のいへるなるべし。宜陽殿中にても、第一の棚に置くべき程の名器なりといふ意。「ことぐさ」は言種の義にて、いひ草におなじ。○頭中將こそ　頭中將が常にいひ給へりと也。「頭中將」は藤原齊信なるべし。

評　中宮は御父道隆公が猿樂言を好まれた御氣質を傳へて、「はかなく名もなしや」、「否換へじ」の秀句ぐらゐは、何の苦もなく、ヒヨイ〳〵御出來になつたものと見える。それが奉仕者の眼からは、めでたくてたまらぬのである。淑景舍の笙の笛を、隆圓の所望したのは、その笙が名器であり、親の形見でもあるからだか、交換の理由としては別にある。それは笙その物が、女に用のない樂器だからである。全く寶の持腐れになるから、女に相應した琴と交換しませうといふのが、口實らしい。然し、淑景舍は、親の形見だからお手放しにならぬのであらう、隆圓がせがんでも、一向取合はぬのは、實の弟だから、多少安くあつかつて居られる氣味もあらう。隆圓は洒落が通じないので、一緒に快く笑つてしまふ譯にいかず、獨怨めしがつて居るなどは、秀句の可笑味の反映になつて、いよ〳〵をかしい。實に活殺自在な筆づかひて、叙事の妙を極めてゐる。

宜陽殿の一の棚は、源氏若菜の卷にも、

この御琴は宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御琴、云々。

と同じ事のやうで「一の棚」といつた點が、殊に樂器通の特色を發揮してゐる。

八十段

うへの御局のみすの前にて、殿上人日ひと日、琴、笛吹き遊びくらして、まかんで別るゝほど、まだ格子をまゐらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、とのあきたるがあらはなれば、琵琶の御琴を、たゞざまにもたせ給へり。紅の御衣のいふもよのつねなる、うちも又張りたるもあまた奉りて、いと黒くつやゝかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけて、とらへさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、譬ふべきかたなくめでたし。近く居給へる人に

（口譯）上の御局の御簾の前で、殿上人が終日琴を彈き、笛を吹きして遊び暮して、退散する時分、まだ御局の御格子をおろさないのに、御燈臺をさし出したので、外のあいてゐるのがあらはであるから、琵琶

さし寄りて、清「なかば隠したりけむも、えかうはあらざりけむかし。それはたゞ人にこそありけめ」といふを聞きて、みちもなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、女房「宮」『我は知りたりや』となむ仰せらるゝ」と傳ふるもをかし。

（考異）○うちも　原本うちきとあり。古本による。○みちも　原本こいちもとあり。抄本による。

評　○うへの御局　清涼殿中の弘徽殿のなり。○琴笛ふきて　琴彈き笛吹きてと也。「吹く」は笛をのみ承くる語なれど、かくいふは熟語の修辭法にあること也。土佐日記に「雨風吹かず」、宇治拾遺に「手足の向きたらん方に行くべし」などを思ひ合はすべし。○格子をまるらぬに　御局の前の格子をおろさざるうちにと也。○おほとなぶら　大殿油なり。燈火をいふ。○さし出でたれば　燈臺に火を點じて持出たる也。○とのあきたるがあらはなればゆるもの也。「と」は外なり。○たゞざまに　たてざまの轉にて、眞直なる樣をいふ。琵琶にて御顏を遮らん爲に、立て、持たせ給へる也。○御衣のいふもよのつねなる　御衣のめでたしなどいふも、世の常なるにと也。いかに褒めても尋常になりて、その美しさに及びがたき程立派なるをいふ。「世の常なる」の下に、。を補ひて聞くべし。これは上着のさま也。○うちも又張りたるも　うちたる御衣も、又張りたる御衣。もの略。布帛の艶を出すために、砧にて打ちも、又板引にして張りもする也。これは下着のさまと見ゆ。○あまた奉りて　紅の袴の下に、打ちも張りもしたる衣を、幾つとなく重ねたるなり。○これを重袴といふ。「奉りて」は貴人の料に物を具ふることより轉りて、貴人のそれを服用し給ふをいふこととなれり。こゝは著給ひての意。○黒くつやゝかなる琵琶　景代の名器のさま也。○そばより　琵琶の片側よりなり。「見えさせ給へる」につゞく。○けざやか　氣のあざやかなるをいふ。俗のハツキリ

中宮に申上げると、中宮がお笑ひなされて、「お前はその譯を知つて居るか」と仰になつた。それをその女房が立返つて、自分に傳へ聞かせるのも面白い。

に當る。○近くゐ給へる人　「近く」は清少自身の近くなり。「人」は女房なり。「居給へる」と敬語を添へたるは、最も上臈の人なるべし。○なかば隠したりけむも云々　白樂天の琵琶行に「移レ船相近邀相見。添レ酒廻レ燈重開レ宴。千呼萬喚始出來。猶抱二琵琶一半遮レ面。」とあり。倡家の女の恥らひて、琵琶を取り出來。猶抱二琵琶一半遮レ面。」とあり。倡家の女の恥らひて、琵琶を取りて、半面を遮りたる風情を稱へたる句なり。今中宮の琵琶をたて樣に持ち給ひて、御顏を蔽ひ給へる樣は、かの琵琶行の女が、半ば隠したりし風情も、これほどまでには、優に美しく氣高くめでたくはあらざりしならんと也。「かうは」の下、人を略き、「かうは」の下、めでたくを含めり。○それはたゞ人にこそは云々　琵琶行に稱へし女は倡家の者にて、平民にてありしならん、とても此尊き中宮の御めでたさと也。「たゞ人にこそ」は平人、凡人などの意。○いふを聞きて　いふをその女房の聞きてと也。○みちもなきを　中宮の御前に、人多かりし故なるべし。○わりなくわけ入りて　その女房がなり。○啓すれば　清少の詞を取次ぎて、中宮に啓上すればと也。○わらはせ給ひて　中宮がなり。○われは知りたりやと仰せらるゝと　汝はこの意味を知りたるかいかにと、中宮の私に仰せられたりととも也。「われ」はその取次ける女房をさして中宮の宣へるにて、二人稱なり。○つたふるも　取次ぎたる女房が、中宮の御詞を承りて立歸りて、それを清少に傳ふるもと也。「笑はせ給ひて」以下、對話と地の文と混雜して、文意明晰ならず。省筆の過ぎたるものならん。

評　「半ば隠したりけむも」と、樂天通の比喩は、なか〳〵のハイカラ振である。「われは知りたりや」で、中宮は御承知であるが、取次の女房には、一向通じてゐない樣子が見える。さてこの文に就いて、最も大切なのは、この詩句の引喩を思ひ付くまでの道程である。殊にこの道程のうちに含まれてゐる氣分である。管絃の餘韻が、たつた今絶えて、殿上人が退散する黄昏ごろ、主殿司が燈臺をさし置く、女房が取入れる、すると御簾越にあかりがさす、照りかへす中宮の色々の御衣の光、黒びかりする琵琶、白き

御額、更に透影のあらはなのを厭うて、琵琶にお顔をおほはれた御仕打、これらが清涼殿角の上の御局内に收まつた瞬間の光景なのを想ふと、清少がいつた通り、何とも譬へやうがなくめでたい。隨つて、かういふ印象を與へ得た筆の力も、亦めでたい。

八十一段

御めのとの大輔の、けふ日向へくだるに、賜はする扇どものなかに、片つかたには日いと花やかにさし出でて、旅人のある所、井手の中將の館などいふさま、いとをかしうかきて　いま片つかたには、京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて　遠くこそえいくまじけれ。

評釋　○御めのとの大輔　中宮の御乳母たりし人なるべし。詞花集に、この「あかねさす」の歌を載せ、その詞書に「つねに侍りける女房の、ひうがの國へ、云々」とあり。これを抄などに、中宮の弟周家の妻にて、一條院の御子の乳母たる大輔とせるは、甚しき時代違なり。○たまはする扇ども　餞別に賜る扇とか」とある中宮の御兄弟をいふかといへる説もあれど非なり。このあたり、一本には「かたつ方は日い

（口譯）中宮の御乳母の大輔が、今日日向へ下るにつけて、御餞別に下される扇などの中に、片一方は日が大層晴れ〴〵とさし出で、旅人のゐる所、井手の中將の館などいふを、大層面白く描いて、今一方には京都の繪で、雨がひどく降つてゐるのに、物思して外を見てゐる人など描いたのに、

あかねさす日に向ひても思ひ出よ都は晴れぬながめすらむと

文詞のやうに、中宮が御手づからお書きになつたのが、哀であつた。そんな情深い御主君をお棄て申して、遠くはとても行かれまいことである。

れた日に向つても思ひ出したがよい）

とうら、かにさしたる田舍の、館など多くして、今かたつ方は京のさるべき所にて、雨いみじう降りたるに」とありて「あかねさす」の歌を擧げたり。○京のかた　京の繪なり。「京」は音にキヤウと讀む。○ながめたる　物思ひつゝ見出したると也。中古文に見えたる「ながめ」は、すべてこの意なり。○あかねさすの歌　「あかねさす」は日の枕詞なり。「あかね」は赤根の義にて、茜草をいひ、又茜色をいへり。「さす」は簪さす、日影さすなどのさすにて、光り耀くこと也。即ち「茜さす日」は茜色に光る日といふ意なり。鹿持雅澄の解に、ねは添辭にて、赤指日なりとあるはいまだし。一說、緋に日をかけたるにて、緋を染むるには茜をさす故なりと。これは捨てがたし。「日にむかひ」は國名の日向を寓せたり。「ても」のもは歎辭。「ながめすらむ」は悵望の意のながめに、長雨（ナガアメの約）をかけたり。歌の意は都の方にては、いつも〳〵晴れやらぬ雨にしほれて、打詠めて居るならんと、晴れたる日に向ひても思ひ出せよと也「日にむかひても」は「晴れぬながめ」に對したる句なり。何時も其方の事を思うてながめする我を、京の方を望む毎に思ひ出せといふ意を含めたる也。○詞に御手づから云々　歌のやうに書かず、文詞のやうに、中宮御自身に書き給ひしはと也。○さる君を云々　さばかり思召す主君をさし置き奉りてとも。その餘意を含めり。

評　當時旅行者の餞別には、幣袋や布帛を贈ることの外に、必ず缺くことの出來ないのは、扇であつた。よかれあしかれ、扇子一本は、必ず贈る習慣であつた。その理由はごくタワイもない事で、扇に逢ふの響あるから、またあはれるようにと、祝福するのであつた。この扇は、雲形か何かに塵地を撒いて、扇面を二段にかぎつて、左右に晴雨各樣の光景を描いたものと見える。日向から京都は、北窓ではあるが東に當るから、日に向ふのは、即ち京都の方に向ふこと、なるので、「みやこは云々」と思ひ出よといふ

ことも、希望が自然であり得る。御歌には大輔をしたふ切なお心持が、十分にあらはれてゐる。大輔の日向に下る事情は、夫が受領にでもなつたからであらう。しかし一任四五年の職だから、何も一所に往かずとも、養君ではあり、かほど御眷顧も厚い君の御許に居たがよいと、大輔の心淺さを誹つてゐる。どこまでも御主君本位である。

春註に、「道隆かくれ給ひ、伊周公左遷などの頃、心みじかき乳母にて、見捨てまゐらするにや」とあるのは面白さうだが、もとより確說ではない。「はれぬながめ」は、只大輔の乳母の離愁に曉ぐ御涙としよう。

八十二段

ねたきもの　これよりやるも、人のいひたる返しも、書きてやりつるのち、もじ一つ二つなど思ひなほしたる。とみの物ぬふに、縫ひはてつと思ひて、針をひき抜きたれば、はやうしりを結ばざりけり。又かへさまに縫ひたるも、いとねたし。

釋 ○ねたきもの　殘念なるものと也。○これよりやるも　此方より遣る歌もと也。○人のいひたる返しも　人のいひておこしたる歌の返歌もと也。○思ひなほしたる　の下、ねたきものなりを略けり。○とみの物　急ぎの物なり。○はやうしりを結ばざりけり　初より絲の尻を結ばざりしとなり。○かへさまに　反對になり。

南の院におはすころ、西の對に殿のおはすかたに、宮もおはせば、寢殿にあつまり居て、さうざうしければ、たはぶれあそびをし、渡殿にあつまり居などしてあるに、

（口譯）殘念なもの　こちらから詠んでやる歌も、人からいつてきた歌の返歌も、書いてやつた後で、一文字二文字考へ直したのは、殘念なものである。急ぎの物を縫ふに、縫上げたと思つて、針を引拔いてみると、初から絲の尻を結んでなかつた。又反對に縫つたのも、甚だ殘念なものである。

（口譯）南の院に中宮のお出の頃、西の對の屋に父の殿が居られるその方に、宮も入らせられるので、女房達は寢殿に集つてゐて、寂しいから戲れ遊をしたり、渡殿へ出て集つてゐたりなどして居ると、これは只今急に御入用のお召物である。誰彼も集つて、時刻を移さず、縫つて差上げなさいといつて、平ぬきの切を渡されたので、皆寢殿の南面に集つてゐて、お召を片身ごろづつ、誰が一番早く縫上げるかと競爭しつゝ、近くも向きあはずかけ離れて縫ふ樣子も、甚だ氣遣ひじみてゐる。命婦の乳母が、大層早く縫上げてさし置いたが、行長の方の御身ごろを

宮「これ只今とみのものなり。誰も〳〵集りて　時かはさず縫ひて參らせよ」とて、平ぬきの御衣を給はせたれば、南面にあつまり居て、御衣かたみづつ、誰かとく縫ひ出づるといどみつゝ、近くもむかはず縫ふさまも、いと物ぐるほし。命婦の乳母、いと疾く縫ひはてゝうち置きつる、ゆだけのかたの御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへずまどひ置きて立ちぬるに、御背合はせむとすれば、早うたがひにけり。笑ひのゝしりて、人々「これ縫ひ直せ」といふを、命婦「たれがあしう縫ひたりと知りてか直さむ。綾などならばこそ、裏を見ざらむ縫ひたがへの人の。げになほさめ。無文の御衣なり。何をしるしにてか。直す人誰かあらむ。唯まだ縫ひ給はざらむ人に、なほさせよ」とて、聞きも入れねば、人々「さいひてあらむや」とて、源少納言、新中納言など縫ひ直し給ひしを、それはよさりのぼらせ給はむとて、宮「とく縫ひたらむ人を、思ふと知らむ」と仰せられしかばとぞ。

（考異）○たはぶれ遊　原本ふれ遊とあり。別本による。○仰せられしかばとぞ　原本とその二字なし。別本による。

釋 ○南のゐん　東三條の第の南院なり。東三條の第は、拾芥抄に「二條南町西、南北二町」とあり。道隆の邸宅なり。正曆四年三月燒失せしが、再建ありたりと見えて、道隆はこゝにて薨じたり。諸註誤れり。○おはします頃　宮のなり。○西の對に　その西の對にと也。寢殿造を見よ。○殿　道隆公。三位

中將を見よ。○寢殿にあつまりて　女房達がなり。○これ只今とみの物なり　これは只今急に入用の物となりと也。「これ」は出されたる御召物の料をさす。○時かはさず　時を移さずと也。時のかはるを見よ。○平ぬき　眞賴は緯絲をこめて織りたる絹といへど、濱臣が「平ぬきは平ぎぬの誤か。雅亮裝束抄に、平絹の汗衫とあり」といへる、從ふべきが如し。平絹は、音にはヘイケンといふ。綾のなき絹なり。○南おもてに　寢殿のなり。○かたみ　片身なり。○いどみつゝ　競爭するをいふ。○近くもむかはず近くも人と對せずと也。○命婦のめのと　未詳。中宮の乳母たりし人なるべし。中宮の御子生み給ひたるは、この時より五年も後のことなれば、御子の乳母にはあるべからず。○うちおきつる　の下、がを略けり。○ゆだけの方　衣服の行の廣き方なり。美隆の說に「下卷の末にも『かたつかたゆだけに、衣たつ人いとにくし。あまた重ねてきたれば、ひかれてにくし。綿など厚きは、むねなどもきれて、いと見苦し云々。さてはもろゆだけはよし。それも猶女房のさうぞくにては、ところせかめり。をとこの冬きたらんにも、かたつかたおほきにぞあらんかし』とあるを見れば、或は片身のみゆだけを廣くし、或は左右共に、ゆだけを廣くしたるもありきと見ゆ。後拾遺、神祇に「あめのしたはぐくむ神のみそなればゆだけにぞたつみづのひろ前」とあるも、行を廣く裁つといふ意なり、云々」。但、こゝは「ゆだけのかた」の御身とあれば、何れかの片身のみを廣くしたる事は明かなり。春註にも、和訓栞にも「左の方をいふ」とあるいかゞ。○そむきざまなるを　表裏を取違へて縫ひたるをと也。○とぢめもしあへず　縫ひじまひのとめもしきらずと也。○御背あはせむとすれば　片身づつ受持ちて縫ひたるを、背にて一つに合はせ縫はんとするにと也。○笑ひのしりて　女房達がなり。○なほせといふを　直せと、命婦にいふをと也。○たれがあしう云々　誰がこれは自分の縫ひそこなひと合點が往つて直さうぞ、縫ひそこなひとは思はねば直さずと也。「か」は反語。○綾など

に置かれうか」といつて、源少納言、新中納言などが、それを縫直された顏を見てゐたのが面白かつた。これは晩方參內なさらうといつて、中宮が「一番早く縫上げた人を、自分を愛しくれる人と思はう」と仰になつたから、かう競爭したのであるといふ。

（口譯）
見せてはなるまい人に、外へ遣る文を間違へて持つて往つたのは、殘念なものである。その使が「ほんに癪忽しました」とはいはないで、口ごはくいひ爭つたのは、人の見る目を思はないなら、走りかゝつても打つだらう。「風情のある萩や薄などを植ゑて見るそちに、長櫃を持つ

云々　綾は文卽ち模樣ありて裏表の見やすき物なれば、縫ひ違へたる人のあやまりなれば、直しもせんと也。○むもんの御衣　これは無文の御衣なりと也。平絹は羽二重の如き物なれば、表裏の差別たしかならぬ也。○何をしるしにてか　の下、裏表を見わくべきを略けり。この句を下に續けて、諸註に解けるは非なり。續くる時は「か」の辭重なりて、文法上の誤に陷るべし。○なほす人たれかあらむ　別本に「何をしるしにてかなほさん」とあり。○とて聞きも入れねば　といひて命婦の聞入れねばと也。○さいひてあらむや　さる無法なる事をいひて縫直さずに置かるゝか、否豈かれはせずと也。○源少納言、新中納言　未詳。○見やりて　清少が見やりたる也。○よさり　夜になりてと也。○のぼらせ給はむとて參內し給はんとてと也。○思ふとしらむ　我を愛する人ぞと思ひ知らんと也。これは中宮の御詞なり。○かばとぞ　かばかく挑みかはしゝなりとぞいふの略。

見すまじき人に　ほかへ遣りたる文、とりたがへてもて行きたるねたし。「げにあやまちてけり」とはいはで、口がたうあらがひたる、人目をだに思はずば、走りもうちつべし。おもしろき萩、薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたるもの、鋤などひきさげて、たゞほりにほりていぬるこそ、わびしうねたかりけれ。よろしき人などのあるをりは、さもせぬものを、いみじう制すれど、「たゞすこし」などいひていぬる、いとねたげなり。見ひ、さりとて、我をばいかゞと思ひたるけはひにいひ出でたる、いとわびしうねたく　追ひてすまじき人の、文をひき取りて、庭におりて見たてる、

行けど、簾のもとにとまりて見るこそ、飛びも出でぬべき心地すれ。

（考異）○家にさるべき所の下部などの　原本になし。抄本による。

評　○見すまじき人に　見せては差支ある人にと也。○取たがへて　使がなり。○いはで　これも使がなり。○口がたうあらがひたる　口こはくいひ爭ひたると也。使の者の、わが過ちを自認せずして、さは仰せられずなど、飽くまで抗言したるをいふ。○長櫃もたるもの云々　長櫃を持ちたる者出來りてと也。「長櫃」は足附の長持なり。その製唐櫃におなじ。○たゞほりにほりて　一途に掘りてと也。「たゞ」はひたすらの意。「ほりにほる」は掘るを強くいはん爲、いひ重ねたる也。○よろしき人などのある折は　相應なる男などの居る折はと也。「よろしき」は例の可なりの意。○たゞすこしなど　兎少し掘りゆくなどの略。○いひていぬる　その下衆のいひて、悉く掘取りていぬるの略。○さるべき所の下部　然るべき權勢ある家の下部なり。○さりとてわれを云々　よし無禮をしたりとて、あの國司風情が、この自分をばいかにする事の出來得べきぞの略。○文をひき取りて　よそより來る手紙を引取りてと也。○見たてる　見ながら立てると也。○簾のもとにとまりて　自分がなり。○飛びもいでぬべき　簾の外になりり。

すゞろなる事腹だちて、同じ所にも寢ず、身じくり出づるを、しのびて引きよすれどわりなく心ことなれば、あまりになりて、人も一さばよかなり」と怨じて、かいくくみて臥しぬる後、いと寒き折などに、唯ひとへぎぬばかりにて　あやにくがりて、大かた皆人も寢たるに、さすがに起き居らむあやしくて、夜の更くるまゝに、ねたく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも、物うち鳴りなどし

て恐ろしければ、やをらまろび寄りて、きぬ引きあぐるに、そら寐したるこそいとねたけれ。「なほこそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

評　○すゞろなる事腹立ちて　女がなり。○身じくり出づる　身退き出づるの意といへり。「身じくり」は或は身くじりの誤にて、身抉りの意にはあらざるか。即ち體にて衾を動して抜け出づることならん。○しのびて　男がなり。○わりなく心ことなれば　無上に心の合はざればと也。女の心が男と反するをいふ。○人も　「人」は男をさす。○さばよかなり　さらばそれにてよきよと也。女の拗ねたるに、男も立腹して、まゝにせよと思へる也。○かいくゝみて　衾をばなり。搔含の義にて、衾を引被くをいふ。○折などにて　折などにての意。○單ぎぬばかりにて　女がなり。○あやにくがりて　寒さをなり。○さすがに　身じくり出でたるものゝ、さすがにと也。○起きてぞいぬべかりける　最前に起きて往けばよかりしと也。今は夜深にて、何處へも往かねたる體なり。○まろび寄りて　男の方へなり。○きぬ引あぐるこの「きぬ」は衾の衣なり。即ち夜具。○そら寐したる云々　寐たる振して長時間自分を苦めたるを、悔しく思ふなり。○こはがり給はめ　「強る」は俗の鰾鉾張にて、強情を張るをいふ。○うちいひたるよの下、いと〳〵ねたしの意を含めり。

評　「かへさまに縫ひたるもねたし」から、忽ちふるい記憶を回想して、南の院の一章が書かれた。中宮は正暦三年十一月廿七日に、内裏から、新造の二條の院に遷られたのは、十二月に入つてからの事だらう。そして八日の夜には、其處から御參內遊ばされたのである。日本紀略に「八日、中宮從二攝政第一參內」とある。攝政は中宮の御父道隆公のことで、第は卽ちこの南院をいふのである。（主上御年十三、中宮十七、清少廿七八ゝ）

中宮の御座所として、寢殿をば明渡して、父の殿は西の對にうつられたものと見える。中宮はまた、

も、外まではしたないので、簾のきはに止まつて見てゐるのは、くやしくて、飛出しもしさうな心持がする。

（口譯）何でもない事に、女が腹を立てゝ、一所にも寢ず、もじ〳〵して拔出すのを、男がそつとひき寄せるが、無暗につんとしてゐるので、男もあまりに思つて「それならさうするがよい」と怨をいつて、夜具を引被つて寢てしまつた後、それが甚だ寒い晩などで、女は只單物だけでゐるので、寒さを生憎がつて、大抵人も皆寢た時分に、自分獨起きて居ようのも變なので、夜の深けるにつけて悔しくて、さつきに起きていつて

しまへばよかつたなと思つて寢てゐるに、奥の方でも、外の方でも、物音などがして恐ろしいので、そろりと男の方へころがり寄つて、夜具を引上げると、男が今までそら寢をしてゐたのが、ひどく殘念である。そして「やはりもつと强情を張つてお出なさい」などいつたことよ。おいくやしい。

その膝下をお慕ひなされて、おなじ方にお出になつたので、寢殿はがら明だから、女房達のよい遊場となつた。ところで急な裁縫御用、手明きが多いから、一つ物も引張りあつて、造作なく仕上げる。かうした臨時の急御用も、平生不用な奉公人を、澤山召抱へて置かれる理由の一つだらう。南面に集つたのは、光線が明いからである。縫ひそこなつた命婦が、小理窟を捏ねて、横車をおす所などは、甚だ面白い。こんな無理をとほしても、端の者が、澁々ながら縫直すといふのは、この命婦なかくのしたゝか者である に違ない。稱呼から推すと、源少納言は清少級の下臈で、新中納言はすこし立上つてゐるが、新參らしい。(古參の中納言に對した名だから)ところで命婦は、中宮の御乳母だから溜らない。わが儘一杯に威張りぬく筈である。「見やりてゐたりし」と、餘所事のやうに、清少がすましてゐるのは、既に縫ひをはつた仲間と見える。中古文に、宮女房の奉公振を、これほどに具象的に記述したものは、他に見當らない。珍しい文として頂かなければならぬ。

おのが失策を、口がしこうあらがふ奴は命婦の乳母の儔で、下衆にはこんなのが、昔もおほかつたと見える。しかしお門ちがひをするのが無理もない程、似たやうな屈先が多かつた事も、記憶しなくてはならぬ。卽ち男には通ふ女が幾人もあり、女にはくる男が幾人もあつた。赤染集に、

この人(あきのぶの女)こと男の許にやりける文を、もてたがへて來りしに、摩周に書付けさせし。

とある。蜻蛉日記などにも似た記事がある。隱事が露顯したうへ、その使に剛情を張られては、さぞ腹が立つだらう。

前栽掘は話しづくで貰ひ合つた例は珍しくないが、無理押付は、あまり橫暴すぎる。しかしこれも無いことではない。伊勢集に、

院の帝(宇多)物へおはしましけるに、女郎花おほかりと御覽して、掘りに給へるを奉りける。云々。

(口譯) 苦々しいもの　來客などに出合つて話してゐる時に、奥の方で、氣樂のないことを人のいふのを、來客に憚つて、叱らないで聞いてゐる氣持

これだの、勅なればの鶯宿梅のやうなのは別としても、權貴の人なども、盛に徵收したらしい。實際男まさりの才媛連は別として、一般的には、婦人の地位は甚だ卑くて、ひどく侮蔑されてゐたから、少しでもしつかりした男でも居ないと、主人の威光を笠に着た連中が、すきな眞似をして往つたものと見える。虎の威を借る狐は今に絕えないが、階級制度のおごそかだつた昔は、殊にひどかつた。權貴の家に侍の籍を置いて、某殿の家人と稱して、下剋上の振舞をする奴の、非常に多かつた事は、物語や雜書の證するところである。無勢力だとなると、隨分親王でも、上達部でも用捨はなかつた。況や殿上人をや、受領をやである。清少は受領の娘だから、こゝに書いたのは、その實驗の事實だらう。

手紙を奪つて庭先で見てゐるのは、必ず男である。追掛けながら簾際にとまつたのは、女猫が端近く出てさへ、「あなまさなや」と小言をいふ位の時代だからである。公衆の面前で、男に飛付く離れ業は、その昔にはなかつた。さう人目をかねるだけ餘計に、殘念さが强かつたらう。

男女の痴話喧嘩は、うまく書けてゐればゐるほど批評に困る。實際困るほどに、この文はその委曲を悉してゐる。

八十三段

かたはらいたきもの　客人などにあひて物いふに、奥のかたにうち解けごと人のいふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく醉ひて、おなじことしたる。聞き居たるをも知らで、人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所、近き所などにて、下衆どものされかはしたる。にくげなるちご

が苦々しい。わが思ふ男が、ひどく醉つて、同じ事を繰返したのは苦々しい。その人が聞いてゐるのをも知らないで、噂をしたのも苦々しい。それは何ほどでもない召使だけれど苦々しい。旅先の手狹な所や間近な所などで、下衆達がふざけあつたのは苦々しい。醜げな乳兒を、自分の心持で愛らしいと思ふまゝに、可愛がり遊ばせ、その乳兒の聲色で、そのいつた事などを話したのは苦々しい。才學ある人の前で、才學のない人が、物識顔に、古人の名などいつたのは苦々しい。格別よいとも思はぬわが歌を、人にいひ聞かせて、人が褒めたことなどをいふのも苦々しい。夜

を、おのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみ遊ばし、これが聲のまねにて、いひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の、物おぼえがほに人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬわが歌を、人に語りきかせて、人の譽めし事などいふもかたはらいたし。人の起きて物語などするかたはらに、あさましう打ちとけて寐たる人。まだねも彈きとゝのへぬ琴を、心一つやりて、さやうのかた知りたる人の前にて彈く。いととう住まぬ聟の、さるべき所にて舅に逢ひたる。

（考異）○いととう　原本いとゞしうとあり。一本による。

釋　かたはらいたき　苦々しきをいふ。かたはらいたしを見よ。○あひて　面會するなり。○うち解けごと　打解言なり。他人には聞かせにくき、不遠慮不謹愼の話をいふ。○人のいふを　召使などのいふをと也。○制せで　客に憚りて小言をもいはぬ也。○おなじことしたる　同じことをいひたると也。○聞きゐたる　その人の聞きゐたると也。○何ばかりならぬつかひ人なれど　その噂をしたる人間は、どれ程の事もなき召使なれどと也。下男下女の類なるべし。○旅立ちたる所　旅先なれば、手狹なる所なるべし。○近き所　これは自宅なれど、間近き所なり。○されかはしたる　ふざけ合ひたると也。「され」は戯ぶるゝ、實體ならぬなどの意。濁りて讀むべからず。○おのれが心ちにかなしと　親の自分の心持に、可愛いと思ふまゝにと也。「かなし」は愛する情の甚しきをいふ。○これが聲　「これが」はおのが愛兒をさす。○人の名　史傳に出でたる古人の名なり。○よしとも覺えぬ　人が聞きてよしとも思はぬと也。○人のほめし　誰それが褒めしと也。○ねも彈きとゝのへぬ　調子も合はぬをいふ。○心　つやりて　自

人が寐ないで話などする脇で、あきれる程打解けて寢てゐる人が苦々しい。まだ調子も整はない琴を、自身だけの心やりに、さういふ方の事を知つてゐる人の前で彈くのは苦々しい。ずつと以前から娘の所へ來ない壻が、然るべき所で、舅に出あつたのが苦々しい。

（口譯）膽がつぶれて興のさめるもの　刺櫛を磨くうちに、物に障つ

分の心だけに滿足してと也。○さやうのかた　音樂の方なり。○いととう住まぬ聟　いと早くより娘の所に來ずなりし聟なり。この句下文、いみじうしたてゝの段の冒頭の文とおなじ。然れども、これを以て、同段をこの段の續きなりしが錯亂したるものとするは非なり。元來長年月に亙れる隨筆のことなれば、思ひつくまゝに、同じ事をいくらも書きもすべし。○さるべき所　然るべき晴の場所なり。○きく心地、おなじことしたる、人のうへいひたる、されかはしたる、語りたる、人の名などいひたる、ねたる人、人の前にてひく、しうとにあひたる　の下、各かたはらいたきものなりを略けり。

評　心なしの妄語、それが來客中であり、醉人の管卷、それが思ふ男であり、陰言のわる口、それが生憎その人のゐる時であり、されかはす不作法、それが旅先や近間であり、學問和歌音樂の高慢、それが知る人の前であり、住まぬ壻の舅に逢つたのが、さるべき所でありするので、かたはらいたさが、一層痛切なのである。聲色入りの兒煩惱は、この中での壓卷である。その態度から推すと、必ず母親だらう。清少は例の子供好だから、こんな目に屢出會つたものとみえる。話する傍で人が寢てゐるなども、共同生活の場合には、よく出合ふことである。「起きて」は寐起きての意味で、朝か曉かの頃の事と見るがよい。優美で持切つたやうな藤原氏時代も、その半面はまさにこんなもので、昔も今も人間にかはりのないところが面白い。

八十四段

あさましきもの　さし櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなるものは、ところせく久しくなどやあらむとこそ思ひしか。た

だ夢の心地して、あさましうあやなし。人のためにはづかしき事、つゝみもなく、ちごも大人もいひたる。必ずきなむと思ふ人を待ちあかして、曉がたに、唯いさゝか忘れて寢入りたるに、烏のいと近くかうと鳴くに、うち見あげたれば晝になりたる、いとあさまし。てうばみにどう取られたる。むげに知らず見ずきかぬ事を、人のさし向ひて、あらがはすべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。のり弓に、わな〳〵〳〵久しうありて、はづしたる矢のもて離れて、ことかたへ行きたる。

釋 ○さし櫛みがく　刺櫛を見よ。○さへて　支へてにて、障るをいふ。○うちかへされたる　轉覆したるを也。○おほのかなる　おほとかと同じ。大きくゆたかなるをいふ。おほとかを見よ。○ところせく久しくや云々　大々として、何時までも覆ることなどなからんと思ひしがと也。「ところせく」は所狹しなり。これを諸註、何かに支へられて、程經てこそ覆るならんと思ひしにと解けるは、甚だ非なり。○ただ夢のこゝちして　それが俄に覆りたるは、只夢心地してと也。○あやなし　條理のたゝぬ、譯モワカラヌなどの意。○人のためにはづかしき事　他人の爲に遠慮すべき事なり。卽ち人の恥をかく事をいふ。諸註誤れり。○つゝみもなく　謹みもなくにて、不遠慮なるをいふ。○かうと鳴く　「かう」は烏の鳴聲なり。○どう取られたる　「どう」は筒の音にて、雙六の賽を入れて振る筒なり。「筒取らる、」は揃目を起されて、相手に筒を續けて取らるゝをいふ。通釋には、とうと清みて疾くの意として曰く「いまだ多く手も下さゞるに、とく敵手にわが駒を取られたると也。さるは宸翰本に『てうばみ打つに上手めきて、その程に丁ども打しきりて、やがて皆かけとられぬる』とあるにても知るべし」。○むげに知らず　わがむけに知らずと也。○あらがはすべくもなく　辨解のしやうもなき程にと也。「あらがはす」は爭はすなり。○のり弓　賭弓。「賭」はかけ物の義なり。「江次第に、正月十八日以二射禮一（正月十七日ニアリ）後朝被レ行」とあり。當日天皇弓場殿に臨御ありて、左右近衞、及び兵衞の射を試み給ふ。四府の舍人四人を左右に分ちて射手とす。射終りて饗あり。これを恒例の賭弓とす。又殿上人等に、臨時に射を試みさせて寳給ふを、臨時の賭弓とも、殿上の賭弓ともいふ。○わなゝくゝ　慄へ〳〵なり。○久しうありて　的をねらひて、久しく引ためたるをいふ。○はづしたる　放ちたるをいふ。○もて離れて　かけ離れてといふが如し。「もて」は接頭語。

評 刺櫛につかふ木櫛は、塗つた物と思はれるから、磨くのは牙角の櫛だらう。小大君集に「昨日使ひし木賊のおちて」などあるのを見ると、木賊で磨いたらしい。車の轉覆は、一寸意外であるが、道路がわるい處へ、牛が強いと來てゐるから、仕方がない。待疲れの寢過しは、夜深しつゞきの女房には、ありうちな事である。しかし晝になつては案外であらう。人に顏を赤めさせる物いひ、口も開かせぬいひがかり、いづれも社交上によくある事で、流石に世慣れた人の言である。賭弓のそれ矢は、晴業だけに淺ましい。要するに、官女としての感想であることは動かない。

八十五段

くちをしきもの　五節、佛名に雪ふらで、雨のかきくらし降りたる。節會、さるべきをりの御物忌にあたりたる。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事いで來て俄にとまりたる。いみじうする人の、子うまで年ごろぐしたる。あそびをもし、見すべき事もあるに、かならずきなむと思ひて、呼びに遣りつる人の「さはる事ありて」かけたは淺ましい。物をうちこぼしたのも淺ましい。賭弓に慄へ〳〵、長いこと的を狙ひ矯めて放した矢が、かけ離れてそつ方へそれたのは淺ましい。

（口譯）くちをしいもの　五節や佛名會に雪が降らないで、雨が暗くなる程降つたのはくちをしい。節會又は然るべき事のある折

が、宮中の御物忌に當つたのはくちをしい。支度をして、何時その日になるだらうかと待思つてゐた事が、差支が出來て、急にお止めになつたのはくちをしい。寵愛してゐる人が、子を生まないで、年來連れそつたのはくちをしい。音樂をもし、又見せようと思ふ事もあるのに、呼べば屹度くるだらうと思つて、呼びに遣つた人が「差支があつて往かれません」などいつて、こないのはくちをしい。男でも女でも、奉公先からおなじ位の身分の者が、一所に寺へ參詣し、物見などへもゆくに、車から衣裳が氣に入つたやうにこぼれ出て、趣向が仰々しくもなく、又あまり見苦しいとも見えさうもないのに、然るべき人の馬なり車なりも行逢はず、見られずなつてしまつたのは、甚だくちをしい。惜なくなつては、物好さうな下衆などにても、人にこの有樣を話しが出來さうな者に行逢ひたいと思ふのも、怪しくはないやうでもあるよ。

などいひてこぬくちをし。男も女も宮づかへ所より、おなじやうなる人もろ共に寺へまうで物へも行くに、このもしうこぼれ出でて、用意はげしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の馬にても車にても、行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すきぐしからむ下衆などにても、人に語りつべからむにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

（考異）○五せち　原本せちゑとあり。古本によると。○所より　原本所などにとあり。抄本による。

評　○節會さるべき折の　節會又は然るべき儀式の折がと也。「節會」は節日の集會なり。その日朝廷より賜饌あり。即位、拜賀を大儀とし、白馬、端午、豐明等を中儀とし、元日、踏歌等を小儀とす。又臨時には任大臣の節會あり。「さるべき折」は賜饌などのなき、臨時の儀をいふか。○御物忌にあたりたる　御物忌の時は、主上の出御なきを以て、儀式の寂寥を感ずればなり。禁祕抄に「御物忌之時、懲不レ出二御他殿舍中一、諸事於二簾中一有レ之、或出二御廣廂一不レ固之時例也。凡四方拜者、雖二御物忌一、或出二御東庭一、於二小朝拜一不二出御一、是匡房卿申、依レ敬二神明天道一也、云々」。物忌を見よ。○いとなみ　いつしかと云云　かねてより經營して、何時かその日にならんと待設けたる事がと也。「いつしか」は何時かなり。「し」は強辭。○いみじうする人　いみじう愛する女なり。○ぐしたる　連れ添ひたると也。「ぐし」は具しにて、ともなふこと。○あそびをも　音樂の遊などをいふ。○さはる事ありて　の下、參りがたしを略けり。○おなじやうなる人　同じほどの身分の者なり。○物へもゆく　物見遊山にもゆくと也。○もしうこぼれいでて　衣裳など好ましく、車の外にはみ出してと也。出衣のさま。おし出でたるを參照。○ようゐはけしからず　用意の甚しからぬと也。即ちあまり奇を求めたる趣向をせざるをいふ。○車にても　の上に、さるべき人のとあるべきを、上のにゆづりて略ける也。○行きあひ見ずなりぬる　行あはず見ずなりぬるの略。上の打消は、下のにゆづりて略ける也。○わびては　情なく思ふをいふ。○人に語りつべからむにてもがなと　人に語りつべからむ者にても逢へかしと也。譯のわかる、話の出來さうなる下衆にても、行逢ひたしと希望する也。「もがな」は願望の助辭。○けしからぬなめり　怪しくはあらぬ事なるべしと也。

評　小忌衣に雪の打散る風情は、その頃頗る驚喜したもので、物語などにも、面白くいつてゐる。佛名に

雪は、殆どつき物で、

年のうちにつもれる罪はかきくらしふる白雪と共にきえなむ　（貫之）

人はいさおかしやすらむ冬くれば年のみつもる雪とこそなれ　（兼盛）

など罪障の積り消ゆるさまを譬へるのが、紋切形であつた。經文中の典據から出たのではあるが、時節が打合つて、感哀がある。これがいづれも雨であつたり、節會が御物忌に當つたり、思ひ立つた事が中止になつたりするのは、全くくやしい。迎にやつた人の來ぬのは、既にすさまじきものの中に攝してゐる。何がしの車はとか、呉がしの衣裝はとか、その外出の行粧を語草とするのが、當時の風習であつたから、中流以上の人士は、行粧に大いに注意を拂つたもので、車中に香を炷いて往來してみたり、下簾から袖は勿論、紅の袴に紅紙の物忌の札をつけて、土に引摺るほど下げてみたりしたこともある。

小き柑子を、大方の玉にぬがせ給ひ、だつまには大柑子をしたる御數珠いとながく、御指貫に具して出させ給へりしは、云々。（大鏡、花山院祭のかへさ御覽の條）

檜網代といふ物を張りて、的の形に色どられたりし車の横さまの窓を弓の形にしたてゝ、ふちをば矢の形にせられたりし、云々。（大鏡、中將兼綱の祭の日の車の條）

（口譯）五月の御精進の頃、中宮は、職の御曹司にお出なさるに、塗籠の前の二間の所を、格別に支度して御座所としたから、平生の御様子でないのも面白い。朔日から雨降り勝で、曇つてばかり日を送る。退屈であるので「時鳥の聲を尋ねて歩きたいものです」といふを聞いて、女房達が私も〳〵と賛成して出かける。賀茂の社の奥に何とか、棚機の渡るといふ橋ではなくて、聞にくい橋の名であつた。「その邊に毎日鳴く」と人がいふと「それは時鳥ではない茅蜩である」といふ者もある。とにかくそこへ行かうといつて、五日の朝、職の役人に車の支度をいひつけて、五月雨には差支がないものぞといつて、職の階の下に車を引寄せて、四人ばかり乘つて、北の陣から出掛ける。外の女房達が羨ましがつて「もう一臺車を仕立てゝ、同じ事なら一緒に往きたい」などいふが、中宮は「否」と仰せになるので、他の女房達の騒ぐのを耳にも入れず、思ひ遣りもない風で出かけると、馬場といふ所で、人が大勢さわぐ。「何をするのぞ」と問ふと、「手番であつて大弓を射るのです。暫く

車にも、こんな珍趣向をめぐらしたのがあつて、清少にいはせれば、用意はけし過ぎる方である。よしそれ程でなくても、相應の行粧で引續けた時には、下衆でもいゝから語り傳へさせたいと思ふは、「けしからぬなめりかし」と、自家辯護してゐるだけ、實は少々怪しかるのではあるまいか。

八十六段

五月の御さうじのほど、職におはしますに、塗籠の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす。清「つれ〴〵なるを、時鳥の聲尋ねありかばや」といふを聞きて、われも〳〵と出でたつ。賀茂の奥に、なにがしとかや、たなばたの渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。「そのあたりになむ、日ごとに鳴く」と人のいへば、「それはひぐらしなり」といらふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさに、車の事いひて、北の陣より、さみだれはとがめなきものぞとて、さしよせて、四人ばかりぞ乘りて行く。うらやましがりて、女房「今一つしておなじくは」などいへど、宮「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて、人多くさわぐ。「何事するぞ」と問へば、車副「手つがひにてまゆみ射るなり。しばし御覽じておはしませ」とて、車とゞめたり。「左近の中少將、皆つき給へる」といへど、さる人も見えず。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ。はやく過ぎよ」とて、行きもて行けば、道も祭のころ思ひ出でられてをかし。

（考異）○宮づかさに　原本に文字なし。古本による。○左近の中少將　原本右近の中將とあり。古本　別本による。

釋　○五月の御さうじのほど　中宮の五月の御精進をせらるゝ程なり。三齋月とて、正五九の三月に精進することあり。簾中抄に「齋月（年三長齋ともいふ）正月、五月、九月、この月は帝釋の南閻浮提にむかひて、衆生の善惡をかんがへしるす月也。五種の味をたもち、戒をたもち、佛菩薩を詣禮すれば、一切の罪業消滅して災難おこらず、命終の後、十方の淨土に往生すといへり、云々」。こゝは中宮が五月の精進を、職の御曹司にて行はせられたる也。さうじを見よ。○職　職の御曹司なり。○塗籠　ヌリゴメ。寢殿内の一室にて、周圍を壁にて塗り、明取をつけ、妻戸ありて出入す。後世の納戸の類にて、專ら衣服調度など、手近き品を納め置く。又寢所にも用ゐたり。源氏夕霧の卷に「塗籠におまし一つ敷かせ給ひて、内よりさしておほとのごもりにけり」などあり。北の塗籠、西の塗籠など稱せり。○二間なる所　二間なる部屋なり。この「二間」は清涼殿のとは別にて、職の御曹司のなり。中宮はこゝを御座所として、佛像などかけて精進し給へる也。源氏餘釋に「二間はよろしききはの家には、必ずしつらふ事。宅神を祭り、或は佛像をもかけなどする間にて、別に清まはりて物するなり。但常に設け置くにはあらず。時に臨みての鋪設なり」。「二間」は一間の倍にて、柱と柱との間を一間といふ、その距離約一丈なり。（附圖參照）○例ざまならぬ　手狹にて、常と樣子のかはれるをいふ。○時鳥の聲云々　清少のいへるならん。○賀茂の奥　上賀茂の社の奥なり。○なにがしとかや　某とかやいふの略。○棚機のわたる橋云々　棚機の渡る橋は鵲の橋なり。淮南子に「烏鵲塡レ河成レ橋、渡二織女一」とあり。織女は卽ち棚機と

御覽なされてお出なさいませ」と、車副の男が車をとめた。「左近の中少將が、皆着座なさる」といふが、そのやうな人も見えない。只六位などの者が徘徊するかち、一向ゆかしくもない事ぞ。疾く通り過ぎよ」といつて、すん〳〵行くと、この道も賀茂祭の時分が想ひ出されて面白い。

訓む。「橋にはあらで云々」は鵲の橋にはあらで、それに似たる、にくき名の橋あるをいへる也。○にくき名　聞にくき名なり。橋の名明かならず。○日毎になく　時鳥がなり。○そこへとて　其處へ往かんとてと也。「そこ」は賀茂なり。○宮づかさ云々　職の役人に、車のことを沙汰してと也。○北の陣より「四人ばかりぞのりてゆく」の「ゆく」につゞく。○五月雨は咎めなき云々　普通ならば、北の陣より乗車出入すべきにあらねども、女房は裳束も濡る、恐あれば、五月雨の頃は差支なしとて、車ながら乗りてゆけりと也。延喜式に「凡乘レ車出二入宮城門一者、妃以下大臣嫡妻已上限二宮門外一、四位已下及内侍者、聽三出入一土門一但不レ得レ至二陣下一」と見えたるにても、この陣より乗車はならぬ由は明かなるべし。「五月雨」は五月雨頃の意。こゝは季節の義に用ゐたるにて、雨をいふにあらず。○さし寄せて　職の御曹司の階際に、車をさし寄せてと也。○羨ましがりて　他の女房達がなり。○いま一つして　車を今一臺仕立てて中宮の許し給はぬなり。○聞きも入れず　他の女房のゆくをば、他の女房達の一緒に行きたしなどいふを聞きも入れずと也。○なさけなきさまにてゆく　思ひ遣りなき樣にて、すけなく出で行くと也。○うま場といふ所「うま場」は馬場なり。右近の馬場、左近の馬場の二箇所ありて、右近のは一條大宮、左近のは一條西洞院にあり。左近のは賀茂へゆく道筋に當り、殊に次にいへる如く、五日といふ日取より見ても、こゝは左近の馬場をさしたること明かなり。○手つがひ　手結の義。騎射、射禮、又は賭弓の前に行ふ演習をいふ。射手を前後左右に分けて爭はしむる故の名なり。荒手番、眞手番の二種あり。荒こゝろみ、本こゝろみといふが如し。こゝのは騎射の手番なり。騎射の手番は左右近衞、各その馬場に於いてこれを行ふ。五月三日は左近の荒手番、同四日は右近の荒手番あり。五日は左近の眞手番、六日に右近の眞手番あり。

（口譯）かうして行く途中には、明順朝臣の家がある。「そこもすぐ見よう」といつて、車を寄せておりた。田舍めいて賀茂にして、馬の繪を描いた衝立障子、網代の屏風、みくりの簾など、わざ〳〵昔風をうつしてある。家作もはかない趣で、端近く淺まだけれど興があるに、ほんに喧しいと思ふほどに、時鳥が鳴かはしてゐるこの聲を、殘念にも中宮樣にお聞かせ申さず、あんなにあとを追つた人達にも聞かせ

○ゆみ　弓なり。「ま」は美稱なり。但雀小弓などに對して、大弓をいへりと覺し。○御覽じておはしませ　「手づかひ」よりこゝまでは、車副の男などの詞なるべし。○左近の中少將等が、皆着座し給へると也。花鳥餘情に「乙殿屋とて、左右近の馬場にあり。五月の騎射の時、中少將着座す、云々」。○といへど　と人のいへどと也。○さる人　中少將をさす。○六位などの云々　地下の六位などの、賤しき官人の徘徊すればと也。○行きもてゆけば　行きに行けばと也。「もて」は强むる詞。○祭のころ　先月にありし賀茂祭の時分がと也。祭を見よ。

かういく所には、明順の朝臣の家あり。「そこもやがて見む」といひて、車よせておりぬ。田舍だち事そぎて、馬のかたかきたる障子、網代屏風、みくりのすだれなど、ことさらに昔の事をうつし出でたり。屋のさまもはかなだちて、はし近くあさはかなれどをかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに、鳴きあひたる時鳥の聲を、くちをしう御前に聞しめさせず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。「所につけては、かゝる事をなむ見るべき」とて、稻といふもの多く取り出でて、わかき女どものきたなげならぬ、そのあたりの家のげす女などひきゐて來て、五六人してひかせて、歌うたはせなどするを、めづらしくて笑ふに、時鳥の歌よまむなどしつる、忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして、物くはせたるを、見いるゝ人なければ、家あるじ「いとわろくひなびたり。かゝる所に來ぬる人は、ようせずはあるじなど、責めいだしてこそ參るべけれ。む

せないことよなど思ふ。明順が「こんな田舍では場處相應のかういふ事を御覽なさるべきです」といつて、稻といふ物を澤山取出して、若い召使の女どもや、その邊の農家の下衆女など連れて來て、五六人で扱かせ、又見た事もないくる〳〵廻る物を、二人して引かせて、臼ひき歌を歌はせなどするを珍しくて笑ふので、時鳥の歌詠まうとした事も忘れてしまつた。唐繪に描いてあるやうな美しい懸盤などで、物を食はせたのを、見向く者もないから、主人の明順が「甚だ粗末に田舍風の御馳走です。然しかういふ所にきた人は物珍しさに、わるくすると、なほ何かあるなら出せと、主人などを責出して召しあがるべきです。かう遠慮勝に召上らないでは、まるで都からきた人の資格はありません」など冗談いつてもてなし「この蕨は私が自分で摘んだのです」などいふが、「何で女官などのやうに、懸盤に列び着いて頂かれませう」などいふと、明順が「懸盤の盤を臺からおろして「例の這伏に馴れてお出なされるお前方であるから、さう仰しやるのも御尤です」といつて世話をし騷ぐうちに、車副の男が「雨が降つて來さうです」といふから、急いで車に乘る時に「時鳥の歌はこの家でこそ詠みませう」といふと「それもさ

げにかくては、その人ならず」などいひてとりはやし、「この下蕨は手づから摘みつる」などいへば、清「いかで、女官などのやうに、つきなみてはあらむ」などいへば、とりおろして。主人「例のはひぶしにならはせ給へる御前たちなれば」とて、まかなひ騷ぐほどに、車副「雨ふりぬべし」といへば、いそぎて車に乘るに、清「さてこの歌は、ここにてこそ詠まめ」といへば、女房「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ、車のすだれそばなどに、長き枝を葺きさしたれば、ただ卯の花がさねを、こしに懸けたるやうにぞ見えける。供なるをのこどもゝ、いみじう笑ひつゝ、網代をさへつきうがちつゝ、こゝまだしまだしとさし集むなり。「人も逢はなむ」と思ふに、更にあやしき法師、あやしのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。

（考異）○いく　原本いふとあり。別本による。○きこしめさせず　原本きこしめさずとあり。古本による。○げす女　原本むすめをんなとあり。活本による。○あるじなど　原本あるもなどとあり。古本あるじにげぬばかりとあれば、もは誤ならん。○まかなひの上、原本とりおろしの五字あり。古本による。○こし　原本こゝとあり。抄本、活本、素本による。

【釋】○いく所　行く途中なり。○明順　高階成忠の三男にて、尊卑分脈には播磨守、左中辨正四位下とあり。高階氏系圖には、從四位上左中辨東宮學士とあり。中宮の御伯父なり。○車寄せて　その家に車寄せてと也。○田舍だち　の上、その家はを補ひて聞くべし。○事そぎて　質素にしてと也。「そぎ」は殺ぎにて、省略するをいふ。○馬のかたかきたる障子　馬の形を畫きたる障子にて、「障子」は衝立障子なるべし。禁中のも、馬形の障子は皆衝立なり。○あじろ屏風　竹又は檜などにて、網代に編みたる屏風なり。河海抄に「漆骨に、片面を張つて、細組にてとぢ合はせたる物なり」。○みくりのすだれ　三稜草の簾なり。三稜草の莖の乾したるを編みて、簾にしたるならん。みくりは既出。○ことさらに　わざ〳〵なり。○はかなだち　はかなき氣の見ゆるをいふ。粗末なる小家の趣なり。○はし近く云々　端近く、奥深からねどと也。○御前にきこしめさせず　中宮にお聞かせ申さずと也。○さばかり慕ひつる人々にも羨ましがりて、さほど自分等のあとを慕ひたる人々にも、聞かせぬことよの略。○所につけては　かゝる田舍めきたる所に應じてはと也。これは明順の料簡にて、女房達を取持つなり。○稻といふもの云々　稻を取出して、農家の所作をなして見せたる也。今は五月なれば、この稻は去年の物なること勿論なり。○わかき女ども　これは明順の家に使へる女共なり。○そのわたりの家のげすをんな　その近邊の農家の妻女などなり。○こかせ　稻扱をさせと也。○くるべき物　くる〳〵廻る物となり。「くるべき」はくるめきと同語にて、加行四段活の動詞なり。大鏡にも「いと廣き殿の内くるべきありけば」とあり、廻轉するをいふ。くる〳〵廻る物とは何か。次に「二人して引かせ」とあるに思へば、引臼のことなるべし。「物」の下、をを略けり。濱臣以來の諸註家、動詞格なるくるべきをば、強ひて名詞として、絲くり器械の久流閉枳の事としたるは非なり。さては久流閉枳と物とのつゞきを、如何に解釋せんとするか。○から繪にあるやうなる懸盤　唐繪に描きてあるやうなる美しき懸盤なり。形のかはりたる珍しき懸盤と解するは違ふべし。「から繪」は漢繪にて、支那の繪をいふが本にて、その系統の繪をもいふ。（既出の圖參照）○見入るゝ人なければ　その食膳を見向く人もなければとなり。食はんともせざるをいふ。○家あるじ　主人公明順なり。○いとわろくひなびたり　この食膳は、甚だ粗末に田舍びたりと也。これは御馳走の謙遜なり。春註に「田舍者めきたりと、臆して食はざるを諫むる詞なり」といへ

うですが途中でも詠めませう」などいつて、歌は詠まないで、卯の花の見事に咲いたのを、皆が折り折りして、車の簾や側などに、その長い枝を葺いたやうにさしたから、まるで、卯の花重ねを車の輿に懸けたやうに見えた。供してゐる男共もひどく笑つて、手傳つて、網代にまでも突通し〳〵して、「こゝがまだ足りない。〳〵」といつて、澤山に挿集めるのである。さてこの車を見せたいので「誰か行逢つてほしい」と思ふのに、卑しい法師や卑しいいふにも足らぬ者ばかりが、たまさかに見えるのが、甚だくちをしい。

（口譯）御所近く來たので、それにしても、かうまるで誰も見知らないまゝで止む事があらうか、せめてこの車の樣子なりとも、人に語らせうと思つて、一條殿のきはに車をとめて「侍從殿がお出ですか。私共が時鳥の聲を聞いて、只今歸ります」と使でいはせた。すると使が立返つて「侍從殿が『只今參ります。お待ち下さい、我が君〳〵』と仰しやいました。そして侍の間で急いで着物など取亂して、指貫をお召しになりました」といふに、今か

る、意は聞ゆれど窮屈なり。この句の下、さりながらを補ひて聞くべし。○かゝる所に　わが家の邊鄙なるをさす。○ようせずば云々　わろくする時は、さし上げたる馳走の外に、田舍珍しさに、何かあらばなほ出せと、主人などを責出して、召上がる筈なりと也。古本「あるじ逃げぬばかり」とあるは、殊に面白きやうなり。○むげにかくてはその人ならず　一向にかう召上らでは、都よりきたる人とは見えずと也。「その人」は都よりきたる人をいふ。かくいひて、女房達の箸を執るやうに催促するなり。○とりはやし　取榮（とりはや）しにて、座を取持つをいふ。○この下蕨は手づから摘みつる　この膳にある蕨はわがみづから摘みたる物なりと也。○下蕨　小き蕨をいふ。草の下に生ふる義。○いかで女官などのやうに云云　清少の詞なるべし。何とて下﨟の女官などが、臺盤に着竝びて食ふやうに、懸盤に着竝びて食はれんやと也。「つきなみ」は竝びて着座するをいふ。○とりおろして　懸盤をその臺より取下しての意。懸盤は上の盤だけ懸けはづしの出來るやうに作れるもの。○はひぶしに云々　明順の詞なり。「はひぶし」は這伏の義にて、宮仕する女房の居ずまひの名と見ゆ。その樣、體を前方に俯し、肘を座におろして、居丈ひろく、衣裳に埋れたる如くに座するをいふ。「例の」とあるも、女房は常に御主人の御前に侍へば、敬屈の態度に慣れたるを思へる也。諸註「這ひたり臥したり、身を自由にありならふ」といへるは、餘りなる臆說なり。○お前達なれば　の下、しかいはるゝも理りなりを略けり。○まかなひ騷ぐ　世話をして騷ぐと也。○雨ふりぬべしといへば　車副の侍などがいふなり。○この歌云々　これも清少の詞なるべし。上に「時鳥の歌よまん」とあるをさす。「こゝ」は明順の家をさす。○さばれみちにても　よしや途中にても詠まるべしなど、他の女房のいひてと也。「さばれ」はさはあれの約。○そば　車の傍なり。○こしに　輿になり。車の上なる屋形になりたる所をいふ。○網代をさへつきうがちつゝ　車の網代をさへ突破りて、卯の花をさすと也。この時の車は網代車と見えたり。○こゝまだし　此處がまだ挿し足らずと也。「まだし」は未しの上略。○人もあ

はなむと思ふに　途中にて、誰かよき人の行逢ひくれよと思ふにと也。これは拾遺集、及び今昔物語に出でたる、屏風の繪に山路に女車ある所をよめる伊勢の歌「ちりちらず聞かまはしきを故鄕の花見て歸る人もあはなむ」とある結句を引用せるなり。○更に　この副詞係るところなし。誤脫あるべし。○あやしき　賤しきなり。

近う來ぬれば、さりともいとかうてやまむやは、この車のさまをだに、人に語らせてこそやまめとて　一條殿のもとにとゞめて、「侍從殿やおはす。時鳥の聲聞きて、今なむかへり侍る」といはせたる。使「侍從『只今まゐる。あが君〳〵』となむの給へる。さぶらひにまひろげて、指貫奉りつ」といふに、待つべきにもあらずとて、はしらせて、土御門ざまへやらするに　いつのまにか裝束しつらむ、帶は道のまゝにゆひて侍從「しばし〳〵」と追ひくる。供に、侍、雜色、物はかではしるめる。「とくやれ」といとゞいそがして、土御門にきつきぬるにぞ、あへぎ惑ひておはして　まづこの車のさまを、いみじく笑ひ給ふ。侍從「うつゝの人の乘りたるとなむ更に見えぬ。なほおりて見よ」など笑ひ給へば、供なりつる人どもゝ興じ笑ふ。侍從「歌はいかにか。それ聞かむ」との給へば、清「今御前に御覽ぜさせてこそは」などいふほどに、雨まことに降りぬ。侍從「などかこと御門のやうにあらで、この土御門しも、うへもなく造りそめけむと、今日こそいとにくけれ」などいひて、侍從「いかで歸らむずらむ。こなたざま

ち支度をして居られるのでは、待つべきでもないと思つて、車を走らせて、土御門の方へやらせると、侍従殿はいつの間に支度をしたのだらうか、帯をば道々しめて、「暫く〳〵」といつて追つかけてくる。お供に雑色や侍が何もはかないで走つてくるやうである。「はやく車をやれ」と、一層急がして、土御門に到着した時に、侍従殿息せき切つてお出なされて、一番にこの車の有様を見て、大層お笑ひなさる。「正氣の人の乗つてゐる車とは、一向に見えない。やはり下りて御覧なさい」などお笑ひなさるので、お供に附いて来た人達も興がつて笑ふ。侍従殿が「歌は何とお詠みなすつたか。それを伺ひませう」と仰しやるから「今中宮様に御目にかけてから、あとで申上げませう」などいふうちに、雨が本當に降り出した。侍従殿が「何で外の御門のやうではなく、この土御門は屋根なしに造り立てたのだらうと、今日はひどく憎らしく思はれます」などいつてゐどうして歸つて往かれませうか。此方の方へは、一途に後れまいと思つたので、人目もかまはず走つて来られたのを、あゝ、歸つて往かうことが　ひどく詰らない」と仰しやるから「さあお出なさいませよ。一緒に禁中へ」といふ。「それにしても烏帽子では、どうして参られませう」、「お裝束をは、たゞ後れじと思ひつるに、人目も知らずはしられつるを、あゝ往かむこそいとさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし、うちへ」などいふ。侍従「それも烏帽子にてはいかでか」「とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なきをのこども、唯ひきにひき入れつ。一條よりかさをもてきたるをさゝせて、うち見返りうちも、この度はゆる〳〵と物うげにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。

（考異）○いそがして　原本いそがしくてとあり。

原本しば〳〵とあり。古本による。

釋義　○近うきぬれば　御所近く来ぬればとまに誰にも見知られずして止まれんやはぬをさす。○一條殿のもとにとゞめて　一條殿のきはに車をとゞめてと也。「一條殿」は、拾芥抄に「一條南、大宮東二町、爲二法住寺大臣爲光家一」とある如く、當時藤原爲光の遺族の住まへる家なり。後に假内裏となる。○侍従殿　藤原公信。太政大臣爲光の六男、長徳二年九月侍従、長保四年五位藏人、寛弘六年藏人頭、同七年左近中將、長和二年参議、治安三年權中納言、萬壽三年五月薨ず、年五十。○侍従　ジジウ。オモトビトともいふ。御許人の義。天皇の御前に侍して、遺を拾ひ闕を補ふを職とす。故に唐名を拾遺といふ。中務省の被管なり。職員八人、従五位下たり。されど兼官の人は、位次高きもあり。後には員數も漸く増して、二十人に至れり。○といはせたる　と使していはせたると也。○只今まゐるあが君〳〵　これは使の取次ける公信の返事なり。只今そこへ参るべし。暫く待給へ、わが君よわが君よと也。「あが」はわがの古言。○なむの給へる　なむ公信ののの給へるの略。○さぶらひに「さぶらひ」は侍所なり、侍の出仕する所にて、寢殿に近きを内侍、遠きを遠侍といへり。○まひろげ　衣服などの前のはだかりたるをいふ。取亂したる様なるべし。眞廣げの義か。空穂物語藏開の巻に「指貫直衣などを引さけ、まひろげて出できたり」などあるも同じ。○指貫奉りつ　指貫を穿き給へりと也。○待つべきにもあらず　公信の出來るをなり。○はしらせて　車をなり。○土御門　ツチミカド。上東門のこと。正親町の南、鷹司の北に、東西の小路あり。この行あたりの宮城門は土御門なり。陽明門の北にあたる。左右は土を塗りたる大垣にして、その間に門を立つ。屋根無しなり。上に引ける如く、延喜式に「四位已下及内侍者、聽レ出レ入二土門一、但不レ得レ至二陣下一」とあれど、この頃はその制漸く亂れて、女車の出入は自由なりき。（附圖參照）○いつのまにか　公信がなり、裝束は直衣ならん。○帯は道のまゝにゆひて　上帯は道をゆくまゝに結びてと也。急ぎて走りながら帯したるなり。○しばし〳〵とおひくる　暫し待ち給へと暫し待ち給へといひつゝ追來ると也。原本「しば〳〵と追來る」は打頻りて取つめて追來る意也。○ともに　公信の供になり。○とくやれと　疾く車をやれとと也。○あへぎまどひ云々　公信がなり。○うつゝの人　正氣の人となり。「うつゝ」は現の意。○のりたると　乗りたる車とと也。○ともなりつる人　公信の供したる人なり。○歌はいかにかそれ聞かむ　時鳥の歌はいかにせむか、それを承らむと也。○今お前に御覧ぜさせてこそは　追付け中宮にお目にかけて、その上にてお聞かせ申さむと也。「こそ」の下、後に告げ申さめを略けり。但下文によれば、歌は遂に詠まざりし也。歌のなき逃口上と見るべし。○などかこと御門のやうに云々　公信の詞なり。何とてこの土御門のみは、他の御門の如くはなくて、屋根もなく造りたるならん、平生はさまで思はざりしかども、今日こそは誠に憎くゝ覺ゆると也。「うへ」は屋根をいふ。○いかで歸らむずらむ　何とて歸らるべきと也。「いかで」の下、かの反語を含めり。○こなたざまは云々　この土御門の方にくるには、只遠

少の車に追付かむと思ふ一心に、人目もかまはず走り來りしがと也。○あゝいかむこそ云々　「あゝ」は歎辭。「いかむこそ云々」は歸りゆかんことが面白からずと也。○いざ給へかしうちへ　いざ內裏へ諸共に來給へかしと也。「內へいざ給へかし」を打反していへる也。「いざ」は人を誘ひ出す發語なれば、來の動詞なくても「給へ」の敬語と相俟ちて、來給へ、の意を成すなり。○烏帽子にてはいかでか　公信の詞なり。烏帽子姿にてはいかでか參らるべきと也。侍臣の參內は衣冠(冠、直衣、指貫)か、束帶(正裝)かに限る。今侍從公信は烏帽子直衣指貫の略裝なれば、御前には出難きなり。但直衣を聽されたる身分の人は格別なり。○取りにやり給へ　冠袍など取りに、人を遣り給へと也。○まめやかに降れば　まことに降ればと也。本降になるをいふ。○笠なきをのこども　笠を持合はせぬわが供の男共がとなり。○たゞひきに引入れつ　土御門の門內に、ひたすら車を引込みてしまひたりと也。○一條より　一條の自宅よりと也。○かさをもてきたるをさゝせて　傘を家來の持來れるを、公信はさしかけさせてと也。○この度はゆる〳〵と　來りし時に引換へて、歸りの時は步くのがゆる〳〵と、大儀さうにてと也。清少等に別を惜める趣なり。

さて參りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。怨みつる人々、ゑじ心うがりながら、藤侍從、一條の大路はしりつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。宮「さていづら、歌は」と問はせ給ふ。かう〳〵と啓すれば、宮「くちをしのことや。うへ人などの聞かむに、いかでかをかしきなくてあらむ。その聞きつらむ所にて、ふとこそよまゝしか。あまりぎしき事さめつらむぞあやしきや。こゝにてもよめ。いふかひなし」などの給はすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合はせなどする程に、藤侍從の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄樣に、

ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

かへしまつらむなど、局へ硯とりに遣れば、宮「唯これしてとくいへ」とて、御硯の蓋に、紙など入れて賜はせたれば、清「宰相の君書き給へ」といふを、宰相「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、かみもおどろ〳〵しく鳴りたれば　物も覺えず、唯おそろしきに、御格子まゐり渡しまどひし程に、歌の返ごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少しやむ程はくらくなりぬ。只今なほその御返ごと奉らむとて、取りかゝる程に、人々、上達部など、かみの事申しにまゐり給ひつれば、西おもてに出でて、物など聞ゆる程にまぎれぬ。人はたさして得たらむ人こそ知らめとて止みぬ。大かたこの事にすくせなき日なりとうじて、清「今はいかでさなむ往きたりしとだに、人に聞かせじ」などぞ笑ふを、宮「今もなど、それ往きたりし人どものいはざらむ。されども、させじと思ふにこそあらめ」と　物しげに思しめしたるもいとをかし。清「されど今は、すさまじかるべきことかは」などの給はせしかど、さてやみにき。

（考異）○おそろしきに御格子　原本おろしにおろす職の御曹司は蔀をぞ御格子にとあり。古本による。○の給はせし　かどきて　原本の給はせしがばとあり。古本による。

取りにおやりなさいませ」など問答してゐるうちに、雨がしんみりと降るので、笠持たぬ男共が、只すん〳〵車を門內に引込んだ。侍從殿は一條の屋敷から傘を持つてきたのをさしかけさせて、見返り〳〵、前とは引換へて、この度はゆるゆると大儀さうに、卯の花ばかりを持つてお出なさるのも面白い。

（口譯）さて中宮の御前へ參ると、今日の樣子などお問ひなさる。置いて往かれてうらめしがつた人達が、怨言をいひつらがりながらも、藤侍從が、一條の大路を走つた所を話すに、皆笑つてしまつた。中宮が「さて歌はどれぞ」とお問ひなさる。かく〳〵の譯で歌は出來ませんと申上げると、中宮が「殘念のことよ。殿上人などが、今日の事を聞くであらうに、何で面白い歌がなくて置かれよう。その時鳥を聞いただらう場所で、つい一寸詠まうものを。あまり大層にし過ぎて、却つて歌が出來ないで、折角の興が醒めてしまはうことが怪しからぬよ。今こゝでも詠みなさい。腑甲斐ないなど仰になるので、まことに御尤もと思ふにつけて、歌の出來なかつたことが、甚だ情ないので、歌を詠まうと一緒に往つた人と相談などするうちに、藤侍從が、最前の卯の花につけて、卯の花の薄樣に

ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

かへしまつらむなど、局へ硯とりに遣れば、宮「唯これしてとくいへ」とて、御硯の蓋に、紙など入れて賜はせたれば、清「宰相の君書き給へ」といふを、宰相「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、かみもおどろ〳〵しく鳴りたれば　物も覺えず、唯おそろしきに、御格子まゐり渡しまどひし程に、歌の返ごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少しやむ程はくらくなりぬ。只今なほその御返ごと奉らむとて、取りかゝる程に、人々、上達部など、かみの事申しにまゐり給ひつれば、西おもてに出でて、物など聞ゆる程にまぎれぬ。人はたさして得たらむ人こそ知らめとて止みぬ。大かたこの事にすくせなき日なりとうじて、清「今はいかでさなむ往きたりしとだに、人に聞かせじ」などぞ笑ふを、宮「今もなど、それ往きたりし人どものいはざらむ。されども、させじと思ふにこそあらめ」と　物しげに思しめしたるもいとをかし。清「されど今は、すさまじかるべきことかは」などの給はせしかど、さてやみにき。

（考異）○おそろしきに御格子　原本おろしにおろす職の御曹司は蔀をぞ御格子にとあり。古本による。○の給はせし　かどきて　原本の給はせしがばとあり。古本による。

様の紙に、
時鳥鳴く音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし（時鳥を尋ねに貴女がゆくと、早く聞かうなら、私の心を一所に添へて遣らうものを、早く聞かないで惜しいことをした）
と書いてよこした。使の者が返歌を待つだらうなど思つて、部屋へ硯を取りにやると、中宮が「たゞこれで早く返歌をしなさい」と仰になつて、御硯の蓋に紙など入れて下されたから、「宰相の君お書きなさい」といふやはり貴女に願ひます」などいふうちに、暗がつて雨が降つて、雷も仰山に鳴つたから、何も覚えず、只恐ろしいので、御格子を一體にあわてておろしたうちに、この返歌の事も忘れた。大分長いこと鳴つて、すこし止む頃は日が暮れた。只今でもやはりこの御返事をさし上げようと思つて、それに取掛かる時に、殿上の人人や上達部が、雷鳴の御見舞を、中宮に申上げに参られたので、職の四面に出て、御挨拶など申上げるうちに、又返歌の事は取紛れた。外の人も亦名ざしで歌を貰つた人こそ返歌の始末するがよいと思つて、手を著けなかつた。大體今日は、この歌の事に縁のない日であると、屈託して「今はどうぞして、さやうに時鳥を聞きに往つたとさへも、人には聞かすまい」などと笑ふのを、中宮が「時過ぎた今

〇さてまゐりたれば　さて中宮の御前に参りたれば と也。〇うらみつる人々　前に「今一つして云々」といへる女房達をさす。但怨みたる趣は、そこに見えで、只「うらやましがりて」とのみあり。思ふに「うらみつる」はうらやみつるにて、や文字の誤脱ならん。さらば、次の「ゑじ」への續きも不快ならでよかるべし。〇ゑじ心うかりながら　怨をいひ、つらがりながらと也。「ゑじ」は怨じの字音便。〇藤侍従　公信のこと。藤原氏の侍従なれば、略していふ。〇一條の大路　京都の最北端の東西に通じたる大路なり。さて一條殿はこの大路を北に、大宮通りを西にひかへたる角屋敷なり。〇いづら歌は　歌はいづらなるぞを、前後にいへり。歌はいかにせしぞと御催促あるなり。〇かう〳〵と啓すれば　かく〳〵の譯にて、歌は詠まざりしと申上ぐればと也。〇うへ人　殿上人。〇をかしきなくて云々　面白き歌なくてあるべけんやと也。「をかしき」の下、歌の字を略けり。〇その聞きつらむ所にて云々　その時鳥を聞きたらん場所にて、一寸詠むべきものぞと也。〇あまりぎしき事さめつらむ　餘り儀式だち、重々しく考へ過ぎて、歌の出來ずなりて、却りて興の醒めつらんと也。「ぎしき」は儀式の音か。さてはあまり儀式とのみにては語を成さず。だち或はめきなどの接尾語の誤脱したるにか。〇あやしきや　怪しからぬよと也。〇げにと思ふにいとわびしきを　中宮の仰御尤もと思ふにつけて、歌詠まざりし事いと心憂きをと也。〇いひ合はせ　さらば歌詠まんと同行者といひ合はせと也。〇ありつる卵の花　以前の卵の花にて、上に「卵の花ばかりをとりておはする」とある卵の花なり。〇卵の花の薄様　表白く裏青き薄様紙なり。「薄様に」の下、書きておこせける歌を略けり。〇時鳥なく音たづねにの歌　時鳥の啼く聲を尋ねに君がゆくと、かねて聞かざりしことが殘念なりと也。「心をそへ」は行く人につけ添へてやらんものを、早く聞かざりしことが殘念なりと也。「心をそへ」は行く人にわがふること。「まし」は重く使はれたれば、ましをの意に聞かるゝ也。〇返しまつらむなど

つらんなど思ひでと也。〇たゞこれしてとくいへ　「これして」は次の硯蓋に入れたる紙などをさす。「とくいへ」は疾く返歌をいへと也。〇宰相の君云々　清少の詞なるべし。宰相の君は、賀茂へ同行せし人と見えたり。二十段に出でたる宰相の君はこれと同人か。さらば富小路右大臣藤原顯忠の孫女と云ふ人なるべし。〇なほそこに　宰相の君の詞なり。「そこ」は代名詞にて、清少をさせり。〇神もおどろ〳〵しう鳴り　雷鳴の劇しくしたるをいふ。〇御格子まゐり渡しまどひし程に　格子をあわて、下すうちにと也。〇久しく鳴りて　久しく神の鳴りてと也。〇只今なほ　「なほ」は遥くなりたれども、なほの意なり。〇とりかゝる返歌の思案に取かゝると也。〇神の事まうしに　雷鳴の御見舞を申上げにと也。〇西おもてに出でて　清少自身がなり。「西おもて」は職の御曹司の西の廂の方なり。〇物など聞ゆる　人々へのあへしらひに話などする也。〇まぎれぬ　返歌の事は取紛れたりと也。〇人はたさして得たらむ人こそ云々　人も亦名ざしにて歌を貰ひたる人こそ、返歌の事は知るべきにて、自分等はかゝり合なき事なりとて也。「人」は同行せし人達にて、「さして得たらむ人」は清少をいふ。「しる」は知る、領るなどの意にて、その事を受持ちて所辨するをいふ。〇大かた　俗のサツパリに當る。〇この事にすくせなき日なり　歌を詠むといふ事に縁のなき日なりと也。「すくせ」は宿世の字音にて、前世のよりの因縁をいふ。〇うじて　鬱しての字音便なるべし。心に面白からざるをいふ。倦して、惱じてなどの説もあれど、さし誰く。古本くんじてとあるは、屈しての字音便なり。〇さなむいきたりしとだに云々　さやうに時鳥聞きに行きたりきとさへも、人には知らすまじと也。歌の出來ぬ故に、しか思ふなり。〇今もなど云々　以下中宮の御詞なり。行きし人達の、今にても何とて時鳥の歌を詠まであらんやと也。「それ」は時鳥の歌をさす。〇

二十六段

させじと思ふに云々　詠むまじと思ふ故ならんと也。「さ」は歌詠むことをさす。○物しげに　不興げに、氣にくはずなどの意。○今はすさまじくなりにて云々　今は時過ぎて面白からずなれりと也。歌詠むべき機會を失したるをいふ。

二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君「いかにぞ、手づから折りたるといひし下蕨は」との給ふを聞かせ給ひて、宮「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

したわらびこそこひしかりけれ

と書かせ給ひて、「もといへ」と仰せらるゝもをかし。

ほとゝぎすたづねてきゝし聲よりも

と書きて參らせたれば、宮「いみじううけばりたりや。かうまでだに、いかで時鳥の事をかけつらむ」と笑はせ給ふもはづかしながら、清「何か。この歌すべて詠み侍らじとなむ思ひ侍るものを。物のをりなど人のよみ侍るにも、『よめ』など仰せらるれば、えさぶらふまじき心地なむし侍る。いかでかは、文字の數知らず。春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のをりは菊などをよむ事は侍らむ。されど歌よむといはれ侍りしするゝは、すこし人にまさりて、『そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへど、それが子なれば』などいはれたらむこそ、かひある心地し侍らめ。つゆ取

でも何で聞きにいつた人達が歌を詠まなからう。けれども、それを詠むまいと思ふのであらう」と、不興げに思召されたのも甚だ面白い。「けれども只今は、時機をはづして面白くなくなつたのであります」と申上げると、「すさまじい事があるものか」など、中宮の仰になつたけれど、それなりになつてしまつた。

（口譯）二日ほど經つて、時鳥聞きに往つた日の事などをいひ出すに、宰相の君が「どうでしたぞ、明順が自身で摘んだといつた下蕨は」と仰しやるのを、中宮がお聞きなされて「思ひ出す事も事よ」とお笑ひなされて、紙の落散

つてゐるのに、したわらびこそ戀しかりけれ（たべた蕨が戀しいことよ）とお書きになつて「この上の句をいへ」と仰になるのも面白い。私が、時鳥たづねて聞きし聲よりも（時鳥を尋ねて聞得た聲は面白いことであるが、それよりも）と書いてさし上げると、中宮が「大層憚もないことよ。こんなにまで、何で時鳥の事を、心にかけたのだらう」と仰になつてお笑ひなさるのも恥かしいものゝ、「なんですか。この歌といふものは一切詠みますまいと思ひますものを。何かの折などに、人の詠みます時でも、『詠め』など仰になると、そ

り分きたるかたもなくて、さすがに歌がましく、我はと思へるさまに、さいそに詠み出で侍らむなむ、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、中宮「さらばたゞ心にまかす。我は詠めともいはじ」との給はすれば、いと心やすくなりぬ。

（考異）○なりぬ　原本なり侍りぬとあり。旁本による。

【釋】○その日　賀茂へ行きし日なり。○いかにぞ手づから折りたるといひし云々　明順が手づから折りたる物といひし蕨は、いかに覺えしぞと也。「いかにぞ」は「下蕨は」の次ぎにまはして心得べし。○思ひいづる事のさまよ　思ひ出す事も事よと也。下蕨など、食物を思ひ出したるを嘲り笑ひ給へる也。○下蕨こそ戀しかりけれ　清少、宰相の君などの意中を想像して、中宮のの給へるなり。○本いへ　上句をつけよと也。○うけばりたりや　おし晴れて憚もなきことよと也。「うけばり」は諾張るの義にて、俗のオツケ晴レテ、大ビラニなどの意。時鳥の聲よりも下蕨が戀しと、不風流にも食物に心の殘るやうに、公然と斷言したるを笑ひ給へる也。○かうまでだにいかで時鳥の云々　これ程にまでどうして時鳥の事を氣にかけたるならんと也。時鳥の聲よりも蕨の方こひしと、歌にはいひたれど、そは表面だけにて、内々は時鳥に執着して、二言目には時鳥をいひ出せる故、中宮の「かうまでだに云々」と仰せられたる也。○何か　これは獨立の句なり。何かの給ふなどの略にて、對手の詞をおさへて、發語の如くに用ゐる。雪山の段にも「何か、いとうき事の侍りしかば」とあり。○この歌云々　この歌といふものは、全體に詠まじと思ひたるものをと也。「この歌」は時鳥の歌にのみ限るにあらず。○物の折　事のある場合なり。○えさぶらふまじき云々　その座には伺候しては居られぬ如き氣持がすると也。○いかでかは「よむ

の場にとても居られないやうな氣持が致します。それはどうして、歌の文字の數もわからず、春は冬の歌を詠み、秋は春の歌を詠み、梅の頃は菊などを詠むことはありませうか。けれど歌詠むと世に評判された人の子孫は、多少人に勝つて『あの時の歌では、あの人の詠んだこの歌こそ優れてゐる。何といつてもあの歌よみの子であるから尤もである』などいはれたらうこそ、その甲斐ある心持が致しませう。少しもこれはといふ特色もなくて、流石に歌がましく我は上手だと思つた風に、最初に詠出しませう事は、故人の爲に氣の毒でありますし」など、眞じめだつて申上げると、

事は侍らむ」にかゝる。○文字の數しらず　歌の字數も知らずと也。○春の　の下、歌を上のにゆづりて略けり。○歌よむといはれ侍りし末々は　歌を上手に詠むと世にいはれたりし者の子孫はと也。清少納言の曾祖父深養父、父元輔は、共に有名なる歌人なりければ、かくいへり。○その折の歌は　これこそ　あの時の歌は清少のよめるこれこそ優れたりけれと也。○いへどそれが子なれば　何といひてもその人の子なれば、よき歌よむも當然なりと也。「それが」は歌詠むといはれたる人をさす。○その折の云々」以下、諸註正しからず。○つゞめ取り分きたるかたもなくて　一向人にすぐれなる特色もなくてと也。○歌がましく我はと思へるさまに　拙き歌をさも歌らしく、自分は上手ぞと思ひたる樣子にの略。「歌がましく」は「さいそに詠出で」につゞく。○さいそ　最初の字音便。○なき人　亡人なり。故人になれる深養父、元輔をいふ。○笑はせ給ひて　中宮がなり。○心にまかす　汝の料簡に任すとなり。

「今は歌の事、思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申せさせ給ひて、內大臣殿、いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くるほどに、題いだして、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがしいだすに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓しなど、こと事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌はよまではなれ居たる。題とれ」との給ふを、「さる事承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」大臣「ことやうなる事。まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よしこと時は知らず、今宵はよめ」など責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れて

中宮はお笑ひなされて「それなら只お前の心に任せる。私は詠めともいふまい」と仰になるので、大層氣安くなつた。

（口譯）「今は歌の事は、心にかけますまい」などいつてゐる頃、庚申待をなさいまして中宮の御兄の內大臣殿が、大層御用意をなさいました。夜が深ける時分に、題を出して、女房に歌をお詠ませなさるので、皆色めき立つて、歌を捻り出すに、自分は中宮の御前に近く侍つて、何か由上げなどして、餘所事をのみいふのを、大臣殿が御覽なされて「少納言は、何で歌は詠まないで、かけ離れてゐるぞ。題を取つて詠め」と仰しや

さぶらふに、こと人ども詠みいだして、よしあしなど定めらるゝ程に、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

元輔がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや。いみじく笑へば「何事ぞ〳〵」と大臣

ものたまふ。

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよまゝし

つゝむ事さぶらはずは、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と啓しつ。

釋　○今は歌の事云々　中宮の「詠めともいはじ」との御許を得たればなり。○庚申せさせ給ひ　庚申待せさせ給ひと也。待は祭の義なり。庚申待には寢ざる風習なり。古俗庚申の夜寢る時は、三尸とて惡き蟲、人の身中に入りて害をなすと也。故に寢ずしてこの夜を明すを守るといふ。もと支那の道家の說にて、柳宗元の罵尸蟲文の序にも「道士言、人皆有三尸蟲一、處二腹中一、伺二人隱微失誤一、日庚申出二於帝一云々」。○內大臣殿　伊周公。○心まうけ　用意、支度、準備などの意。○夜うち更くる　庚申の夜のなり。○けしきだちゆるがしいだす　色めき立ち、歌を捻り出すと也。「ゆるがし出す」は、骨折りて詠み出す形容なり。○近くさぶらひて　清少がなり。○こと事　一異事にて、歌に關係のなき事なり。○おとゞ　內大臣殿をさす。○題とれ　題をいたゞけといふに同じ。通題にいふ事なり。探題に限らず。○さる事承りて云々　清少の答なり。さる事を承りて、御許を得たる事なれば、歌は詠まぬ事にきまりたる故、詠まんとも思ひかけずと也。「さる事」は中宮の「さらば心に任す、われはよめともいひ

はじ」と宣ひしをさす。○ことやうなる事　異樣なる事よと也。以下伊周の詞なり。○さる事やは侍るどかは　「かは」は反語。○よしこと時は　詠まずとも構はぬをいふ。○けぎよう聞きも入れずして　斷然拒絶したるをいふ。「けぎよう」は氣清うなり。○こと人　他の女房達なり。○いさゝかなる御文　小き紙片に書かせ給へる御文なり。○書きて云々　中宮がなり。○元輔がのちといはるゝの歌　歌人の譽高かりし元輔が子といはるゝ、清少にして、何とて今夜の歌まとるに外れて、詠まずに居るこ　とかと也。「歌にはづれて」は歌まとるにはづれての略。「君は」清少をさす、臣下なども親愛してかく宣ふなり。○笑へば　清少がなり。○その人ののちといはれぬの歌　その有名なる歌人の後裔といはれぬ我が身ならば、今夜の歌は眞先に詠まんものをと也。然るに、中宮もその人の後と仰せられたる我が身なれば、詠みかねたりとの餘意を含めたり。○つゝむことさぶらずは　遠慮する事あらずはと也。遠慮するは、父祖の名を汚さんことを恐るゝ故なり。○これよりぞ云々　御催促なくとも、こちらより出來て參るならんと也。

評　伊周が内大臣だつたのは、正暦五年八月から長德二年四月までの足掛三年間である。そして五月のあつた年は、中間の長德元年のみである。それ故に、この段を長德元年五月五日、及び七日の記事と推定する。隨つて庚申待をなされた日は、その十五日となるのである。但藤原公信が侍從になつたのを、公卿補任には長德二年九月とある。これに據ると、少くとも長德三年の五月でなければならぬが、その頃は伊周は遠島の御赦にあつたばかり、中宮は家居してあらせられた時だから、事狀が全く出あはない。これが公卿補任の任官年月の誤記でないとすれば、この文が公信の侍從時代になつて書かれたものと見る外はない。

お前がまあ　今夜の歌まとゐに外れてゐることか。あゝ腑甲斐ない）

とあるのを見るに、面白い事は類がないよ。ひどく笑ふと、

「何事か〳〵」と大臣殿も仰しやる。

その人ののちといはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞ詠まいし（その歌人の後裔といはれぬ私の身であるなら、今夜の歌は一番騙に詠まうものを）

遠慮する事がございませんならば、千首の歌でも、こちらから、進んで出來て參りませう」と申上げた。

さる仔細を承つて、歌は詠むまいことになつて居りますから、詠まうとは思ひがけも致しませんでした」といふと、内大臣殿が「奇體なことよ。本當にそんな事がありますか。何てお許しなされましたかい。甚だあるまい事である。よし外の時は構はん。今夜は詠め」などお責めなさるけれども、すつぱりと耳にも入れないでをりますに、外の人達は歌を詠出して、その佳否などを定められる時に、中宮から一寸した御文を賜いて下された。それをあけて見ると、

元輔がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはある（歌人元輔の子孫といはれる

い？（中宮御年二十、伊周廿二、公信十九、清少三十、三十一？）

中宮は、この前月御父道隆公の御病氣見舞で行啓なされたまゝ、その薨去によつて、一旦登華殿に參着、それから職の御曹司に居られたらしい。七月十九日になつて、「今夜中宮參內」と紀略に出てゐる。

職はその南廂が中宮の御居間で、その東鄰の二間を、御精進の爲、特殊な飾附をしたのが、一寸目先が變つて面白かつたらう。西廂を表の間、今なら應接の間といふやうな場處にした。それは西の御門から取付の間に當るからである。丁度梅壺で、東廂を表の間に使つたのと同樣の理由である。

例の時鳥狂の清少のことゝて、おのが五月の村雨の空には、「今一聲の聞かまほしさに」の遊行的氣分にそゝられて、溜らなかつたらう。時鳥と蜩との爭に至つては、餘に飛離れすぎて、失笑に値する。されば當時の上流婦人が、智識否むしろ自然の經驗の乏しかつたことを證明するが、又一面からいへば、こんなあどけない問答が、宮女房達の身上であつて、何もかも事實に卽した今日から見ると、この超實際的な氣分が、ひどく面白いと思ふ。

高貴の御方は、出入が臆劫であらせられるから、いかに花紅葉がよくても、何が見たく思召しても、平民のやうに、手輕にお出掛けにはなれない。大抵は女官などを代理に見聞させて、その復命を聞いて、お樂みになる。女房達が賀茂行も、かうした事情のもとに遂行されたのである。蚓も女房の外出は、德川時代の御殿女中ほど嚴重でも、たまさかでもないが、兎に角奉公人だから、さう〳〵自由にはゆかない。御主人が否と仰せられゝばそれ迄である。だから公然と御許の出た物見遊山は、この人達に取つては、無上の悅樂である。自然の句を嗅ぎ、田舍氣分を味ふことは、女性同士の神經質的な面倒な葛藤の中に、二六時中沒頭してゐる者の心を、どんなにか慰藉することだらう。「おなじくは」など義ましがるのも、無理はない。

大奥の女中が、表方の大官を物の數ともしなかつた事は、何時の時代にもあることだが、「六位などゆかしからぬ者ぞ」は、地下の官人などを、ひどく見縊つた詞である。かうした氣風なり風潮なりは、自然上下睽離の因を成して、遂に報復的に、武家天下の下剋上の亂世になつた。

賀茂祭の渇仰者は、同じ道筋を通つたばかりでも、嬉しい氣持になる。明順朝臣の家はどの邊であつたか、紫野を出拔けた上賀茂附近であつたらう。されば時鳥の啼く森もあらう、卯花の咲く野もあらう、蕨のもえる岡もあらう。簡素な古風は、都會地よりも、邊鄙に殘つてゐるから、「田舍だち事そぎたる」は、卽ち古風である。馬形の障子も古風な物で、禁中にあるのも金岡が筆とかいつて、一時代昔の物である。粗造な網代屛風、ことにみくりの簾垂など、隨分捻つたものではないか。源氏椎が本の卷にも、八の宮の宇治の閑居の有樣を叙して、

さまことに山里びたる網代屛風などの、こと更に事そぎて見どころある御しつらひを、さる心地してかき拂ひ、いといたうしなし給へり。

とある。蜻蛉日記にも、兼家の宇治の別墅に網代屛風が見え、又圓融院東大寺御受戒記にも、宇治の雅信の別業に、みくりの簾垂が見えた。藤原時代の貴紳が、榮耀榮華の第宅にも飽が來て、小倉の山莊の宇治の別業のと、わざとかうした侘住居に數寄を凝したのは、いはゆる絢爛の極、枯淡に入つた境涯で、これが人生の自然に來るべき欲求であり、約束であり、また逕路である。東山時代から大小名が、松風の響を數寄屋に娛んだのも、おなじ心機に發程した現象である。して見ると、あの茶趣味といふものは、あへて珠光や紹鷗から突發したものではなくて、文化の發達した社會には、必ず伴ふ反映だともいへる。とにかく大厦廣屋に住慣れた女房達の眼からは、この小じんまりした氣の利いた建物と、茶味を帶びた田舍風の裝飾とは、珍しくも面白くも感ぜられたに違ひない。

賀茂の奥まで尋ねるに及ばず、盛に時鳥が聞ける。まさに田舍だ。この上品な珍客への御馳走に、稻を扱かせたり、臼を引かせたり、歌を唱はせたり、蕨をあへ物にしたり、十二分に田舍氣分を發揮して見せたのは、明順のよい思付で、又これがこの處柄の自慢であつた。時鳥の歌をさへ詠むことも忘れて興がつたのも、尤もである。「稻といふ物」とは、米のなる木を知らぬ口吻で、つまり宮女房の身上である。見も知らぬくるべき物も、亦さうである。當時は稻を稈の付いまゝ乾して貯藏して、必要の折々、籾を磨つて白けたのだから、稻をはかるにも一升二升ではなくて、一束二束と數へた。それで五月時分にも稻扱が出來た。源氏須磨の卷にも、三月時分に、馬に稻を飼うた事が見える。

「唐繪にあるやうなる懸盤」は、主人の物數寄が、いよ〳〵伺はれる。これを竝べすゑて、いざ召上がれは、このお客樣に取つては、甚しい迷惑らしく、又一面には侮辱のやうにも感じたらしい。下衆の女官ではあるまいしと拗ねたので、さう想像される。人前で大ビラに物食ふことは、上流婦人のせぬ事と見えた。のみならず「這臥にならはせ給へるお前達」とある。高貴の前では、歩くには膝行、座に卽いては這臥で、敬屈するのである。こゝでは何も這臥の要はないが、上品がつて懸盤に向はぬから、「例の」と取做して、折敷だけを取下したものと見える。「まかなひ騷ぐ」とのみあつて、食べた事をいつてないのは、省筆法で、下文に宰相の君が「いかにぞ手づから摘みし下蕨は」と思ひ出したので見ると、平生鹽漬のばかり食ひ馴れてゐた人達だから、この新鮮な野味の饒い御馳走には、大に舌鼓を打つたものと見える。

「かゝる所にきぬる人は――むけにその人ならず」は、當時のいはゆる猿樂言（さるがうごと）卽ち冗談口で、畢竟客あしらひの面白い挨拶である。「この下蕨は手づから摘みつる」は、光孝天皇の「わが衣手に雪は降りつゝ」と仰せられた若菜の儔で、實際は召使か何かが摘んだ物かも知れぬと、一旦は思つたが、あまり鄕土的

の句が充實してゐる點から推すと、全く自分が揃んだものらしい。かう志のあつさや勞力の尋常でないことを誇稱して、わが贈遺獻羞に價値づけることは、昔に多い習慣であつた。

以上を概括して見ると、明順はなか〳〵の數寄者で、才子で、交際家であることが認定される。しかし清少の一行が、女だてらに不遠慮にも、この家におし懸けたり、明順がまたこんなに款待したりして、兩者の間に何等の芥蒂もないのは、一寸變であつて、實は變でない。明順は中宮と叔姪の關係で、不斷親しく宮中に出入し、女房達とも別懇の間柄であつたからである。

「雨降りぬべし」で、當面の諸問題を打切つて、筆鋒を一轉したのは面白い。さあそこで時鳥は聞いたし、賀茂の奥を尋ねるまでもなく引返す段取となつた。假令張筵（はりじろ）や雨皮（あまかは）の用意などがあつてからが、雨は大禁物であることは、既にいつた如くである。

卯の花見物は、この時代の遊樂の一つであつた。この花は花としては一向つまらないが、古くからそれに附屬した風流的情味と慣習と、又自然の趣味に渇して、田舍氣分に觸れたい希望とが結び付いて、珍重がられたものである。卯の花を車に葺挿すあたり、まことに面白く書かれてある。「いみじう笑ひつゝ、こゝ、まだし〳〵と」は、興に乘つて興を亂んだ態が浮いて見える。卯花襲に譬へたのは、上文に卯花垣根を白襲した靑色に譬へたのと一致して、女らしい觀察である。赤染集に、

四月ばかりに、向なる人の小家に、公信中納言のおはすと聞きし夜、うの花につけて車にさゝせし、これは只一枝の卯の花であるが、なほ同集に、

この人の車を借りて、嵯峨野に花見に出でける人の返すとて、色々の花をさしておこせたるを、いかゞいふべきといひしに代りて、

とあるのは卯の花でこそないが、澤山車にさした趣である。車に花などさすことは、まだ物語や歌集に

も散見して、當時の風流人は、ちよい〳〵やつたことで、あながちこの卯花車が濫觴でもない。然し時に取つての逸興は、類例の有無を問うてゐる場合でない。得意氣に誇つて見たいが、如何にせん相手が居ない。前段に、折角用意した物見車を見る人の無いのはくちをしいといつたのは、抑もこの段の生ずる伏線であり、纔染である。そして下衆でもいゝから見せたい語らせたいとはいつたが、實はそんな徒輩では、風流趣味も美的鑑賞の力もないし、且交際場裏の花々しい話柄とさせたいといふ、はかない、否、清少の心狀からいへば、大した希望と名聞とが手傳つて、遂に一條殿消息の一幕が展開された。

一條殿はその頃、誠信、齊信の長兄次兄は既に別居し、姫君の三の君四の君などが、若い弟の公信と同住して居たものと見える。門前の行ずりに「侍從殿や」と名ざしで、時鳥聞の歸といはせる。公信も、これを事もなげに聞過すやうなら、いはゆるよき人の資格はない。大急ぎに裝束しかへて飛出す。こゝに年若な、はずみ切つた輕々しさも見えるが、全くは興を興としておなじ心にもてはやすといふ、折過さぬ心の發動したのである。

「只今參る。あが君、〳〵」の切迫しきつた語調から、侍にま廣げて指貫奉る匆卒の光景を、使者の中から叙出したのは、面白い手際な描寫である。容儀帶佩を重んじた時代だから、よき人達の衣裝附は、なか〳〵時間を要したものらしい。それを、使者の見たのは、指貫をはく所であつたが、もう烏帽子直衣で、帶を結び〳〵追掛けてくるではないか。「何時の間に」と驚かれたのも尤である。「帶は路のまにゆひて」、この簡短な描寫に、何ともいへぬ妙がある。況や「供に侍雜色ものはかで走るめる」は、その貴人であることを象徴し、「物はかで」の印象的の句が、切實に急遽な場合であることを說明してゐる。旁註本に、「雜色」の下に三人ばかりとあるのは、委曲を悉して、いよ〳〵面白い。萩野博士は嘗て、左傳の宣公十四年、楚子が宋にて吾が使者を殺したのを聞いて怒り立つた所に、

楚子聞レ之、投レ袂而起、履及二於寢門之外一、車及二於蒲胥之市一。

とあるのは名文だが、それにも勝つてゐると、この文を稱賛された。

追掛けてくると、妙な意地になつて、車をわざと急がせる。一條の大路を走つたとあるから、一條殿の北通りから土御門まで、ざつと二町ばかりの所を、活動寫眞的の追掛をやつたものだ。到頭土御門で追付くと、物をもいはず「まづ笑ふ」は面しろい叙法で、咄嗟の際、何よりまづ卯花車が、公信の好奇の感をそゝつた趣が、歴然と見える。「うつゝの人の乘りたると云々」は、その奇異なことを證する、極端な誇張で、「この車の樣をだに人に語らせて」と思つた清少は、この一言を得て、どんなにか滿足したものであらう。「おりて見よ」は、自家の評言の不當でないことを確信させようが爲の語で、いよ〳〵本當の氣違ひにしてしまつた。「供なりつる人も興じ笑ふ」に、公信の供がおくればせに、漸く腑付けた趣が、言外にあらはれてゐる。記述上の順序が、さう説明してゐる。

時鳥を聞いた人が、お歌はと問はれるのは、打てば響くよりも當然に思はれた時代だのに、それが歌なしでは、ちと御人體にか、はる譯である。例の氣轉で胡麿化してゐるうちに、雨が降つて來た。「まことに」と冠せたのは、上に「降りぬべし」といつた首尾である。興は盡きず、歸りたくはないのに、雨には濡れる。美しい幻境を、いやな現實がそばから破壞する。つく〴〵屋根なしの、この土御門が怨めしくなるではないか。暫時公信の愚痴やら、參内慫慂の對話があつて、それを「雨もめやかに降れば」と、雨でまた打切つて「笠なきをのこ共、只引きに引入れつ」で、幕をしめたのは、簡淨な筆法である。「一條より云々」から、「卯の花ばかりを取りおはするもをかし」までは、幕外の引込で、烏帽子直衣の若公達が、卯の花を手にしながら、侍雜色に柄傘をさし掛けさせて、卯花車を見返勝に、名殘惜し氣にゆる〳〵と揚幕にはひる光景は、實に餘韻饒々たるもので、藤原時代情調の尤も面白い所である。

藤侍從が一條の大路を走つたことなど、本文に書いたやうな調子で、面しろをかしく話したらうから、不平連も不平を忘れてしまつた。一條の大路を走るとは、大凡にいつたもので、事實は大部分一條大宮通りを走つたのであらう。よし公信が一條殿の北門から出たとしても、清少は車を急がせたのだから、公信の影を認める頃は、もう半町位は出越して、大宮通りへ既に曲つて出てゐる筈である。

時鳥に歌なしで、お叱を受けてゐる所へ、公信の歌が屆いたのは、甚しい皮肉を感じたらう。それが「卯の花ばかり取おはする」とあつた、その卯の花に付けたのだから無駄がなく、紙も卯の花の薄樣だから、いよ〳〵趣がある。そしてそれに時鳥の歌が書いてあるのは、何たるみやびな趣向であらう。

時鳥の點景としてあしらつた雨が、面白くこの文の自然味をたすけてゐる。曾て「五月五日は曇りくらしたる」といつた理想に、ほゞ適合するもので、「雨勝に曇りくらす」「雨降りぬべし」「雨まことに降りぬ」「まめやかに降れば」「かきくらし雨降りて」と、恰も草蛇の出沒するやうに點綴して、だれないやうに文章を引締めてゆくのが面白い。そして最後の雷鳴に至つて、更に波瀾を揚げた。この時代には雷鳴の時は、戸格子をしめて燈火をつけて、閉息する風習とみえたが、雷電震動の最中に、格子の鄰の下すのは、大した大仕事で、とても歌どころの騒ではない。

故障の續出は、詠歌の機會を、動もすれば逸せしめるので、「大方この事に宿世なき日なり」と歎息してゐる。實際はさほど名歌でなくても、その機を外さず詠んでしまへば、自然出榮がして、相當の喝采は博せたものだ。しかしかう時日が經つては、容易な歌ではさまらなくなる。中宮が「させじと思ふにこそ」と仰しやつた通り、なまなかな事をいふよりはと棄權したのである。そしてこの序に歌壇から手を引かうと試みた。この一事には、清少の自己を知る明のあるに感服する。當時歌人では、男には公任實方等の大家があり、女には和泉式部、赤染衞門、紫式部、小大君、伊勢大輔等の才媛がゐたので、そ

れ等と轡をならべて馳驅するには、遺憾ながら、すこし歌才が短かつた。

一體清少の歌は、才氣と口拍子とで作つたもので、決して感情で歌つたものではない。「世にあふ坂の關はゆるさじ」の鷄の虚音は著名だが、それは頓才と學問との融合で出來たものである。「よしさらばつらさは人にならひけり憑めてこぬは誰か教へし」も、やはり頓才の作である。その他にすぐれたのは、家集を見ても、一首もない。清少は利口な女だから、自己の弱點を知り抜いてゐる。その氣質として、とても二三流どこの歌人に甘んじてゐられないことは、同じ宮仕しても「二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらむ」といつたのでもわかる。そこで庚申も何も關せず焉で、気清うもて離れてすましてゐたのである。その癖「つゝむ事待らずは千歌なりとも」と、まだ負惜みをいつてゐる。例の勝氣は、表面だけでも、その降服に相當の理由を附けることを忘れなかつた。

庚申待は菅公にも守庚申の詩があり、源順にも和歌の小序がある。當時一般に信仰された行事で、その夜は一睡もならぬのだから、女房達の多い宮中などでは大騒であつた。

康保三年卅日庚申、今夜召二殿上侍臣於御前一、聊打二攤給一、酒、及二曉令一レ詠二和歌一。（紀略）

正月に庚申出來たれば、東三條殿の院の女御（冷泉上皇女御超子）の御方にも、梅壺の女御（今上圓融帝女御詮子）の御方にも、若き人々「年のはじめの庚申なり」ささせ給へと申せば、さはとて御方々皆ささせ給ふ。男君達、この女御達の御兄弟三所ぞおはします。いときようあることなり。いとよし。此方彼方と參らむほどに、夜も明けなむ」などの給ひて、さまざまの事どもして御覽ささせ給ふに、歌や何やと、心ばへなかしき御方々の有樣よりはじめ、女房達、碁雙六のほどのいどみもいとなかしくて、この君達のおはせざらましかば、今宵のねぶりざましはなからましなど聞え思ひて、度々鳥も啼きぬ。（榮華物語、花山の卷）

十月廿餘日庚申なるに、上達部殿上人まゐり、遊の方の人も、文の道の人々も召集め、殘るくまなくまゐりて、歌よみ遊などあり。下臈もその道の人はまじりたり。（同、殿上花見の卷）

とあるやうに、御殿〳〵で思ひ〳〵に催して、殿上やその外にも、絹や割籠や碁代の錢紙などを下され、眠氣ざましに、色々な遊をした。こゝもそろ〳〵夜更けて眠氣のさす時分に、お歌の題が出たのであつた。若い御兄弟の方々が肝煎で、男女合併の徹夜の遊樂、信仰心も面白い方に〳〵と應用されたものである。東三條の院の女御は、この晩に脇息に凭つたまゝ、頓滅なされたので、藤氏一門の庚申待は止まつたと、古事談などに出てゐる。この女御は中宮の御叔母に當らせられるが、もうそれから彼これ十四五年も經つて居るから、何時か復舊されてゐたものと見える。

この段は草子中一二を爭ふ大文字で、又名文である。但文章の組織から見ると、時鳥を中心とした部分を一段落として、打切つた方がよいと思ふ。それは時鳥に歌が何時も帶叙されてゐるから、末節の歌の話への推移は自然ではあるが、餘波があまりに大き過ぎて、統一を缺くので、折角の面白い感じを殺いでしまう。やはり「廿日ばかりありて云々」以下は、別段とする方が纏りがいゝ。

（口譯）中宮の御身内の方々や、君達殿上人など、中宮の御前に、人が澤山お出になるので、自分は離れて、廂の柱に凭りかゝつて、他の女房と話をしてゐた時に、中宮

八十七段

御かたゞ〳〵、君達、うへ人など、御前に人多くさぶらへば、廂の柱によりかゝりて、女房と物語して居たるに、物をなげ賜はせたる、あけて見れば、「思ふべしやいなや。第一ならずばいかゞ」と書かせ給へり。御前にて物語などするついでにも、「すべて人には、一に思はれずば、さらに何にかせむ。唯いみじう憎まれ、あしうせられてあらむ。二三にては、死ぬともあらじ。一にてをあらむ」などいへば、「一乘の法なり」

と、人々笑ふことのすぢなめり。筆紙（てかみ）たまはりたれば、清「九品蓮臺（くほんれんたい）の中には、下品（げぼん）といふとも」と書きてまゐらせたれば、宮「むげに思ひくんじにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそあらめ」とのたまはすれば、清「人に隨（したが）ひてこそ」と申す。宮「それがわろきぞかし。第一（いち）の人に、又一（いち）に思はれむとこそ思はめ」と仰せらるゝも、いとをかし。

（考異）○かゝせ　原本問はせとあり。別本による。

釋　○御かたぐ〳〵　中宮のお身内の方々なり。抄本には此の段の初に「職におはします頃、八月十餘日の月あかき夜、右近の内侍に琵琶ひかせて、端近くおはします。これかれ物いひ笑ひなどするに、廂の柱によりかゝりて、物もいはでさぶらへば、『などかうおともせぬ。物いへ。さうぐ〳〵しきに』と仰せらるれば、『只秋の月の心を見侍るなり』と申せば『さもいひつべし』と仰せらる」とあれど、この段に續く文とも覺えず。必ず別段なるべし。「秋の月の心」とは、後撰集「月影はおなじ光の秋の夜をわきてみゆるは心なりけり」を據としたる也。○物を投げ云々　中宮がなり。「物」は紙片なるべし。○思ふべしや否や　汝を思はんか否かと也。○第一ならずば云々　わが思ふこと第一ならずば、汝はいかにするぞと也。○御前にて物語などする　これより以下「すぢなめり」までは、清少が平生いひたることによりて「第一ならずば」と仰せられし由來を說くなり。○何にかせむ　思はれても何にかせんと也。○あしうせらるゝをいふ。○死ぬともあらじ　死ぬとも思はれてあらじと也。○一にてをあらむ　第一に思はれてあらんと也。「を」は歎辭。○一乘の法なり　法華經方便品に「十方佛土中、唯有二一乘法一、無レ二亦無レ三、除二佛方便說一、但說二無上道一」云々」とあるより、法華の說を一乘の法といひ、大乘最究

が何か投げて下された。それを開けて見ると「可愛がつてやらうか、どうか。しかし第一番に可愛いがるのでないならどうか」とお書きになつてある。これは自分が、何時も御前で話などをする序にも「すべて人には第一番に可愛がられないならば、可愛がられても、更に何しようぞ。その位なら、只ひどく憎まれ、惡く扱はれて居よう。二番や三番では、死んでも可愛がられて居まい。何でも第一番に可愛がられて居よう」などいふと、他の女房達が「それでは一乘の法である」と笑ふ話の筋を思召しての仰と見える。書くべき筆と紙とを下されたので「九品蓮臺の中なら、下品でも結構です」と書いてさし上げると「ひどく意氣地がなくなつてしまつた。それが甚だいけない。一旦いひ出した事は、その儘かへすに置かう」と仰になるから「それは人によつてであります」と申上げると「それがいけないのぞよ。第一番の人に、又第一番に可愛がられようと思ふがよい」と仰になるのも面白い。

竟の佛說とせり。「乘」は連載の義にて、迷境にある者を載せて、直に佛果の境に到らしむるをいふ。清少が平生「人には第一に思はれずば云々」といへるを、無二亦無三の一乘法なりと、喩へて嘲れる也。○筆紙賜はり　清少に返答せさせんとて、中宮の與へ給ふなり。○九品蓮臺の中には云々　極樂往生には、九品即ち九階級あり。まづ上品、中品、下品の三等に分れ、品每にまた、上生、中生、下生の三等に分る。そこには往生したる聖衆の座すべき蓮華座あり。これを「蓮臺」といふ。畢竟九品淨土の果といふに同じ。「下品といふとも」の下、足りぬべしを略けり。「下品云々」は、朗詠集、慶滋保胤が極樂寺建立願文に「十方佛土之中、以二西方一爲レ望、九品蓮臺之間、雖二下品一應レ足」とあるによりて、中宮に思はれ奉ることを極樂往生に譬へ、それならば第二第三に思はるとも、卽ち下品にても滿足すべしとの意を寓せたり。○さてこそあらめ　その儘にてあるべしと也。變更せずに押通すをいふ。○人に隨ひてこそ　對手の人によるべしと也。「こそ」の下、あらめを略けり。普通の人ならば第一に思はれんと思へど、中宮ならば下品にてもよしと也。○第一の人　世間第一の地位の人なり。

評　法華三昧の世の中だから、前には退亦佳矣や五千人の增上慢で洒落れ合ひ、こゝでは無二無三の一乘法で、氣轉を鬪はせてゐる。慶內記は清少同時の先輩であつて、この「九品蓮臺云々」は人口に膾炙された佳句だから、早速に應用したので、「人に隨ひてこそ」も、人を見て法を說けの維摩の誡から出たのかも知れない。「第一に思はれずはいみじうあしうせられて」は、何だか女らしくない、剛愎な拗ねくれた氣質に見え、晉の桓溫が「大丈夫不レ貽二芳於百世一者、可レ貽二於臭於萬代一」といつたのと共鳴してゐる。その末路の面白くないのが似てゐるのも、その思想上共通の點があつた爲ではあるまいか。

「第一の人に又一に思はれむとこそ」は、中宮が清少を激勵遊ばされた御詞であることは勿論だが、既に第一に思召されてゐる趣が、暗に拜察される。雪山の段に「いひそめてむ事は」と、固うあらがつたほど

の清少が、こゝでは又、忽ち前説を飜して、この君ならば假令第二第三でもと、葵向の心を吐露してゐる。君臣意氣投合して、清少は中宮に依つて活き、中宮は清少に依つて光つてゐることは、はたから見ても美しい。

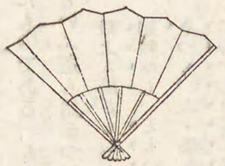
八十八段

中納言殿參らせ給ひて、御扇（おほんあふぎ）たてまつらせ給ふに、「隆家（たかいへ）こそいみじき骨を得（え）て侍れ。それを張らせて參らせむとするを、おぼろげの紙は張るまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。中宮「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、隆家「すべていみじく侍り。『更にまだ見ぬ骨のさまなり』となむ人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」と、こと高く申し給へば、清「さては扇のにはあらで、海月（くらげ）のなり」と聞ゆれば、隆家「これは隆家がことにしてむ」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入れつべけれど、人々「ひとことな落しそ」といへばいかゞはせむ。

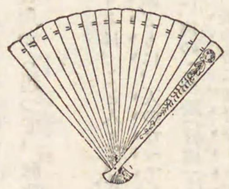
（考異）○いみじく侍り　原本いゝみじく侍るとあり。○さては　原本さてとあり。○といへば　原本と侍ればとあり。以上皆古本による。

語 ○中納言殿　藤原隆家。關白道隆の子。伊周の弟なり。幼名阿古君（あこぎみ）。正暦二年左近少將、同三年左近中將、長德元年權中納言より中納言たり。同二年五月出雲權守に貶せられ、後赦されて兵部卿となる。長和中大宰大貳を請ひて赴任し、刀伊の寇を平ぐ。正二位大藏卿となり、長曆中太宰權帥を兼ぬ。寛德元年薨ず。年六十六。○まるらせ給ひ　中宮の御前になり。○骨を　扇のなり。○おぼろげの紙　並一通りの紙なり。紙は地紙（ぢがみ）なり。おぼろげに紙を求め侍るの略。○いかやうなるにかある　いか樣なる骨にかの略。○かばかりのは　かばかりの骨はの略。○海月のなり　海月の骨なりの略。海月は海中に浮游する腔腸動物にて骨なく、鐘狀又は傘狀をなし、寒天質なり。和名抄に「海月、一名水母、久良介、貌似ㇾ月在ㇾ海中一故以名ㇾ之」。○これは隆家がことにしてむ　これは面白き洒落なれば隆家が詞にせんと也。「これは」は「海月のなり」の洒落をさす。「こと」は言なり。○かやうの事こそ云々　かゝる自讃めきたる事は、かたはらいたきもの、中に入れて然るべくて、玆に書付けさんことはいかゞなれど、「一事も書落すな」と、人々のいへば、何とせん、據なく書付くと也。「入れつべけれど」に入れつべくて、書付くべきにはあらざれどの意を含めり。「ひとこと」は一事なり。「といへば」の「と」の下、人々のを略けり。「いかゞはせむ」の下、止むを得ず書付くの意を含めり。

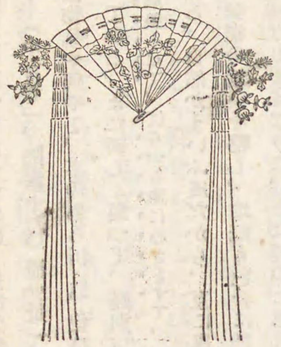
（口譯）中納言殿が、中宮の御方に參られて、御扇を中宮にさし上げられる時に、「私隆家は、見事な扇の骨を手に入れました。それを張らせてさし上げようと思ひますが、並大抵の紙は、不釣合で張れさうまいので、よい紙を尋れてをります」と仰しやる。「どのやうな骨であるか」と、中宮がお問ひなさると「全く見事でございます。『一向にまだ見た事もない骨の樣だ』と、人々が申します。ほんにこれ程の骨はございませんのです」と、御自慢に仰しやるから、私が「それでは扇の骨ではなくて、海月の骨です」と申上げると、中納言殿が「これは妙だ。隆家のいつた言にしてしまはう」と仰しやつて、お笑ひなさる。こんな事は傍痛いもの、中に入れて、書かずに置く筈であるが、「一事も書落すな」と、人々がいふから、どうせうぞ、據なく書付けて置く。



蝙蝠扇



檜扇



柏扇